THE JAPAN'S MOST REMARKABLE S-M MAGAZINE
昭和38年6月7日日本国有鉄道特別扱承認雑誌第1580号・昭和31年2月3日第3種郵便物認可・裏窓第9巻第3号　昭和39年3月1日発行（毎月1回1日発行）

裏窓



3月号

THE JAPAN'S MOST REMARKABLE S-M MAGAZINE
昭和38年6月7日日本国有鉄道特別扱承認雑誌第1580号・昭和31年2月3日第3種郵便物認可・裏窓第9巻第3号　昭和39年3月1日発行（毎月1回1日発行）

裏窓

定価 250円
IBM 1807

裏窓の合本用ファイルをお申し込みください！

◎本誌の新装判を簡単に合本できる、秘蔵用ファイルです。
◎堅牢優美な高級仕上げで、これさえあれば、お揃えになったバックナンバーが散逸する心配もなくなりますし、また、好みの頁を取り外して、ファイルすることもできます。
◎御希望の方は、頒価１３０円に送料２０円を添えて、スグお申し込み下さい。
◎なお御注文の際は「**裏窓用ファイル**」と御指定ください。
◎裏窓の１年間（12冊）直接購読者にはファイル１個を無料で差し上げます。

東京都中野区松が丘２丁目21番
株式会社**あまとりあ社**営業部

★本誌の記事および挿絵写真を、無断で転載、上演、上映、放送することはお断りします。
★お買い上げの本誌に、落丁乱丁等がありました節は、お買いになった書店でおとり替え下さるか、または、本社宛にお送り下さればすぐおとり替え致します。
★直接購読を御希望の方は、6カ月分(1,500円)または、3カ月分(750円)を本誌営業部宛にお払い込み下さいますと、送料は本社の方で負担しまして店頭発売前に直接お送りします。
★外国からの直接御購読は、送料を1冊につき20円御負担下さい。

裏窓・三月号
（第九巻・第三号）
定価 250円・送料18円

印刷……昭和38年 2月25日
発行……昭和39年 3月1日
編集兼発行人……飯田豊一
印刷所……向上印刷株式会社
〃……伸光印刷株式会社
発行所……株式会社あまとりあ社
東京都中野区松が丘２丁目21番
3151
（振替東京・10756）電話（386）3152
（久保書店宛）3153

37年（七月号）二〇〇円
絵物語・最初の火星人……絵・山田彬弘
〃 鞭に生きる女(5)……ヴァン・ロッド
○海外SMフォト特選集
○中川彩子妖美画個展……中川彩子
★グラビア・時代劇のムード……猪島昌也
〃 石伐り場の女……毛卓三
〃 沼のほとり……毛卓三
フォト時代劇・島抜け伝八……海老沢七郎
旗本祓魔年譜……島本春雄
鼻には鼻を……九十九十郎
脱走兵とその妻……竹谷十三
姫に捧げられた人獣の話……白畑高之
はも・とその周辺(5)……かびや・かずひこ
地獄で泣け！……万里小路寛
武后秘話……綾川妖司
奇縛縁切り模……小田桐爽
絵本かぞえうた……喜多玲子
蚕獣デリムソン(8)……阿麻哲郎
忘念油屋火事……竜崎聖吾
現代マゾヒズム文化時評……森下高茂
裁場温泉のおもいで……影なぎさ
裏窓タウン……編集部・編
風雲地獄街道(2)……鈴宮英樹

37年（六月号）二〇〇円
絵物語無残女忍者記……文・矢桐重八
〃 時間旅行機第一号……文・豊田一狼 画・山田彬弘
〃 鞭に生きる女④ 文・画・ヴァン・ロッド
〃 フン族の暴雄アッチラ画・中川彩子
碧眼蛮女伝……小田桐爽
肉の濁流……城堂純
蚕獣デリムソンVII……阿麻哲郎
グラビア追いつめられていく演技・毛卓三
〃 和室のひとり……猪島昌也
〃 女体倉庫……毛卓三
〃 ふとんの上で……猪島昌也
色獄鬼島田……竜崎聖吾
桜とサムワイとサディズム……浜野真砂
哀艶十六夜街道……文・円城寺達
A心酔のタイプ……かびや・かずひこ
日本刑罰史(1)……名和弓雄
稲妻ざんげ……万里小路寛
現代マゾヒズム文化時評……森下高茂
黒髪幻想曲……亘文彦
地獄船青竜号……水井卓二郎
繩を待つ女……堀越早苗
風雲地獄街道(1)……鈴宮英樹

37年５月号ぜんぶ売り切れました

37年４月号ぜんぶ売り切れました

○37年（三月号）
○37年（二月号）（売切）
○37年（一月号）（売切）
○36年（十二月号）（売切）
○36年（十一月号）（売切）
○36年（十月号）
○36年（九月号）
○36年（八月号）（売切）
○36年（七月号）
○36年（六月号）
○36年（五月号）（売切）
○36年（四月号）
○36年（三月号）
○36年（二月号）
○36年（一月号）
○35年十二月号（売切）
○35年（十一月号）（売切）
○35年（十月新装号）
○35年（九月号）妖気感覚小説特集
○35年（八月特大号）濃艶女白浪特集
35年（七月号）あぶちっく小説特集
35年（六月号）天変三日月秘文・特集号
○35年（五月特大号）仁侠義賊特集
35年（四月号）異色時代小説特集号
○印はぜんぶ百五十円、他は百二十円です



女が台にのぼるとき
●山本喜八郎・著
人の世のよろこび悲しみ なさけも恋もすいもあまいもかみわけた検診台の四季 微苦笑しながら女心解剖
200円 〒40円

南国うわき旅行
●志摩辰郎・著
旅の恥はかきすてとはよくいったもの こんなすてきな恥ならなんどでもかいてみたい……南国のセクシールート探訪記
170円 〒40円

秘聞・女づくし
●狭山 温・著
洋の東西古今は変われど 変わらぬものは女ごころの妖しさふしぎさ むかしから伝わるエロチック民話集
200円 〒40円

東京都中野区松が丘２～21 株式会社あまとりあ社 振替・東京10756番（久保書店宛）

発売中！

裏窓・十二月臨時増刊号

★耽美芸術写真・絵画・絵物語集★

かねて予告ちゅうの「増刊号」がいよいよ発売になりました。

豪華絢爛、耽美派の粋をつくしたグラビア、オフセットページは、かならずご満足いただけると思います。

目次の一部をご紹介いたしますと——

▼小日向一夢・島本春雄の時代戦国絵物語「戦国餓狼記」▼落合竜二の画集「現代鳥獣戯画」▼江渕晃夫「幸福なけものたち」▼山田彬弘「部屋をまちがえた旅行者」▼中川彩子の「妖美画集」▼豊田みのる・京剣児の時代絵物語「美女菊忍法」▼都築峰子「きもの美五態」▼東桂史「女囚行列」

絵画集だけでも、この豪華執筆陣です。

価 380 円
送料18円

書店で売り切れの場合は
直接当社へお申しこみ下さい

東京都中野区松が丘2の21
株式会社　あまとりあ社
振替・東京一〇七五六番
（久保書店宛）

売り切れ近し！

裏窓・六月臨時増刊号

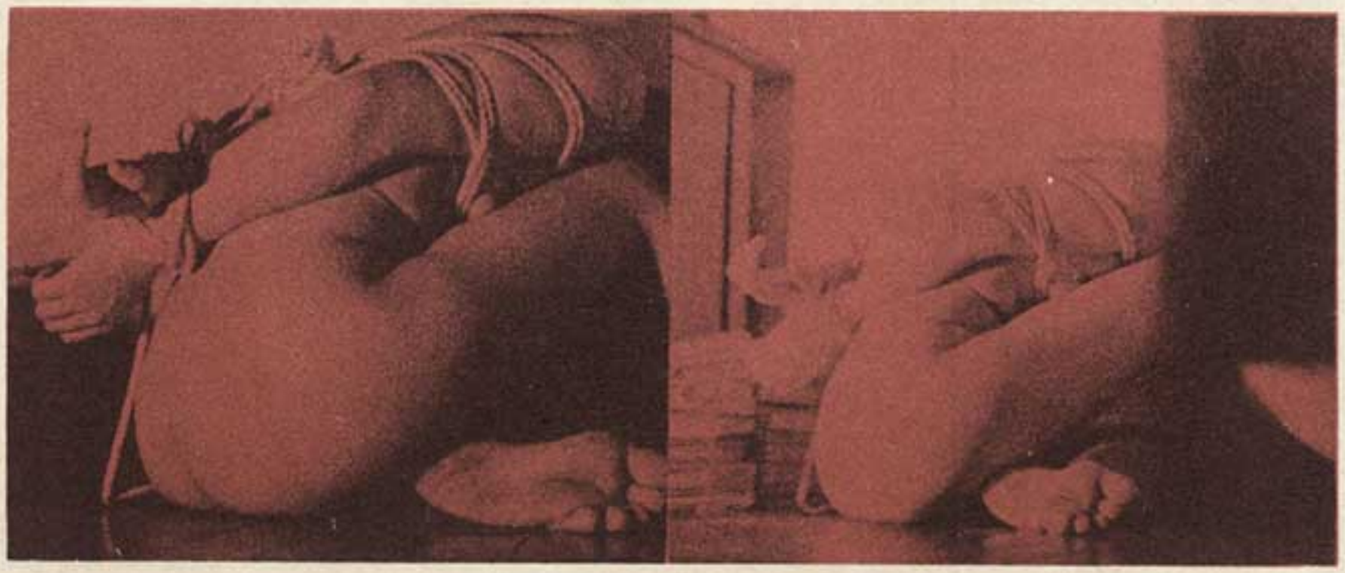
★耽美芸術写真・絵画・絵物語集★

すでに発売いたしました六月臨時増刊号は、書店売り切れ後も、お買いもらしの読者から、本社にお申しこみがつづき、在庫部数が日ごとにすくなくなっております。

価 380 円
送料18円

書店で売り切れの場合は
直接当社へお申しこみ下さい

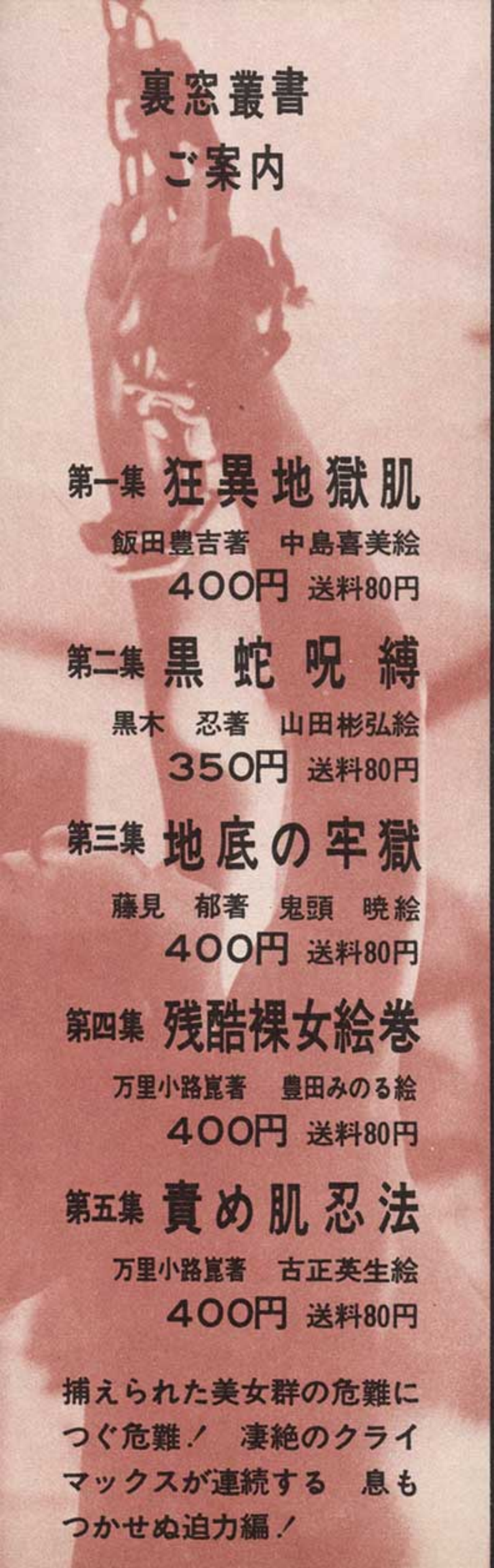
東京都中野区松が丘2の21
株式会社　あまとりあ社
振替・東京一〇七五六番
（久保書店宛）



お手頃なねだんで　たのしい読みものが
いっぱい！　あまとりあ社の特選出版物！

■東京都中野区松が丘二丁目二一番
株式会社　あまとりあ社
振替・東京一〇七五六・久保書店宛

裏窓叢書 ご案内



第一集 狂異地獄肌

飯田豊吉著　中島喜美絵
400円 送料80円

第二集 黒蛇呪縛

黒木　忍著　山田彬弘絵
350円 送料80円

第三集 地底の牢獄

藤見　郁著　鬼頭　暁絵
400円 送料80円

第四集 残酷裸女絵巻

万里小路嵐著　豊田みのる絵
400円 送料80円

第五集 責め肌忍法

万里小路嵐著　古正英生絵
400円 送料80円

捕えられた美女群の危難につぐ危難！　凄絶のクライマックスが連続する　息もつかせぬ迫力編！

裏窓・三月号・目次

スクリーンに躍る
ロマンと幻想…藤見郁 (24)

海の復讐鬼…潮一樹 (36)

背骨のまがった娘たち…岐阜須三夫 (154)

手だれの死者…かびや・かずひこ (94)

奢れる女神への祈り・②…森本愛造 (52)

多ァ坊のこと…北野竜一 (174)

浅草の妖魚…間野嶺 (188)

体当たりマゾヒズム論・㉑…水尾究 (144)

アラビアの城・⑨…北園透一郎 (60)

裏窓既刊号総目録 (86)

現代マゾヒズム文化時評…森下高茂 (168)

きつねづら…井村錠 (194)

裏窓タウン (135)

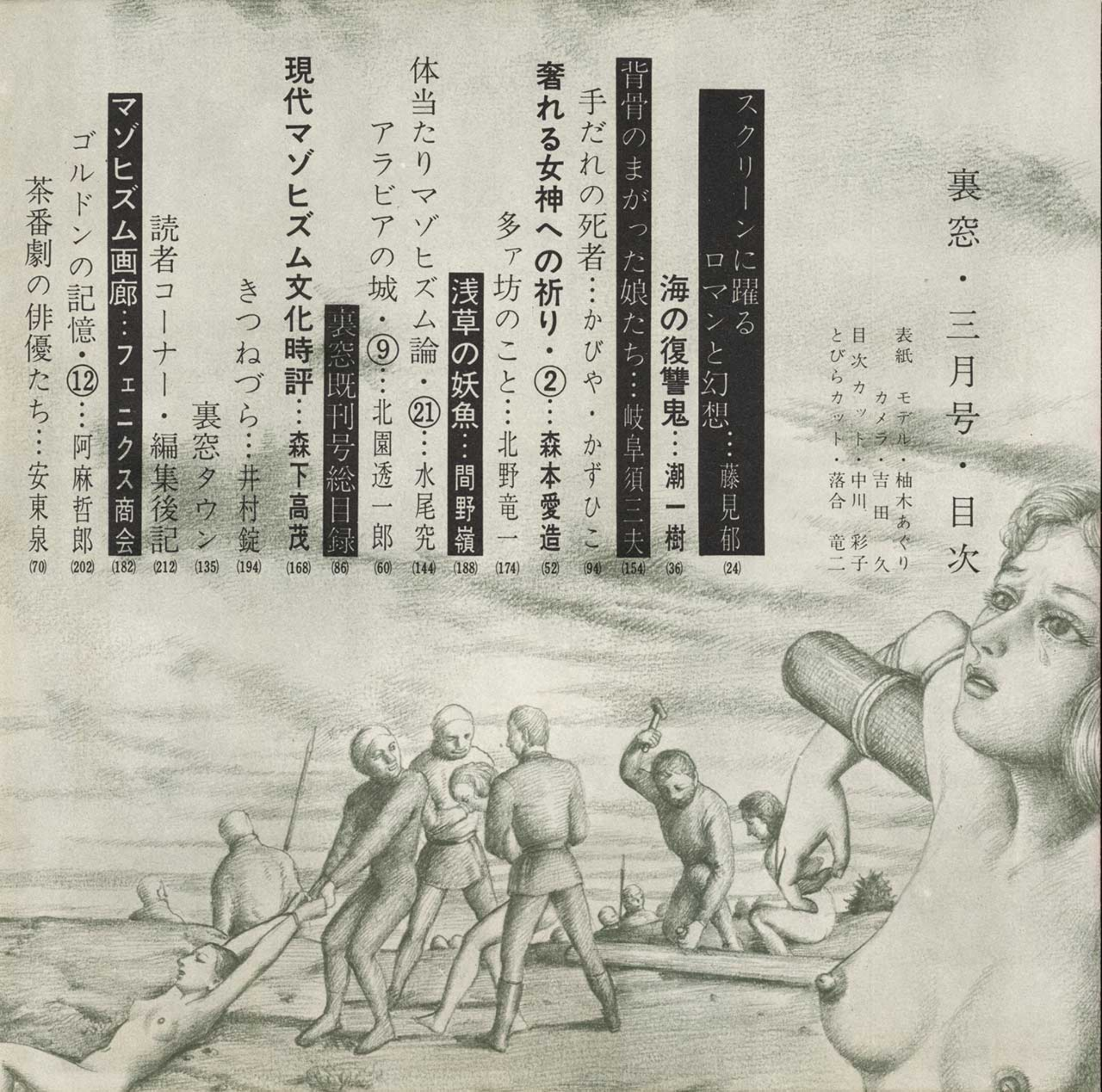
読者コーナー・編集後記 (212)

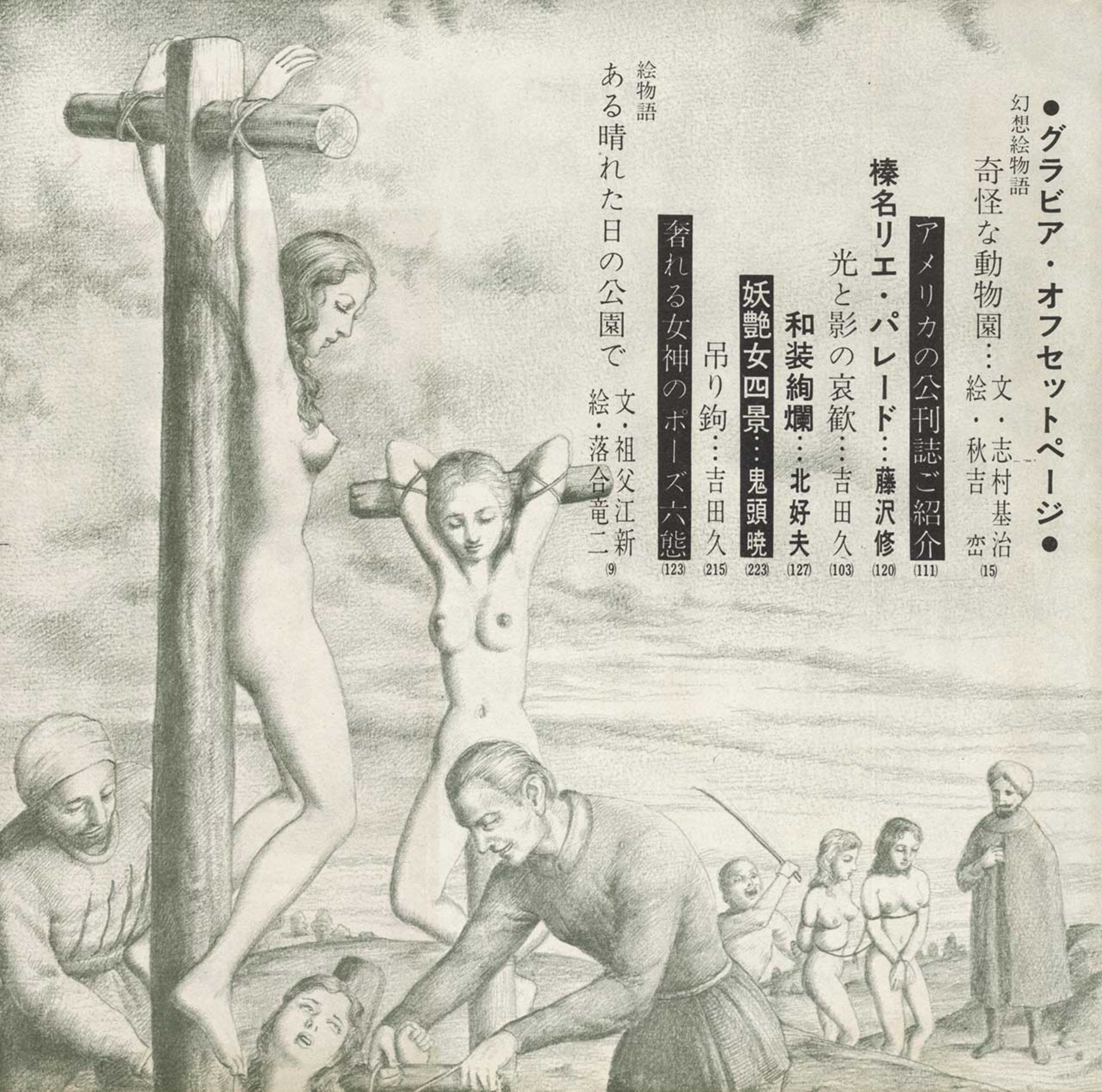
ゴルドンの記憶・⑫…阿麻哲郎 (202)

茶番劇の俳優たち…安東泉 (70)

マゾヒズム画廊…フェニクス商会 (182)

表紙　モデル・柚木あぐり
　　カメラ・吉田久
目次カット・中川彩子
とびらカット・落合竜二





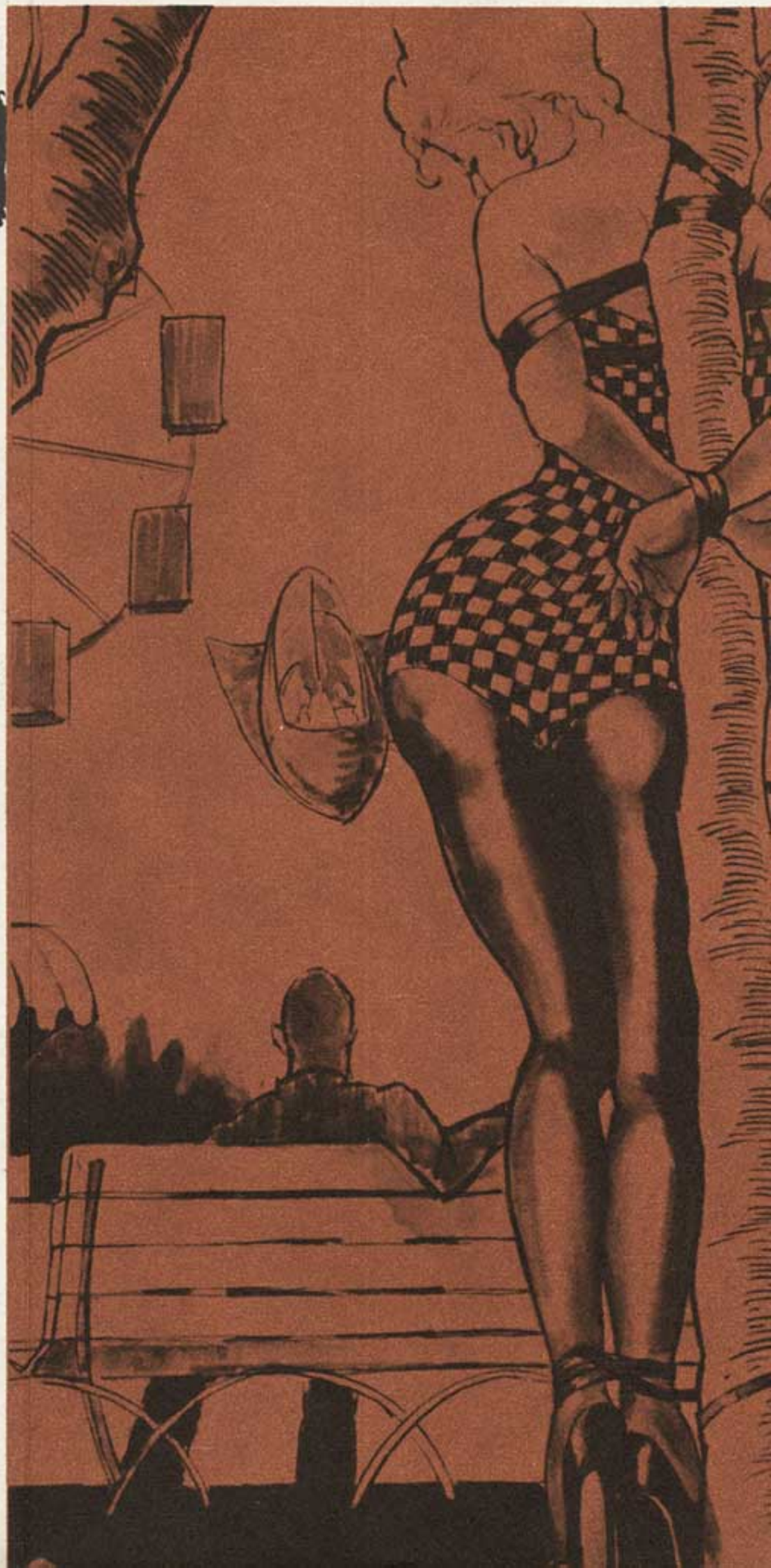
●グラビア・オフセットページ●
幻想絵物語
奇怪な動物園…文・志村基治 絵・秋吉 恋 (15)
アメリカの公刊誌ご紹介 (111)
榛名リエ・パレード…藤沢修 (120)
光と影の哀歓…吉田久 (103)
和装絢爛…北好夫 (127)
妖艶女四景…鬼頭暁 (223)
吊り鉤…吉田久 (215)
蒼れる女神のポーズ六態 (123)
絵物語
ある晴れた日の公園で 文・祖父江新 絵・落合竜二 (9)

ある晴れた日の公園で

★絵物語

文・祖父江新
絵・落合竜二





ある晴れた日の公園で

（まったく、いい世の中になったもんだ）

そろそろ昼も近い。カリフォルニアの、明かるい春の日射しをいっぱいにうけて、コポロ爺さんの真っ黒にしわんだ顔は、幸福にほころぶ。

ふところは重い。洋服だって一ちょうらだ。さあ、今日はなにをしてすごそう。

爺さんはベンチに腰をおろして、しばらく思案にふける。

遊園地の方から、楽しそうな歓声がきこえる。男たちの笑い声だ。アベックの片われはそこここの立ち木や柵につながれたまま、男たちのお帰りまでそのままだ。

回転木馬

遊園地を一歩はいると、そこに人だかりがあった。下卑た掛け声、からかい調子の口笛。

爺さんは伸びあがってみた。ああ、回転木馬だ、なつかしいなあ。

だが、あの木馬の、なんてかわいくてたくましいことか。オレも乗ってみたいな。

けど、これぁ小僧ッこの遊び道具だ。オレにゃちょっと照れくさい。

ピイ、ピイピイッ、ひときわ高い口笛だ。

ボーリング

でっかい館物だ。コポロ爺さんはゆっくりその中に消えた。

ここも、やっぱり小僧ッこの世界だ。たくましい黒ン坊が真っ白い歯をむいて、てんでいいカッコで球をころがす。ごーんごろどろ、でっかいボールが、コースを鳴らして走りぬける。近づくボールにピンが目をむく。

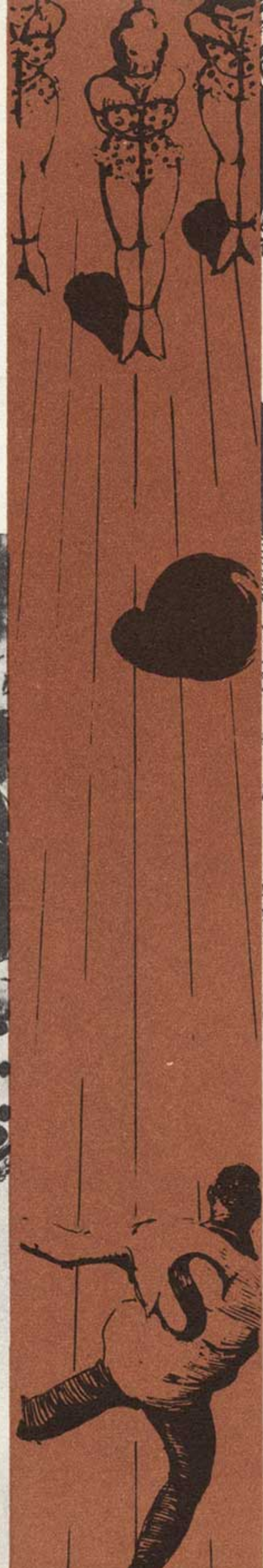
やった！　やったぞ、大当たり！

中央のピンが、サッとはじけ飛ぶ。ごろごろばたばた、総倒しだ。キリキリ、キリキリ上にのぼる。かわいいピンだ。食いこむ綱だ。

「やっちゃえ、やっちゃえ、みんな飛ばせ」

コポロ爺さんの血は躍っても、かんじんかなめのからだが利かぬ。







いやのどっとはやすだみ声。チェッ、あのビート髭の小僧ッこめ、調子に乗って木馬をいたつけやがる。ヤレ、ヤレ、みろやい、あれみろやい。ビート髭の曲乗りだ。



ガン・コーナー

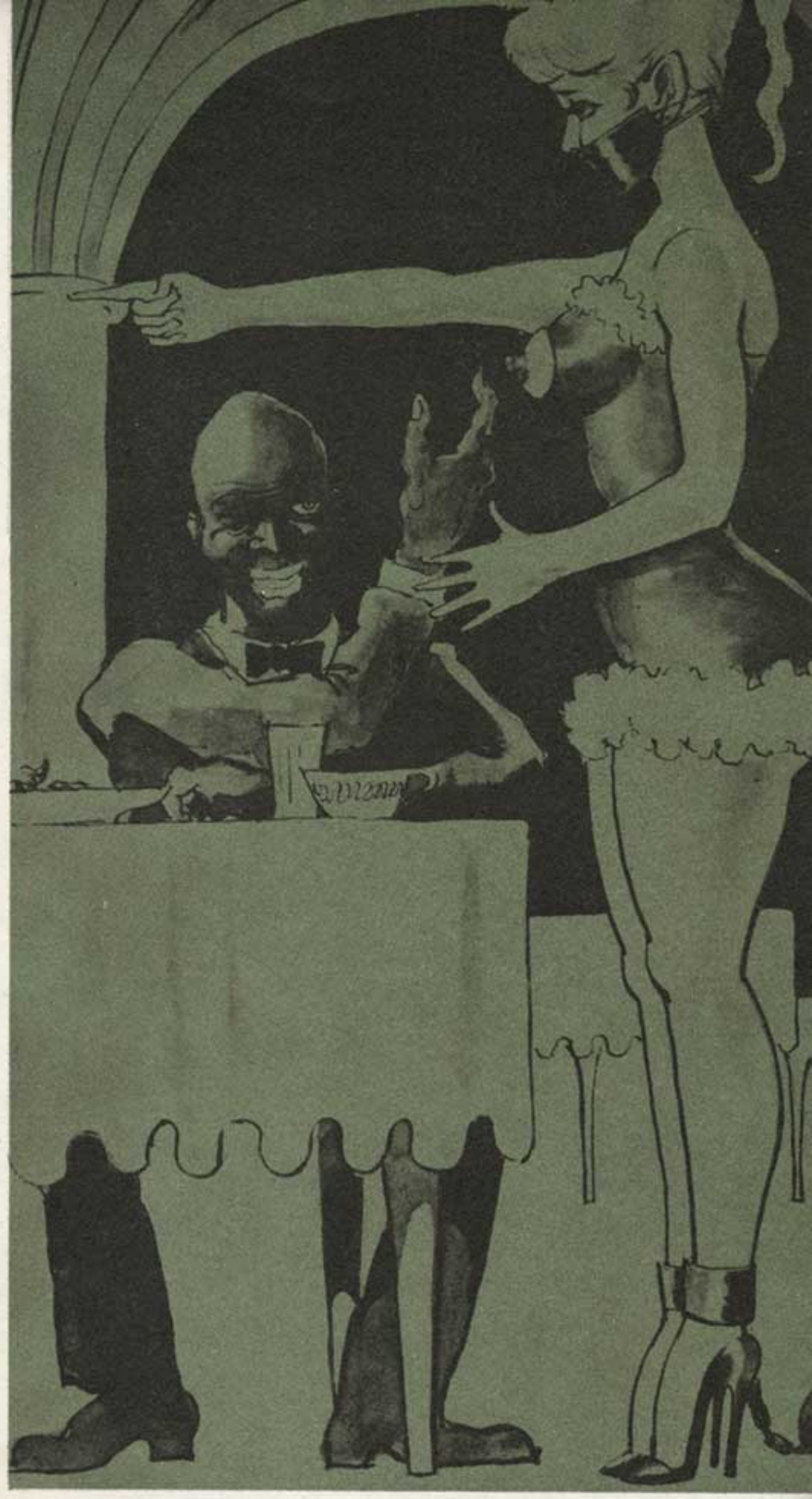
やってるやってる、老いぼれもガキも。景気のいい音を立てて、コルク弾が飛ぶ。的はちっちゃな三重丸だ。壁にたくさん、人形が吊るしてある。

「景品は、あの人形をくれるのかね」

「人形はあげるわけにはいけません。それそのかわり、的に当たりゃこのとおりでさ」

親爺が指で、的の一つをピンとはじいた。的の上の人形の綱が、しゅるッとゆるむ。落下する人形の恐怖の顔。ドブーンッ、とあがる水しぶき。スルスルとまた綱が引かれる。





レストォラント

時計を見るともう一時。

腹がへったら、ひるめしだ。

ずっしり、ふところはまだ重い。一ばん上等のビフ・ステーキだ。そして、野菜の盛り合わせだ。可憐なウェイトレスが傍にはべる。

「その、なんだ、ワシにも遊べるようなもんはないかね？」

ウェイトレスはだまってある方向を指さした。かわいそうに、マスクでお口がきけない。

いやいや、つばきがとんでは失礼だからか。

「なるほど、あれなら出来そうだ」

オーケイのかわりに指をまるめて、ウェイトレスの胸をピンとはじいた。

と、こわいかに、花紙で仕立てたドレスは水に溶けて、たちまちあわれなまるはだか。

「こいつはこたえられねえ」

ポンポンポンポン、コポロ爺さんはめくらめっぽう引き金を引く。ねらいは、とびきり別嬪のブロンドだ。撃て撃て、撃て撃て。弾だ、金だ、弾だ、めくら撃ちだ。

下手な鉄砲も、数撃ちゃ当たる、じゅるッ、どぶーんッ。やったぞ！　ワッハッハ。





やったぞ、ワッハッハ。今日はなんていい日だ、オレはまだまだ若いんだぞ。

コポロ爺さんは躍るような足どりで、道路の方へ跳ねていった。

危ないぞ爺さん、ほら自転車が。あっ、衝突だ。コンクリートの路上に、長々と爺さんは横たわる。

「フッフッフッフ、娘っこめ、オレをはねたな。重罪だ。重犯罪だ。ウワッハッハ……」

輪禍

今日も晴れた日の公園で

ケープル刑事は公園のポリス・ボックスで、いま調書を手にとっている。ジョージ・E・コポロ、ミネソタ州生まれ……。〟

コポロは裕福な農場主だった。そして、善良な男だったのに……、白い女房とが、彼の運命を一変させた。

「可哀そうなことをしました。でも、あの爺さんの気味悪いことったら、死ぬ間際までニヤニヤ笑ってるンですもの……」

爺さんをはねた小太りのおばさんは、そう言って大ぎょうに猪首をすくめている。

ああ、あのお爺さんたらおかしいのさ。あそこン財的場の跡ンところでね。鉄砲撃つ真ン言ってンのさ」

そう話したのは、水つ婆をたらしたソバかすのベンは言った。

「ここ二三日、夜が冷えたでしょう。風邪でどうかしてたんじゃねえもう年だしな」

今日もまた明かるい日射しが荒れ放題の芝生や、緑園となって朽ち果てた遊園地の館物上降りそそいでいる。

遠くのベンチの上に、陽炎が立って、コポロ爺さんの白昼夢のように、ゆらゆらとゆらめいている。





幻想絵物語

奇怪な動物園

文・絵　志村基治
秋吉　恋

①　霧の島の古城

一九一〇年一月三日、地中海にあるイタリア領のサルディニア島に、固く密栓をした葡萄酒壜が漂着した。漁民の一人がこれを発見し、舌なめずりをして栓を抜いたが、この壜の中味は酒にあらず、ぎっしり詰めこまれた紙片であった。——といっても、ただの白紙ではなく、乱れた筆跡それもフランス語で何やら書き綴られていた。この紙片は官憲に届けられ、そして大騒ぎになった。筆者が、当時謎の失踪をとげていたフランス社交界の名花で、世界の美女と謳われたジャンヌ・プレジャン嬢であり、その記述の内容が、あまりにも怪奇だったからだ。——彼女は、こう書いている。地中海のどこかに年中霧に包まれた謎の小島があり、そこには陰惨な古城が屹立している、——と。





② 悪魔博士

ジャンヌ・プレジャン嬢の壜詰通信をもとにして、この不気味な古城の秘密と、彼女を見舞った地獄の運命を簡述してみよう。

ガス灯と二輪馬車のパリの夜がふけたとき夜会帰りのジャンヌ嬢は、突然、四、五人の暴漢に襲われ、意識を失った。

そして、失神から覚めたとき、彼女はすでに常人ではなかった。眼は見え、耳は聞こえるが、その全身は完全な麻痺状態であり、指先一つ動かすことができない美しき癈人と化していたのだ。

彼女は見た。聞いた。恐ろしい現実を。

「モウリス博士、準備完了です」

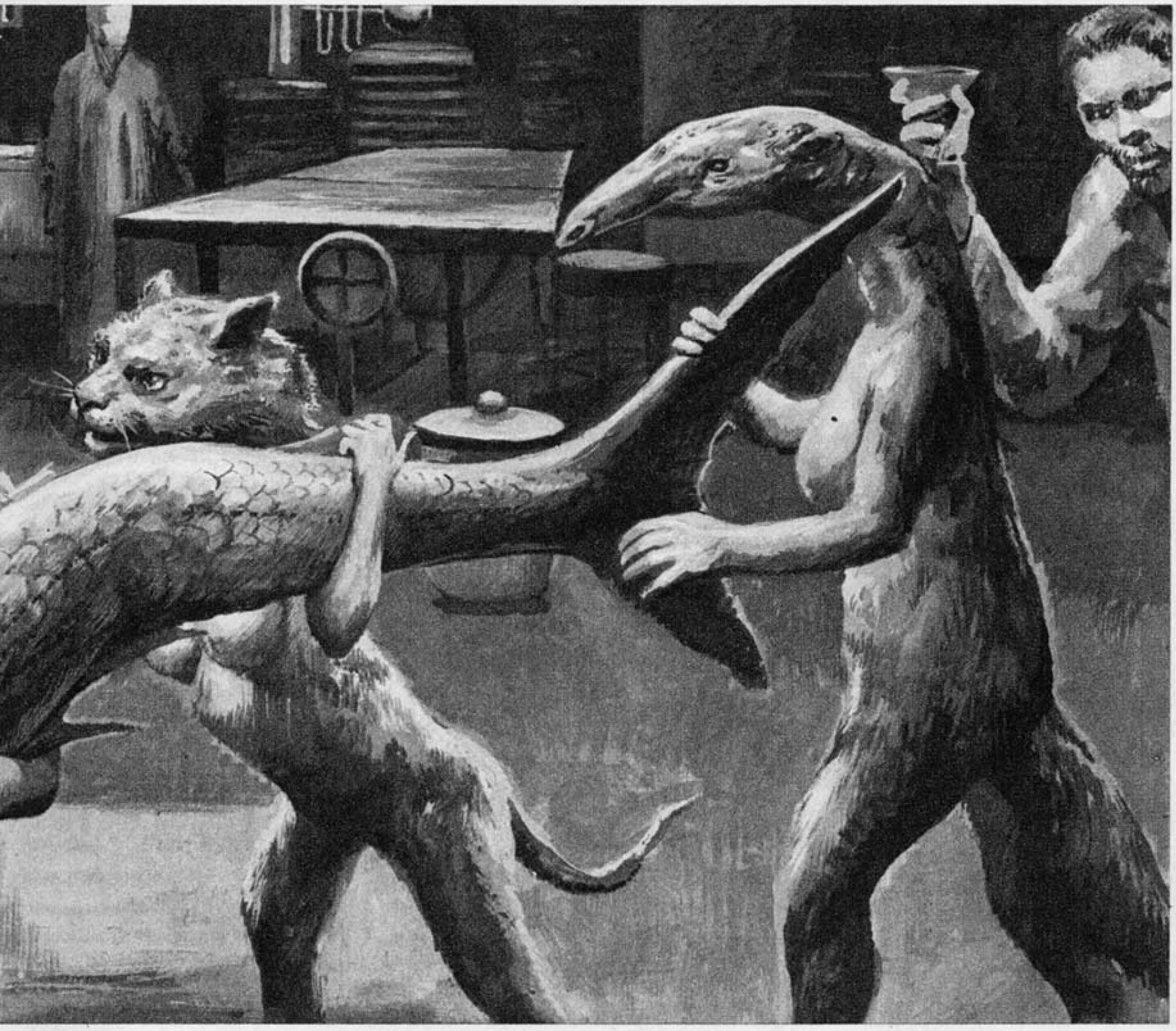
手術用の白衣を着た若い男が、緊張した声でいうと、すでに老年期に入ったこれも白衣姿の男が、無言でうなずく。

（――モウリス博士？　――あっ！）

彼女は思い出した。フランスの天才的名外科医で、手術による人工的手段で双頭児をこしらえようとして失敗、逃亡した男がモウリス博士という名であったことを――。

恐怖におののく彼女は、手術台の上から、やがて奇怪な電気変身台の上にと移された。





③ 恐怖の変身台

「ふふふ、とうとうこのモウリス動物園にも待望の人魚が出現する。永遠に汚されることのない、世界一美しいものが……」

モウリス博士は、濁った声で言い、そしてケラケラと笑った。不吉な響きを秘めた、歪んだ笑い声であり、ジャンヌ嬢は、その声に狂気を感じた。

しかし、その直後に、彼女は激しい電撃ショックを受け、ふたたび意識を喪失してしまった。

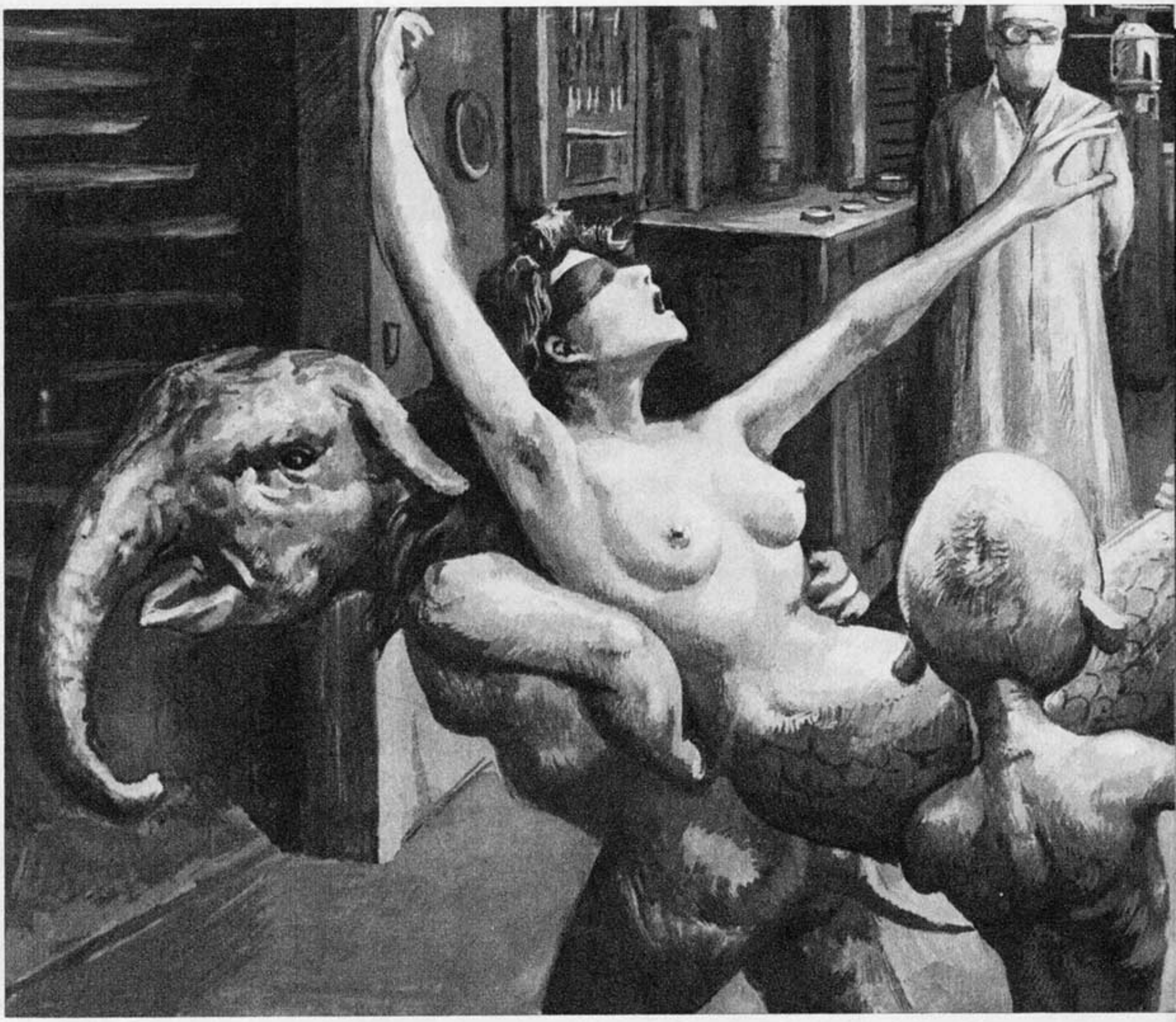
「は、は、博士！　成功です！　せ、成功しました！」

若い男の感動的な叫び声を、ジャンヌ嬢は遠く、夢のように聞いた。それは意識の恢復をうながす触媒となったようだ。

意識を失っていた時間が、何分だか何時間だか、いや、何日間だか、彼女にはわからない。ともかく、続いてモウリス博士の声が聞こえたのである。

「人魚姫ジャンヌ誕生……。ほうら、もう手も動く、口も動く、足も――いや、尾鰭も動くぞ！　うふふ、ヒヒヒヒ……」

尾鰭が動く？　彼女には何のことだかわからなかった。今度は眼が見えなかったのだ。



④　人魚姫ジャンヌ

「さあ、連れてゆくがよい、人魚の檻へ」

博士の声と同時に、彼女は何人かの手で手術台の上から担ぎあげられた。

「眼、眼が見えない。あたしは、あたしはいったいどうなったのです！」

彼女は叫んだ。

「お、お願い。救けてえ！」

自由になった手で、必死にあたりを探ぐりまわす。その手が、ザラザラした皮膚に触れ、続いて毛深い肌に接触した。

それは、明らかに人間の感触ではなく、彼女の恐怖が爆発した。心の中で、瞬間的に湧き起った不気味な想像、すさまじい疑惑！

しかし、現実は彼女の想像、疑惑以上の地獄図であった。

もし、このとき彼女の眼が見えたら、完全に発狂してしまったに違いない。——すでに美しき人魚と化している自分の姿。しかも、その人魚を担いでいるのが、いずれも豊満な乳房をもった女身獣頭の怪物なのだ。

「ふふふ、世界の美女ジャンヌよ、お前は伝説の妖精……あの美しき人魚になったのじゃ」

博士の声を聞き、野獣特有の臭気を嗅いで彼女はもう一度、恐怖の声をあげた。

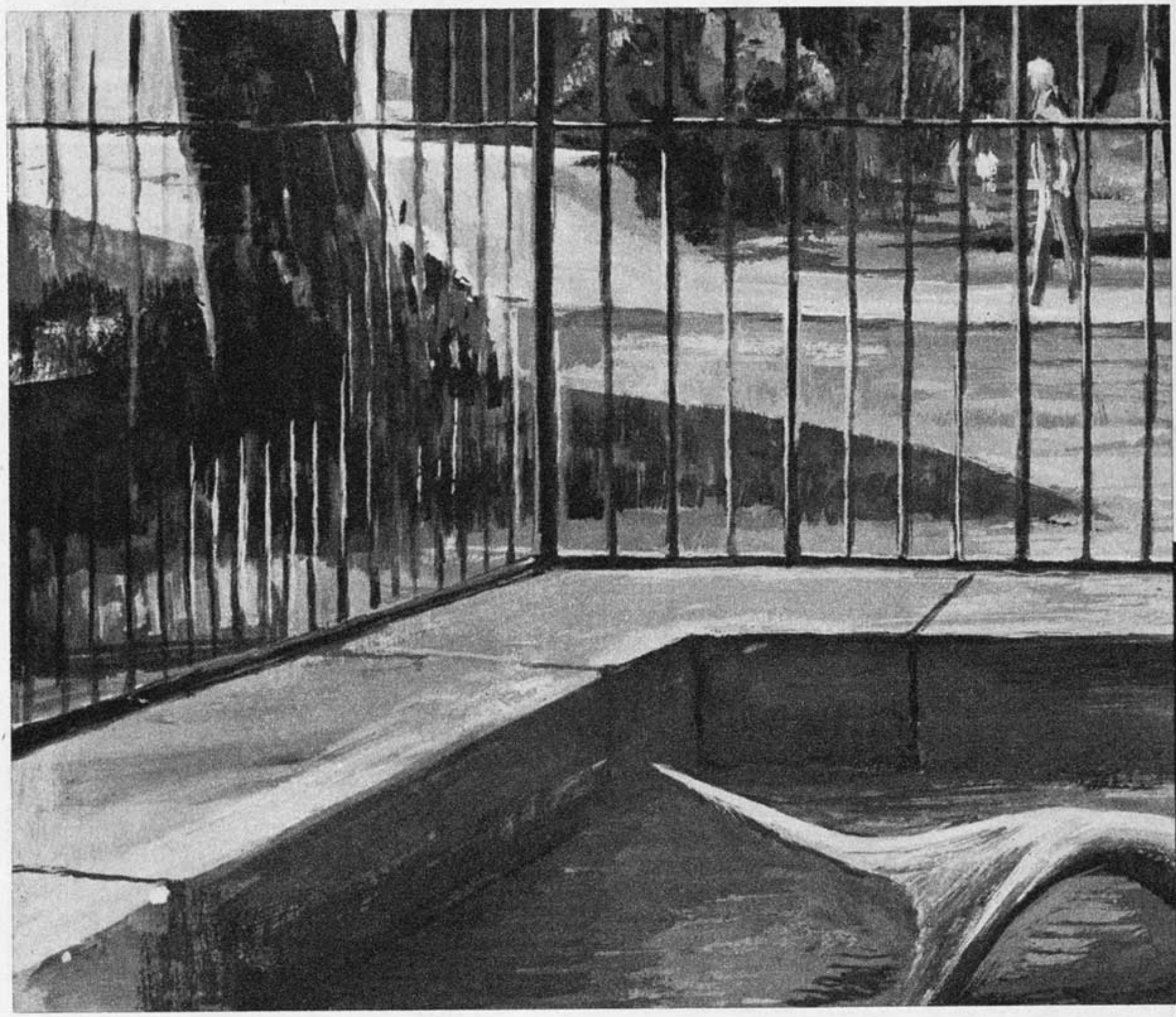


⑤ 人魚の檻

ジャンヌ・プレジャン嬢は、その壜詰通信の中で、こう書いている。

「はじめのうち、わたしはどうしても現実を信じることができませんでした。人魚と化して、地中海の水を引いた檻の中に入れられているという実現を……。これは悪夢なのよ、たちの悪い、地獄の悪夢なんだわ、と、なんどもなんども自分に言い聞かせ、悪夢の消滅する日を待ったのです。でも、この悪夢は消えません。いまだに……。やっぱり、これは夢ではないのです。そうして、わたしは狂気したわけでもないのです。モウリス博士の弟子の一人で、人間的な心をわずかに残しているアルベエル青年が、この地獄の島の秘密を話してくれました……」

地中海の広い海原のどこかに、局部的な気象状件のため、つねに霧に包まれ、その姿を隠している豆粒のような島がある。十七世紀の初めごろ、この島に偶然漂着したフランス貴族モウリスは、霧を突いてこの島に上陸できる唯一の航路を発見し、帰国すると極秘のうちに領民を集めて、この島に霧の城を築いた。万一のとき隠れ住む城にしたわけだが、その必要もなく、星移り時が流れた。



⑥ 悪魔の動物園

この貴族の子孫モウリス博士は、天才的な外科医であり、あまりにも卓越した頭脳の持主であったがために、変人、狂人あつかいを受け、愛する美貌の妻クローデットにまでそむかれてしまった。——その瞬間、彼は心のネジを狂わせ、世の中の美女のすべてを憎悪するようになった。

以来、人体移植に関する彼の研究は、不具者救済という崇高な初期の目的を逸脱し、悪魔的な願望——人獣合体の研究へと変化したのである。

やがてその研究は完成した。

モウリス博士は、先祖の遺した霧の城にとじこもり、莫大な財産を武器として、多くの弟子たちを奴隷化し、狂った心が求めるもの——すなわち獣頭女動物園の完成に没頭しはじめた。このため、もと妻であったクローデットをはじめ、評判の美人が次々と襲われ、悪魔の手術台の上で人獣と化していった。

「わたしも、その犠牲者の一人なのです」

と、美女ジャンヌはその壜詰通信に書いているが、さて、フランス当局必死の地中海捜索にもかかわらず、ついに謎の霧島は発見されず、今日に至っている。……

カメラ・金井行雄

縁側の女



裏窓



3月号

第9巻・第3号

スクリーンに躍るロマンと幻想



藤見　郁

大映のヒット時代映画「座頭市」シリーズの最新作「座頭市喧嘩旅」のクライマックスシーンは、黒沢明・三船敏郎の「用心棒」における、れいの人質交換シーンに酷似した設定で（さびれた宿場町に風が吹き埃が舞う、その舞いかたまで似ている）いささか、おそれいった。

「用心棒」のヒロインは司葉子だったが「座頭市」では、藤村志保。

やくざの群れが、宿場の大通りで対決し、とらえた女の人質を前方に突きだして、相手方の強い助ッ人の行動を封じる、という設定は「用心棒」そっくりなのだが、いちばんかんじんの、ヒロインの扱いかたが「喧嘩旅」においては、なってない。

つまり、当然縛っておかねばならぬ女主人公を、まったく縛ってないのである。

やくざの子分二人が、藤村志保の左右から手をとって押さえつけ、

「どうだ、座頭市、これをみろ」

と、わめいているだけなのである。

さて、斬りあいがはじまる。たいせつな人質だから、味方の後方へ、人質の娘をひきさがらせる。

ところが、縛ってないものだから、娘は、それまで敵同志だった女（藤原礼子）の寝返りの手引きで、すぐに、らくらくと逃げだしてしまうのである。こんな、のんびりした話はない。

斬りあい寸前の一触即発の緊張したシーンにおいても、後方へ監禁しておくシーンにおいても、可憐なヒロインは縛っておいたほうが悲痛さがでて、よりドラマチックというものではなかろうか。理の当然というものでもある。

これは、脚本（犬塚稔）のツミでもあろうが、また、監督さんの責任でもあろう。

たとえ脚本に「娘、縛られる」などと書いてなくとも、縛らなくては不自然な場合にはやはり、監督としては、そうしなくてはいけないと思う。

なにも必然性もないのに縛ることはないけど、それが、演出というものであろう。

ここで、いわゆるSMッケのないライターおよび監督と、SMッケというほどのものはなくとも、そのムードに敏感な映画作家の差が、はっきりとあらわれてくる。

その精神に本来SMッケのない作家は、どんなにそれらしくしムードや効果を織りこもうとしても、しょせん、駄目なのである。

私の知人のシナリオライターが、あるとき

私にいった。

「こんど、ぼくの書いたシナリオのなかに、〝裏窓〟的シーンを入れたからね」

そのシナリオが映画化され、私は劇場にみに行った。

期待した場面は、ひとつもでてこない。

友人にそのことを言った、こたえは、こうだった。

「主人公の浪人が、女の背中をいきなり斬ると、肌は傷つかずに、着物と帯だけがばっさり切れて、女はハダカになるだろう。そこが〝裏窓〟シーンだよ」

つまり、SMッケのない作家は、いかに努力しても、このていどの解釈しかできないのである。

「〝裏窓〟はおもしろい雑誌だねえ。これがワカラナイやつは、とても現代人とはいえないねえ」

などと大声で語りかけ、こちらを赤面させるのである。

「座頭市喧嘩旅」の監督さん(安田公義)に、だから、いくら、ああだ、こうだと言っても、しょせんは、はじまらないのである。

しかし、映画はたのしい。

なんといっても、たのしい。

スクリーンには、多くの美女が登場し、その美女が、生き生きと「裏窓」的活躍をするからである。

「裏窓」の印刷や、紙質のよさは、すでに定評のあるところだが、いかに鮮明で美しいグラビア印刷においても、縛られた美女は、どこまでも平面的で、当然のことながら動かないし、声をだすこともできない。

スクリーンの女主人公は、そのほとんどが美しい色つきであるし、雑誌にくらべて、サイズも巨大である。

せまりくる危難に、ヒロインの表情はクローズアップされ、全身はなまめかしく呼吸する。このクライマックスこそ、SMファンにとっては、まさしく恍惚、陶酔の一瞬なので





ある。

残念なことは、待ちに待ったそのクライマックスシーンが、文字どおり、一瞬であること。

縛られポーズの美女の姿態が、十秒以上つづく映画は、きわめてすくない。

と同時にいえることに、縛られたヒロインが、十秒以内スクリーンにうつしだされる映画は、内外ともに、きわめて多い。

映画好きのSMファンは、その十秒以内、いや、五秒、三秒のわずかなシーンをたのしみに、いそいそと映画館に足をはこぶのである。

週刊誌や映画雑誌に紹介された筋書きを読み、新聞の映画評を注意ぶかく読み、これぞと、あたりをつけ、狙いをつけて映画館へかけつける。そのときの心情は、まったく、いじらしいほどのものである。

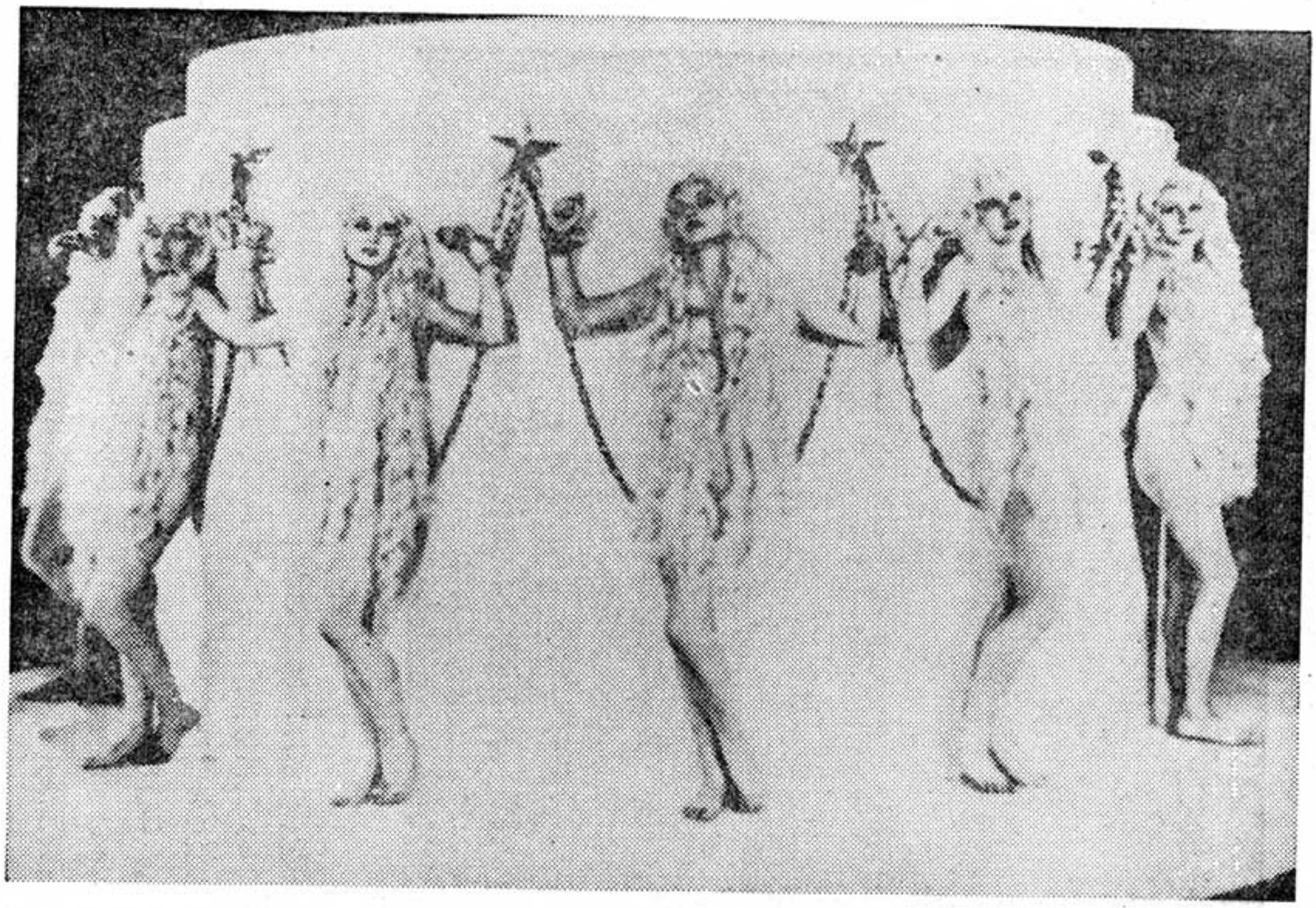
スチル写真に、はっきりとその場面が撮られているのは、まず、安心といえよう。（もっとも、スチルだけ、というのがあるから、うっかり安心もできないけど）

しかし、筋書きだけで狙いをつけていく場合、クライマックスが近づくにつれて、そのドラマ本来の緊張と同時に、一般の観客にはない、まったくべつの緊張感が、われわれの胸をしめつける。

ひたむきな期待から、胸苦しいほどの祈りとなって、スクリーンを凝視する。（ああ、こんな熱い視線でスクリーンに相対する観客が、ふつうの映画ファンに、ひとりでもいるだろうか）

その期待が裏切られたとき、祈りがききとどけられなかったときの失望、落胆は、ＳＭ派のなかでも、とくに「映画好き」のものでなければ、とうていわからない気もちであ





ろう。

期待どおりのシーンが、たとえ、わずかでも出現したときの興奮は、また、なにものにもかえがたい。

全身を包む恍惚と陶酔のバラ色の数秒間はこの派のものでなければ、絶対にわかり得ぬ境地なのである。

筋のわかりきった通俗時代劇、国籍不明のばかばかしいギャング映画と知りつつ、その数秒間、ワンショットの興奮を得たいがために、劇場にもぐりこむ者の心境は、やはり、マニアとよばれても、致しかたのないところであろう。

ときに、わが身の因果におぞましさをおぼえ、おのれの性癖に、一抹の哀れをおぼえぬ

でもない。

しかしまた、こうも考える。

数多くの、くだらない劇映画のなかから、このように強烈なにおいと、色彩のよろこびを得ることのできる感覚を持ち合わせたことは、やはり、ひとつの幸福というものではなかろうか、と。

そしてそれは、我田引水をゆるしてもらえれば、ゆたかな感受性、デリケートな感覚、とよんでも、さしつかえないのでは、なかろうかと。

妙なたとえ方だが、われわれは、三百五十円の入場料から、ときに千円、二千円、いや金銭ではもとめることのできない絢爛たる値打ちの宝石を発見でき得る能力を、神からあたえられている、ともいえるのである。

さいきんのある夜、私は、三人の畏友と、異色ある二編の映画を観賞した。

その畏友とは、ひとりは、喜多玲子氏であり、ひとりは、落合竜二氏である。

いわずと知れた。おふたりとも、本誌だけの、いわば「専属」画家である。

その夜、私は、ひとつの発見をした。

S派の映画ファンのなかでも、各自の好みに、大きな差があるという事実である。

私たち三人の、その夜の「異色映画観賞」後の、感想と批評が、三人ともそれぞれ異っていたのは、意外であったし、この発見は、私自身の勉強にもなった。

映写された二本の映画のうち、はじめのものは、一応ストーリーがついている。

まず、その映画の内容をご説明申しあげよう。

――セーラー服をきた美しい愛らしい令嬢が、ギャングにさらわれ、ある怪しげなホテルの一室のベッドに、ねむらされている。

同じ部屋の片すみで、ギャングの一人が、いすに寄りかかってウィスキーを手酌でのんでいる。

意識を回復した娘は、ギャングのすきをみて、ベッドからおり、足音をしのばせて、ドアのほうへ逃げようとする。

ところが、ドアには錠がかかっている。

ノブをまわしているうちに、ギャングに気づかれ、娘は乱暴にひきずられて、また室内にもどされる。

このへんから、映画は急激に盛りあがる。

「このやろう、逃げられねえように、ふんじばってやる」

というようなセリフを、ギャングがいって（じつは無声映画なのである）娘はその男のために、長い縄でうしろ手にぎりぎり縛りあげられる。

ゆかの上に、胸を下にねじ伏せられ、左右の腕を背中にねじあげられて縛られていく過程が、すこしの省略もなく、同じ角度から、ていねいにうつしだされる。

その描写を主題とした映画だから、ていねいなのは、当然である。縛りかたでも、ウソや芝居ッけは全然感じられず、迫力百パーセントの、完全なものである。

娘の両腕をぎっちりと背中に縛りあげて、ほっとひと息ついたギャングは、また自分のテーブルにもどって、ウィスキーをのみつづける。



29　スクリーンに躍るロマンと幻想

どうやらこのギャングには、べつに仲間がいて、そいつは娘の家に、みのしろ金の請求の交渉にでも出かけているらしい。

見張り役のギャングは、娘を縛りあげて安心したらしく、だらしなく酔っぱらった顔でいねむりをはじめる。

とみた娘は、縛られたからだを必死にうごかして、ベッドのわきにおいてある電話器のほうへ、いざり寄っていく。このへんの描写がまた、ていねいですばらしい。

苦心の末、ようやく受話器に接近する。うしろ手に縛られているから、背中を受話器にむけて、不自由な格好のままで、ダイアルのなかに、指を突っこもうとするのだ。つまり、一一〇番をまわそうというのだ。

その瞬間、ギャングの手がアップになって彼女の肩を強く受話器のそばから引きはなしてしまう。

いねむりしていたギャングが、いつのまにか目をさまし、娘の行動に気がついたのだ。

「こんちくしょう！」

とでもいっているらしく、ギャングの口が大きくゆがむ。

セーラー服の胸倉をつかむと、いきなり、娘の両頬をなぐりつける。

それから、べつの縄で、娘の両足をそろえて縛りつける。つまり、身動きできぬようにしてしまおうというのだ。

娘は猛烈ないきおいであばれる。両足を蹴りあげるようにばたつかせ、スカートもまくれあがる。

ギャングも、けんめいになって足をおさえつけ、よううやく縛りつける。

「ざまァみろ」

といった感じで、完全に手足の自由をうばった娘のからだを、ゆかの上にころがす。

と、このとき、ギャングの目が、きらりと光る。大きくまくれあがったスカート。

ひざの上のももの白さ、まるさが、ギャングの目を光らせたのだ。その目は、異様な輝きを放ったまま、しばらく娘の全身をながめまわしている。

舌なめずりでもしそうな





表情。

そしてギャングは、とうとう、誘惑に負けてしまう。

娘の縄をときはじめるのだ。手も足もぜんぶ自由にしてから、セーラー服をぬがせはじめる。

娘は生きかえったように、また猛烈な抵抗をはじめる。

その抵抗があんまりはげしいので、ギャングも本気になって怒りだす。大きく腕をふりあげて、娘の顔を数回なぐりつける。

娘は顔をゆがめて悲鳴をあげ、ついに、ぐったりとなってしまう。

「むだな抵抗をやめて、おとなしくしろ」

というように、男の口がぱくぱくひらく。

セーラー服はむざんに剝がされ、白いスリップ一枚の哀れなすがたになる。

ゆかの上に、がっくりとうつ伏した娘を、ギャングは髪の毛をつかんでひき起こす。

すでに抵抗の気力をうしない、おしりをぺたんとゆかの上につけて起きなおる娘。

ギャングは、娘の背後にまわって縄を手につかむ。

「うしろに手をまわせ」

というセリフがはいるところであろう。

抵抗の意志をすっかりなくした娘は、哀れにも自分から左右の腕をうしろにまわし、首を前に垂らして、縛られるポーズをつくる。

ギャングは、にやにやしながら、自分もペったりゆかに腰をおろして、娘の手首から、悠然と縛りつける。

いちばんはじめの、すさまじい勢いとスピードをもった縛りかたとは逆に、縄の一本一本、一筋一筋を、ゆっくりと時間をたのしみながら、縛っていくのである。

このS的ムードは、劇場で公開される映画には、ぜったい見られない、だいご味といったような恍惚たるものである。

すべてをあきらめきって、自分から手首を背中で組み合わせる娘の心理、およびM的ポーズには、強烈なS的感度がふくまれているようだ。

また、わざと時間をかけて娘を縛りあげていくギャングの動作にも、その結果よりも過程をたのしむものの享楽的な心境が、巧まず表現されていて興味ぶかかった。

娘の両腕を、X型というような形に、入念に、寸分のすきもなく縛りあげたギャングは、にやりと笑う。

無抵抗の娘のからだを、あっちへころがしたり、こっちへころがしたりする。

スリップがまくれあがる。はだかのおしりをぺたぺた叩いたりする。

——というような、ストーリーともいえないような、かんたんなお話だが、それでも、ふつうの劇映画のワンシーンを、ていねいにひきのばしたような味



わいは、たしかに存在するのである。上映時間は、約二十分。

さて、二番目の映画には、ストーリーというものは、まったくない。

がんじがらめに手足を縛りあげられたヌードの美女が、ベッドの上でただひとり、しずかに、ときに激しく、くねり、もだえるだけのものである。

しかし、カメラはあらゆる角度からその被写体を撮りまくり、あますところがない。むろん、決してわいせつなものではないし汚ならしい感じをあたえるものでもない。均勢のとれた美しいヌードのけんめいな悶えは、きわめて魅力的に、そして芸術的に、堂々と二十分間、スクリーンにうつしだされたるのである。

（悪口をいって申しわけないが、この映画にくらべたら、昨年、松竹で公開した「女・女・女物語」のあの場面の、なんとうす汚なくうそ寒く感じられることか）

さて、話をもとにもどそう。

この二本の貴重な映画を見終えたあとの三人の感想が、二派にわかれたということについてである。

私の好みは、はっきりと前者なのである。つまり、ドラマチックな構成のなかの「縛り」なのである。

ストーリー性を必要とし、劇的な盛りあがりの上に、男と女とがクライマックスの、縛りをおこなわなければ、おもしろくない。

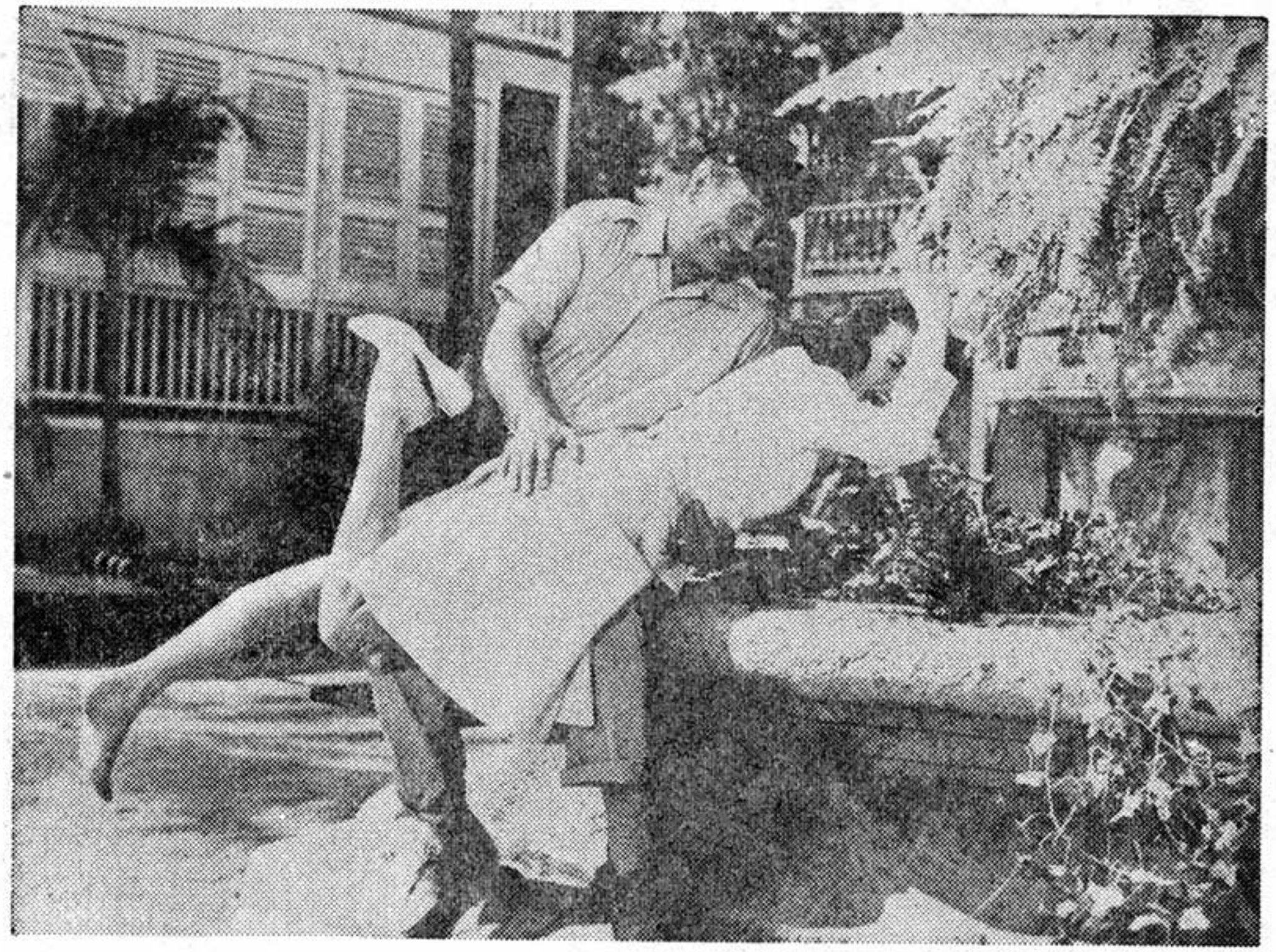
（「責め」である必要はない。ただ「縛り」だけでもよい）そうでないと、どうも、自分自身の心も、クライマックスに達しないのである。

いいかえれば、クライマックスに至るまでの、あの、わくわくする期待の心境が、なんともいえないのだ。

自分は、あくまでも第三者の観客として、客観的に、S的ムードを味わいたいのだ。

ところが、喜多玲子氏と落合竜二氏は、後者、つまり、よけいな





男なんか登場せず、ただ、美女の魅惑的なポーズだけが、スクリーンいっぱいにのたうちまわったほうがよい、と主張される。

「そのほうが、スクリーンの美女を、自分だけで独占しているような気もちになるじゃないですか」

という説明をきいて、なるほどと思ったのである。たしかに、それも一理ある。

あるいは、画家として、つねにモデルと相対して仕事をされている習慣からの見方かもしれない。

しかし、この両画伯にしても、喜多氏はむろん時代劇ムードの和服ものを好まれ、そして落合氏は、現代ものの清純ムードがお好きというふうにはっきりと対立（とは大げさだが）するのである。

私の場合は時代現代を問わず、そこにドラマがあって、美女が窮地におちいる必然性さえあれば、こころよく陶酔できる。

なんの準備も説明もなく、ただ裸女が縛られ、ころがされているのをみても、それほどの感興はわかないのである。

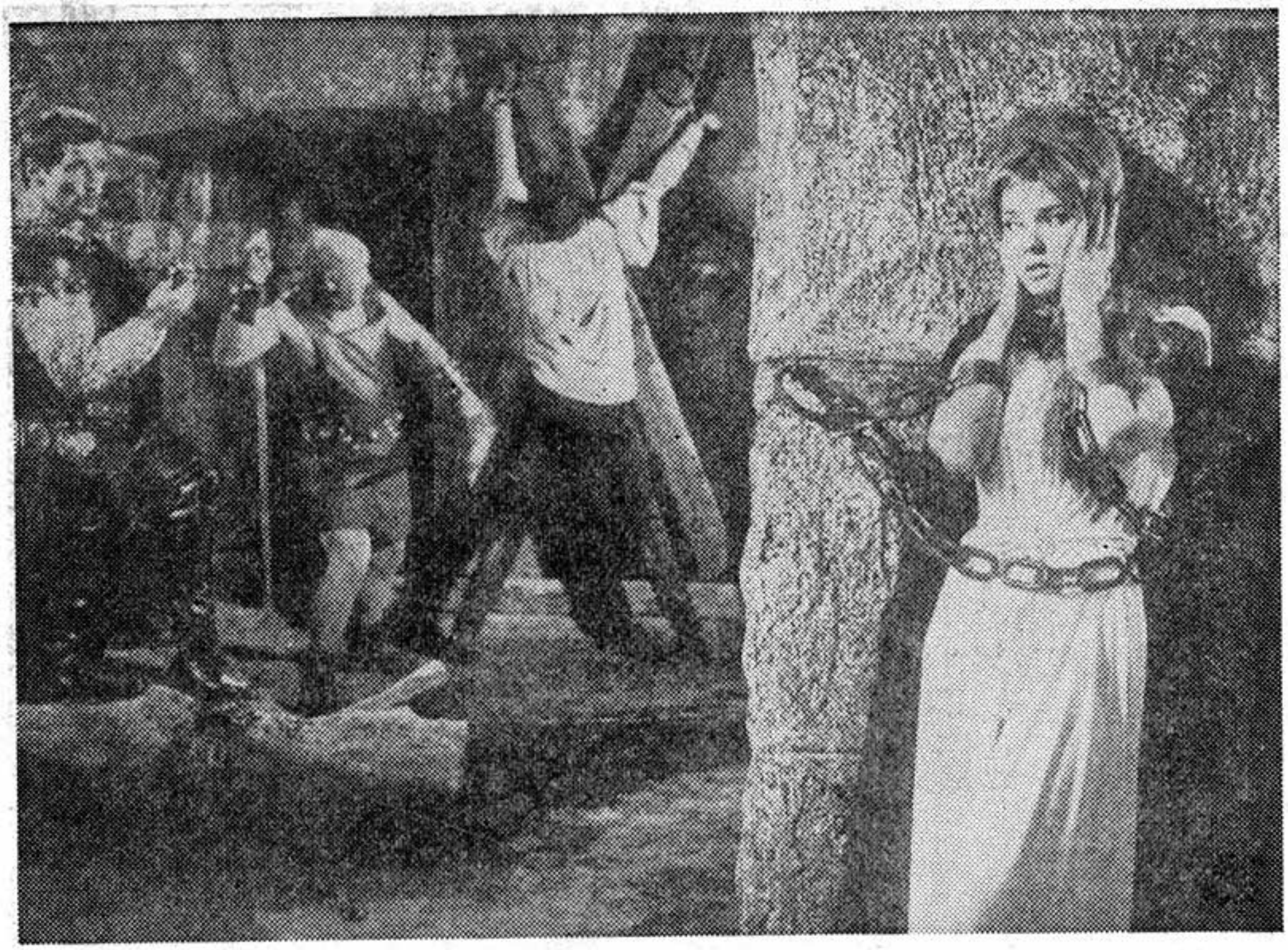
S的シーンを狙って、映画館へかよわれるかたがたのうち、客観派が何パーセントで、独占派が何パーセントか、だいたいの数字がでるとおもしろいのだが。

どちらでもかまわない、ただそのシーンが登場するだけでありがたい、という方も、たくさんおられることだろう。あるいは、そういう方が、数の上では、いちばん多いかも知れない。

テレビに押されて、映画館へ行く人間の数がすくなくなったといわれる。たしかに、映画館へ行っても、たいていの場合、ガラあきで、すわれないというようなことはない。

「またまた大ヒット、空前の盛況！」などと新聞広告にでた映画をみに行っても、客席の前半分は、だれも坐っていない。

映画好きのSファンにしても、おそらく、映画からテレビへと移行しているのではない



かと、私は想像する。

早い話が、一時間半の劇映画のなかで、登場するS的シーンは、たいてい、わずか三、四秒である。だとしたら、三十分たらずのテレビドラマあるいはテレビフィルムのなかでS的シーンを三秒間発見できたとしたら、そのほうが、あきらかに、トクである。

あちこちのチャンネルを、たんねんにまわせば、一日のうち、数回のSシーンを、タダで、居ながらにして観賞できるのである。

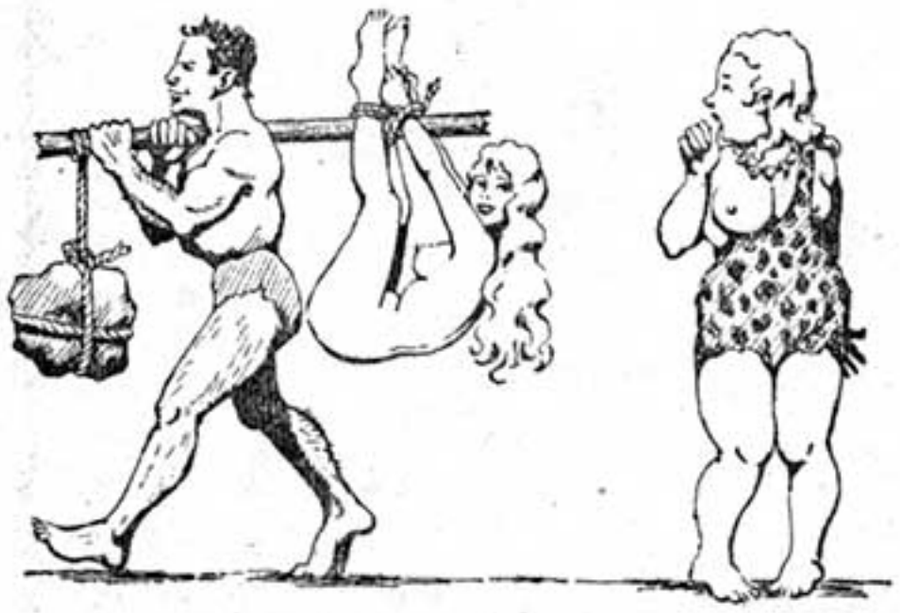
三十分間で起承転結を盛りこまねばならない娯楽ドラマにとって、もっともクライマックスを強調する方法は、悪人に女主人公をさらわせておき、主人公にそれを救いださせて「完」にする脚本を使うのが、なんといっても、いちばん、まとめやすいのである。

通俗とよばれ、安易とさげすまれようが、もっとも大衆に理解され得る筋立てなのである。

かくて、S派の映画ファンも、しだいにテレビだけで満足し、映画人口はいよいよ減少していく傾向になっていくのであろう。

しかし、私などのように、数十年来の熱烈なる映画ファンは、やはりあの暗闇のなかの特殊なロマンチシズムをすて去ることができないのである。

（未完）



海賊黒吉の襲撃

海の鯉幟



一龍斎貞史絵

夜の潮来

月も星もない陰暦九月の夜。

伊予の国岩間島の沖合に現われた軍船から三艘の伝馬が櫓音をひそめて離れた。夜の海にうずくまった岩間島の浜辺をめざし、槽ぎ出た伝馬には武装した男共が三十人ほど乗っていた。首領と見える大男が、闇の中でぎらぎらと双眸を光らせている。剃りあげた坊主頭が異様である。

と、暗い岸の一角に赤い松明の炎がゆらいだ。



「合図の火が見えたぞ」
首領の坊主頭が太い声を放った。伝馬は松明の炎をめがけて船足を早める。船底が砂を噛むのを待ち兼ねたように、男共が身をおどらせた。
「七郎次、顔を見せい」
坊主頭の声に松明をかざした男が岩陰から現われた。漁師の身なりをした男である。
「お待ちしておりやした。岩間の党の海鷹丸は明朝戻って来るそうで、部落の中には得物を持てる野郎はおりません」
「よし、者共。いいか」
と、坊主頭は部下を振り返った。
「家々に火を掛けて焼き払い、若い女は殺さずに引っ掠え。さからう奴は斬り捨てろ」
怒号をあげて、刀を抜き放った男共の中には、縄の束を用意している者もいた。
「七郎次、岩間の頭領、海之介の館に案内せい。奴の女房を捕えるのだ」
松明の赤い光芒を浴びて、坊主頭は醜怪に笑った。
二十戸余りの家々がひっそりと眠っているのが見えた。岩間の部落である。
七郎次と呼ばれた男が、調達していた数本の松明に火がつけられ、海賊達は刀をひらめかせて襲撃に移った。戸を蹴破り不意に乱入する無法の徒に、夢を破られ悲鳴をあげて逃げまどう女。残っているわずかな年老いた男達の抵抗を、雑作もなく斬り倒して、家々の屋根を炎がなめた。
野卑な声を響かせる男達に、若い娘や女房が捕えられては縛りあげられていた。いずれも、寝衣のままで、必死にあがろうために、裸身に近い姿で、後手に括られて追い立てられている。
坊主頭はふたりの部下と共に七郎次を先に立て、海之介の館に踏みこむ。
彼等の前にひとりの少年が脇差を振っー飛び出して来た。十二、三の子供である。
「お、お前達は、な、なにものだっ」
声が震えていた。健気にも、脇差をかまえて戦う心算である。
「邪魔をするな。小僧の命までは取らぬ。失せろ」
「ど、どかぬっ」
「面倒っ」
坊主頭がわめいて長刀を振った。刀尖が斜めにはしって、少年の右腕を宙に噴き飛ばした。
「うあーっ」
絶叫を残して一転した少年に眼もくれず、四人は館の奥へ足を進めた。
と、四人の前にひとりの美女が立った。燃えさかる炎の輝きを浴びて凄艶である。手には短剣が握られていた。岩間の党の頭領である海之介の妻千春である。
「お、お前達は――」
千春が短剣をかざして敵を凝視した。
「黒竜党首領、竜崎玄鉄」
名乗った坊主頭が、にたりと笑った。

海賊・黒竜党の名は死神を髣髴させる恐怖に満ちていた。瀬戸の海はおろか、遠くは呂宋、安南までも、黒く染めぬいた帆をあげて掠奪をほしいままにする海賊である。無法と殺戮に狂奔し村上水軍を放逐された竜崎玄鉄が、無頼の徒を蝟集させたのが黒竜党であった。

千春は恐怖に息を凍らせて、玄鉄の背後に佇立している七郎次に気づいた。

「お、お前は――」

「ふふふ、俺は岩間の党を裏切った訳じゃねえのさ。もとから黒竜党の者だ。この岩間に潜りこむために、時化に会って流れついたと見せかけたのよ」

七郎次はとがった頬に嘲笑を浮かべた。

「おい、この女を船へ運べ」

玄鉄は部下へ命じた。

「あ、ああっ」

躍りかかる男に、振りまわす短剣は雑作もなく叩き落とされ、弱腰を蹴られてのめりこむ千春。両の腕が折れる程に背へ捻じ曲げられて、重なった手首に縄が噛みついていく。

「おい、舌を噛ませるな。猿轡だっ」

千春の意図を悟った玄鉄の声。千春の最後の手段を封じるために、七郎次の魚臭い掌が素早く動いた。必死に歯を噛み合せる千春である。七郎次が苛立って、形良い鼻を摑みざま揉み捻じった。鼻腔を閉ざされて呼吸ができぬ。暫くは意を詰めて耐えたが、たまらなくなって唇を開く瞬間を、狙っていた七郎次が、汚れて異臭を放っている布切れを口の中に押しこんだ。

「う、くう――」

続いて一筋の縄が唇を割って口の自由を奪う。千春の頬が半ば程から、切れたように深い溝を刻んでくびれた。すんなりとした足首を括られて、千春の肢体は海賊どもの肩にかつがれていた。

「火をかけろ」

玄鉄の絶叫と同時に松明の一本が投げ捨てられた。

やがて――

玄鉄を先頭に立てた三艘の伝馬は、千春を含めて七人の女を積みこみ、沖の黒竜丸に向かって島を離れた。

浜辺では岩間の部落を焼く炎が夜空を赤く彩っていた。

「おっと忘れていた」

七郎次が思い出して声をあげた。

「首領、海之介には五つになる娘がいましたぜ。女房が隠しやがったんです」

「海之介を釣る餌にはなったろうが、この餌ひとりで充分だわい。娘は館と共に焼け死んでおるわ。のう、千春」

足下に転っている千春を眺めて、玄鉄は満足気な笑い声を響かせた。

船倉

化鳥の翼のような帆をあげた黒竜丸は、暗い海面を走り出した。

玄鉄は千春を船倉へ運ばせると、残った六人の女を部下の前に並べて、血塗られたような赤い唇を動かした。

「俺達は岩間の党を地獄の底に送りこまねばならぬのだ。前祝いにこの女共を楽しむがいい。だが、女共を殺してはならぬ。殺さぬ限り思うがままに扱わせてやる」

歓声が荒くれ共の口からどっとあがる。

「あー、あれぇ――」

「い、いやじゃ。離してっ」

幾つかの悲鳴が交錯して夜の海に流れた。たちまち、裸身に引き剝れた女達が、くびれこんだ縄目にもがくのであった。

「ふふっ」

玄鉄は部下の狂態を後にして、ゆっくりと船倉へ降りて行った。熱っぽい妖しい期待が玄鉄の胸の底でうずいている。

暗い胴間の片隅で、低い女の喘ぎが、玄鉄の耳をくすぐるように断続している。千春なのだ。

喰い入った縄は、上半身の知覚を失わせる程に厳しい。口腔に詰めこまれた汚布の異臭が、千春の敗北感を強めていた。

「暗い、灯を入れてやる」

玄鉄は天井から下っている網金を張った釣燈籠を引き寄せた。堺の豪商の持ち船を襲った時に掠奪した物である。

拡がった光茫が床に転っている千春の姿を浮かび上がらせた。

野獣の眼にさらされるおのれの姿を意識して千春は体を精一杯縮めた。まとっている寝床の裾も襟も乱れて、ぬめやかな女盛りの肌がのぞいていた。くびれんこだ縄が、豊かな胸のふくらみを盛りとがらせ、真白い太腿にまつわりついている薄紅色の腰布が玄鉄の血を昂ぶらせた。

船上での狂宴はたけなわになったらしく、吹きちぎれた悲鳴が船倉まで聞えてくる。

「く、くくっ」

と、玄鉄は咽喉の奥を鳴らして奇妙な笑い声を立てた。

「俺が村上一族から放逐された理由はお前だった。夫ある身に横恋慕とお前の亭主がわめきおった。ふふ、竜崎玄鉄の恐しさと執念の程を存分に味合うてもらおう」

玄鉄は楽しげな顔で言った。

「立て、立って俺の部屋まで歩け」

玄鉄は手を伸ばして、千春の髪を太い指で摑んだ。千春の眉が吊りあがった。

「う、うっ」

つぶされた苦痛の呻きと共に、白くすべやかな咽喉がひくひくと痙攣した。よろめきながら、体を起こす千春の縄尻を、玄鉄が非情に引きずって行く。

膝頭が床板にこすれる。

「く、くう」

猿轡の奥で濁った悲鳴を噴きながら、千春の体が転がるようにして引きずられて行く。裾がめくれあがり、ふくよかな太腿があらわになって、黒ずんだ床をもがく。後手に縛められた千春は、玄鉄の意志通りに操られるのであった。

「これが俺のねぐらよ。これから、お前が泣きわめくのだ」

と、玄鉄は醜怪な顔を歪めた。

それは見た事もない、奇怪な部屋である。床には異国の真赤なジュウタンが敷き詰められて、燃えるようであった。明国の商船から奪った寝台が据えられ、枕もとの小卓には、ぎやまんの壺に人血のように赤い液体が満たされていた。西班牙の葡萄酒である。

千春の眼を射ぬいたのは、壁に掛けられた数条の鞭と、奇妙な道具の数々だった。

玄鉄はぎやまんの壺から、杯に赤い液を注ぐと、唇に運びながら、あわれな生贄をなめまわすのだった。

「ふふ――」

と、玄鉄は不気味に嗤い、飲み干した杯をゆっくりと小卓に置いた。

「そのような不細工な猿轡はお前には似合わぬ。俺がとび切りの轡をはめてやろう」

その言葉に、千春のからだがびくりと動いた。

玄鉄は秘蔵の道具の中から、奇妙な形のひとつを摑みあげた。嵌口具なのだ。

「これはのう。南蛮船を襲うた時に手に入れた代物でな。お前に使うてやるのを楽しみにしていたわい」

千春は玄鉄の生暖かな息が顔に吹きかかるのを感じた。

「く、くうっ、くっ」

と、千春はこれから味合う屈辱を予想して咽喉の奥で泣いた。

夫の敵に自由を奪われた身をさいなまれる

苦しさ。燃え盛る炎の中で果てたかも知れぬ愛娘への想い。

悲運の底に呻吟している女を前にして、玄鉄の顔は勝利感に酔っていた。兇暴な海坊主であった。

玄鉄は千春の柔軟なからだを太い腕に抱きすくめた。千春の動きを封じておいて、玄鉄は片手で縄の猿轡をはずした。口中に詰められた布を引き出された時、千春はその機会に舌を噛み切ろうと図った。

「う、うっ」

「殺しはせぬ。死にたければ、俺が殺してやるわ」

玄鉄のしゃがれ声が千春の耳朶に流れた。己れの舌を噛もうとする前に、歯の間を冷たい鉄の棒が割った。それは屈辱をそそる嵌口具である。

鉄棒の太さは小指ほどで、両端には革紐が付いて、その先端には止め金があった。玄鉄は千春のうなじにまわした革紐を締めつけていた。たちまち、千春の頬はふたつにくびれてしまった。

これまでに、幾人かの女の苦鳴を、浸みこませたであろう轡は、千春の口腔に、酸っぱい唾液を拡げた。

「どのようにしても、美女とは美しいものじゃのう」

玄鉄はどっかりと寝台に腰を下ろして、千春の姿に、執拗な視線を這わせながら言った。

眼をゆっくりと動かして壁の鞭を探る。南蛮渡りの鞭や、強靱な竹鞭が生贄の肌を待っていた。

海の奸計

空も海も蒼かった。

黒竜丸が岩間の浜を焼き払った翌日の昼下がり。黒竜丸は帆を下ろして漂泊していた。甲板の上に荒くれ共が転って、いぎたなく眠っている。彼等の間に羅致されて来た女達が縛められたからだを転がしていた。飽く事のない、兇暴な欲望にさいなまれた女達は、すでに生気を失って動こうともしなかった。

と、舳に突立っていた見張りが、はるかな島陰を背にして、すべるように接近して来る一艘の船を認めた。黒竜丸よりも小さな船であるが船足はおどろくほど早い。

「皆おきろ。岩間の党の船かも知れねえ」

見張りの絶叫で、跳ね起きた七郎次が、水平線に眼を据えた。

「違いねえ。あれは岩間の党の海鷹丸だ」

岩間島に戻った海鷹丸が、殺戮の復讐に急追して来たのだ。黒竜党の奸計が潜んでいる事を知らないのである。

「帆をあげろ。俺は首領に知らせる」

七郎次がわめき捨てて、胴間に駈け降りて行った。

玄鉄は昨夜から、己れの一室に閉じこもったままである。その場で何が行なわれているのか、首領の性癖を熟知している七郎次にはわかっていた。

七郎次は玄鉄の部屋の前に立つと、耳を傾むけて内部をうかがった。

扉越しに女の低い呻きが洩れてきた。類いまれな美しさを持つ千春が、どのような姿態で玄鉄に玩弄されているかと想像する七郎次は妖しい昂ぶりを感じた。

「首領」

七郎次は低く言った。

「誰れだ」

「へえ、七郎次でございやす。岩間の党の海鷹丸が近づいて来るようで」

「案の定、海之介め、追って来たか」

扉が鳴り、玄鉄が現われた。

玄鉄の上半身は裸であった。盛り上がった胸に密生した毛が、汗でべったりと皮膚に貼りついていた。双眸は赤く濁り、異様な光茫

を滲ませていた。

七郎次は玄鉄の背後に、白磁の裸身が宙吊りにされているのを見た。千春である。

「よし、すぐに行くぞ。皆を集めて戦さの用意にかかれ。種ガ島を忘れるな」

命令を与えて、七郎次を追いあげると、玄鉄はゆっくりと千春を振り向いた。

千春は腰布をまとっただけの裸身を、梁から吊られていた。後手の縄は胸に廻って、乳房を異形に歪めて喰いこみ、幾条となく残っている鞭跡も痛々しい。一晩中玄鉄の手に呻吟し、肌を伸ばせば、からだを支えられる程の高さにの知覚を失わせていた。

海老責め、逆吊り、擽り責め、鞭打ちと玄鉄はおのれの願望の総てを、飽きる事なく千春にぶちまけた。疲れると寝台に横たわる。

その間も千春の縛めは許されない。奇妙な屈辱感をそそる轡すら外されなかった。

「千春、お前の亭主が追って来たぞ。頭に血がのぼる程に怒り狂うておろう」

玄鉄は千春の顎を摑み、顔を仰向かせて、熱っぽく言葉を吐きつけた。

「海之介にお前の姿を見せてやるのだ。よろこぶだろう」

閉じられていた千春の瞼がひらいた。

この浅ましい捕われの姿を、どうして海之介の前にさらけ出されようか。しかも、岩間の党が捕われた千春を見て気力を削がれてはどうなるであろう。

千春は双眸に哀願の色をたたえて玄鉄を仰いだ。声が出れば、口が動けば願えるのだが非情な猿轡は自由を奪っている。

「ふふ、その顔つきでは、亭主に会うのが嫌なようだの」

玄鉄は笑顔を作った。

宙吊りを外された時、

「う、うう」

いきなり、千春が玄鉄の足下に這いつくばったのである。

轡を噛まされ、美貌を凌辱された千春の顔が、玄鉄を必死に見上げている。先刻まで、眼にもからだにも漲ぎっていた敵意が、不思義な程消え失せていた。あるのは、海之介の前に引き出されまいとする烈しい願いであった。

責め抜いた千春の、悶え呻く姿よりも、いま足下に這っている姿に、玄鉄は噴きあげるような征服の悦びを感じていた。

「うおっ、うおっ」

凄絶な哄笑が玄鉄の唇からほとばしった。

黒竜丸の船内は、すでに殺気が張り詰めていた。刀槍を手にした兇暴な海賊共は甲板に勢揃いを終り、十数丁の種ガ島がひそかに舷側から海鷹丸を狙っていた。

両船の距離は一町を余すのみである。

その時、玄鉄が裸の上半身に小具足を付けて、太刀を背負って現われた。しかも、右手に握った鎖の先には、腰布一枚をまとったのみの千春がつながれていた。

「おい、岩間の女共を舷側に括りつけい。奴等に見えるようにな」

玄鉄は双眸を怒らせて命じた。

六人の女が荒縄で舷側に縛りつけられる。いずれも、がっくりと首を垂れてはいるが、至近距離にある海鷹丸からは、はっきりと眺められた。玄鉄の狙い通り、海鷹丸の船上にざわめきが拡がった。

「おどろいたか、岩間の党よ」

と、玄鉄が声を張った。

「黒竜丸に矢を射るがいい。うぬ等の女房や娘が命を失うだけだぞ。まだ、うぬ等の胆をつぶす者がおる。海之介、よく見るがいい」

勝ち誇ったように、玄鉄は右手に握った鎖に力を伝わらせた。

悪魔の勝利

巻きついている鎖に力をこめられると、肌にきりきりと軋んだ音を立てて鎖が喰いこんだ。

さんさんと照りつける陽光を浴びて、黒竜丸の船上に千春の姿はくっきりと浮かんで、くねった腰を包んだ赤い布が、吹きつける風にめくれて、真白い太腿がさらけ出て妖しい美しさをふりまく。高々と後手に括られた千春を海之介は見届けたであろう。

千春は、出来る事なら岩間の党が放つ矢に射たれて死にたい。そう叫ぼうにも、唇を封じている非情な筬口具が許さなかった。屈辱の底に呻吟したからだを、海之介に凝視される耐えられない羞恥を感じていた。

「見るがいい、海之介」

玄鉄の絶叫が響きわたった。

「うぬの恋女房だぞ。俺は千春をたっぷりと可愛がってやるぞ。口惜しいか、海之介」

千春の髪を摑んで顔を仰向ける。眉を寄せて必死に眼を閉じている千春の顔を海鷹丸に向けるのだ。

二艘の距離は五十間程である。海鷹丸の舷側には岩間の党が硬直した顔を並べている。その中に黒糸縅の具足を付けた壮漢が舳に立った。海之介である。

「卑怯だぞ、玄鉄。うぬはそれでも村上水軍の端くれか。恥を知れいっ」

「なんとでもほざけ。黒竜党はうぬら水軍とは違うのだ」

玄鉄がわめき返した時、弓鳴りの音が海鷹丸から起こった。二筋、三筋の矢が黒竜丸の舷側に突き刺さる。狙われているのは縛りつけられている女達であった。戦いの邪魔になる事を恐れて、岩間の党は自らの一族を屠り、宿敵の撃滅を意図したのである。

さすがの黒竜丸にも、一瞬の狼狽がはしった。

つんざくような悲鳴が波間に響いた。ひとり、ふたりと味方の手に射たれた女達が、がっくりと息絶えていく。玄鉄の表情が醜怪に歪んだ。

「七郎次、海之介を種ガ島で狙うのだ」

命じておいて、玄鉄は千春の裸身を楯のように引きつけた。

「海之介、うぬはおのれの女房が射てるか」

「おうっ、射てるとも。そしてな、うぬの坊主頭を叩き落としてくれる」

弓を構えた海之介の姿勢が大きくなった。

「いまだ、七郎次。射てっ」

だぁん——銃声が轟き白煙が流れた。

噛んでガチガチと鳴った。

海之介のからだが大きくゆらいで、支えようとする部下の腕の中から、崩れ落ちて行く光景が千春の眼に映じた。

「射て、射ちまくれ」

玄鉄の声で十数丁の種ガ島が一勢に火を噴いた。海鷹丸の弓の射手がなぎ倒されると、玄鉄は黒竜丸の舳を真すぐに相手の舷側に向けた。指揮者を失った海鷹丸の混乱を急襲するのである。その間に装填を終えた種ガ島が第二弾を送る。

「皆殺しにしろ」

玄鉄はわめくと、千春を引きまわして、帆柱に縛り終える。

「よく見ておけ。岩間の党が亡びるさまだ」

勝ち誇った哄笑を噴かせて、玄鉄の太刀がきらりと光をはね返した。

黒竜丸の舳が海鷹丸の舷側にめりこんだ。玄鉄を先頭にしてどっと斬りこむ。すでに頭領の海之介を失い、種ガ島の攻撃で浮足立っている岩間の党である。

凄絶な死闘であった。

絶叫と血臭と白刃の触れ合う音が静かな海面に拡がった。必死に戦う岩間の党も、劣勢を補う強者を欠いては、斬り崩されるのも当然であった。

千春は届いて来る断末魔の声に耳を塞ぎたかった。海之介のからだが大きくゆらいで、支えようとする部下の腕の中から、崩れ落ちて行く光景が千春の眼に映じた。

「射て、射ちまくれ」

玄鉄の声で十数丁の種ガ島が一勢に火を噴いた。海鷹丸の弓の射手がなぎ倒されると、玄鉄は黒竜丸の舳を真すぐに相手の舷側に向けた。指揮者を失った海鷹丸の混乱を急襲するのである。その間に装填を終えた種ガ島が第二弾を送る。

「皆殺しにしろ」

玄鉄はわめくと、千春を引きまわして、帆柱に縛り終える。

「よく見ておけ。岩間の党が亡びるさまだ」

勝ち誇った哄笑を噴かせて、玄鉄の太刀がきらりと光をはね返した。

黒竜丸の舳が海鷹丸の舷側にめりこんだ。玄鉄を先頭にしてどっと斬りこむ。すでに頭領の海之介を失い、種ガ島の攻撃で浮足立っている岩間の党である。

凄絶な死闘であった。

絶叫と血臭と白刃の触れ合う音が静かな海面に拡がった。必死に戦う岩間の党も、劣勢を補う強者を欠いては、斬り崩されるのも当然であった。

千春は届いて来る断末魔の声に耳を塞ぎたかった。海之介のからだが大きくゆらいで、支えようとする部下の腕の中から、崩れ落ちて行く光景が千春の眼に映じた。

後手に縛りあげられたからだを、鎖で帆柱に括りつけられた千春は、絶望の底で呻き続ける他に、苦痛から逃がれる方法はない。

殺戮の終った海鷹丸には、火が放たれて、どす黒い炎が船体をなめている。

全身に返り血を散らし、荒い息を吐きながら、玄鉄がもどって来た。

「七郎次、女共はどうだ」

「へい、ふたりが矢にやられて死にました。後は無事ですぜ」

「よし、引きあげたら船倉へぶちこませろ。西班牙の加比丹に売りつけるのだ」

黒竜丸は燃え盛っている海鷹丸から船首を廻した。負傷した者は手当てを受け、絶命した者は無雑作に海に投じられている。岩間の党の反撃で黒竜丸にもかなりの死者を生じていた。

玄鉄は殺気の残っている眼をぎらぎらと光らせて船上を見渡している。

七郎次が舷側から四人の女を船倉へ追いこもうとしていた。いずれも、縛められたからだをよろよろと運んでいる。

「こやつら、さっさと歩かぬか」

七郎次の怒号が飛び、右手に持った弓折れ

が、女達の臀に襲いかかる。
「ひいっ、助けて」
「か、かんにん」
悲鳴を耳にして、玄鉄がにやりと笑った。帆柱には千春の白い裸身が眩しく、くびりつけられていた。

屈辱の果て

きり立った断崖、岩を噛む波濤。
荒涼たる孤島は黒竜党にとっては、絶好の根拠地であった。天与の要害は島全体を砦と化さしめており、その奇怪な光景を恐れて、近寄る船もないのである。
突出した岩を背にした小さな入江が、島唯一の船を着けられる個所であった。帆を畳んで淀泊している黒竜丸から、伝馬へ向かっていた。海賊共が島で休息を得るのである。
玄鉄はひとり船の中に残っていた。
部下達が上陸して、捕えている岩間の女を看にして酒宴を張る事を許して、玄鉄はおのれの部屋に閉じこもっている。
船はゆったりと揺れていた。
勝利の快感と宿願の美女を掌中にした悦びが、玄鉄の部厚い胸の中で赤い炎を噴いていた。千春がいかに意に従うまいとしても、玄鉄は、鼠を弄ぶ猫の如く、ゆっくりと刻をかけて責め落とすまでなのだ。むしろ玄鉄にとっては、千春が抗えば抗うほどおもしろいのである。
玄鉄は小卓を前にして、朱塗りの床几に腰を据えて祝杯をあげている。強烈な琉球の酒が咽喉を灼き、胃の腑を熱くする。
杯を唇に運びながら、玄鉄の眼は執拗な輝きを帯びて、明国の商船から掠めた寝台を凝視していた。
そこには千春が標たわっていた。
柔らかな夜具の上に、美しい肢体を伏せているのだ。寝台の四隅に手足を拡げられ、それぞれに縛りつけられている。すでにまとう物もない身を、大の字なりにうつ向けて括られた姿態である。
むっちりと凝脂を光らせた背。くびれた胴から、盛りあがった双臀に幾条かの薄赤い痕が残っていた。昨夜の鞭跡なのである。
千春は夜具に顔を埋めていた。
唇が半ばひらき、だらりと舌がはみ出ているのだ。妖しく奇体な轡が口を責めているのである。まるで、犬のように舌を引き出されてその付け根にまるい輪金がはめられているのだ。舌を口腔に収めようにも、噛みこんで



いる輪金が邪魔になる。嫌が応でも、ぶざまに舌を垂れていなければならぬのだ。屈辱感た骨の髄まで浸みこませずにはおかぬ効果的な響であった。

玄鉄の考案した箝口具である。

めくらめくような屈辱が千春のからだを熱くしていた。これでもかと加えられる玄鉄の手に翻弄されるばかりだった。

玄鉄は酒をすすりながら、白磁の肌を羞恥で紅に染めている千春を、楽しむように眺めている。

剃りあげた坊主頭が光り、酔に火照った顔に不気味であった。

長い間、千春に対して燃え続けさせた邪恋の炎を、醜悪な形で爆発させようと思ってきた玄鉄であったが、いまはそれが変化しつつあった。

縛りあげた千春の美しさ。奇体な響をはめられ、不恰好な姿を恥らう女体の妖しさが、玄鉄を強く捉えているのだ。この女を屈辱の底に呻吟させてやりたい。玄鉄は幾度となくたを責めたが、千春ほど烈しい感覚を経験した事はなかった。期待が部厚い胸の中で音を立てて燃えている。

玄鉄の手から杯が床に転り落ちた。

床几から腰をあげて、ゆっくりと寝台に近づく。気配で閉じていた眼をひらいた千春の瞳を、おののきがかすめた。

玄鉄の顔はにたりと粘りつくような微笑を浮かべていた。

「ふふ、見せろ。その美しい顔をな」

玄鉄の指がつややかな黒髪をまさぐった。摑んだ髪を手もとにたぐりこんで、千春の顔を仰向ける。咽喉がそり返って、濁った呻きがこぼれた。

ぬらぬらと唾液が唇の端から顎に糸を引いている。

「千春、その響の味はどうだ。お前のためにしい面立ちにより似合うわい。声も出せず、俺が用意しておいたのだ。お前の高慢気な美舌も噛めまい。これからは、お前は俺の飼犬よ」

玄鉄は千春の顔を覗きこみながら、声を弾ませていた。

「まず鞭の味をしっかりと覚えてもらおう」

玄鉄の言葉に、千春のからだが一瞬ふるえた。昨夜の拷問の記憶が拡がる。灼けるような痛覚、空を切る鞭の鋭い響き。

「恐しいか、千春」

玄鉄は千春の頭髪を離した。がっくりと沈みこむ顔を見送りながら壁の南蛮鞭に手をのばす玄鉄。



しなやかで、強靱な鞭は生贄を前にして、蛇のようにくねっていた。

白く円味のある背を凝視した玄鉄が、右手を後方へのばして、腰をひねった。

ひゅっ、と鞭が鋭い唸りを船室の内部に響かせた。

「くうっ」

千春の裸身が動ける限りよじった。ぬめやかな肌に鮮やかな鞭跡が浮き出た。次に鞭が巻きついたのは豊かな双臀であった。

異様な悲鳴をほとばしらせ、黒髪を振り乱してもがく千春。もっとも効果のある太腿を玄鉄の鞭が責めると、千春の裸身は激しく震えた。

やがて。

背にも、臀にも、赤い傷痕が筋を重ねる頃になると、千春の呻きも低くなっていた。意識は濁り、ただからだの中が熱かった。

玄鉄の手から鞭が落ち、唇が脂汗を噴きあ

がらせたぬめ肌を、昆虫のように這いずりまわるのだった。

これから、どのような屈辱の地獄が、千春を待ち受けているのか、玄鉄の胸の中だけが知っていた。

呻吟の島

黒竜丸が根拠地である奇怪な相貌の島に戻って四日目。

一隻の南蛮船が現われた。南蛮船は真すぐに島に接近し、黒竜丸の淀泊している入江に来ると、船上から三発の砲声を響かせた。合図の号砲である。

すると、島の一角から、伝馬が漕ぎ出され、て、南蛮船の舷側に向って行く。伝馬の中には、巨軀を海風になぶらせている玄鉄の姿があった。

南蛮船の甲板には二人の西班牙人と数人の明国人が立ち並んで玄鉄たちを眺めている。伝馬が着くと、縄梯子が下ろされ、巨軀に似合わぬ素早やさで玄鉄に登っていった。

「相変らず元気のようだな。玄鉄殿」

と、濃い髯を顎に密生させたひとりの明国人が流暢な日本語を投げた。

「これは李王海、おぬしも暴れておるそうだな。加比丹のエック殿もお達者で何より」

玄鉄は李王海の背後に立っている西洋人に手を差しのべた。エックは蒼い眼を鈍く動かして玄鉄を見詰める。エックは西班牙の海賊である。部下の多くが明国人である通り、エックはアジアの海に出没しているのだ。

「おぬしの望む種ガ島を積んで来たぞ」

と、李王海が言った。南蛮船は黒竜党との取引のために来たのである。

「俺の国では種ガ島が高く売れるのだ。大名や堺の商人どもが争って買い集めておる。どうだな、御一統。俺の屋形で酒宴を開こうではないか」

玄鉄の言葉に李王海と加比丹エックが、それぞれに部下を連れて迎えの伝馬に乗り移った。浜辺の岩陰には、七郎次を初めとして黒竜党が威を誇るように勢揃いしている。

やがて——。

南蛮の客達が屋形の広間に座を占めた。酒肴が運ばれて宴が始まる。

「やくそくのもの、あるか」

エックが杯を乾しながら、淫らな色を蒼い眼に滲ませて玄鉄を見た。李王海がにやりと笑って、

「加比丹は楽しみにしておられたのだ。用意はしてあるだろうな、玄鉄殿」

「ふふ、心配はいらぬ」

と、玄鉄は肩をゆすった。剃りあげた頭を掌で撫でながら、七郎次に合図を送った。

「七郎次、岩間の女どもを連れて来い」

「へい、承知しました」

七郎次が腰をあげると、玄鉄はエックに視線を向けた。

「エック殿、充分に満足して頂けよう」

そらせた玄鉄の胸を、千春の白い肢体がよぎった。いま、千春は奥の一室で往生柱を抱いているのだ。あの女をやすやすとこの異人に渡されはせぬ。

「おう——」

エックと部下が嘆声をあげた。七郎次が岩間の虜囚を引き立てて広間に入って来たのである。六人の女はいずれも素裸に剝かれている。六人の女たちの驚きを予測して玄鉄が指示した。エックたちの驚きを予測して玄鉄が指示しておいたのだ。後手に縛られ、胴に廻した縄尻が次々とつながれている。もはや、己れの運命を締めて、女達は抵抗する気力もなく異人の視線にさらされている。黒竜党に掠われて以来、兇暴な海賊どもに弄ばれ続けた女達は、羞恥のために体を固く縮めるのが精一杯であった。

「エック殿、この若い女どもを差上げよう。種ガ島を運んでくれた礼としてな」



玄鉄は、エックのだらしなくゆるんだ表情を凝視して言った。

引き据えられた女達は首を垂れている。エックは立ちあがると女たちに近寄る。

「わかいおんな、私とてもすき」

エックはにたにたと唇を歪めた。

「李王海、種ガ島はどれほどあるのだ」

「五十挺、値段はこの前と同じでいいと加比丹が言っている。あの女たちをアラビアの土族に売るのだ。奴等は世界中の女を後宮に集めるのに黄金は惜しまぬ」

李王海は答えながら、エックの動きを眼で追っている。エックは女の髪をわし摑んで、顔を眺めたり、肌や肉づきを調べていた。始めて見る異人の姿に、女達は恐しさに声も出ぬのである。

「このおんなたち、もらってよいのか」

と、エックが玄鉄に声をかけた。

「李王海、おんなたちをふねにはこべ。それから、にもつをりくにあげろ」

続けて命じると、エックはもとの座に戻って酒をふくんだ。

「私、もっとうつくしいおんながほしい」

蒼い眼を濁らせて玄鉄を見るエック。

玄鉄は往生柱を抱いている千春を思った。あの女をエックに見せたら欲しがるだろう。

玄鉄が要求するだけの黄金を出すかも知れない。だが、いま千春をエックに売り渡すのは惜しい。

玄鉄は杯をなめながら思案している。

李王海は部下を指揮して、いやがる女たちを引き立てて、大広間から出て行った。

「首領、千春はどうします」

傍に寄った七郎次が囁いた。

「まだ、おんながいるのか」

と、横合からエックが口をはさんだ。七郎次の言葉から、別に女がいる事を悟ったらしい。

玄鉄がエックに顔を向けた。

「エック殿、もし、おぬしの気に入る美しい女がいるとしたらどうなる」

「のぞむものあげよう。たねがしま？　それとも――」

エックが杯を置くと体をのり出した。好色な海賊船の加比丹である。さすがに女を得るために物は惜しまぬのだ。

狡猾な玄鉄の眼が宙を泳いだ。

千春の美貌と豊満な女体を手離すのは惜しい。だが、ここでエックの望みを叶えてやればこれからの取引に利益がある。

「エック殿、明日まで待って頂こうか。おぬしの気に入る女が得られるかも知れぬ。今夜は屋形で休んで頂こう」

玄鉄は言い終ると、すっと座を立った。エックが満足気な表情を浮かべて玄鉄を見送っていた。

往生柱

玄鉄は酔いの色を赤黒い顔に刷いて寝所にうっそりと足を踏み入れた。すでに日は落ちて、部屋の中は薄暗くなっている。

灯を運ばせると、玄鉄が血走った眼を、一隅に投げた。短繁の光が届くその場所に白い千春の体が立っていた。

まるい、直径で二尺程もある柱に括られているのだ。往生柱をはずして欲しいか。もはや死ぬなどと思いはすまい」

その言葉を聞いた千春は、うなずき、哀願の色をたたえた眼で玄鉄を見詰めた。ぬれぬれとした瞳であった。

猿轡の布を解き放たれると、千春の唇が震えた。

「お願い、縄を解いて下さいまし」

「駄目だ、俺は女を縛りあげ、その姿を眺めるのが好きだからな」

「それでは、何か、何か着せて下さいまし」

玄鉄は黙って答えなかった。眼を千春の一点に釘付けにしている。薄紅色の布に包まれたこんもりとしたふくらみである。

「お前の悲鳴を聞いてみたいものだ。これま

では轡を噛ませたままだったからな」

低い呟きが千春の耳に響いた。玄鉄が何を意図しているのか、千春にはすでに判っていた。戦きが背筋をはしった。

玄鉄が手を伸ばした。腰布をたくしあげて裾を紐にはさみこむ。

「お願いですっ、許してっ」

羞恥が哀願の叫びを出すのだ。千春は肌を赤く染めた。玄鉄は黒竜丸の船室から、たずさえて来た南蛮渡りの革鞭を握った。

「泣け、わめけ」

と、玄鉄が陰惨な声を響かせた。

びゅっ、と革鞭が空気を裂き、短檠の炎をゆらめかせた。

「ひい――」

唇から苦鳴がかん高く噴きあがった。鞭の先端は千春の双臀に巻きついている。玄鉄が手もとにたぐりこむ。赤い一筋が隆起に浮き出ていた。

玄鉄は鞭をすくいあげた。

「ひえっ、お、おゆるし――」

のけぞった千春の顔が歪んでいた。

柱を抱いた両手の指が苦痛を耐えるために握り締められている。肌を襲う革鞭な熱い感触を残すのだ。

冷たい木肌に密着した肌が、悶えるたびにこすれて痛む。ぬめぬめとした凝脂の輝きが



みごとである。
玄鉄の鞭が空に鳴ると、反射的に千春の裸身が痙攣する。
「玄、玄鉄さま、お許し下さりませっ」
憎むべき敵に哀れみを乞う千春。
征服者の悦びが、玄鉄の胸にじんわりと拡がる。この女は、もはや岩間の首領海之介の妻ではないのだ。
「ふふふ、音をあげるのか千春」
玄鉄は鞭を捌きながら千春を覗いた。額に脂汗を浮べた美貌が震えている。
「岩間の女達は西班牙の海賊、加比丹・エックに売るらしい。エックめは美女を所望してな、満足する女ならどのような代価でも払うそうじゃ。どうだ、千春。お前はあの異人の毛深い腕に抱かれてみるか」
千春の瞳が翳った。話に聞いた西班牙人とか申す国の土族に売るらしい。エックは女をアラビアクにくれてやったわ。エックめは女をアラビアちは若い女の生血をすすると言う。しかも、美女を所望してな、満足する女ならどのような代価でも払うそうじゃ。どうだ、千春。お前はあの異人の毛深い腕に抱かれてみるか」
千春の瞳が翳った。話に聞いた西班牙人たちは若い女の生血をすすると言う。しかも、獣の肉を喰らい、野獣と同じ体臭を放つ蛮人だと聞いている。
残酷な運命に変りなくば、まだ玄鉄の方が耐えられよう。また、いつかは果たせよう海之介の恨みも、南蛮船に売り渡されては消え失せるほかにない。
「お願いです。玄鉄さま。私を、私を異人の元にやらないで下さいませ」
「俺の所がよいと言うのか」
玄鉄はてらてらと光る赤黒い顔を崩した。宿願の美女を屈伏せしめた勝利の快感が全身に拡がる。
「どのような事でも致しまする。お願い、玄鉄さま」
往生柱を抱かされた千春の姿は、妖しい一幅の絵である。この女をエックに売るのは、惜しいと、さすがの玄鉄も思った。
「よし、お前は俺の傍から離すまい。エックに断って来るとするか」
玄鉄は鞭を捨てた。そして、千春の黒髪を摑み、顔を仰向けると酒臭い息を吐きつけながら、ぶあつな唇を這い寄せるのであった。

復讐を誓う者

岩間島は廃墟と化していた。
燃え落ちた部落の中に、襲撃を生き残ったわずかな人々が呆然と暮していた。
黒竜党に部落が蹂躙された翌朝、戻って来た海鷹丸が、追撃のために出発してから島には帰らぬ。噂に依ると、海鷹丸も黒竜党の玄鉄に敗れたと言う。
部落のはずれに、粗末な小屋が作られて、その中にひとりの少女とひとりの少年が住んでいた。
少女は海之介の娘で真弓。少年の名は大助と言う。
大助は右腕を喪って、肩まで白布を部厚く巻かれていた。黒竜党が襲った時、千春を守るべく、玄鉄の前に立ち塞った健気な少年なのである。
玄鉄の長刀に奪われた右腕の傷は、ようやく痛みと出血が止ったのであった。大助の小さな胸には、いま玄鉄への復讐の想念が燃えていた。
床に横たわった大助は真弓を凝視した。
まだ五歳になったばかりの真弓は、千春の美貌を受け継いで幼い中にも天凛の美しさと気丈さを持っていた。父と母を失っても、真弓はうろたえぬのであった。
大助は業火の中から、深傷を負ったからだで、真弓を救い出したのである。
「真弓さま、海鷹丸も黒竜党の玄鉄に沈められたそうじゃ」
「お父さまは死んだのかえ」
あどけなく真弓は訊ねた。
「岩間の党全部が死んだのじゃ。無念な」
大助は口惜しそうに唇を歪めた。
「お母さまはどこへ行ったのだろう。大助、

お前は知らぬかえ」

大助の眼に強い光が浮かんだ。自由になる左手で身を起すと、真弓の顔を喰い入るように見詰めた。子供心にも大助の表情に、厳しいものを感じて、真弓はまっすぐに相手を見返した。

「お母さまは黒竜党に捕えられたのです。生き残った中で、仇を討てる者は俺と真弓さまのふたりだけじゃ。これから、どのような事をしても、黒竜党の玄鉄を討つのだ。俺も真弓さまも腕を鍛えて、必ずこの恨みを晴らすのじゃ。判ったな、真弓さま」

「うん、真弓はお父さまのように強くなる」

大助の言葉の持つ意味が呑みこめたのか、真弓はこっくりとうなずいた。

「よし、必ずこの左腕で玄鉄を斬ってやる」

大助は顔前に宿敵を迎えたように叫んだ。いま、潰滅した岩間の党の中で、首領海之介の復讐を果たし得る者は、隻腕の少年と幼い娘の他にはなかった。

全身に噴きあがる闘志が、大助の血を燃え立たせるのであった。

そのころ——

黒竜党の根拠地では、加比丹エックの南蛮船が出航しようとしていた。

エックは玄鉄から、思うような返辞がもらえずに、不機嫌な顔つきだったが種ガ島五十挺の代価として積みこまれる黄金に、ようやく笑いを浮かべていた。

「こんどは、うつくしいおんな、たのみますよ」

と、南蛮船の舷側から、送り出ている伝馬の玄鉄に向って叫んだ。

「玄鉄殿、よろしく願っておく」

エックの執念に李王海が言葉を添えた。

「判っておる。楽しみにしてもらおう」

玄鉄の声が波の上に響いた。

やがて、帆を一杯に張った南蛮船が、島の入江から外海に向ってすべり出して行く。

伝馬を返した玄鉄に控えている七郎次が口をはさんだ。

「首領、種ガ島はどこへ売るお心算だの」

「値の良い方に売るのだ。織田、武田をはじめ買い手は山ほどあるわ」

「今度は、少々、この七郎次にも御褒美を頂きたいもので」

と、七郎次が卑屈な笑いを刻んだ。

「判っておる。お前の力倆で岩間の党を葬った訳だからな」

玄鉄は鷹揚にうなずいた。

屋形の寝所の中に千春が睡っていた。

夜が白むまで、玄鉄は千春をあらゆる方法で責め苛いなんだ。これまでに味合った拷問の代価として積みこまれる黄金に、比較し難い玄鉄の行為であった。千春の全身はしびれ、疲れ果てて、何の反応も示さなくなって、玄鉄はようやく許したのであった。

夜具の上に横たわった千春の縛めは依然として解かれてなかった。喰いこんだ縄の感触を忘れる程、千春は疲労し切っていた。

屋形に戻った玄鉄が、寝所に足を運んで来ると、仰臥している千春の頭を蹴った。

「起きぬか。俺の帰るを知らずに睡るとは横着だぞ。仕置をしてやる」

玄鉄の腕に引きずり起される千春。

必死に哀願する千春を、玄鉄の手が無慈悲に、苦痛の底に追いやるのだった。海老責めに縛りあげられ、濁っていく意識の中で、千春は海之介と真弓の面影を求める。

海をへだてたはるかな岩間島で、玄鉄への復讐に燃える真弓と大助の危難と活躍は、稿を改めて物語ろう……。



ある征服の記録から

森本愛造

一

はなやいださわめき、着かざった女たち、ゆるやかな円舞曲の調べ、一九五一年の秋も深まったころ、東京会館では日本最初の——と銘打ったファッション・ショウが開かれていた。

私はふとした機縁から、さるデザイナーの紹介で定刻よりも遅れて会場へ行った。

日本最初と銘打っていたほどだから、じっさいモードなどとはほど遠い感をまぬがれない代物が多かった。そのほとんどがトレーシング・ペーパー一枚でパリのデザイナーの作品から盗みとったものであり、その中に一つ二つアメリカ帰りの某氏による和洋折ちゅうのおかしなモードが独創品として出たのが、せめてものというファッション・ショウであった。

しかし当時にしてみれば、はなやかな雰囲気に飢えていた有閑女性たちにとっては、その会場が十分に高級な社交場としての役目をはたしていたようである。

ショウがおわり、人びとが広い正面階段をおりてゆくころ、すでに街には灯がつき、まだ楽しみのすくない敗戦国の夜景が眼下にひろがっていた。

多くの人たちがうすよごれた国電で家路へ急ぐのであったが、なかには二三十人の自家用者族もいた。私がこの話をはじめようとする主人公も、そのなかの一人であった。

薄いグレーのフレイヤーのついたオーバーを肩にかけ、大股に歩くそのスタイルは、戦後アメリカ帰りの某氏が日本に持ちこんだ独特な気取りであった。その人はこともなげに私に声をかけてきた。

「お送りしましょう。あたしも近くですから——」

ついさきほど、さるデザイナーから紹介されたときの話では、彼女はオペラ・シンガーであるとのことだった。

その夜私たちが彼女のシボレーで家の近くまで来るのには三十分もかからなかった。いまでは一時間半はかかる道のりである。ごく近くまで来たとき彼女は言った。

「ずいぶん眠いですこと。このあたりに温いお茶でも飲ませる所をご存じありません?」

というこころから新しい喫茶店に入った。

じつは、この一っぱいのお茶が契機となって、一人の人間の秘密の奥へ、私が没入してゆこうとは、そのとき私自身考えてもみなかったのだ。



■ 映画〈嵐を呼ぶ大鼓〉

もしそのとき、彼女が持っている古いシャンソンのレコードを、だれかにゆずりたいと言わなかったなら、また私がそれを引きうけなかったなら、ある一人の男は私の前に現われずにおわったにちがいない。その男とは、日仏混血で彼女の内縁の夫であった。私がレコードを見に、彼女の家をつぎの日たずねたとき彼はいなかった。

私が不用意にも棚の上からレコードをおろそうとして、自分のわきの下からはさんでいたスクラップ・ブックを落としてしまった。そのときの私のあわてぶりが彼女に好奇心をおこさせた。そのスクラップは私のSMコレクションの一つであった。

彼女は夫もそんな趣味を持っていること、自分にはどうしてもぴんとこないこと、それらをぽつりぽつりと話しはじめた。さらに、夫は夜毎に彼女に対しムチをふるい、その後に彼女にムチを持たせて逆に打たせる奇習があるというのだ。そして例のデザイナーも夫と同じ趣味を持っているらしいという話を私に打ち明けた。そのときの彼女は、はずかしいことを打ち明ける女の態度、独特のやさしさで訴えるように話した。

このやさしいシェラザードの導入部に現われる一条のバイオリンの旋律にも似た語りかけは、

〝むかし、あるアラビアの国に――〟

で、はじまる千一夜物語と同じく、なんというロマネスクの世界であった。彼女の話がではない。彼女のいう《おかしなひと》の世界がである。

二

その翌々日、私は一つの小包みを受けとった。中から厚い日記風な英文で書かれたノート数冊と、『ビザール』誌が三冊出てきた。

ビザールとは《奇妙な》という意味だが、この余りにも有名になった雑誌を、私がはじめて知ったのはこのときであった。

日記はかならずしも日付順ではなく、また記入してない日も多かったが、これは大人の男のふしぎな肉体の記録である。

彼A氏は、十九歳のときはじめて夢精をおぼえた。偶々、その夜寝床に入ってから読んでいた本が『リディア・ベイリー』であったためである。

ちょうどその夜、リディア・ベイリー嬢の登場する広大な荘園の描写の部分を彼が読んだために、彼の夢精にさいして現われたのは凛々しく身をかためた馬上のリディアであった。

ご存じの方もあろうが、この本は欧米で広く愛読されている、ハイチ島の革命に遭遇した、女荘園主リディア・ベイリーの物語である。その中に、彼女が相続すべき保険金のことで、アメリカからたずねてきた保険会社員と二人で、黒人たちの反乱の中からぬけだそうとする物語の前半部の「フォト・プレイ」から、ケイ・フランシス扮する写真ありの「モーション・ピクチュア・クラシック」誌より四点。支払金額四、〇〇〇円——

右のような簡単な記載がつづく。この部分は約一カ年にわたってつづいている。私はこの部分の淡々とした記録を読みながら、ふと『ドン・ジョヴァンニ』のなかで、従者レポルロの歌う『カタログの歌』を思いだす。これは

困惑し疲労する。

〃彼女は、もはや乗馬服に嫌悪を感じはじめたのだろうか？〃

と失望をもって記している。このときまでに彼は、美しい妻にじつに九種類の乗馬服、十七種類の乗馬靴を買いあたえている。

しかし妻は夫の趣味に倦怠感をもちはじめる。ときどき彼女は、それらのぜいたくな衣しょうを着けることを婉曲にこばむようになる。

〃今日は、女性なしで――〃

とA氏は記している。

そしてふたたび彼の蒐集がはじまる。それはかわいた者が水を求めるのに似て、異常な執念をもってつづけられている。もはや一セントチ四角の写真さえ見のがそうとしない。その集積がいかにすざましいものであったか、彼がメモしている。古雑誌の売払数量によって歴然としている。曰く、

〇月×日　古洋雑誌　一二貫七百

〇月×日　古洋雑誌　一〇貫五百

そして後に従えば、

〃妻のうごきやすい、わかりやすい心理と反対に、七千の美女は変わることなく私にはほえむ〃

のである。

彼は、はげしい失望と切り抜きの女たちにかこまれる。この状態は約二年つづく。その間に彼にとっては、切り抜きの蒐集だけが生きがいである。A氏はときどき記している。

〃何故に私は彼女を妻としつづけているのか？〃

何故それをつづけていなくてはならないのか？〃

この結論を発見したとき、彼A氏は喜びをもってつぎのように書く。それは一九五六年十二月二四日のことである。

〃妻に愛を、そして、もう一つの別のものを女たちに――〃

このあたりで、彼の心の中でようやく、交錯した想念は整理されてゆくのである。アイドルを彼のごとく、はっきり心の中で把握している者にとって、この整理は比較的容易である。

彼のいう理想の女神と彼自身の間に、ぴんと張りつめられた一本の糸がひかれる。何千の切り抜きの女たちは、その上に一直線に並ぶ。そして彼は現実の妻を、その糸の上にのせようと努力を始める。そこに愛があるからである。

一般に愛の発現とは考えがたいA氏の蒐集癖、その切り抜きに対する異性としての執着は、彼の妻に対するもっともノーマルな愛情によって、もっとも純粋な形での愛の発現となる。

三

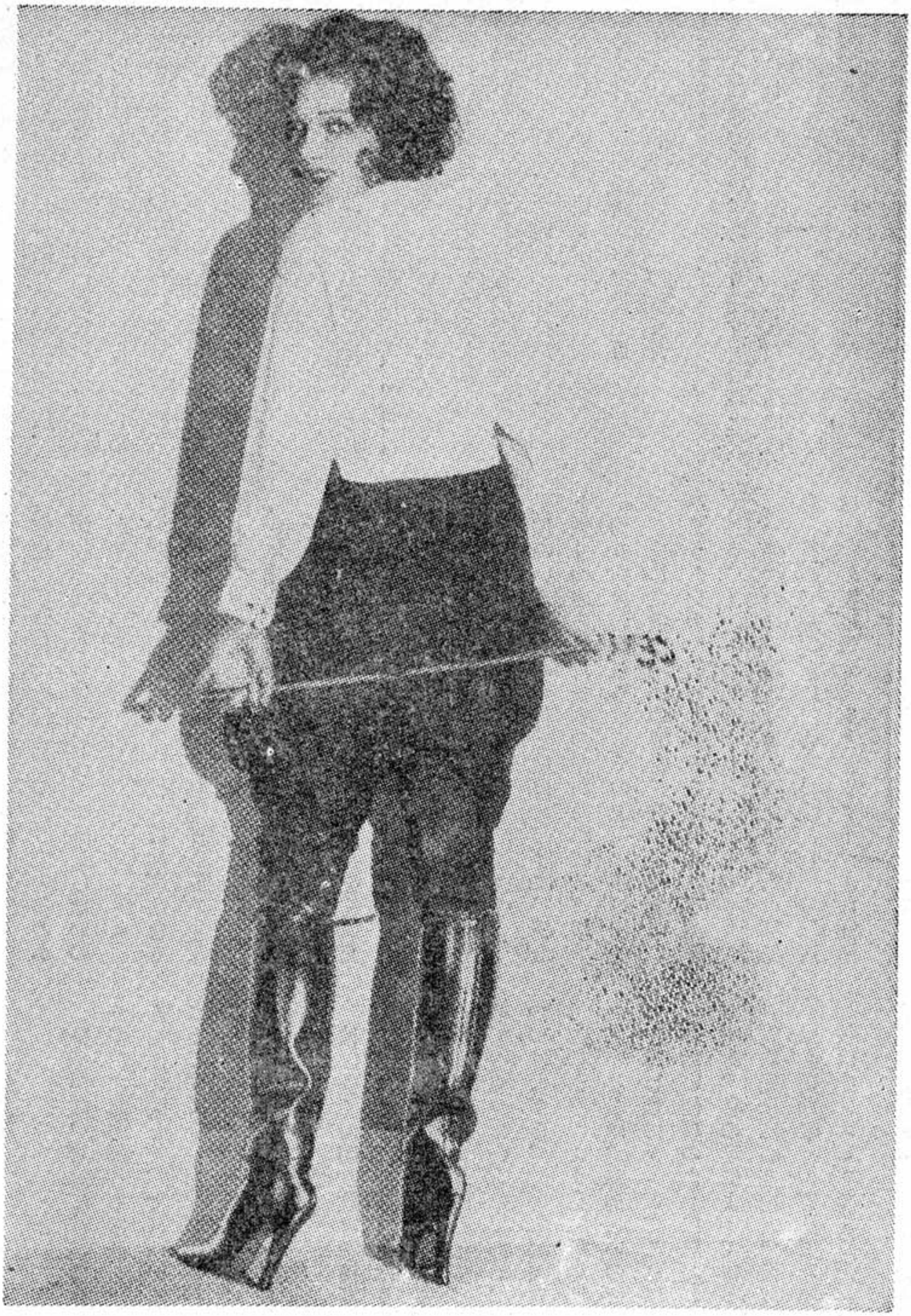
ひそかに、着実に、彼の心の第一幕がおわり、第二幕がはじめられる。溶暗、そしてだんだんと明るく、それはいまだに到達されたことのすくない第三幕は、神と女と愛と心との一致である。その幕開きに向かって、その長い起伏にみちた道程を進みはじめるのである。

彼は多くの切り抜きを複写し、その女性の顔の部分に、妻の写真をはりつけ、モンタージュを作りはじめるのである。この作業はかんたんであるようにに見えて、そのじつ、きわめてむずかしいものである。何十回も失敗しつづけながら、ついに要領を会得する。

〃このようなよそ目には奇怪な仕事に熱中している私は、おかしいのではないだろうか？しかし私にとって、これは大事なかけがえのない仕事のように思われる。

夢を、私の妻によって得るために、妻を真実に完全に心と肉とで愛するために、これは必要な唯一の方法である、と考える。〃

彼は赤エピツで《私の妻によって》と



■ ビザール誌　1946年1月号より

《必要な唯一の方法》の二つの文字に力づよくアンダーラインを引いている。まごうところなく、これは彼にとって《必要な唯一の方法であり》その目的は、他のだれでもなく彼の妻によってなされなくてはならないのである。

つねに外観に見る異相は、なんらかの真実によって普遍的なものと密接に、唯一のやり方で結合している場合が多い。血にぬられた

キリスト像も、水の上を歩む聖フランシスも巌頭で強風に向かう婆羅門も、そして処女懐妊も、その異相の故にこそ、愛と永遠につながっているのではないであろうか。

モンタージュという、余りにも現代的な作業とその結果に対して、容易にこの説明は理解されないかも知れない。しかし彼は嘗実に妻への愛を後宮の何千人の女性たちの魅惑へと近づけていった。

リヒアルト・シュトラウスが好んで絢爛とした筆法で描く、現代人の秘蹟《夢の混乱》が、ついにこのコレクトマニアの夜におとずれる。彼はおどろきと畏敬をもって日記に記している。

〝夢の中でモンタージュは完ぺきにおこなわれているのだ！　それは不完全な写真術のそれではなく、自然のあたえた完全なものであった。止めどなくつづく快楽感（エクスタス）の中で、私は完全な彼女を妻の中に見たのだ。〟

この事実は、旧来のパブロフの原理によっても説明することができよう。事実おこったのみは、それも可遺精とエクスタスについてのみは、それも可能である。しかし無限の可能をつねづね得ている心との結合は、どうして説明すればよいのであろう。彼は余白に書き記している。

〝大きなるラッパ天よりひびくときに――〟

これは聖書の一句である。彼のマニア性からな発想法からのみではない。彼の心は、いまやらではない。彼の混乱の中で神と対峙するのである。

〝妻はよみがえり、虚像は消えた。私は切り抜きをすべて火に投じよう――〟

一九五七年六月、むしあつい夜、彼はしずかに書く。一万点近いコレクションが火に投じられたとき、もはや彼は一片の名ごりも感じなかったであろう。彼の後宮はもえた。しかしそれは劫火によってではなく浄火によってであった。

四

彼は雑誌を探そうとしなくなった。ひたすらに夜を待った。秘蹟が毎夜おとずれることを約束されているからであった。彼はさらに劇的な要素を儀式に加えるために、ムチを使うことを考えだした。

〝ムチで打つんです――〟

という彼女の私への話し方は不十分であった。というのは彼はムチを使うことを、その痛みを、その唸りが打たれる者に加える独特の感覚を妻に知らしむべく、目をさましている彼女を打ち、彼自身は眠りについてから妻に打たせるのであったからだ。

夢の混乱の中で彼自身の官能が、その苦痛を感じるときに彼はより理想に近く妻を愛するのであった。失われたはずの切り抜きの女たちの幾千の衣しょうが妻をつつんで現われた。それは無限につづく祝祭劇の合唱のように彼の想念と官能をとらえてはなそうとしないのである。

その苦痛は現実のものであったが、彼はこれを混乱の中に受けとめる。花火工場の爆発のような色彩的な噴火がそこにあった。

〝それはロシオの祭りのようである――〟

と、彼は以前おとずれたスペインの思い出をまじえて書いている。ロシオ祭り行列（プロセシオン）は有名なきらびやかなものである。こうして彼が第二幕の終りに到ろうとしているころ、いっぽう彼の妻はどうしていたのであろうか。

彼女は夫の中で起こったこれほどの変化を一つも知らなかった。夫の心の中にある彼女は、夜ごと衣しょうをこらして彼をおとずれているにもかかわらず、肝心の本人は何もわ

からないまま無為にすごしているのである。
彼女は、なぜ夫が切り抜きをやいたのかを知らない。彼女の話によれば、
「きっと彼は子どもじみたことをしていたとさとって、思いきったのですわ――」
と、そしてムチについては、
「そうかと思うと寝室へムチを持ちこむなんて、すこし非常識で、きちがいじみているようね――」というのだ。

美しい横顔と流れるような栗色がかった髪毛を持った二十七歳の有能なオペラ・シンガーは、その美貌にそぐわしく、余り理づめな頭脳を持たず、サンチョの心しか持ち合わせていない。
彼女の真の存在は、すでに夫に吸収され、神は彼女に機会をあたえようとさえしないのであろうか。再度、私が日記を返しに彼女をたずねたとき、香り高いレモンを紅茶にまぜながら、この不運のヒロインはあでやかな笑いをまじえて言ったのだ。
「あたし、彼のそういうところを、抜きにして彼を見ていますわ。それが彼のためにも一番いいと思いますし、そのこと以外には、彼には、なんの欠点もないのですもの――」
大きな花が開いたときのような、彼女の魅惑的な笑顔をながめながら、私の一部を思い出してみた。
〝妻は病院でみてもらえと言う。だが医者になにがわかるというのだ。私の心の中で起こったこの奇蹟がわかるはずがない。しかし、それがわかる医者だったなら、きっと、そっとしておいてくれるだろう――〟
一九六一年の暮、あわただしい人ごみの中で私はふたたびこのカップルに会った。そそくさとした挨拶の中で、彼が彼女を正式の妻にしていることを知った。彼女の美しさはおとろえず幸福そうに見えた。そして、
「上が男で、下が女の子なのよ――」
そう私に言う彼女は、彼A氏の心の中の祝祭劇に登場する彼女ではなく、ただ満ちたりた妻、しあわせな母の姿であった。そして、私が日記を読んだことを知っているA氏は、目礼しながら私の手をにぎり、くちびるに微笑をうかべた。
その夜は、はじめて私が彼女に会ったときと同じように、街には灯がともり人々はざわめいた。だが彼女は不満のかわりに満足を、男は焦燥のかわりに安ねいを自分のものとしているようだった。
〝女は言う――
あなた私の部屋をおぼえていらっしゃる？
あなたは私とのことを思い出さないの？
しかし男は答えず、黙って空を見上げた。
月の光が声もなく二人を照らしていた。〟
これはベルレーヌの『感傷的な対話』の一節である。
男は月を、女は唇の味を、人間の風景はかく描き上げられるのであろうか。女性が美しければ美しいほど、女性が偉大であれば偉大であるほど、その登場する祝祭劇は壮大であり、豪華であり、目をあざむくばかりである。しかしそこにあるすべてのものは、その結構をつかさどる者を待ち望んでいる。
天は陽光をもって照らすべき大地を望み、偶像は拝跪する祈る者を望む。倒錯の愛もまた愛する男と愛される女を、支配する男と奉仕する万能をかたどった女を望むだろう。
〝病院に行けと妻は言う――〟
かすかなオブリガードをもって、憂いに沈んだ彼の一節は、たびたび私の中で思いだされる。そしてこのシェラザードもまた、首打ちに落とされるかわりに、妃の座をえたのであった。

※　※

百害あって一利なし

ミステリ月刊誌の「宝石」一月号に〝二人で犯罪を〟という対談記事が載っている。これは新しくはじまった〝佐野洋の連載対談〟の第一回目で、ゲストは東洋大学で社会学を講ずる村田宏雄氏。

この村田宏雄氏の略歴を、つぎに記す。

昭和十八年東京大学文学部社会学科を卒え、同二十四年法務府技官、二十六年最高裁事務官、警察庁科学警察研究所環境研究室長をへて、現在は前述のように東洋大学社会学部で教鞭をとっておられる。主なる著書に、「異常社会」「審判科学」「少年犯罪鑑識」などがある——。

さて、その対談の一部を、ここにご紹介してみよう。

佐野　（略）よく言われることなんですが、推理小説の影響で、犯罪を犯すなんてことが、あり得るんでしょうかね？

村田　それはないと言っていいでしょう。よく、犯行を自白した犯人が、テレビ・ドラマの真似をしたとか『推理小説を読んで影響された』なんて言っていますが、あれは、警察で取調べられ、いろいろ問いつめられたときに、どこかに原因を持って行かなければならず、そう言ったのが、調書に残るだけです。

佐野　そうでしょうね。それと似たことですが、悪書追放、あれ、どうお考えでしょう？　ぼくは実に危険千万だと思うのですが……

村田　あれはね、ぼくはああいうことによって、言論統制の基盤を作って行くようなもので、百害あって一利なしですよ。前にあの種の本の影響を調べたことがありますが、ほとんど影響なんてものはありませんよ。

佐野　すると、新聞があの種の運動に踊らされる。大々的にとりあげるということの方が重大ではないでしょうか？

村田　そうなんですよ。いわゆる良識というばけものを背景に、つぎには法律的に規制しようとかかってくる。ある意味での大謀略ですよ。一方に於て、人づくり運動なんてのを推進して行き、言論統制を触発しやすいムードを作ってか……。非常にこわいですよ。しも、中にはそれを売名でやっている奴がある。自分はこういうことを叫んでいるんだと言って、名前を売る種類の人間がおりますからね。いわゆる悪書に、普通の青少年が影響を受けるかと言えば、そんなものは受けない……

佐野　ある意味では、右向け右と言ったときに、すぐ右を向いてしまう少年ができる方が、より恐しいですからね。

村田　まあ、あの運動は、親父さんが浮気するのが、あんな影響だと思っている奥さん連中に多くて（笑）それを、こどもにスリかえているんじゃないのかな（笑）極端に言えば、そうだと思うんですよ。そんなら奥さん連中ね、そんなことというより、てめえが魅力出して、親父がよそへ行かないように努力すべきなんでね（笑）。そういう努力をやらないというくらいなまぐさなんだ。なまけ者なんですよ。だから、むしろ、その方が日本を悪くするんだが、そんなことは気がつかない。（笑）いまに、推理小説も悪いと言いだしますね。

佐野　しかし、この人がと思うような評論家でも、新聞で推理小説の影響だなんて、しゃべっていますね。

村田　推理小説というのは、碁や将棋と同じような働きがあるでしょう？　ところが現在では、碁や将棋でも賭けてやる奴がいる。しかし、推理小説で賭けるばかはいない。だから、レクリエーションとしては非常にいいと思うんですが……（後略）



■アラビアの城・9

水遊びする弓子

カット・鬼頭暁

北園透一郎

1

やがて、ステージでは、絢爛たるショウが開始された。

舞台の効果音は、感度のよいスピーカーによって、Qと弓子のすわっている、この特別室まで、立体的に伝えられる。

ショウは、サディスティックな、しかも、しゃれた寸劇と、そのあいだにはさまれた豪華なヌードショウによって構成されていた。

「さあ、よく見学するんだよ、弓子。あのステージから、けっして目をはなしてはいけないよ」

Qは、クッションのきいた安楽いすにゆったりと腰をしずめ、幸福そうな微笑の声でいった。

「はい」

というように、弓子はうなずいた。

このレストランで働かされているウェイトレスのうち、売り上げの悪い何人かが舞台に出されているのだと、Qは弓子に説明した。

もちろん、責め手になる男が、男装した女であることは、この特別ハレム街のレストランのシステムとして当然である。

しかし、弓子には、彼らが女であるとは信じられない。それほど、手きびしい責めが、つぎつぎと展開した。

それほど、このようなショウを初めて見る弓子は、恐怖にふるえながらも、羞恥に全身

を染めていた。

しかし、眼をつむることはおろか、うつむくことええゆるされないのだ。

じっと舞台を見ていなければ、Qの手が弓子の柔らかいおしりをつねったり、のどをなでたりするからである。

美加子は、ときどき弓子を休ませながら、自分の乳を吸わせていたが、Qの食事の終わる頃には、左右の乳房を全部、弓子に飲ませてしまっていた。

舞台のショウは、ようやく最高潮に達していた。

客席には熱っぽい空気が渦巻いている。

Qは、美加子と弓子の美しい素肌を左右に引き寄せてなでてやりながら、熱心にステージを眺めていた。

特別室の中は、二人の美女のかなしい吐息と、Qのまんぞくげな笑い声で、次第に妖しい雰囲気になっていった。

ショウは一時間あまり続き、そして終わった。

ショウの終わった後も、しばらくその余韻を楽しんでいたQは、やっと寝椅子から立ち上がった。

「さあ、そろそろ帰ろうかね。お口くくってあげるから、アーンしてごらん」

弓子は悲しそうにQを見上げたが、言われた通り、おずおずと口を開いた。

ショウの恐ろしさと恥ずかしさは、弓子からさるぐつわを拒否する気力を奪ってしまっていたのである。

「よしよし、いい子だ。お利口だね」

Qは、たのしそうに、ゆっくり弓子の口にれいのぐっしょりぬれている、パンティを詰め、さるぐつわをはめた。

つぎに、美加子に手伝わせて、ほとんど裸にむかれてしまっていた弓子に、また元通り服を着せ、外出用のコートで包み、移動椅子に固定した。

「さあ、それでは約束通り、これから日光浴に連れていってあげようね。どうだ、うれしいだろう」

Qは、はずしてあったあのオシメのチャドルをまた、弓子にあてがいながら言った。

「むっ、むうん」

弓子は、ほとんど身動きのできない椅子の上で、いやいやと首を振った。

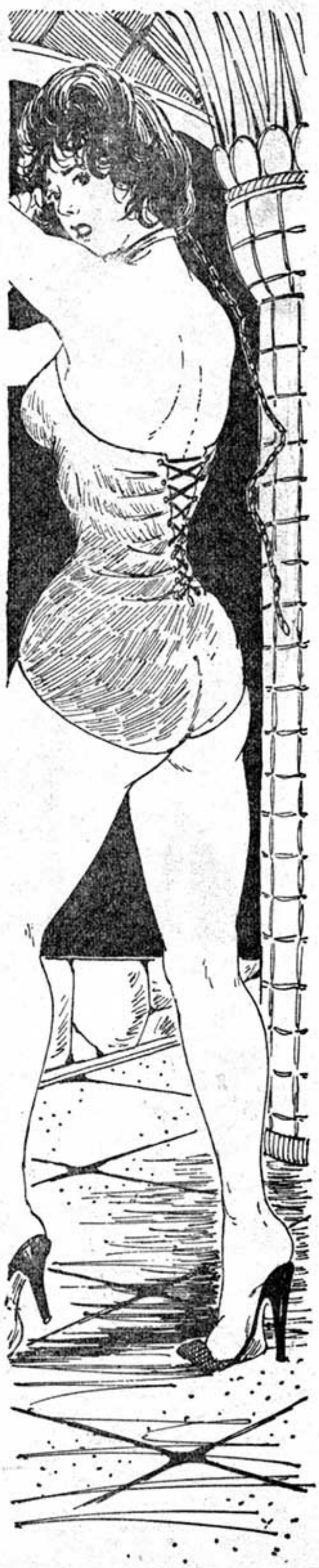
「フフフ、よしよし。じゃ、行こうかね」

Qは、弓子の反応に満足した。

この分なら、まだ当分、弓子は屈伏しそうもない。

そんな弓子を、ネチネチと恥ずかしめてもだえさせるのが、Qの好みなのだ。

私の期待通りの、理想な女だ。まったく、



可愛いい玩具だ。Qは会心の笑みを浮かべていた。

まだまだ、存分に愛玩してやるぞ。

美加子の手で、レストランの入口まで運ばれた弓子の椅子は、そこで待機していた、弓子の専属の世話係の手に渡された。

これからの戸外での訓練の手伝いは、この女性がするのであろう。

弓子は、椅子の上で小さくふるえながら、ふたたびシクシク泣き始めていた。

Qが弓子専属の世話係として選んだだけあって、この女性のおこなう責めは巧妙で効果的であった。

しかも、弓子のからだのすみずみまで知りつくしており、どんな微妙な変化も見逃がさず、それを、たちまち責めに応用するのである。

この女性が弓子の前に現われるだけで、弓子はもう恐怖にふるえ、恥辱に耐えきれず泣き出してしまうのだ。

弓子は、涙のたまった瞳をQに向けて、必死にゆるしを乞うていた。

しかし彼女の意志に反して、弓子をのせた椅子は、つぎの責めの場所へと運ばれていった。

2

弓子は、彼女が初めてこのハレムに連れ込まれたときとは、逆のコースをたどって、戸外へと運ばれていった。

地下のハレム街を連絡するエレベーターで地下一階まで昇ると、そこには常に数人の守衛たちで監視されている、地下と地上とを結ぶ唯一の出入り口がある。

そこで弓子は、小さな検査室に入れられ、女性の守衛の手で全身の検査を受けた。

この守衛室には、地下のハレムにいる女たちのからだの特徴がすべて登録されており、出入りの際にはかならず検査を受けて、間違いのないことを確認することになっているのである。

着ているものを全部ぬがされて、からだを調べられた弓子は、女の守衛が用意していた小さな銀色の首輪をはめられて錠をかけられた。

首輪には、「零号室・弓子」と刻まれており、弓子がハレムに戻るときに、この守衛室を通るまでは、はめたままにされるのである。

間違いないことを、念入りに確めて首輪をほどこされた弓子は、また元通りにコートでくるまれてから、別室で待っていたQの手に戻された。

Qは、弓子の足枷を、間隔を短い鎖でつないであけたものに換え、弓子を抱いて、べつ

のエレベーターにのって地上に昇った。
そのエレベーターを出ると、そこは、このアラビアの城のロビーであった。
ゆかには一面に厚いじゅうたんが敷つめられ、天井からは豪華なシャンデリアがさがっていて、どっしりと落ち着いた雰囲気であ
る。
ロビーには、女を連れた紳士たちが二、三人いた。
もちろん、このアラビアの城というクラブの会員たちである。
彼女たちは、ほとんど裸に近い格好で拘束具をはめられた四肢を、ひっそりと所有者である紳士に寄せて、かるい愛撫を受けていた。
エレベーターから弓子が降りると、紳士たちはいっせいに彼女のほうを眺め、ヒソヒソとささやきあった。

かれらにとっては、地下の特別ハレムに入れられている女は、一種のあこがれであった。
弓子に、ハッとして、新しい羞恥に身をすくませた。
「フフフ。なにも恥ずかしいことはないのだよ。弓子の素肌はだれも見えないのだからね。さあ、アンヨしてお庭のほうに行ってみようね。オンモはとってもきれいなのだよ」
Qは連れている弓子に言うと、彼女の足をゆかに立たせた。
「じゃ、ヨチヨチアンヨするのだよ。走ったりあばれたりしたら、コートを脱がせて裸にしてしまうからね」
弓子が素直にうなずくと、Qは弓子の腰をささえて歩かせ始めた。
しかし、一歩足を動かしたとたん、弓子は「ウッ」とうめいて、その場にしゃがみそうになった。
「おっと、しゃがんじゃ、だめだめ。フフフ、パンティと上着の羽根が、くすぐったいのだね。だけど、がまんしてアンヨしなくてはだめだよ。こんな所で裸になりたくはないだろう。フフフフ。さあ、アンヨはじょうず」
Qは、弓子をからかいながら、ふたたび歩かせ始めた。
弓子は、一歩ごとに全身の神経がすくんでしまいそうなくすぐったさと、恥ずかしさを、必死にこらえながらヨチヨチと歩いた。
彼女は、すぐにあえぎ始めた。
さるぐつわとチャドルに呼吸を制限されているだけに、いっそう苦しいのだ。
しかも、チャドルは、れいの恥ずかしい弓子の液体のむれたにおいである。
弓子は、Qに腰を突かれて、強制的に歩かせられながらその恥辱をも耐えねばならなかった。

った。

ロビーを横切り、入口のドアを一歩外に出ると、弓子は立ち止まった。

そこには、明かるい太陽が輝く美しい庭があった。弓子には、ここへ連れてこられて以来、初めて見る太陽であり、ひさしぶりに接した戸外の空気であった。

太陽は、弓子の運命が変えられた日と同じように明かるく輝いていた。

変わったのは、弓子だけだった。以前は、この明かるい太陽の下で、小鳥のように自由にとび歩き、語り、十九歳の生活を楽しんでいたのだ。

しかし、いまは、羞恥とくやしい思いでこらえながら、ヨチヨチと歩かせられ、口は厳重に封じられ、執拗きわまりないQの玩具になっているのだ。

弓子の大きな瞳から、ふいに、ポロリと大粒の涙が落ちた。

「フフフ、泣くんじゃない。いまさら泣いたって、もう以前の生活には戻れないのだからね。あきらめなくてはいけないよ。どんなにいやがっても、弓子はわたしの可愛いい赤ン坊になってしまうのだからね」

弓子に言い聞かせたが、もちろん、彼の望みがこれと正反対であることは、言うまでもない。

Qがこうして弓子を戸外へ連れ出したのは、れいによって、弓子に以前の自由な生活を思い出させ、ハレムの屈辱に満ちた生活に対して、いまで以上に嫌悪の情を抱かせるためなのである。

あきらめきってハレムの生活に慣れてしまった女は、Qにとって、すでに用のないものなのである。

理想的な玩具に教育されている弓子は、ひとつひとつの責めに対して敏感に反応し、羞恥と屈辱に泣きもだえなければならないのだ。

それは、Qが弓子にあきてしまうまで、いつまでも続く巧妙な教育なのである。

Qは、この教育の目的が、予想外に早く弓子に現われたことに、大いに満足していた。

「さあ、もっとアンヨしようね。とってもきれいな所に案内していってあげるからね」

Qは、ふたたび弓子を歩かせ始めた。

芝生の上や、庭の真ン中にある大きなプールでは、紳士たちに連れられた哀れな女たちが、苦しい運動をさせられたり、日光浴をしたりしていたが、弓子には、なにも目に入らなかった。

ときどき立ち止まって休ませてもらいながら、不自由なヨチヨチ歩きを続けて、弓子は庭を横切り、深い木立ちの中の小道の奥に作

られている〝あずまや〟に連れて行かれた。

3

あずまやは、高いコンクリートの壁と分厚い鉄の扉で、ほかからまったく独立している。弓子がその中に入ると、ドアに厳重な錠が下ろされた。

「フフフ。苦しかったかね。よしよし。もうアンヨしなくてもいいのだよ。こんどは泳がせてあげるからね」

Qは弓子を、室内にあった椅子に坐らせると、窓のカーテンを開いた。そこには、真ン中に、プール全体に明かるく輝いていた。

弓子は、目を見張った。そこには、真ン中庭と同じように、プール全体に明かるく輝いていた。

「ホラ、きれいなプールだろう。まるで初夏のようにあたたかいね。ここは温室みたいなものだから、いつでも泳げるのだよ。弓子がいい子にしていれば、いつでもここへ連れて来てあげるからね。さあ、泳がせてあげようね。ちゃんと水着も着せてあげるからね」

Qは弓子のコートを脱がせ、着せてあったくすぐったいよ上着とスカートをはぎ取った。

しかし、その下につけている鋼鉄のベルトと羽毛を植えたパンティは、そのまま、残させる。

ハレムの外にいるときは、常に貞操帯でからだを保護しておかねばならないのだと、Qは弓子に説明した。

やがてQは、用意してきた水着を恥ずかしそうに身を縮めてふるえている弓子に着せ始めた。

水着はうすいなめし皮で出来ており、水着というより、搾衣に近いものであった。

弓子の胸から腰までの前面を皮で包み、背中の部分で締めつけるのである。

弓子は、もちろん顔をしかめていやがった。

しかし、Qは、世話係に弓子を押さえつけさせ、

「さあ、いい子だ。ちょっと、じいッとしておいで。すぐに着せてあげるからね。でないと、裸で泳がせるよ」

あやしながら、水着に取り付けてある皮ひもを、弓子の背中で、厳重に編み上げていった。

水着を着せられた弓子は、いよいよほっそりと可憐に見え、Qの目を楽しませる。

「じゃ、泳がせてあげようね」





Qは早くも息苦しそうにうめき始めた弓子を、よいしょと抱きあげてプールサイドに運んでから、手枷と足枷を解き、臭いチャドルもはずした。

「だけど、さるぐつわは、はめたままだよ。大きな声を出されては困るからね。もちろん、お手手が自由になったからといって、さるぐつわをいじっちゃだめだよ。そんなことをしたら手も足もくくってプールにどぶんと、ほうりこんでしまうからね。いいね」

Qは、弓子に言い聞かせながら、可愛いい水泳帽をかぶせた。

水泳帽は、さるぐつわの防水をも兼ねるようになった、特殊な形のものである。

つぎにQは、弓子にはめられている首輪に細い鎖を取り付けて、その先端を世話係に渡した。

「泳がせてやってくれ」

Qは命じた。

「アラ、うれしいわね、弓子さん。さあ、おらいましょうか。きょうは貞操帯がついていても水に入ってごらんなさいな。お手手もお足もるから、とっても痛いわよ。さあ、こっちへ自由なんですもの。とっても楽しく気もちよいらっしゃい」

「むっ」

弓子はうめいて、すばやく世話係の手からほうへ引っぱった。

「むっ、むうん」

弓子は、プールのなかにとびこんだ。

「ホホホホ」

世話係は、満足そうに笑った。

「いくら逃げても、この鎖をちょいと引っぱれば、弓子ちゃんはこっちに来てしまうのよ」

世話係は、弓子の首輪の鎖を、軽く引っぱって見せる。

「むっ、むっ」

弓子は、プールの中で、子犬のようにもがいて抵抗している。

「ホホホホ。じゃ、お馬はかんたんにしてあげるから、旦那さまに、弓子ちゃんの水遊びを見ていただきましょうね。さあ、泳いで見せてちょうだい」

弓子は仕方なく、さるぐつわとだんだん締まってくる水着の苦しさをこらなえがら泳ぎ始めた。

弓子は、泳いだり、世話係の投げる大きなゴムボールを受け止めたりして、水遊びをさせられていた。

世話係は、プールサイドから鎖を引いたりゆるめたりして、弓子をさらにもてあそぶのである。

Qは、プールサイドの椅子に腰を下ろし、れいによって葉巻きをくゆらせながら、哀れた弓子の水遊びを目を細めて眺めていた。

細い白いからだが、透明な水の中にひらひらとただよう様子は、Qにとって、美しい、楽しい光景であった。

しかし、呼吸を制限されている弓子は、長くは泳いでいられながった。

十分ほどで、予定通り、弓子はプールの中で精魂尽き、ぐったりとなってしまった。

4

世話係は声をあげて笑うと、鎖をたぐりよせて弓子をプールから引き上げ、

「じゃ、しばらく休ませてあげるわ」

と言いながら、あっと言う間に弓子を木馬の上にのせ、太い腰枷をはめて降りられないようにしてしまった。女ながらも、ものすごい腕力である。

「むっ、むっ」

新しい恥ずかしめに、弓子はふたたびもだえ始める。息をつくひまもない、きょうの苦痛であった。

「ホホホホ。おとなしくノンノしていなくてはだめ、お手手をくくっておいてあげますからね」

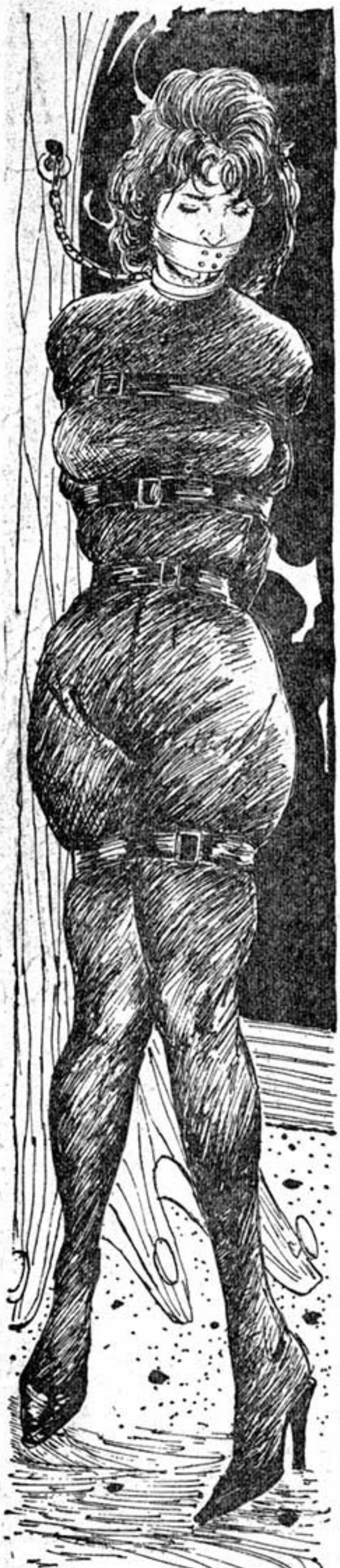
世話係は、ほっそりと白い弓子の両手を、木馬を、Qの坐っている椅子のそばの、よく日の当たる場所へ移動させた。

「フフフ。じっとしておいでなさい。そのうちに、もっとおもしろくなってくるからね」

Qは葉巻きの煙をはきながら、いっそう目を細めて、はかなくも美しい弓子のもだえを眺めていた。

しばらくすると、弓子は、その「おもしろいこと」が何であるかを悟った。

たっぷり水を吸ったなめし皮の水着が、太陽の熱で急速にかわいていくと同時に、弓子のからだをいよいよ締めつけ始めたのであ



る。

Qは、フフフと、絶えずふくみ笑いをもらし、弓子がその苦しさに激しくうめきもだえ、憎悪にみちた眼を自分に向けて哀願するのを、凝視していた。

Qは、弓子が声も消えて、ぐったりしてきてから、やっと椅子から立ち上がった。

「どうだね。水着を脱がせてほしいだろう」

弓子は、いっそう激しく身をもだえている。

「よしよし。じゃ、さるぐつわをはずしてあげるから、いま弓子がしてほしいことを、えんりょなく言ってごらん」

Qは、弓子のさるぐつわを解いた。

弓子に恥ずかしい望みを言わせて、屈辱をあたえるためである。

弓子は、さるぐつわがはずされても、しばらくはシクシク泣きながら沈黙していた。

しかし、Qが椅子に腰を下ろしてゆっくり葉巻きを楽しんでいるのを見ると、弓子は観念して、哀れな声をしぼり出し始めた。

「ああ、お願い。お馬から降ろして。水着をゆるめて。とっても苦しくて痛いの。息ができなくて、弓子死んじゃいそうなの。もうゆるして」

「フフフフ。じゃ、オンリしたら、おとなしく日光浴すると約束するかね」

「ハ、ハイ」

「よしよし。それでは、おとなしく旦那さまに抱っこされて日光浴しますから、お馬から降ろして水着を脱がさせて下さいと言ってごらん」

Qは、弓子の哀れな悲鳴と、木馬の上の可憐なもだえを観賞していたが、やがて立ち上がって、

「仕方がない。弓子の美しい肌に傷がついても困るから、そろそろオンリさせてあげようかね」

と言うと、弓子を苛酷な三角の頂点から抱き降ろし、子ウサギのようなはかない抵抗を楽しみながら、ゆっくりと皮製の水着も脱がせた。

Qは、弓子が言い付けに従わなかったことに満足していた。



彼の辛抱づよい巧妙な教育が、予想以上に効果をあげている事実が、証明されたからである。

「よしよし、じゃ、このままの格好で、日光浴しようね」

Qは、プールサイドに置いてあった柔らかなマットレスの上に弓子を寝かせ、首輪をマットレスに結んだ。慣れた手つきである。

「ああ、いやッ、いやッ」

「さあ、いい子だから、だまって日光浴するのだよ。お手手でそんなに胸をかくしたりしては。さあ、くくってあげるから、うしろへおまわし。フフフ。ホラ、これでいい。ついでに足のほうも、ちゃんとしておいてあげようね」

Qは、弓子の四肢の自由を、いつもの通りに全身が暑苦しくなってきたの。がまんできないわ。かんにんしてッ！」

悲鳴を楽しみながら、日焼け止めのクリームでマッサージしたり、からだをあちこちに向けさせたりして、全身にまんべんなく日光浴させた。

こんなときの弓子は、まるで一個の物体であった。

が、やがてQはそれにもあきたらしい。大きなアクビをひとつすると、世話係に命じて、黒いビニール服を持ってこさせた。

まるで魚市場で働く男のような服である。

Qは、弓子のひたすらな哀願を、微笑をもってきいていた、またもや、さるぐつわをほどこした。

「むうん、むうん」

「フフフ。弓子はさいきん、ちょっとふとったようだから、すこし、汗をしぼってあげようね。お水はいくらでものませてあげるから、たんと汗をおかき」

「ああ、くるしいわ。このビニール服のなかで、湯のような汗をながしはじめた。

Qは、弓子のなみだをハンカチでふいてやったり、ビニール服の胸だけをすこしひらいて、乳房に空気を送ってやったりするのだ。

■ 現代思潮社刊「サド裁判」を読んで

茶番劇の俳優たち



安東泉

1

わたしは今、《サド裁判》の全記録を机上に置き、石油ストーブのほてりで適当に暖められた四畳半の室内で、この一文をしたため始めました。ちょうどふろから上がったばかりのところです。心もからだも、気持ちのよいあるけだるさをおぼえています。何か、目に見えぬ何かに、その何かにわたしは今解けこんでゆきたい気持ちです。

十二月の下旬と言えば、もはや夜の空気は相当に冷たいものです。ですが室内は暖たかく、わたしのからだもふろ上がりの血管のゆるみで、ふくらんでいます。一片のしあわせな満ちたりた感情が、しかし今わたしをかえってそのために、じんわりとたとえようもない孤独感の中に、陥れようとしています。こういうとき、わたしの頭の中は、薄暮のそれに似た、きわめて平静な、或る静けさを味わうことができるのです。こうい状態でいつも物を考えることができたら、きっとわたしは、ほとんど何の感情の高ぶりも動揺もおぼえることなしに、冷静に事の真相をつかめるに、――ですが、やはり室内の、光線の明暗、時のきざみ――つまりどんな事象にもすぐに反応を示したがります。

わたしの感情は、次第に静かな或る色合いを呈し始めました。これを静かな怒りとでも言ったらいいでしょうか。《サド裁判》の茶番劇――この何にたとえようもないばかげた裁判を、大まじめに行なわねばならなかった「社会正義」という巨大な化物の実態が、執拗な重苦しさでのしかかってくることに対しての怒り、いや、やりきれなさなんでしょうか。

一九六三年は、年度も押し詰まってショッ

キングな事件が二つ、曰くケネディ暗殺、曰く力道山の急死またここに記念すべき裁判が二つ、曰く松川事件の無罪判決、曰くサド裁判の有罪判決――そして中でもサド裁判は、大方の大事件頻発の陰にあって、ほんのわずか新聞の片隅に、ほとんどあまり関心も払われずに、つい見過ごしてしまえばしまわれそうなささやかさで、小さく報道されたのみで終わりました。人間が法の前に圧殺されてゆく恐るべき断面を、わずか数行の活字が何事もなげに報道している白昼夢――

2

かつて≪サド裁判≫は、一九六一年八月十日より翌六二年十月二日にかけて、東京地方裁判所刑事第十八部において、鈴木重光裁判長のもとに行なわれ、無罪判決をかちとったものでした。この当然の帰結をさらにむし返した形で、しかも反転して有罪判決という思いもよらぬあやまちをしでかした高等裁判所の、人間に対しての合法的なという名の大犯罪は、これを他のどのようにもたとえようはないのです。

今東京地裁における裁判記録を読み返すとき、だれが今日、高裁における有罪判決を予想できたでしょう。ここにおいては、もはや人間が完ぺきに法に優先し、人間の自由が完ぺきに法という名の権力意識をさばき破砕した、歴々たる経過が語られているのみであります。この歴々たる事実を、いったい何が、どのようにして否定し、及ぶべくもない有罪判決に結びつけることが可能なのか、およそ不可解の一語に尽きるのみであります。

ここに掲げるのは、フランス共産党創立者のひとり≪ユマニテ≫の国際評論家であったガブリエル・ペリーが、死に臨んで書き残した遺書の一節であります。

『友人たちよ。君たちは、わたしがわたしの人生の理想に忠実であったことを、わかってくださるでしょう。同胞たちよ。君たちは、わたしがフランスが生きるために死んでゆくのを知ってくださるでしょう。わたしは最期にのぞんで自省してみる。わたしは誤らなかった。たとえ、わたしがもう一度人生を繰り返さねばならぬとしても、今までたどってきたと同じ道をまた行くでしょう。わたしは、ポールヴァイン＝クチュリエが、コミニズムは世界の青春であり、それは歌う明日を用意する、といったことばの正しいことを、今晩もやはり信じています。今わたしは、大胆に死に直面しうるように思います。さようなら、フランス万歳！』

この美しい人間の言葉の、みずみずしいまでかなでるような真実と美しさを、もし少しでも理解できる能力があったら――つまり人間の自由こそ、世界の青春であり、歌う明日を用意する、ということの意味を幾らかは理解できるであろうに。そしてその美しいことばこそ、実はここに、破れん恥な罪名のもとに、正義の敵としてさばかれたサドのことばがあるはずだのに――最も勇かんな戦士は倒れる、サドこそは最も勇かんな自由の戦士であったのです。

3

ここで一度、わたしは最初から、逐一≪サド裁判≫の経過を振り返り、真にそれが意味するもの、それが志向したもの、経過から生まれ出るもの、生まれ出てそれが明示するものを考えたいと思います。ここにあるものは決して一個の単純な、或る形式の一つの裁判があるのではなく、われわれが最も唾棄すべきからくりが内包されています。「社会道徳」や「良識」という名の人間の無知頑迷さに無鉄砲な暴力でもって、真に自由なる世界の青春を踏みにじろうとするかを、わたしはこの目で跡づけてみたいと思うので

す。

東京地方裁判所における≪サド裁判≫の第一回公判は、一九六一年八月十日、鈴木裁判長ほか三名、水野検察官、大野弁護人ほか四名、特別弁護人として白井健三郎、遠藤周作出席のもとに午前十時開廷されました。

まず検事が立って起訴状の朗読です。つまり被告人石井恭二は、「現代思潮社」を経営、同じく被告人渋沢龍雄は、フランスの作家マルキ・ド・サドの研究者で、この両名が共謀して出版した≪悪徳の栄え・続――ジュリエットの遍歴――≫は、十四か所に渡って露骨な性描写を施したわいせつ文書であり、そのわいせつ文書を販売、かつ販売の目的で所持した、という主旨のものです。罰条は刑法第百七十五条これをさらに形式的に検察官冒頭陳述で補足しております。

これに対して弁護人の冒頭陳述は、細部にわたって克明な説明を行なっております。まず第一に、≪悪徳の栄え≫の文学的思想的価値は、単に文学史的な評価だけにとどまるものではなく、社会思想史的にも、医学心理学的にも、シュールレアリズム、実存主義の芸術運動の観点からも、またカトリックの立場からも、大変重要なものだと説き、サドは人間性に潜む根源的な暗黒面の摘発者で、既成の社会秩序や道徳観念をその根底から疑い、これを破壊し、そして人間性の本質に迫ろうとしたのだと説きました。

4

サド文学の歴史的背景として、当時の王朝権力、あるいはブルジョワ革命政府の権力、いわゆるいっさいの外的権力に対しての徹底した反抗者としてのサド。アルベール・カミュをして反抗思想の歴史的な最初の人物と評価させたサドを説明しました。

サドの現代的意義として、人と人との関係、自己と他者との関係、主人と奴隷との関係の本質、支配＝被支配という現代的問題の予感、実存主義を初めとする現代思想に対しての影響――

裏返しにされたキリスト教徒、神を見なかったカソリック、サド。彼はルソーの社会契約論を神話にすぎないと考え、普遍的道徳もありえず、普遍的法律も不可能であり、相対的法律も相対的であるがゆえに架空のものだとして退けました。

この強固な観念の裏打ちによって書かれた≪悪徳の栄え≫は、従って第二に、その性描写の特質として、たとえば≪チャタレー夫人の恋人≫等、普通の文学作品、あるいは春本と称する一群の読物の中にあって、その性は前者の種族保存本能を謳歌、あるいは性の喜びを肯定するオプティミスティックな立場に比べ、人間と人間とのむしろペシミスティックな孤絶感を深める方向に走るとし、それは性行為の讃美や誘惑はなく、ただ作者の思想・観念の検証にほかならず、従って観念的、非現実的、非感覚的であるとしました。

このため第三、一般読者に対する影響も春本的興味を与えるような心配は絶対にあり得ず、

第四に、被告人渋沢は、以上のことから全く思想的純粋な立場から翻訳し、訳語も江戸時代の古語を適所に用い、文体もくふうし、できるだけ性に関する生な印象は押えるよう配慮するのに意を尽くし、

第五に被告人石井も、従来好色本や娯楽文書を出版したこともなく、今回も、ただサド文学に一途な思想性――既成の道徳、宗教への痛切な批判を見たればこそで、これを、わいせつ文書と判じて出版を企図したのではなく、従って発行部数も昭和三四年十二月に二〇〇〇部発行にとどまったということを見てもそれは明らかなことだと、説明しております。

わたしはここで、被告人渋沢龍彦の、堂々たる意見陳述に目を見張らざるを得ません。われわれの側の選手のひとりとして、彼が演じた役割はりっぱでした。彼はサドを弁じながら、人間の自由の側に立って、すさまじい牙を権力の側に向けて言うのです。

《悪徳の栄え》は十八世紀における歴史的著作として、その地位はルソーの《社会契約論》ロックの《人間悟性論》に匹敵し、さらには無意識の性衝動の問題をとりあげたフロイトと、キリスト教の偽善的なモラルを転倒したニーチェの諸作品の源泉として価値を持つ、というその立場をまず明示します。

元来人間の自由と法律とは対立するものです。この点サドは、《悪徳の栄え》において完膚なきまでに法律を愚弄します。法律家がこれを不愉快に思うのは、当然といえるのかもしれませんが、しかしこの自由な思想を弾圧する権利は、検察官にはないのだ、これはサドがいろいろな著作の中で、繰り返し述べていることであります。

いったいわいせつとは何だ、——そんなものは無縁であり、支配者側からの道徳律の、最も暗黒の部分を象徴するものである」と。

人間の精神史は、その夜の霧のようなヴェールを引きはぐことに苦闘を続けているのです。しかもわいせつ意識が存在するだけです。そのわいせつの否認者が、逆にわいせつの罪で起訴されるという皮肉な結果を産んでいるのは、何ということでしょうか。

6

《サド裁判》は、単的に言って、これは被告人の主張にある通り、権力と自由との対決が、この裁判の形式を借りて集約されたものとわたしは考えます。サドを好むか好まないか、またはサドの思想に共鳴するかしないかは、別の問題に過ぎません。つまり、各個人の好悪の問題を越えて、ここには人間の自由の大いなるあかしを宣明すべき、一つの危機を意識するのです。《サド裁判》に、文化人を初めとする多くの人たちが、サドの弁護のために提携して立ったのは、このためです。

特別弁護人、白井健三郎はこう陳述しました。「サドは自然の再生（人間の自由の日々新たる主張＝筆者注）には、破壊が必要であることを見抜き、自然に対する肯定と否定とを弁証法的に展開し——あらゆる特権状態を無限に否定した。」

これはルソーが『万物は神の創造で善である』としたのに対し、サドは『万物はサタンの創造であり悪である』としたゆえんであり

ます。人間の残虐であるということ――これ第一、二次大戦中、人類が真正面からこれと対決を迫られた課題であり、特にナチズムの残虐行為という試練と直面し、サドの投げかけた波紋は現代においてなおこれを無視することはできないのであります。

なお現在、右から来るブルジョワ道徳の圧迫、左から来る画一主義的教条主義の、この二つのあつれきの中で、人間実存の自由の問題はどこへ行くのか、サドの課題はこうしてもっともっと広がって行く一方なのです。

シモーヌ・ド・ボーヴォワールは、『牢獄の孤独の中でサドは、デカルトが身を包んだ知性の夜に比すべき倫理の夜を実現した』と言い『サドの証しの最高の価値をなすものはわれわれを不安にさせることである』と結論しています。個人はそれぞれ皆違います。皆違うところに、普遍的道徳があり得ましょうか。

こうして普遍的道徳は、だれにとってもつわりのものとなります。そのいつわりに反抗するとき、そこにのっぴきならない真の人間の、真に自由な倫理的決断が求められるのです。そうでないとき、普遍的道徳に順応するとき、人間は人間でなく事物となり果てます。人間の自由とは、こういうまやかしを、不断に打ち破るところの現実変革にあるのではないでしょうか。

現代フランスの、一流の詩人であるポールエリュアールは『サドは文明人にその素朴な本能の力を回復せしめようとし、愛欲の想像力をそれ自身の対象から解放せしめようとした人間であった』

としているのであります。

7

特別弁護人、遠藤周作の陳述にここで移るわけですが、わたしは彼には相当の期待を持ってその陳述を読んだのではありましたが、正直なところ、内容に軽い失望を覚えさせられました。

つまり弁護をするにも、どこかにズレがあるように思いました。遠藤周作はサディズムとサドの文学をまず区別します。サドとサディズムとは別のものだと言います。学者たちが勝手にサドからサディズムということばを借用したにすぎないのであって、これはマゾッホからマゾヒズムということばをとったと同じく、一種の便宜主義だと述べました。サドの作品は、或る種の、特定のサディズムの作品を読んで、その中に一種の性的快感を満たすような種しかないと考える人があったら、残念ながらその人たちこそサディストである。と、こう申し述べております。

この言わんとするねらいはわたしにもわかります。そしてサディズムやマゾヒズムということばが、便宜主義だと説くゆえんもわからぬではありません。もちろん、サドやマゾッホが現われる以前から、こういう人間の基本的な傾向は、厳としてあったでしょう。サドやマゾッホが現われたから、こうつぜんとして一夜にしてサディズム、マゾヒズムが産まれたわけでないことは、だれにでも納得ゆくことでしょう。

しかし学者たちが、そこにそういう傾向が一編に精力的に集中されているという、きわだった特徴から、サディズム、マゾヒズムという名称を名づけたことに対して、そのために遠藤周作のような異議のとなえた方をする必要はないと思います。彼は便宜主義だと言いますが、ことばとは、しかり、その全部がすべて便宜主義なものなのです。サドからサディズム、マゾッホからマゾヒズムという冠称を与えたそのことに、異議をとなえる理由はないのであります。これはやはり、両者両人たちの心を満足させるために書かれたものではなく、逆にもし、サドの作品を読んで、サドの作品は、だれにとってもいつわりのものとなります。そのいつわりに反抗するとき、そこにのっぴきならない真の人間の、真に自由な倫理的決断が求められるのです。そうでないとき、普遍的道徳に順応するとき、人間は人間でなく事物となり果てます。人間の自由とは、こういうまやかしを、不断に打ち破るところの現実変革にあるのではないでしょうか。

現代フランスの、一流の詩人であるポールエリュアールは『サドは文明人にその素朴な本能の力を回復せしめようとし、愛欲の想像力をそれ自身の対象から解放せしめようとした人間であった』

としているのであります。

7

特別弁護人、遠藤周作の陳述にここで移るわけですが、わたしは彼には相当の期待を持ってその陳述を読んだのではありましたが、正直なところ、内容に軽い失望を覚えさせられました。

つまり弁護をするにも、どこかにズレがあるように思いました。遠藤周作はサディズムとサドの文学をまず区別します。サドとサディズムとは別のものだと言います。学者たちが勝手にサドからサディズムということばを借用したにすぎないのであって、これはマゾッホからマゾヒズムということばをとったと同じく、一種の便宜主義だと述べました。サドの作品は、だれにとってもいつわりのものとなります。そのいつわりに反抗するとき、そこにのっぴきならない真の人間の、真に自由な倫理的決断が求められるのです。そうでないとき、普遍的道徳に順応するとき、人間は人間でなく事物となり果てます。人間の自由とは、こういうまやかしを、

ズムという名の傾向は、これを悪徳の栄え、として、当然サドが人類の代表選手としての栄光を担うべきであり、マゾッホまたしかりです。ほかにではいったい、だれがそういう二つの基本的な傾向を肩に背負って立てる資格を持った人がいるでしょうか。

8

遠藤周作の基本的な間違いは、サディズムを病的な、低俗な、ごく末梢的な傾向として認識し、そのことから、サドとサディズムとをともかく無関係なものとして、切り離そうという努力をこころみたことです。つまり俗世間の受取り方に迎合した形で、サディストを、類型的な悪者に仕立てあげていることであります。サドはこういう悪者ということではありますが、サディズムとは無関係ないんだ、低俗なサディズムのみで足りるとするは関係ないんだ、低俗なサディズムとは無関係だ、それをそう読む人こそ、病的なサディストなんだ、と力説します。

この論法は、もしかすると遠藤周作一流の逆説か、あるいは裁判を有利にするための、それこそ便宜主義的手段なのかもわかりません。もしそうだとすると、なお彼のあやまりはいっそう深いものと言わざるを得ません。これは究極的には権力の側への屈服を意味する以外、ないからであります。

サディズムとは、それほど低俗な、無視するに足る、一部の病的な傾向にすぎないものでしょうか。そんなことがあるはずはありません。これは、これこそ最も基本的な生命体の、個を存続させるための原型ともいうべき姿勢体なのであります。サディストとは、そして、それを自覚する人のことであります。

自覚することは、人間が人間であるための最高の英知であり、特権であります。サディズムを、はっきり明確に自覚内在するサディズムを、もちろん、サドにした英知の人であります。むしろその刺激のほうが、その性格を根元的に一変させるほどの、あるものは、サディズムのみで足りるとする革命的なショックとなることもあります。しかし、ショックを受けることがなぜいけないのでしょう。ショックを受けずして、自覚に達することは不可能だからであります。日々の変革と俗に申しますが、これは日々のショックの体験と一方で言い直せる性質のものであります。

だが、遠藤周作の功績をここで一つだけ取り上げたいわけですが、それはこの裁判を通じて、いろいろと弁護人や証人がサドを擁護して申し立てているのですが、その全部を通じ、故意にか偶然にか、不思議にその中の重要な焦点としての、サディズムの問題が閑却されている中にあって、とにかく彼だけは、一応このサディズムとサド、といった角度か

9

遠藤周作はさらに、サドの肉欲の描写は荒唐無けいで抽象的なもので、時としてこれらの場面は性欲を刺激されるどころか、爆笑したと言い、もしサドをエロ作家とするなら、一番技術のへたな作家だった、と述べており

らの照明の当て方をこころみようとした点、このことは見のがすべきではないと思われます。

つまり、裁判上における駆引の巧妙さの技法を抜きにして、それより、この裁判が、権力と人間の対決の場であるという、もっと大きな視点に立てば、サドの意味も、その文化史的な思想のもたらす意義や価値の面からばかりでなく、もっともっとサディズムそのものについての論議が展開されるべきではなかったでしょうか。

10

東京地裁の第三回公判は一九六一年十一月二日検察側の証人喚問で行なわれました。この日は、田崎敏子と清水貞助の、ふたりの証人調べです。それから引き続き、同じく十一月の十三日には第四回公判として生江義男、内藤文質、橋本政東の三人の証人調べ、計五人が検察側の証人として法廷に立ったわけです。

ここで特徴的なことは、いずれも学校の教員であるとか、青少年問題関係の役員である、とか、いわゆる真正な思想問題、文学や芸術問題とは縁遠い人たち、というより、そのたずさわっている職業から判断するとき、ひどくはんぱな、片手落ちな印象を受けるのです。事実、この五人の証人は、あまり文学書は読んだことのない人たち、まして、サドなぞ、改めて考えたこともない人たち、これは各証人が自身で証言していることですが、このような人たちで構成される証言というものが、どんなものであるかはもう既に歴然たるものがあります。

なぜもっと、広い範囲から、たとえば弁護側の証人のように、各職種の、いろんな階層の人たち、といった、幅広い視野に立ってのか、もしくは病人ばかりである場合、つまり前記のように、精神的経験において発育不全をきたし、小児病的になる、こういうことになりやすいことが考えられます。

こういう発育不全症は、同じ理由から、官吏や宗教家の中にも、往々その傾向が見られやすいのであります。検察側の証人が、わざわざそういう傾向を、特に顕著に持っているのではないかと思われる人たちばかりを選んで証人に選定したというのは、いったいどういう理由からでしょうか。既に検察側は、この第一歩から、本質的なあやまりを犯してしまったのであります。

11

証人の手初めとして田崎敏子、彼女は東京

都地域婦人団体連盟副会長、東京都社会教育委員、東京都青少年問題協議会委員、練馬区婦人連盟役員、練馬区青少年問題協議会委員長、練馬公民館運営審議委員、新聞即売スタンド倫理審議委員、ちょっと数えても、八つばかりの肩書がつくわけですが、この肩書を持つ婦人が、だいたいサドに対してどういう先入観をもって臨むか、既に自明の理と申さざるを得ません。田崎証人に限らずどの証人も、不意に検事の依頼を受け、にわか仕込みに≪悪徳の栄え≫だけをいきなり読まされた、という事実をサドについてのなんらの予備知識も勉強もなされず、ただ検事側の指示通りに、その先入観のもとでサドを読まされた、——こういったものが無視することはできません。

田崎証人は、その読後感を、「大変残虐を、きわめた酸鼻なもの、醜悪なもの」と述べ、「これは生きる希望と善意を青少年に持たせるためにはほど遠い、——こういったものが青少年に知られることは非常にこわい」と証言しております。またこれに追随するように検察官は、「家庭内で、娘さんや子どもたちに読ませたいという気持ちをもたれますか」と、愚にもつかない質問を飛ばせたりします。

田崎証人によると、サドに限らず、最近の出版物、ことに週刊誌にはエロ・グロものが多く≪週刊実話≫≪特集実話≫≪週刊漫画≫などがその部類に入り、≪週刊新潮≫≪週刊女性≫≪週刊文春≫は要注意で、だいたい安心できるのは≪週刊朝日≫≪サンデー毎日≫≪女性自身≫というふうにおではうかうか週刊誌など、こわくて読めなくなりますし、≪週刊女性≫が要注意で≪女性自身≫ならまあよろしい、という判定はどうというものでしょうか。

弁護側の中村光夫証人が、「≪週刊朝日≫の中に、今東光さんの≪悪名≫というのが出ておりますね。あれなんかどういうふうにお考えですか」と証人にすかさず反問しているのは、味のいい皮肉なもののようでした。田崎証人は文芸作品は好きでよく読むが、三島由紀夫や井上靖なんかを、というところで、すかさず大野弁護人が「三島由紀夫の中にたびたび男色の話がテーマになるが、お読みになりましたか」とやりこめるところなんか、ちょっとした漫才の味さえわいてきます。

田崎証人の発言で重要なことは、結局つづめるところ、その中のわいせつではなくて、そこに流れている思想がいやだ、ということにあります。そして特別弁護人埴谷雄高の、「思想的に反発を感じるものが、また新しい次の思想の土台になる、というような興味はお感じになりませんでしたか」というのに対し「そうなっては困ります」と、ニベもなく保守の殻の中に自分で閉じこもってしまうところに、この証人の性格が表明されています。

生きる希望を与えない不健康なものはいけない、という証人の説をとるとするなら、彼告渋沢龍彦が指摘し、田崎証人もそれを肯定するごとく、いわゆる現状否認の色彩の強いニヒリズムの文学、ドストエフスキーもボードレールも、また太宰治も、よろしくない文学ということになってしまうわけです。

検察側証人、清水貞助は東京都立大森高等学校の校長ですが、これも先の田崎敏子と似たり寄ったりの立場を露呈します。清水証人がよく読む雑誌は、まあ、良書という意味で、≪文芸春秋≫≪中央公論≫の名をあげたわけですが、それでは大野弁護人が指摘するように≪文芸春秋≫には竹山道雄を初めとしてしばしばナチ収容所での残酷な場面について書いているし、≪中央公論≫には谷崎潤一郎の≪鍵≫や≪瘋癲老人日記≫また村松梢風の≪女経≫等、エロの立場からいって証人はど

う思うか、ということになるわけでありま
す。

ただ、《悪徳の栄え》は、特に残酷な場面
が多いから青少年に読ませたくない、の一点
張りでは、理由の説明にはなるはずもありま
せん。被告石井恭二から、サドはギロチン反
対、死刑反対の温和主義者であったことをご
存知ですか、と質問されて、意外だ、と、目
を白黒させているあたり、この裁判での発言
者としての資格すら疑われてまいります。

検察側証人生江義男は桐朋女子学園の校長
ですが、経歴を見ても、過去二十一年、教育
者として通して自分が他のおとな同士の実社
会の中で教育された経験はありません。生江
証人は、オールオアナッシング、ものは良く
なければ悪い、中間的なものはない、といっ
たしごくさっぱりした考え方を被れきし、サ
ドが一部研究家の間で読まれることはさしつ
かえないがと譲歩しながら、しかし、教育的
立場からこれは禁止さるべきだと主張してい
ます。

12

検察側証人、内藤文質は東洋大学社会学部
の教授、純潔教育懇談会委員、青少年問題協
議会委員、という肩書の人です。経歴は昭和
十六年に広島少年審判所少年審判官、二十一
年、松江少年審判所所長、司法省法規室長、
二十三年最高裁判所事務官、二十四年同じく
家庭局の第三課長という道をたどりました。

これを見ただけで、証言内容の半分はわか
ってしまうという気が既にするわけですが、
しかし内藤証人は、人間にはいろいろな欲望
があり、正直サドにはおもしろい興味を感じ
るところもあり、そういう欲望を持つこと自
体、決して恥ずべきではない、と思う、と、意
外な位な発言があるのですが、しかし青少年
のために自分を犠牲にする教育とか、国家社会
に与える影響、特に社会秩序に適応した人間
を作りあげることが健全育成だという証人の
方針に従えば、結局サドは発禁の書というこ
とになってしまうのです。

検察側証人橋本政東にいたっては、これはも
うまるでお話にならぬほど、その狭量頑迷な
思考方法は、はんぱな小児の頭のまま、から
だだけがおとなになった、といっていいの、ひ
どいものです。

橋本証人は、現在、文京区保護司会副会長
富坂地区補導連絡会副会長、青少年問題協議
会礫川地区委員長、全日本教育父母会議常務
理事ということだそうですが、わたしは正直
な話、こういう重要な職種にたずさわる人
が、これほど貧相な頭脳、情操の持主だとは
予想もしていませんでした。或る程度の見当
はつけていたとはいうものの、実際はもっと
ひどいものでありました。

橋本証人は、戦前『双葉塾』という私塾を
開いていた経験を持ち、精神教育として剣道
場を建て、剣道をやりながら学術指導をした
という陳述を見ても想像できる通り、熱心な
軍国主義の鼓吹者であったろうと推察できま
す。それはただ筆者がそう想像するだけでは
なく、戦前の教育はよかったとか、国家社会
のために自分を犠牲にする教育とか、教育勅
語の教育観は非常にいい教育観であったと、
その陳述を読むと、容易に推察できることで
あります。

橋本証人はサドを評して、それは人間の道
徳が破壊された、まるっきり人間でない動物
の世界に落ちていくような気持ち、としてお
りますが、いったい軍国主義を鼓吹するに当
たって、戦争による殺りくを是認奨励するこ
とで、現実にはどんな地獄図絵が展開された
のか、まして長らく教育という大事な任に
当たってや、支那人を見ればチャンコロ式のひ
どい思想を大いに青年子女に吹きこみ、その
結果がいったい何を産んだか、その責任に対
しての一片の悔悟すらないという不死身の精
神で、なお戦後相も変わらず、以前と同じ教

育状態を再現したいと願うそのことの恐しさのほうが、どれほど非人間的、非精神的なものであるか、筆者は慄然とせざるを得ないのであります。

そのことはとりもなおさず、同時に検察官の、こういう証人選定の仕方しか持ち合わせなかったという、それは単純にして恐るべき権力意識を予想させることであり、こういう粗野にしておろかな頭が、サドの願う真正な自由への歌の本質を解するとは、おそらく永久に望めぬこととあきらめるべきではありましょうが、思えば悲しいことです。くやしいことです。

13

第五回公判は引き続き一九六一年十二月十五日に開かれました。これからは弁護側の証言ということになります。第一陣として立ったのは作家の大岡昇平、続いては評論家の奥野健男でした。大岡昇平は、スタンダールやボードレールに対してのサドの影響ということから陳述し、心理学的にクラフト・エビングなどに貴重な研究資料を提供したりなど、文献上の価値を強調します。

そしてその道徳における効果としては、クロソフスキーなどの評言を引用し、つまり「あれだけ悪いことをあくまでも追求するという精神は、普通の人はするということができないものです。

大岡昇平の証言は、ひどくおだやか、というより、何か毛並みのよい文化人の、その毛並みのよさということの限界が露呈されたような性質の証言に終わりました。文献上の価値ということで、そこに西欧の有名な文人たちの名を列挙したり、終局的にはサドは神性を志向したのだ、と言い訳じみたきれいごとを述べたてることで、サドを擁護しようというのはとんでもないあやまりに思います。もちろん文献上に価値あることは、それ自体文化財として貴重でしょう。

しかし、サドの激烈な精神は文化財的貴重品の棚に、安閑と収まっていることで済まされない、もっと激越で危険な代物であるところに、その生命はあるのです。結果的には神性を志向し、カトリックと同じだ、という言い方のことばのあやはこの際わたしはとりたくありません。

サドは、とことんまで神性を否定しきった人です。無限に否定し、否定し切ってなお否定するこの反神性の徹底無残さを、小ぎれいなことばのマジックで、検察官のお目こぼしを願うという式の安易な精神で臨むのは排せきしたいものです。

14

奥野健男証人は、最も近くサドの本質を擁護したように思います。

「悪の極限が書かれることは、文学の一つの高揚です」という前提のもとに、既成道徳への懐疑、人間の無意識下にある衝動、フロイドとサド、サディズムとインフェリオリティコンプレックス、こういう斬新な角度からサドを弁じたことは大きな収穫であると思いま

食人の風習はタブーです。このタブーを一度あえて是認してみる、ふん便排せつは不浄のものとされている。そのことをあえて反対の立場で捕えてみる。≪悪徳の栄え≫ではもちろんのこと、それは池田徳太郎の≪家畜小屋≫倉橋由美子の諸作品、大江健三郎の≪飼育≫でも似たケースで出てきます。近親相姦とか男色というタブーを、あえて改めてそれにゴワサンでで触れてみる、三島由紀夫にそういう傾向の作品が出たりする。

また親孝行という美徳をまるでひっくり返して、老人を大切にしようという道義をひっくり返して、深沢七郎が≪楢山節考≫を書いた。そういうことが、何かしら人間の深層意識、大脳皮質の古い部分に、生理的な共鳴を呼ぶ、眠っている人間に警世的なショックをもたらす、こういう奥深い共鳴の底からの揺さぶりというのが、文学の負う大事な効果の一つだとする奥野証人の立場に、筆者も多く賛意を表したく思うのであります。

15

第六回公判は一九六二年一月二十四日。評論家で思想家である吉本隆明、文芸評論家の大井広介、東大教授の森本和夫、三氏が登壇陳述しました。

吉本証人は人間の自律という点からサドを説明しています。つまり現存する権力秩序に対してどれだけ自立的であるか、これがポイントであると説きます。自立を考えると、たとえば、一木一草に至るまでキリスト教的倫理で貫かれているものに対して、サドが提起した自然という問題です。自然は二つに分けて一つは盗み、これを収奪といってもいいわけですが、あと一つが性の自然ということになるわけです。

いったいに社会は、上は権力者の支配から下は盗人の盗み、強者が弱者を盗むという、これは動物社会に端的に現われる弱肉強食の自然から成っている。この自然が何らかの反省や抑圧で押えられる、倫理というか、西欧にあってはキリスト教的な倫理です。しかしその倫理は、本的に現実にあるところの政治的収奪支配秩序を是認している。だから、これに対してサドは自然を主張する。どんな悪徳をしてもよい、という自然、これはすばらしいことじゃないか、という自然。しかしこの自然というか、反語としての自然にはアイロニーという原理があるわけです。

もともと思想というものは、与えられるがままのものであってそれをこわして、自分流の原理のであって、それをこわして、自分流の原理に組立てるところにあるのですから、それを徹底し、あらゆる可能な限りの自分流の原理をギリギリまで展開してみせたサドの価値は

森本証人が説くまでもなく、筆者自身、筆者流に言い直して、ここに強調するようなわけでもあります。

第七回公判、一月三十一日の法廷には、美術評論家の針生一郎、同じく栗田勇、文芸評論家の中島健蔵、作家の大江健三郎の四氏が立ちました。針生証人は、≪悪徳の栄え≫におけるきわめてすばらしいイマジネーションは、第一流のものだと言いきった上で、ここには他者と自分との関係、支配者、被支配者、との関係の原型は何か、という重要な問いが発せられている。と証言します。

人と人とのつながり、関係は、本当は何もないのではないか、という質問です。それからすごいリアリティです。当人自身が無意識の底に畳みこんで忘れているような、それをショック療法で引き出すようなすごいリアリティがサドにはあって、その意味でのサドの価値というものはとうてい無視できないものです。

栗田証人はまず危機の時代とセックスの関係から説きます。なぜ危機の時代になるとセックスの問題が前面に押し出てくるのでしょう。それはこれこそ人間にとっての根源的な問題であるからです。フランス革命という危機の時代に、一度秩序が失われた時代に、何がどうよみがえるか、サドという天才が破壊と死を通して人間の復活を歌ったのでありま す。

中島健蔵証人は、アウシュヴィッツ、その他日本人の間でも行なわれた戦争中の残虐行為、これをどう始末するか、ということとサドとのかね合いから論じようとしたところは筋をついた証言と思われました。それから、いわゆる正常人としての意識から読んだ場合あの残虐、あの背徳に覚える刺激は相当強いものだ、との証言も当を得ているように思われます。

しかし、それが検察官の言う「わいせつ」だとは決してならない、かえって、あのエキスが、多少とも水ましされたり、薄められていたとすると、誘惑の種になるのかもしれませんが、サドの強烈さは、そんな誘惑なぞは、ものの見事に、みじんに吹き飛ばしてしまうほどに激しいものです。こういうものを、何か春本じみた、「わいせつ文書」ということで罰しようとは、筋違いもはなはだしいと言わざるを得ないのではないかと。

大江健三郎証人も、サドは人間を自由にするのだ、と述べています。今の人間関係のあり方は、過去二千年の間に人間が作ってきた二次的なもので、本当の人間は、それから解放された自由なものじゃないか、そういう覚醒的なショックをサドはもたらしたんだと証言します。

しかし大江証人は、証言中、本来通常人というようなものはいないと考えている、と一方で言いながら、もしサドから、性的な興奮を得る人が居たら、その人は正常人じゃないんじゃないか、そんな人は捕まえてもらいたいものです。と言っているのは、少しどうかと思われます。

もちろん、そのことは、それはサドを評して「わいせつ」だとときめつけた検察官側に対しての皮肉なのかもしれませんが、だとすると、逆効果ではないでしょうか。これは先にも書きましたように、抽象的な、実際にはありようもない観念上のことからも、人間はいっそう刺激も受け興奮もする場合があるものです。

しかし、それ自体、どうしていけないのでしょう。もちろん正常人というもののイメージは、こしらえられた、一つの架空事にすぎないものです。その発見のショックに、実は大いに検察官が驚いたものが今回の≪サド裁判≫として、産まれたその発想なのしょう。

二月十四日に八回公判、評論家の中村光夫

証人です。筆者は、かねがねこの有名な評論家の文学論には、どうも分類学的文学上の知識過多からくる、感受性の裏打ちがないところにかねがね疑問を持っていたのですが、やはりそういう意味での知識人には、サドは少しわかりかねたようです。技術的に不備でおもしろくない観念小説、だからほっといてもよいはずだ、というのがサドに対しての主張のようです。しかし、こういう主張での弁護なら、むしろ受けないほうがサドとしてはありがたいのではないでしょうか。

中村証人は、道徳的価値判断など、できるだけさけてほしい。まちがいだとは言わないがさけてほしい、といったような、お目こぼしを陳述するような、これでは、終局的には検察側に立っての弁護に、ついなってしまう同じ穴のムジナのような気がしないでもないのであります。

16

第九問公判は二月二八日、評論家の埴谷雄高と学習院大学教授の白井健三郎。

埴谷雄高は、サドをドストエフスキーと並べて、不可能性の文学にまで到達しようとし、かすかながらもその端に到達した作家だと証言、白井健三郎はお得意のフランス現代文学の知識を駆使しながら、サドの有要な現代的価値について弁護しました。

ところで特筆すべきは、十回公判から始まった、弁護側の一般証人の陳述についてです。裁判の公平を期すべく弁護側は、≪悪徳の栄え≫について寄せられた読者カードの中から任意に、しかも年齢、職業、性別の片寄りを防ぐべく、いろんな年代、職業、男女の別を織りまぜた、一般証人の証言を得るべく努力したのだ、とはっきり付言し、同じ学友の中にはサドは絶対だと、大変感激をした人もいた、と述べ、もうひとりの女性、若い主婦植木美智子証人は、非常におもしろく興味を持った、と言いながら、少しも悪びれたところを見せなかった、そのようすなどから、女性よりは女性のほうがいろんな意味でのショックに強いということです。

こういう一般的任意自発的な証人が、それぞれよくわからないながらも、しかし真率に、サドの意味を、本能的に感覚的に受けとったところを証言したのは、これを検察側の、天下り的なお役人的証人の指導者意識に駆られた陳腐な証言と比べると、あざやかなほど対照の妙が浮きぼりにされました。一般市民は一部の狂信的な指導者層が見くびるほど愚かではなく、サドを悪書だなぞと判断はしていないことが、はっきり証明されているのです。

なおおもしろいことには、この中の若い女性、ひとりは女子大生の松沢久美子は、サドの残酷さに驚いたと証言はしたが、それは残酷に驚いたというのじゃなく、知らなかったから驚いたのだ、とはっきり付言し、同じ学友の中にはサドは絶対だと、大変感激をした人もいた、と述べ、もうひとりの女性、若い主婦植木美智子証人は、非常におもしろく興味を持った、と言いながら、少しも悪びれたところを見せなかった、そのようすなどから、女性よりサド、という点で多くの考えさせられる新しい問題を得たことでした。

案外、東京地裁のサド裁判は、こうした陳述の積み重ねから当然の帰結として無罪をかちとったのではありましたが、その後、高裁でこれが有罪となったについては、とうていこれを信ずることができ得ないのであります。

この稿を終わるに当たって、ここに若干の補足をしてみたいと思います。被告を含め弁護人たちが、サドを擁護せんとして陳述した様々な論法も、どこかで不徹底、かゆい所に手が届きそうなところでくるりと旋回していてるきらいがあることです。自由も反逆も証しも結構なことです。その通りには違いありません。しかし、サドが書かざるを得なかった≪悪徳の栄え≫に対しての、原衝動は、証人の全部が言うがごとくに、これが手段であったと言いきることに不満があるわけです。何と解釈しようとそれは読む人の自由でしょうが、サドが書きたかった最も強い原衝動、それは論理や自由の問題以前に、生な衝動としてのサディズムがしからしめたもの、というふうに考えることを、なぜみんなためらうかと、筆者は考えます。

ことばや論理のばく然たる外観の下に、激しいうず巻くような力の目に見えない流れを見あやまってはならない。とモオリス・ナドオは≪今日の文学≫の中で言います。われわれはもっと自信と勇気を持つべきではないでしょうか。勇気のある井戸掘り人として、このとうとうたるうず巻くような地下の流れを、掘り下げくみとるべきです。でなかったら、この流れを倫理という人為的な権力でせき止めようとしたら、それはいつしか巨大な洪水となって地上に奔騰するでありましょう。サディズムとは、サドにとっては、権力否定への手段であったと同時に、それが同時にそれ自体目的でもありました。

なぜ人々は、自己の内部のサディズムを認めるのをこわがるのでしょう。弁護側の証人も、なぜかサディズムそのものの認識論にはそっと背を向けてしまいました。

「それでも地球は回る」と言った有名なガリレオのことばを借りるならば、「それでもサディズムの血はかれない」。検察官自身、被告を思う通りの罪名に追い詰めてゆく時感じるあの快感を、否定はでき得ないでしょう。職業という天性の隠れミノの下で、それでもとうとうとして人間の原始衝動は流れているのです。

■落合龍二・小品傑作集



第四集 残酷裸女絵巻

万里小路嵐・著
豊田みのる・絵

「鉄斉、蠟燭を乳房にも立ていい。うつ。ぬらぬらとした脂汗が、胸から腹までねっとりと柔肌に噴きあがった。睫毛が激しく痙攣して涙が玉となって瞳に浮かぶ。

美女の燭台じゃ」

無言のうなずきを返して、鉄斉は新らしい蠟燭を取り出すと、芯に火を点ずるのだ。

「ひい、ゆるして、ゆるして下さいまし」

二本の蠟燭は、しごきに緊めあげられてむっくりとふくらんだ乳房に、蠟滴とともに立てられたのである。

「ふふふ、見事な燭台じゃ」

せわしい息をもらして、熱さにあえいでいるお千代の裸身が起伏するのを、左京は喰い入るように凝視するのだ。

「ああうっ、くるしいっ」

顔を左右に振ってお千代はのたうつ。ぬらぬらとした脂汗が、胸から腹までねっとりと柔肌に噴きあがった。睫毛が激しく痙攣して涙が玉となって瞳に浮かぶ。

「ひいっ――」

とお千代の紅唇が鳴咽した。

左京が手をのばして、白くすきとおったお千代の足の裏を擽りはじめたのだ。悪魔のように、執拗な左京の目は、女体の責め所を心得て、たくみに攻撃するのである。

「ああ、あれっ、たすけて――」

「動けば蠟燭が倒れるぞ。まだ擽って欲しいのか、千代」

みだらな愉悦の声を吐き散らして、左京は指をそのあたりまで這わせる。羞恥と異様な感触が、お千代の体をおののかせる。だが乳房と腹部に立てられた三本の蠟燭は、悶えることすら許さないのである。

やがて、蠟燭責めに飽きたか、左京はうっそりと立ちあがり、手文庫の中から、一束の新しい縄を摑んで意味ありげに眼を光らす。

「鉄斉、地獄縄をかけい。生娘を責めるのはあれが一番よいのだ」

どさりと足元に投げ出された縄束に、視線を落とした鉄斉は三本の蠟燭を吹き消した。

縄はくびれたお千代の胸を、二巻ほど締めあげて、中をくぐった縄尻が下に降りた。固く閉じたその間をくぐり、双丘の割れ目に沈んだ縄は、鉄斉の手に強く引き絞られた。あろう事か、縄目はお千代の身体を縦に縛りあげたのである。

「ううっ――ううっ」

と、身をくねらせてお千代があがいた。

脚をのばすとタテの縄は厳しく喰いこむ。柔軟なその丘を緊めあげ、女のもっともむずかしい縛り方法なのである。苦痛と羞恥がお千代の脳裡をかき乱した。

第五集 責め肌忍法

万里小路嵐・著
古正英生・絵

木馬の高さは四尺余りである。背の鋭い刻みが、乗せられた女のせられた女の脚が、床に届かぬ、柔らかな部分を割り裂こうとように作られた木馬なのだ。木馬いう寸法だ。女の羞恥を唆る有効の背には、鋭い刻みがある。そしな女体責めの道具である。

て、木肌は脂を吸いこんだのか、「一心殿、もはや舌を噛む気力も黒々と光っていた。ありますまい。それに、舌が腐り

落ちますぞ」

白っぽい朱実の舌を、凝視しながら陣内が言った。

「よかろう、ゆるめてやれ」

一心がうなずいた。

朱実の顔を仰向けて、陣内が舌の根元をくびっている三味線糸をたたった。

ほどきはじめた。しびれるような「う、う――」

痛覚が消えても、舌は思うように呻いて、がっくりと崩れている動かず、だらりと垂れさがったまま朱実。海藻のような黒髪が、その白い肌を浮きあがらせていた。

までである。唾がぬらりと光って、

顎からゆたかな胸のふくらみにし一心が壁際から木馬を引き出してくる。

「さあ、一鞭当てるか」

と、陣内が新しい責めの効果を期待して声を弾ませた。異相は喜悦に不気味なほど歪んでいる。その異様な熱気に、一心すら圧倒されていた。

「むむッ」

言葉にはならぬ叫びである。朱実は必死で体をくねらせた。眼前にある木馬が、これからのおそましさを、朱実にたっぷり味わわせるかのようである。

「や、やめて――」

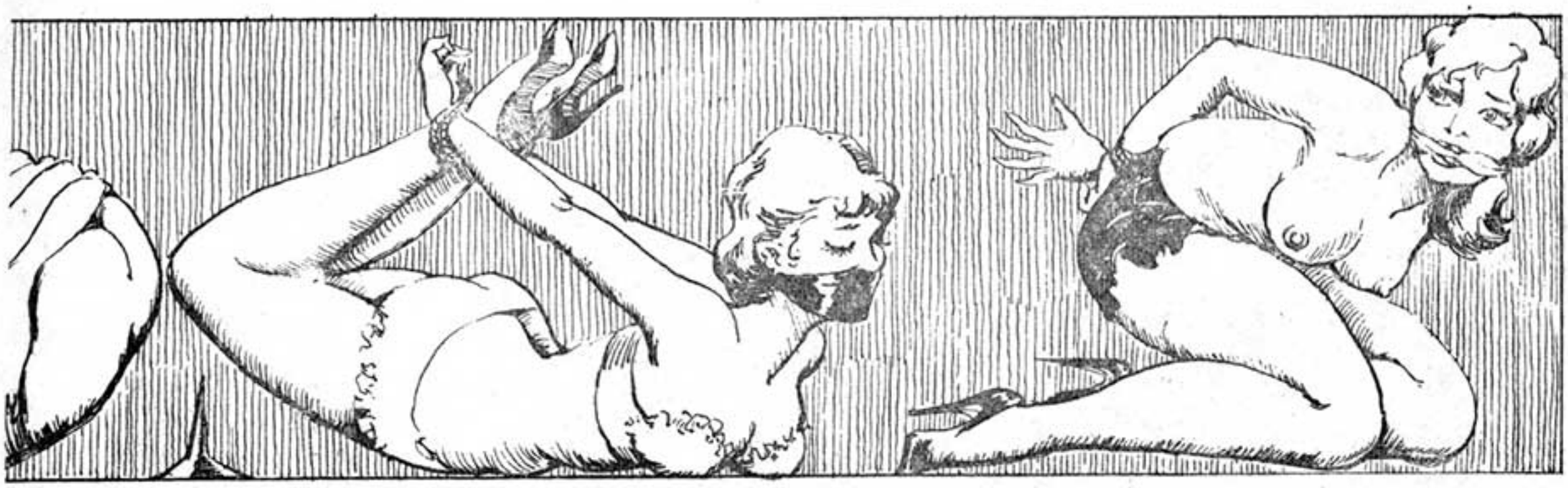
朱実が哀願する。くびれた胴をふとい腕が、がっしりと抱きすくめる。

「い、いやッ」

後手に縛りあげられた裸身が、軽々と宙に浮きあがった。懸命にばたつかせる両脚を、一心が手をのばして押えつける。

「ふふ、嫌がるなよ。乗り心地は悪くないだろう」

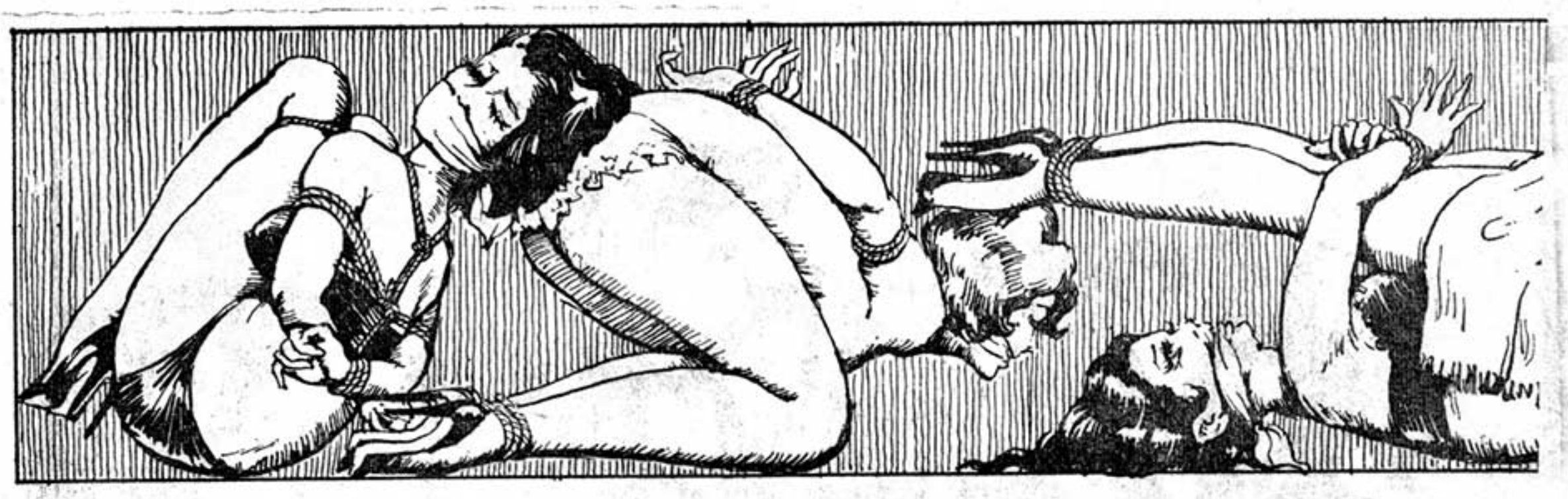
全裸の肢体を括りあげられ、全くの自由を失った朱実が躍った。



★裏窓既刊号総目録★

■昭和三一年度の「裏窓」は、ぜんぶ売り切れになりました。お申し込みにならぬようおねがいいたします。

○三二年一月号　凄艶妖奇読物特集号　価一〇〇円　〒一八円
●〃　二月号　ぜんぶ売り切れました
●〃　三月号　〃
○〃　四月号　妖奇犯罪実話特集号　価一〇〇円　〒一八円
●〃　五月号　ぜんぶ売り切れました
●〃　六月号　〃
○〃　七月号　倒錯の手記特集号　映画緊縛場面集ほか　価一〇〇円　〒一八円
○〃　八月号　異色読物特集号　隠密覚書（島本春雄）女形地獄（稲垣史生）ほか　価一〇〇円　〒一八円
○〃　九月号　耽奇小説特集号　女犯経秘図（円城寺達）ほか　価一〇〇円　〒一八円
○〃　十月号　時代伝奇小説特集号　猿鍔伝奇（島本春雄）ほか　価一二〇円　〒一八円
○〃　十一月号　あぶちっくみすてりい特集号　価一二〇円〒一八円
●　十二月号　ぜんぶ売り切れました
○三三年一月号　あぶちっく忠臣蔵特集号　血まみれ観音像（飯田豊吉）闇に生きる義士（島本春雄）ほか　価一五〇円　〒一八円
○〃　二月号　裏窓遊俠伝特集号　お小夜嵐（高月大三）ほか　価一二〇円　〒一八円
○〃　三月号　裏窓妖婦伝特集号　白い顔の悪魔（矢桐重八）ほか　価一二〇円　〒一八円
○〃　四月号　あぶちっくさすぺんす特集号　絵物語白獣の市場（山田彬弘・絵）ほか　価一二〇円　〒一八円
○〃　五月号　妖異捕物特集号　血まみれマリー（藤見郁）ほか　価一二〇円　〒一八円
○〃　六月号　女忍者・女間諜特集号　慶安女忍道（円城寺達）紅



★裏窓既刊号総目録★

○〃　七月号　紐呪縛（小田桐爽）妖異呪文鏡（島本春雄）ほか　価一二〇円　〒一八円

○〃　八月号　妖異譚特集号　価一二〇円　〒一八円

●〃　七月号　一揆殉教秘史特集号

○〃　十月号　独立黒月党（南村蘭）天保血笑録（小田桐爽）ほか　価一二〇円　〒一八円

○〃　十一月号　ぜんぶ売り切れました

●〃　十二月号　怪異復讐譚特集号　価一二〇円　〒一八円

○三四年一月号　妖異裏窓忠臣蔵特集号　価一二〇円　〒一八円

○〃　二月号　変幻侠盗義賊特集号　変幻中条流（矢桐重八）湯文字盗賊（島本春雄）ほか　価一五〇円　〒一八円

○〃　三月号　凄艶毒婦妖婦特集号　価一二〇円　〒一八円

○〃　四月号　淫祠邪教特集号　女色金猫教（矢桐重八）黒髪呪縛（小田桐爽）馬のり仙女（藤見郁）ほか　価一二〇円　〒一八円

○〃　五月号　女性解放悲史特集号　価一二〇円　〒一八円

○〃　六月号　伝奇秘宝録特集号　夜叉姫絵図（小田桐爽）伝奇紅蓮党（矢桐重八）ほか　価一二〇円　〒一八円

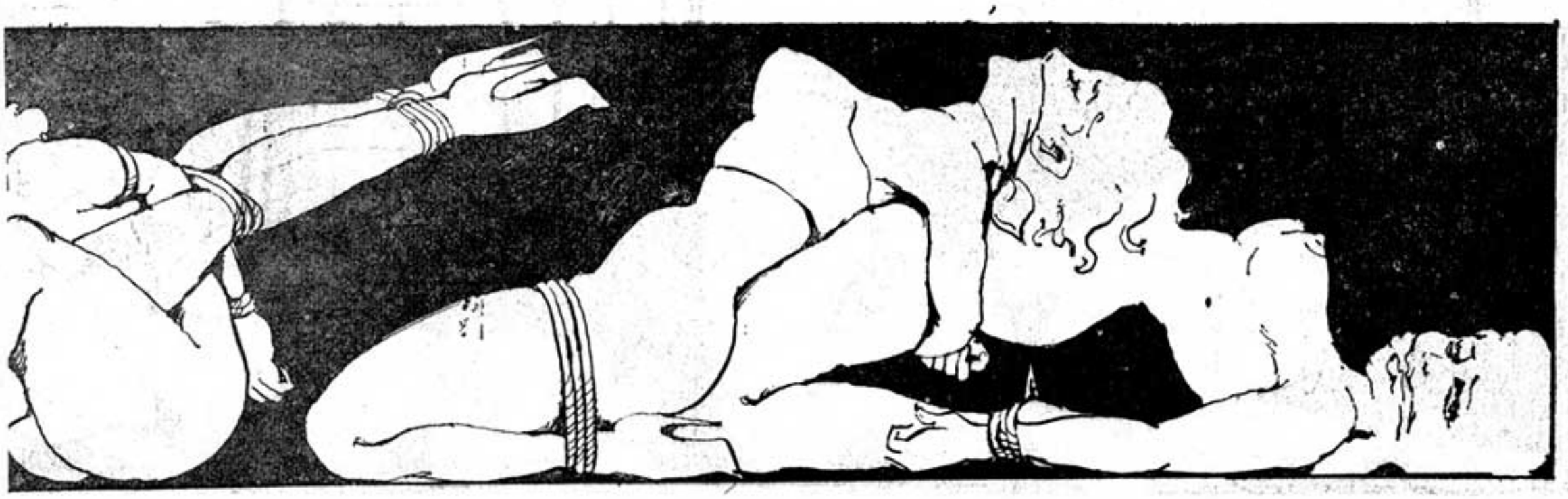
○〃　七月号　恐怖異色感覚特集号　価一二〇円　〒一八円

○〃　八月号　呪法幻術特集号　幽霊陰陽師（矢桐重八）ほか　価一五〇円　〒一八円

○〃　九月号　大奥後宮秘史特集号　妖雲練馬御殿（小田桐爽）秘説千代田絵巻（矢桐重八）ほか　価一二〇円　〒一八円

○〃　十月号　あぶちっく・すとおりい特集号　価一二〇円　〒一八円

○〃　十一月号　倒錯小説特集号　ボラ助の災難（南原哲）絵物語ナゾの裸女像（松



★裏窓既刊号総目録★

○ 〃　十二月号　**妖美小説特集号**
十字架の美少女（山田彬弘絵）黒子受難（小田桐爽）苫船地獄（飯田豊吉）
価一二〇円　〒一八円

○三五年一月号　**陶酔小説特集号**
グラビア蛇と女（藤沢修）　○〃　六
絵物語・墓穴を掘れ（豊田一狼文・山田彬弘絵）仇討ち修羅道（小田桐爽）比丘尼忠臣蔵（矢桐重八）ほか
価一二〇円　〒一八円

○● 〃　二月号　**伝奇小説特集号**
鷹の巣谷伝奇（藤見郁）紅草紙（円城寺達）雪魔女は四本指（長谷川勇）地獄絵女房（飯田豊吉）ほか
価一二〇円　〒一八円

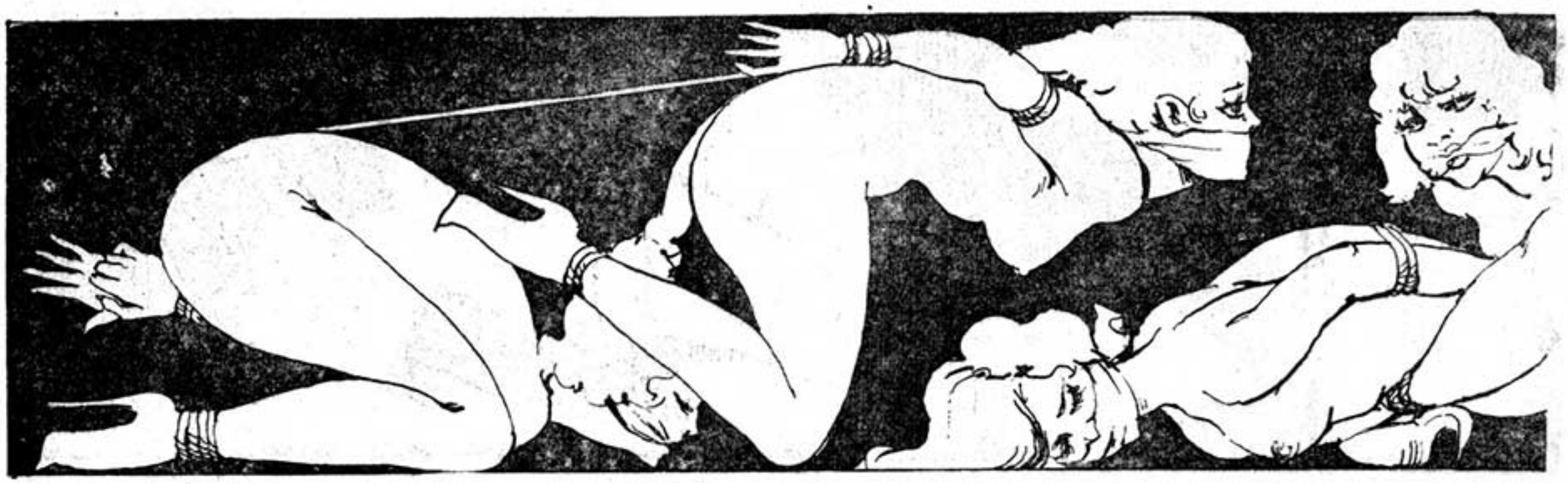
○ 〃　三月号　**異色時代小説特集号**
妖槍柔肌秘聞（小田桐爽）ある男の生涯（矢桐重八）
価一二〇円　〒一八円

○ 〃　四月号　**仁侠義賊特集号**
大利根血念仏（藤見郁）おどろ雨（円城寺達）雨夜ざんげ（矢桐重八）隠密愛憎記（飯田豊吉）絵物語・恐怖の穴（絵・山田彬弘）ほか
価一五〇円　〒一八円

天変三日月秘文特集号
天変三日月秘文（万里小路嵐）鈴姫伝奇（絵・小日向一夢）ほか
価一二〇円　〒一八円

あぶちっく小説特集号
虻田氏の愛人（豊田一狼）サン・ラザールの女囚（鳴滝三郎）奇説裸女八幡（黒部恭治）絵物語・恐怖の山小屋（絵・山田彬弘）ほか
価一二〇円　〒一八円

濃艶女白浪特集号
緋牡丹銭（島本春雄）ラシャメン白浪（矢桐重八）化粧蝙蝠（万里小路嵐）鬼乳



★裏窓既刊号総目録★

●〃　九月号　グラビア・悦虐ヌード集
○〃　十月号　オフ絵物語（堂昌一絵・山田彬弘絵）ピララの敗北（南村蘭）鬼乳房伝奇（飯田豊吉）マゾヒスト随想録（阿麻哲郎）ほか
価一五〇円　〒一八円

●〃　十一月号　ぜんぶ売り切れました
●〃　十二月号　新装判（以下同じ）
○三六年一月号　オフ絵物語（堂昌一絵）グラビア・悦虐フォト特選集　絵物語（豊田みのる絵）マゾヒズムへの誘惑（黒田史朗）囚われの檻（殿村恵）大奥裸女絵巻（中島喜美）ほか
価一五〇円　〒一八円

○〃　二月号　オフ絵物語（山田彬弘絵）グラビア・悦虐フォト特選　オフ絵物語（堂昌一絵）狙われた囮（豊田みのる絵）飼われる女体（殿村恵）マゾヒズムへの誘惑（里田史朗）ほか
価一五〇円　〒一八円

●〃　三月号　グラビア・責絵秘画集・悦虐の部屋（吉田久）青い情事（豊田一狼）妖説閨人形（島本春雄）妄執の炎（小田桐爽）スカートの下の世界（阿麻哲郎）オフ絵物語（堂昌一絵）ほか
価一五〇円　〒一八円

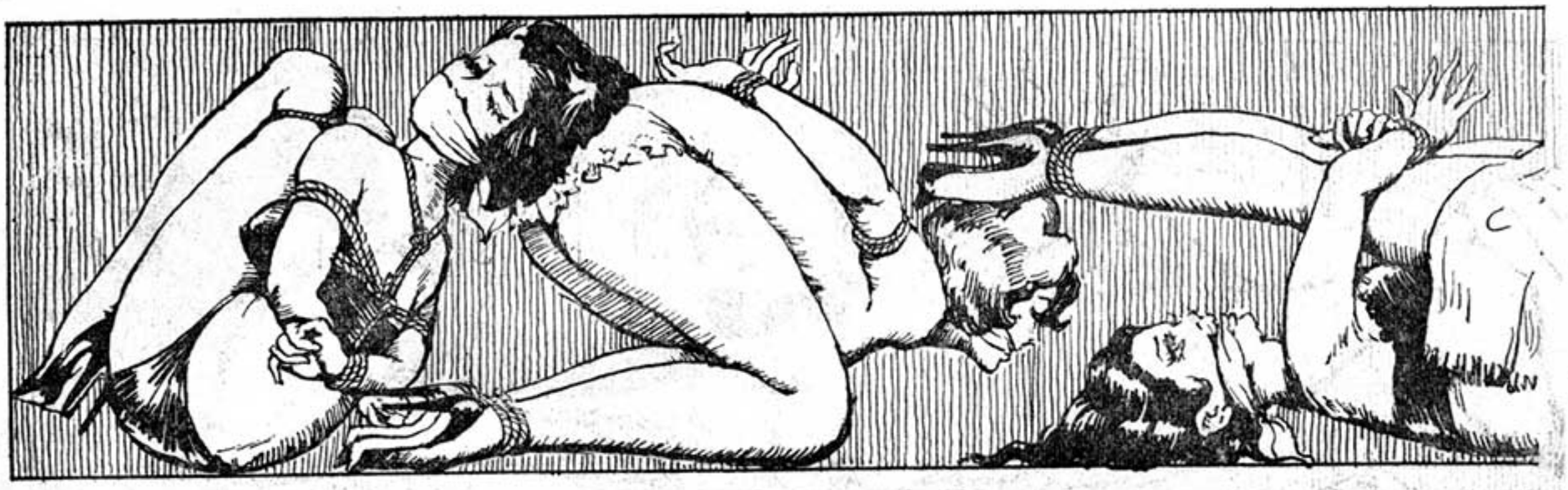
●〃　四月号　ぜんぶ売り切れました
●〃　五月号　〃
○〃　六月号　グラビア（吉田久）オフ絵物語（沖渉司絵）バスティーユ牢獄（中川彩子絵）痴者の文（南村蘭）ある老遊俠伝（矢桐重八）ほか
価一五〇円　〒一八円

●〃　七月号　ぜんぶ売り切れました
●〃　八月号　〃
●〃　九月号　〃
●〃　十月号　グラビア（藤沢修）執念泥沼地獄（本誌特写）懸想文



★裏窓既刊号総目録★

●十一月号　受難（小田桐爽）黒髪模様
●〃　（志摩不二）ギプスに泣く
●十二月号　恵子（片山俊一）変幻鬼女
●〃　囃子（矢桐重八）ほか
　価一五〇円　〒一八円
○三七年一月号　ぜんぶ売り切れました
●二月号　〃
○三月号　グラビア（吉田久）オフ絵物語（中川彩子絵）グラビアもだえ三態（編集部編）不貞現場の女（春川光彦）海老沼武七の執念（小田桐爽）マングローブの葉かげで（松平荘司）
　価一五〇円　〒一八円
●四月号　ぜんぶ売り切れました
●五月号　〃
○六月号　グラビア・特選悦虐集（毛卓三・猪島昌也）オフ絵物語（中川彩子絵）（山田彬弘絵）碧眼蛮女伝（小田桐爽）稲妻ざんげ（万里小路嵐）地獄船青竜号（永井卓二郎）風雲地獄街道（鈴宮英樹）ほか
　価二〇〇円　〒一八円
●八月号　ぜんぶ売り切れました
○九月号　グラビア（吉田久・猪島昌也）　北原環妖美画個展オフ絵物語（東桂史絵・山田彬弘絵）お浜の受難（花巻京太郎）山小屋の暴風雨（駒井たまき）白痴美の女（青柳貫次郎）女賊と姫君（霧山志郎）体当たりマゾヒズム論（水尾究）ほか
　価二〇〇円　〒一八円



★裏窓既刊号総目録★

○〃　十月号

グラビア（金井行雄・藤沢修）　江渕晃夫妖美画個展　オフ絵物語（曾我部泰絵）　ある青年の休暇（ゴードン社）紅の私刑（五所章）妖しい体臭の夜（市川菊夫）　鬼洞又四郎の煩悩（小田桐爽）現代女牢記（多賀満）　体当たりマゾヒズム論（水尾究）おろかな馬のものがたり（馬場弘二）ほか

価二〇〇円　〒一八円

○〃　十一月号

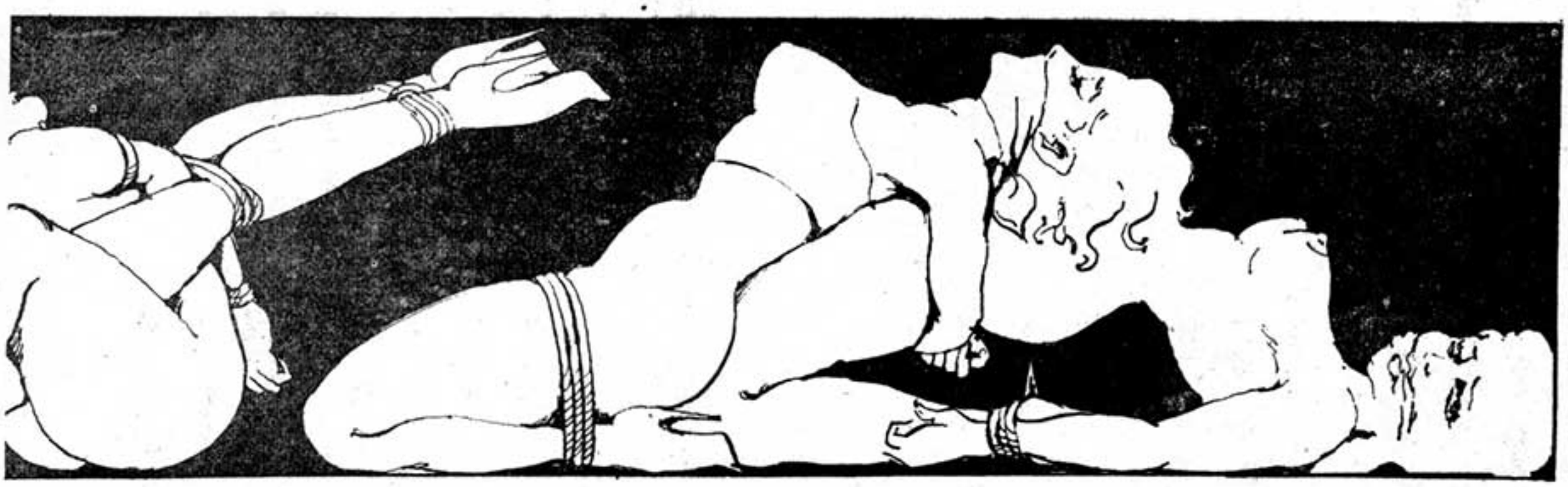
グラビア（毛卓三・金井行雄）オフ絵物語（中川彩子絵）外海SMフォト特選集　グラビア　あわれ雪路（丸亀恵史）霧笛の町（五所章）足（村山省）夜の画帳（鳴滝三郎）　ざまアみろ（春川光彦）ある恋の物語（山本節夫）体当たりマゾヒズム論（水尾究）妖美画傑作選（都築峰子・沖渉司絵）ほか

価二〇〇円　〒一八円

○〃　二〇三八年一月号

グラビア（毛卓三・金井行雄・北好夫）　山田彬弘妖美画個展　オフ絵物語（小日向一夢絵・中島喜美絵）SMフォト特選集　グラビア　絵物語（中川彩子絵）仮面のたわむれ（溝口雄太）忍者遁走記（祖父江新）決闘立花屋（花巻京太郎）もませておくれ（深見良介）夜の感触（万里小路崑）売られていく玩具たち（北園透一郎）ほか

グラビア（金井行雄）黒い皮のスタジオ（泰西出版）　秋吉辨妖美画個展　海外SM画傑作展　島原の子守唄



★裏窓既刊号総目録★

○〃　三月号
（春川光彦）カブー家の第三夫人（加木れい子）金色の胸毛（立原道夫）女囚お蓮の死（小田桐爽）代田品じゃつまらない（九十九十郎）ほか
価二〇〇円　〒一八円

○〃　四月号
グラビア絵物語（小日向一夢絵）巻頭百枚異色小説・醜いコメディ（淡路周五）
大利根無頼（祖父江新）和装恋慕（宮古志満夫）銭姫党伝奇（島本春雄）犬とギプスと搾衣（春川光彩）虻川画伯のアトリエ（飯田豊吉）ほか
価二〇〇円　〒一八円

○〃　五月号
グラビア・夢幻のへや（藤沢修）オフ・江渕晃夫耽美画集　海外SM画傑作選
夢幻小説アラビアの城（北園透一郎）茅女物語（井村錠）会津の女兵（潮一樹）
孤島の復讐鬼（祖父江新）ばんざいッお転婆学園（郷保夫）ほか
価二〇〇円　〒一八円

○〃　六月号
グラビア・幽囚のへや（吉田久）オフ・時代妖美画集（鬼頭暁・中島喜美）
七つの大罪（九十九十郎）異端の終末（芦田奈貴）月光の道で（河村童八）鬼婦長（丸亀恵子）特選時代小説集（庄内裕治・潮一樹・島本春雄・佐藤達四郎）
価二〇〇円　〒一八円

六月・臨時増刊号
耽美芸術写真絵画絵物語集
グラビア写真集（吉田久・藤沢修・猪島昌也・金井行雄・北好夫）
グラビア絵画集（小日向一

夢・中川彩子・江渕晃夫）
オフ絵画集（鬼頭暁・江渕
晃夫）ほかアメリカSM絵
物語集
価三八〇円　〒一八円

○〃　七月号　グラビア・アメリカSM物
語・闇に光る（吉田久）
オフ絵物語（春日章絵）切
支丹牢（喜多玲子絵）
くたばれッ淑女学園（郷保
夫）わが愛の渇望（白木ゆ
り子）西鶴におけるマゾヒ
ズム（安東泉）ほか
価二五〇円　〒一八円

○〃　八月号　グラビア・砂の上の船（吉
田久）オフ絵物語（春日章
絵・山田彬弘絵）残念なり
猿飛佐助（井村錠）お仕置
きにぬれる弓子（北園透一
郎）紅のライフル（落合竜
二絵）切支丹散華（北村仙
也）ほか
価二五〇円　〒一八円

○〃　九月号　グラビア・犬吠岬（モデル
エダキリコ）中島喜美時代
海辺のうた（吉田久）ほか
オフ・絵本いろはうた（小
日向一夢絵）海賊虹姫伝奇
（春日章絵）お化粧される
弓子（北園透一郎）小笹姫
受難（潮一樹）特製マゾキ
ン（嶋岡晨）魔女アクーリ
カ（春川光彦）ほか
価二五〇円　〒一八円

○〃　十月号　グラビア・モデル（エダキ
リコ）オフ絵物語（山田彬
弘絵）ほか
海外S小説（グラナムール
作）体当たられマゾヒズム
論（エダキリコ）灰色の夜
（水尾究）アラビアの城⑥
ゴルドンの記憶⑨現代マゾ
ヒズム文化時評㉑体当たり
マゾヒズム論⑱ほか
価二五〇円　〒一八円

○〃　十一月号　グラビア・中島喜美時代
エダキリコ）中島喜美時代
妖美画集　オフ・金井行雄
フォト集ほか　ねむれぬ夜
の追憶（北海道雄）武士道
無残（島本春雄）青雲崩れ
るとき（井村錠）悪党半九
郎（潮一樹）ほか
価二五〇円　〒一八円

○〃　十二月・臨時増刊号
耽美芸術写真絵画絵物語集
グラビア写真集（吉田久・
海藤真・フェニクス商会・
新井正也・青沼定三ほか）
裏窓妖美絵画集（小日向一
夢・中島喜美・都築峰子・
山田彬弘・江渕晃夫・落合
竜二・東桂史・古正英生・
鬼頭暁・中川彩子）
時代絵物語・特選フォト集
価三八〇円　〒一八円

手だれの死者

かびや・かずひこ
桂　史・絵

つばきも甘露の水

きさらぎ寒い昼さがり——

丸屋勘右衛門は、釣り道具を手に、興福寺の南大門前を通りかかった。

と、そこの芝地に、広く、幔幕がはりめぐらされてある。

「おお、薪能（たきぎのう）だナ」

と勘右衛門は呟いた。

薪能は毎年二月七日を初日に七日間、この場所で興行される神事能である。その日は九日であるから三日目、金春（こんぱる）の一座が勤めているわけだ。

——ちょいと覗いてみるか……

勘右衛門は左手にさげていた釣り用の腰かけを、幔幕のそばにおくと、そのうえに足をかけた。

背の高い彼の首が、幕のうえを越えて、にゅっとつきでた。七、八間ほどもはなれて、舞台と桟敷が、斜めのかたちに彼の視野にはいった。

舞台では、能役者大蔵求馬（おおくらくるめ）が、シテの美童に扮しての直面（ひたおもて）で、二番目の「花月」を舞っていた。

へこし方より、いまの世までも、絶えせぬものは、恋といえるくせもの、くせものかな、身はさらく〳〵に、恋こそ寝られね……

恋は恋でも、衆道の恋をあつかったものである。

——うーん、うつくしい……

勘右衛門は端正な求馬の顔を、じーっとながめる。

が、彼の目的は、舞台よりも桟敷のほうにあった。興福寺の桟敷をとっている稚児や若衆のほうなのだ。

勘右衛門の眼は、まもなく、目当ての方へすーっと移る。そこに振り袖姿も臈たけく、ずらりと居並んだ、十三、四歳から十四、五歳の美童たち、そのひとりひとりをくいつくように見ていく。

二十の春にこの道をおぼえてから、やみつきとなって約十年、その間かぞえきれぬほど多くの若衆をあやなし、遊び、いまでは衆道の通人（わけしり）として、その秀れた剣の技とともに、朋友のあいだに知られている勘右衛門であるが、このみの色若

衆をみれば、いまさらにわかもののように、心が燃える。

ゆっくりとながめおわった後、その場をはなれた。

――わがものならぬ他人の寵童ばかりだが、ひさしぶりで眼の保養をしたわい。

どんよりと曇った冬空というのに、勘右衛門は心ものどかにプラリプラリと歩きだした。

当世流行を逆にいくひねった髪形、上下黒い竜門に葉菊の五所紋、糸打ちの平帯、吉屋づくりの大小――しゃきっとした装いである。

すれちがう女のなかには、そうした勘右衛門をそっとふりかえっていく男好きらしいものもいるが、彼は一瞥もくれない。「女遊びは隠居おやじのやるもの、血気盛んな男のするものにあらず」というのが、彼の信条なのだ。



まもなく、目ざす岩井川の汀（みぎわ）に来ると、はえがしらを使って、釣りをはじめた。水面に餌をまいておいて、寄ってくる魚――ヤナギバエや小アユなどを引っかけて釣るのである。

日が暮れかかるころまでに、十数尾を釣りあげた。

――さて、このへんでおみこしをあげようか。

と帰りじたくをはじめているときに、ひとりの若衆の姿をみとめた。

年のころ十四、五歳にもなろうか、切れながのさかしらな眼、ふっくらとした童顔が可愛いい。袴のすそさばきも軽やかに、歩いてくる。

勘右衛門はわれにもあらず、胸をときめかした。

若衆は歩きながら、川面にむかってぷっとつばを吐いた。

――うん、この機を逃がしては……

と気づいた勘右衛門、そのつばが自分の前に流れてくるより速く、さっと手ですくいあげると、のみくだした。

若衆がいそいでちかよってきた。

「これはとんだ無作法をいたしました」

と若衆はいった。

「あなたがお手水（ちょうず）をおつかいになるとは思いもよらず、申しわけございませぬ。
どうかおゆるしください」
頭を低くして詫びるのを、勘右衛は手で制した。
「なんの、お詫びどころか、わしが好きで飲んだのです」
「え？　すきで飲んだとは？」
と若衆はいぶかしげな顔をする。
「されば……あなたのような美しいお若衆のつばを、なんで不浄と思いましょう。わしにはむしろ甘露にもまさるもの。その甘露の水が、泡沫（うたかた）と消えるのを惜しんで、飲ませてもらいました」
勘右衛門にとって、このような殺し文句は、口をついてスラスラとでる。
若衆ははじめてニコリと微笑うと、
「そのような、ひとを喜ばすこと、あだにはお聞きませぬ。またお逢いすることもございましょう」
いいすてて、川岸づたいに去っていった。

夜の野道を送り送られ

若衆は郡山藩中の多村三之丞とよぶ小姓であった。
勘右衛門と別れて、三之丞は郡山へと足を急がせる。
途中でとっぷりと日が暮れた。曇っているので、あると思った月もみえず、真暗な寂しい道である。こどもごころの、三之丞は心細くなってきた。
——自分に気のあるらしいさきほどのお侍に甘えて、送っていただけばよかった。
とも思った。
——あの方は、わたしの吐いたつばを、好んで飲んだと仰言った。そんなひとには、いままでいちどもあわなかったので、はじめはちょっとびっくりしたが、……でも、ほんとうにすきになれば、そうなるのかもしれない……。
さびしさをまぎらすために、そんなことを思いながら、三之丞はせっせと歩きつづける。
「もしもし……」
ふいにうしろから呼びとめられて、三之丞はドキリとした。
「夜道のひとり歩きは、おたがいに心細いものです。ごいっしょに参りましょう」
いいながら、うしろの男が三之丞のそばに寄ってきた。
闇になれた眼ですかしみると、自分の家の近くに住む針医者の道仁であった。
「おお、道仁どのか……」
「そういう声は、多村さまのお坊っちゃまでございますね」
道仁は見えるほうの片目を三之丞にむけながら、
「きょうはどちらのお帰りで？」
「薪能を見物してきました」
「おや、それは結構でございました。お坊っちゃまほどのご器量のものは、そうたんとはいますまい。親御さまはさぞおたのしみでしょうが、またご心配でもございましょうナ」
「心配とは、どういうわけで？」
「それはソレ、お美しいとおおかみに狙われるからでございますよ。きょうあたりも、あなたのあとをコッソリと尾けているかもしれません」
「道仁どの、おどかしっこなし？」
このあたりは、ときおり狐狼がでるという話をきいている三之丞、さすがにこどもで、そう声をあげた。



話しあいながら暗い野道を、隠坊（おんぼう）が住んでいるというひとつ家の前をすぎて、大安寺まで来たとき、わきの道から、頭巾（づきん）をかぶり、手に提灯をもった小者風の男がでてきて、ふたりの先きを小走りに歩いていく。

「こりゃ助かった」

道仁はにわかに元気づいて、もう鼻唄げんである。

やがて、郡山の三之丞の家の門前まで来た。

道仁に別れをつげて、門のなかへはいりながら、三之丞はひょいとあとをふりむいた。と、いままで自分たちの先きに立っていた小者風の男が、急に元来た道をひきかえしていくのを見た。

――おや？……では、あのひとはわざわざ送ってくれたのか。

と知った。

三之丞はそのままそっと、その男――勘右衛門のあとをつけた。

奈良近くなったころ、ローソクが絶えたのか、すーっと提灯の明りが消えた。

「これは困った」

闇のなかに、勘右衛門の声がきこえた。

「暗闇になると、よけい寒さが身にしみる。着なれないもめん袷は寒いものだ。……それにしても、このように姿をかえて、送っていったとは、あのお小姓よもや知るまいが……」

と独言っている。

「知ったからこそ、はるばるここまでお送り返してきたのです」

三之丞はそういうと、勘右衛門にちかよって、その手をとった。

さつをすると、とってかえして、いまの男のあとを追った。

ようやく男のかげをみつけて、二、三間てまえまでちかづいてみると、男のさげた提灯に葉菊の紋所がついていることに、はじめて気づいた。

――さては、夕方、岩井川のほとりでみたお侍……

「おお……」
三之丞の手が、激情的に強く握りかえされた。
「夢のようだ。……心が通じて、うれしい」
「わたくしも……」
「では、念契結んでいただけるか」
「はい……いつまでもかわりなく」
奈良のほうから、八ツの鐘の鳴るのが聞こえてきた。
「まだまだ夜明けは遠い。語りあいながらこんどはわしがお送り申そう」
ふたりはきびすをかえした、また郡山のほうへ向かった。

仏の前のふたり若衆

桃の節句がすぎて、四日——
勘右衛門と再会を約した日なので、三之丞は御殿をさがると、過ぐる日にきいておいた薬師寺あたりの彼の仮り住居へでかけた。
おとないをいれると、奥のほうから、六十がらみの老婆がひっそりと現れた。
「勘右衛門さま、ご在宅ならば……」
と三之丞はいった。
「おや、ご存知ないのですか」
と老婆はけげんな顔で、
「あの方はお亡くなりになりましたのです が……」
意外な返事に、三之丞ははっと胸をつかれた。
「えッ、亡くなられた？……それはいつのこと？」
「さよう、先月の二十七日の夜のことでございますから、もう五日になります」
「で、ご病気でか？」
「はい……わたくしは留守居に頼まれていた者でございますが、あれは幾日でしたでしょうか、二十日ほど前のこと、あの衣裳ごのみのお方が、下男のようなふうで、明け方ちかくにお帰りなされ、かぜをひいらしいと仰言って、すぐお寝みになったのです。それから日ましに病気が重りまして、枕があがらず、お医者の手当ても効がなく、とうとうお亡くなりになりました」
「うーン……」
と三之丞は深いためいきをついた。
「で、あの方のお住居は？」
「南市（みなみいち）の、なんでも、連歌師の詔巴（じょうは）がむかし住んでいた跡とか、仰言っていましたが……」
「ありがとう」
そのままそこを去ると、三之丞は、尋ねながら、老婆に教えられた南市の里に来た。
勘右衛門の住居は、もうかなり年老いた茶花が白く咲いていた。
下地窓から供部屋をのぞいてみると、数人の小者が集って、賭博に余念がないらしい。主人の死を悲しむようすなど、つゆほどもみえなかった。
——まだ初七日もたたぬというに……
と三之丞は眉をひそめながら、ことわりなしに枝折り戸をあけて、庭にはいった。
庭づたいになかへ歩いていくと、母家の座敷のひとつが、縁にむかって障子が開いていて、その床脇のところに、土器に盛って線香が数本、ほそいけむりをあげているのがみえた。
三之丞はしずかに、縁から座敷にあがって、床脇の前に端座した。
いちばん上段の棚に、戒名をしるした白木の板、「春雪道泉」と読まれた。その文字をじっとみつめていると、しぜんに涙が

流れてきた。

——まだ契りをかわさぬというに、この悲愁はどうしたことであろう？……やはり、すきだったのだ。

袖を顔におしあてて泣いていると、間のふすまの開く音がきこえた、三之丞は涙を拭い、居ずまいを正した。

まだ元服してまもないようすの、ひとりの若者が、座敷にはいってきた。白むくに浅黄の上下（かみしも）の喪服、ひきしまったなかにもどこかいたずらっぽいかげのみえる顔立ちである。

若者は仏棚の前に頭をさげると、そのままいざって、脇のほうに座った。

「そつじながら、わたくしは……」

と三之丞があいさつをしかけると、若者はその途中からひきとって、

「多村三之丞どのでございましょう？」

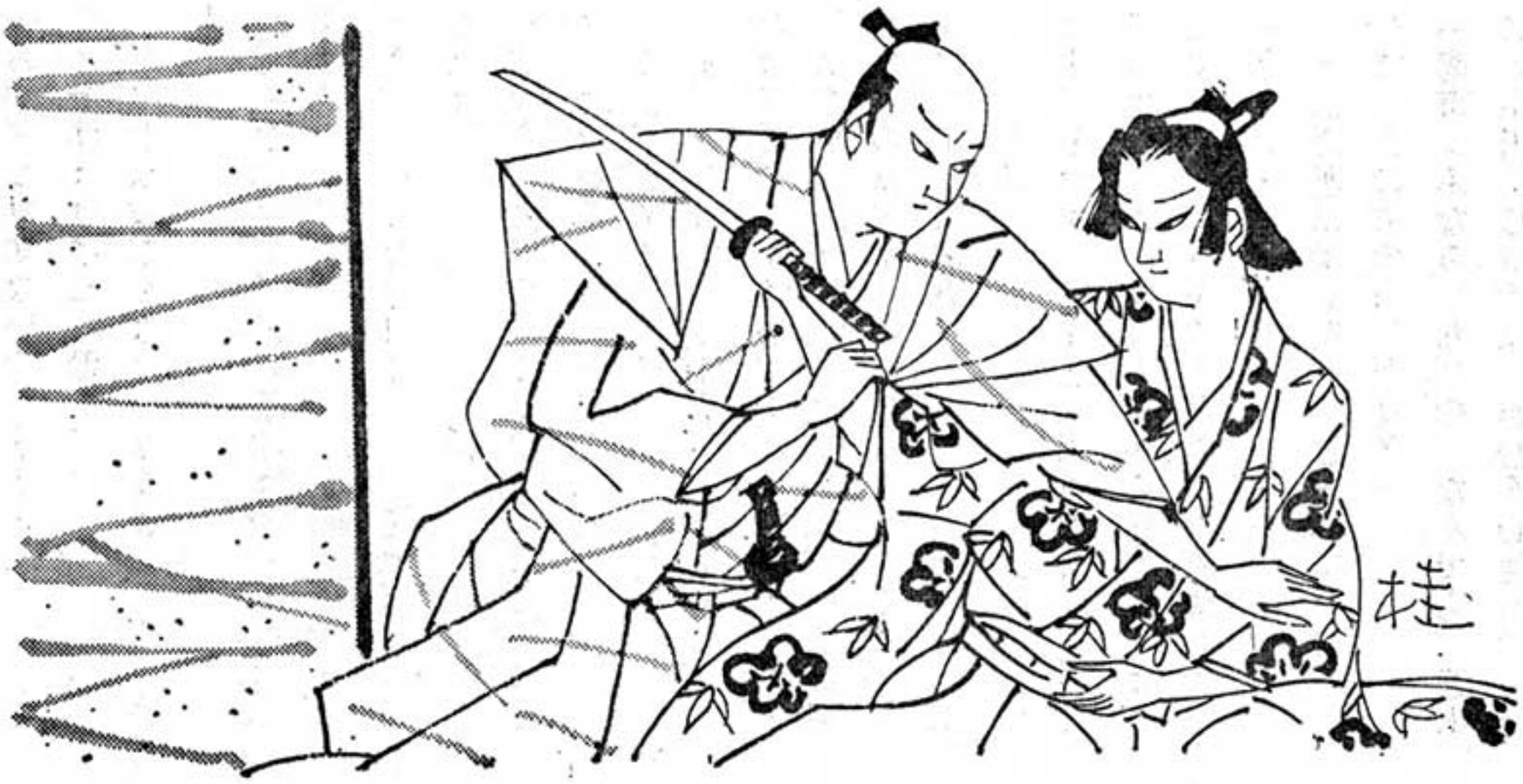
といった。

「はい、いかにも……」

「勘右衛門が最期まで、あなたのことをあれこれとこまかく話しておりましたから、すぐとわかりました」

「で、あなたは？」

「岩藤左内という者です。以後ごじっこんに……」



おとなっぽい調子で言った。眼がいたずらっ児のそれのように、ピカリと光った。

春の遅日もいつしか暮れかかっていた。

「せっかくおいでいただいたのですから、きょうはここへゆっくりと泊っていってくだされ。仏の前で、ふたりで故人の話でもしましょう」

左内は立ちあがって縁にでると、雨戸を繰りはじめた。

勘右衛門の名を敬称なしに呼んでいることといい、この家の勝手を知ったらしいところといい、この若者は彼の身内でもあるのかナ、と三之丞は思った。

座敷に灯をいれると、左内はへやをでていった。

ひとりでぽつねんと坐っていると、三之丞はよけいに悲しくなってきた。

勘右衛門の死を悼むというよりも、人の世がはかなく、たのみがたく思われてきて悲しいのである。

生きているのがつまらない気がした。

——これからまた、わたしに念友ができるかもしれない。そのひとと契りをかわし、逢ったり逢わなかったりする。やがて

元服して、一人前の侍となる。妻をめとって、妻とのあれこれ。……両親のようすをみていると、夫婦のくらしとはさほど楽しいものではないらしい。そのうちにだんだん年をとってきて……それでおわりだ。……つまらない。

人の世のなにもかもが、つまらなく思われてくる。

――このさい、いっそ……

ふいと三之丞は思った。

手が刀の束にかかっていた。しずかに抜いた。燭の灯に刀身が光った。怖いが、なにかひきこまれるような、刀の光り……。

なぜ、武士が易々として切腹するか――そのきもちが、いまはじめてほんとうにわかったような気がした。

ふすまがあいて、左内がはいってきた。跳んできて、三之丞の手をおさえた。

「早まったことなされるナ」

と左内が言った。

「自害してなんになる。死なねばならぬのは、三笠山かなにか引っかかえていたように思っていたのに、おもわくがはずれて、勘右衛門は死んでしまったのです。勘右衛門は最期のとき、自分は遠国他国の者だから、死んだあとも誰も香花を手向けてくれるものはあるまい。だからどうか死なずにいてくれろと、わしに言いました。が、そういわれるまでもなく、わしは死ぬつもりなど、毛頭ありませんでした。まあ、末は坊さんくらいにはなってもいいと思っています。……それにくらべてあなたなど、かりそめに言葉をかわしたくらいとのこと、なんの後を追うことなどありましょう。……さあ、わしのいうことをきいて、危いものは蔵いなされ」

左内はようやく、三之丞の手からは手をはなした。

勘右衛門のあとを追うのではない――と三之丞は言おうとしたが、言えなかった。彼はただうなずいて、刀を鞘に納めた。

小者が夕食の膳をはこんできた。さすがに精進料理だが、徳利がそえてあった。

「さあ、どうぞ……」

と左内は徳利をとりあげて、三之丞のほうへ傾けた。

「いいえ、わたしはまだ酒は……」

「でも、きょうだいの約のしるしに、一杯だけ……」

「きょうだい？」

「そう、なってくれるでしょう？　仏もきっと喜びます」

「はい、それはかまいませぬが……」

「では……」

と三之丞の盃に酒を注ぐと、左内は自分も独酌で杯をかたむけながら、

「勘右衛門となれそめたはじめのころの話をしましょうか」

と言った。

念者は夢に現われる

「勘右衛門は手だれで、上手なやつでしたよ」

と左内は語りはじめた。

「最初に彼と出会ったのは、堺の昌雲寺の庭を、ここに移すことになった日のことです。そのころ、わしはまだ十二歳で、ちょうど寺へ遊びにきていました。

庭の石に腰をかけて、蘇鉄を掘っているのを見物していたのですが、掘ったあとに

水が撒かれ、わしはその撒き水を手にうけて、うしろへぱっと飛ばしたのです。

ところが、そこにひとりの侍が立っていたのです。わしは、しまったと思い、色を失いました。が、侍は顔じゅうを、わしにかけられた水のしずくで光らせながら、ちょうどぬれたいと思っていたおりふしにありがたいと、ニコニコと微笑いながら、わしに言うのです。

ひどく怒られると思っていたのに、そんなふうに言われたので、わしはほっと胸をなでおろすとともに、そのお侍をすっかり好きになってしまいました。

そのお侍が、勘右衛門だったのです。わしは勘右衛門の誘うままに、いっしょにその家へ行き、絵本などみせてもらって遊び、帰りは勘右衛門が、わが家の前まで送ってくれました。

このときの楽しさが忘れられず、また勘右衛門のところへ行ってみたいと思うのですが、高畠のわが家から南市までの遠路はこどもひとりではよう行けません。

すると、二、三日して、わしが家の近くで遊んでると、勘右衛門がプラリと現われたのです。わしは大喜びで彼にとびつき、



自分から連れていってくれと頼み、彼の家のこと）の御番のときをみては、彼のところへ遊びに行ったものでした。

そのときはたしか、勘右衛門は、わしに剣道の初歩を手ほどきしてくれました。それもふつうの師匠のように厳しくなく、わしをおもしろく遊ばせるようにしながら、ていねいに教えてくれました。

あるとき、かならず行くと勘右衛門と約束した晩に、雪が降ってきましたところ、彼はわが家のそばまで迎えにきてくれて、わしを肩車にのせ、雪のなかを歩きだしました。

坊よ、いいものをやろうと勘右衛門は言って、ふところから具足をつけた金平（きんぴら）人形を二ツとりだすと、わしに手渡しました。あなたももちろんご存知であ

ろう、この人形の下に棒が仕掛けてあって、その棒を動かすと、人形の持ってる刀が動きます。

わしは勘右衛門の頭のうえで、二つの人形に斬り合いごとをさせながら、雪のなかもすこしの難儀もなく、彼の家へ行くことができました。

その晩、勘右衛門は馬になってくれ、わしはそのうえに跨って遊びました。よい御大将だゾと言って、彼はほめてくれまして、わた。じつに上手にあいてになって、わしを遊ばせてくれたのです。

一年半ほどのあいだは、そんなたわいのない遊びごとばかりでした。そしてそのあいだにわしは勘右衛門に全く手なずけられてしまっていたのです。

が、手なずけられたことで、わしはすこしも彼を怨んではいないし、もちろん後悔などしておりませぬ。むしろ、両親にほってておかれたわしを、おもしろく遊ばせてくれ、また教えみちびいてくれたことを、彼に感謝しているくらいです」

左内はそれで、勘右衛門についての話を結んだ。勘右衛門と衆道の契りをかわしてからのことは、なぜかひとことも語らなかった。

その話をききいりながら、三之丞はすすめられるままに数杯の盃をかさね、トロリと酔いごこちとなっていた。

夜も更けて、左内と三之丞は、ひとつ衾にはいった。

明けがたちかく、三之丞は夢をみたが、そのなかに勘右衛門が現われた。

「そなたが左内ときょうだいの約を結んだことはうれしい。まさに男雛と男雛の一対と申してよい」

と夢のなかの勘右衛門は、満足そうな微笑を洩らしながら、

「左内も美しいが、そなたはとりわけ美しく、十九万石（筆者注、郡山藩・本多家の禄高のこと）の値うちがある。あの家中にそなたにまさる美童はいないが、ただ郡山風で、鬢つきがさがりすぎ、やぼったい。わしがうまいぐあいにしてやろうか」

「よろしゅうおねがいいたします」

三之丞は鏡の前に坐った。勘右衛門はそのよこに寄りそうように立ちながら、手にしたカミソリを三之丞の月代（さかやき）にあてた。

と思うや、夢はそれで切れてしまったのである。

朝、三之丞が目がさめて、寝乱れ髪をくしけずろうと鏡にむかってみると、夢のなかの勘右衛門が言ったとおり、月代が剃られてあった。

——夢ながら、ふしぎなことがあるものだ。

三之丞は思った。

彼の眠っているうちに、その月代を剃ったひとが、すぐそばにいるとは、こどもの三之丞には智恵がまわらなかったのである。



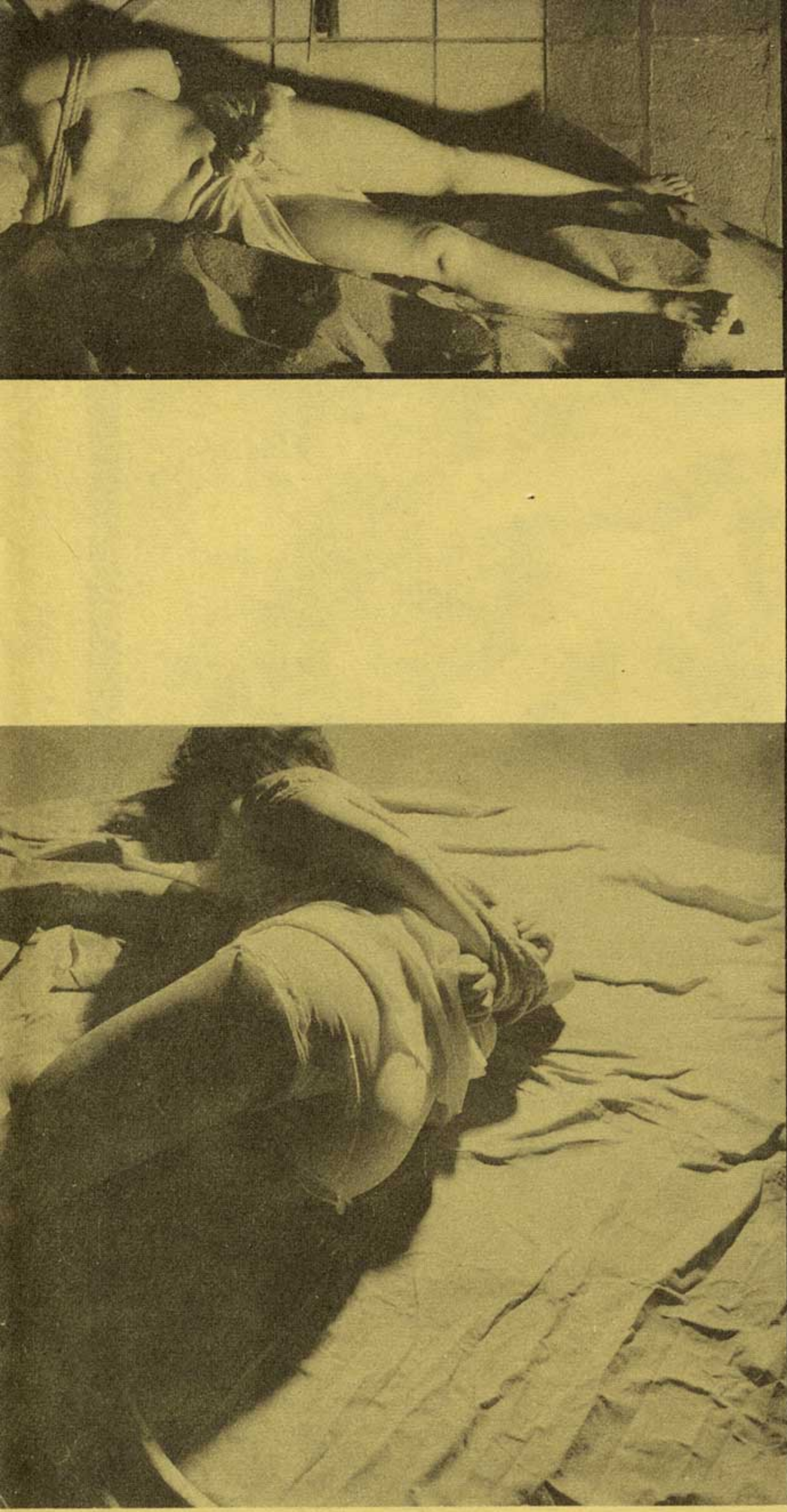
第三話おわり

●モデル・南　ゆり

●カメラ・吉田　久



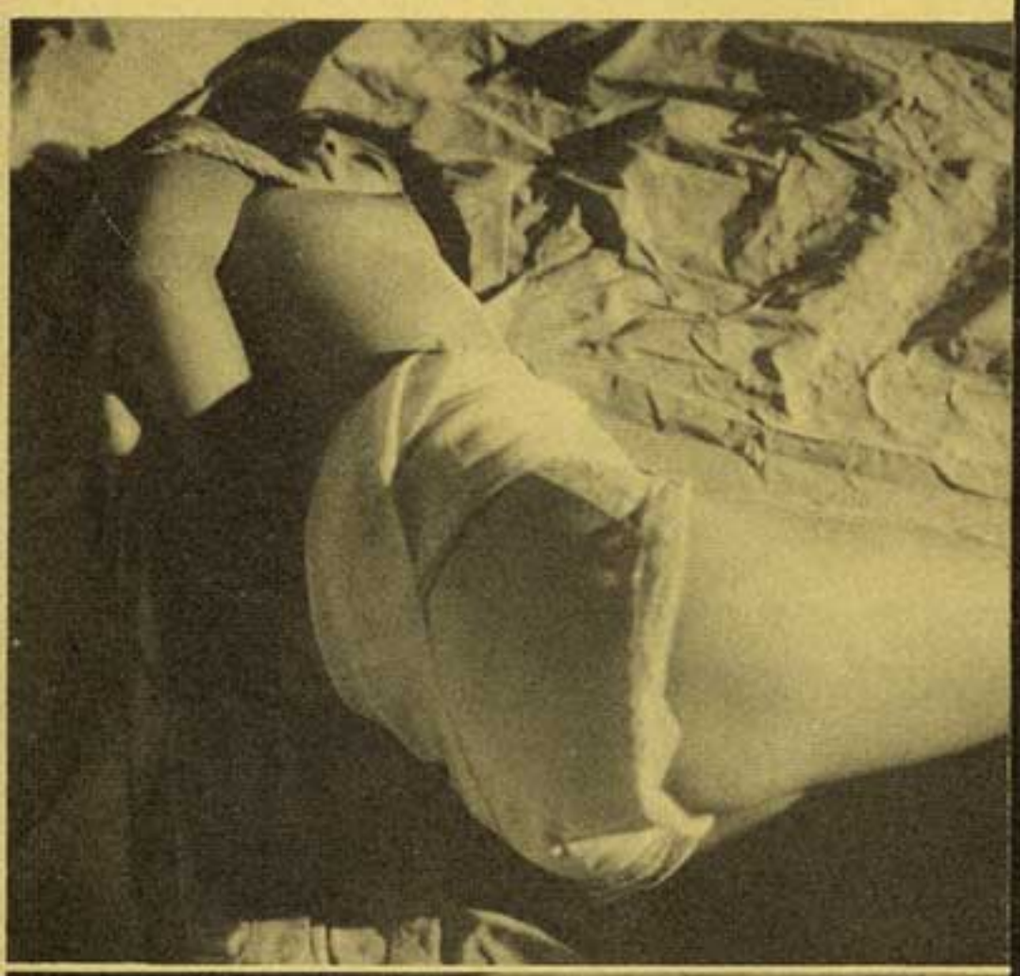
光と影の哀歓















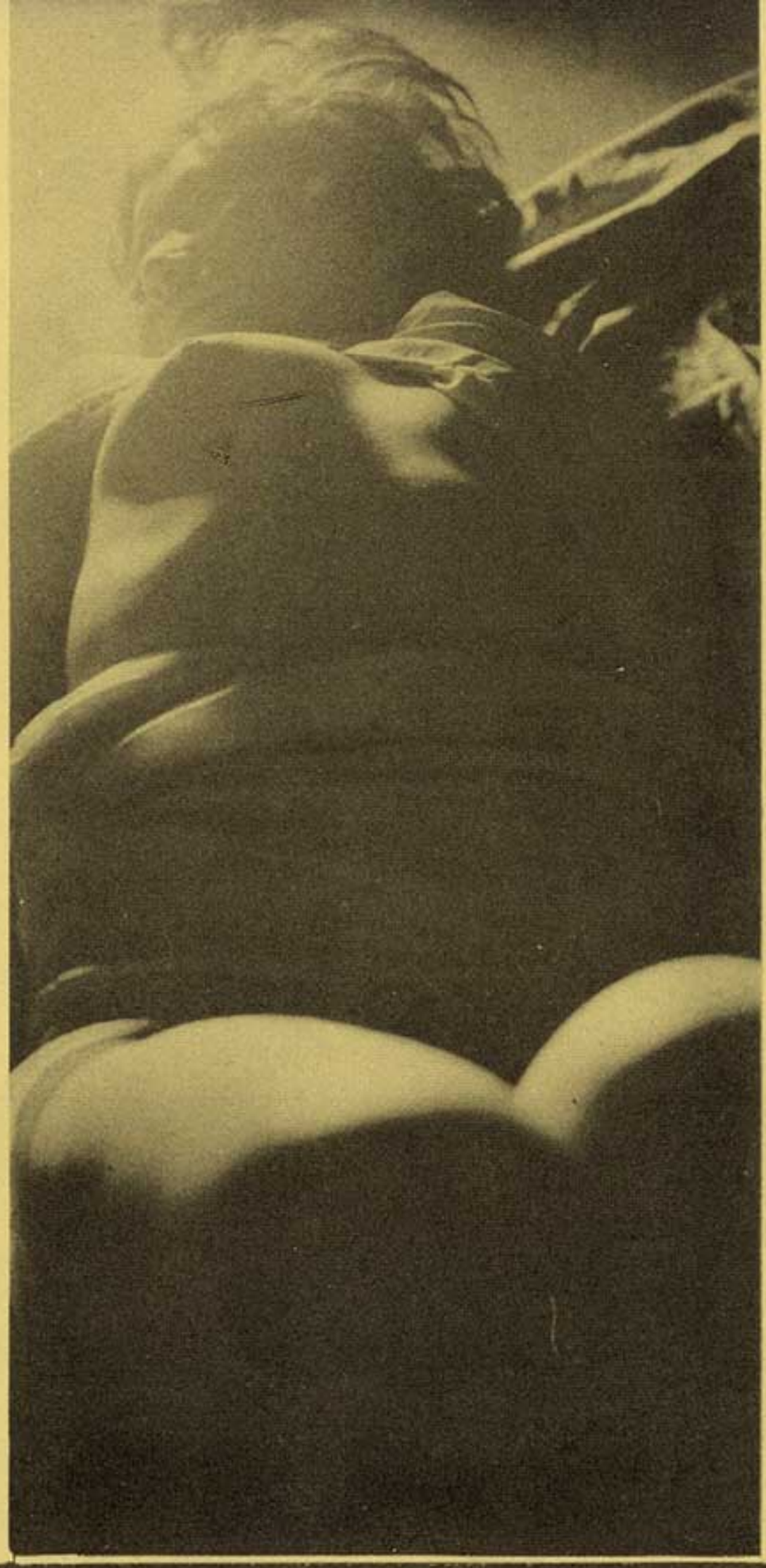












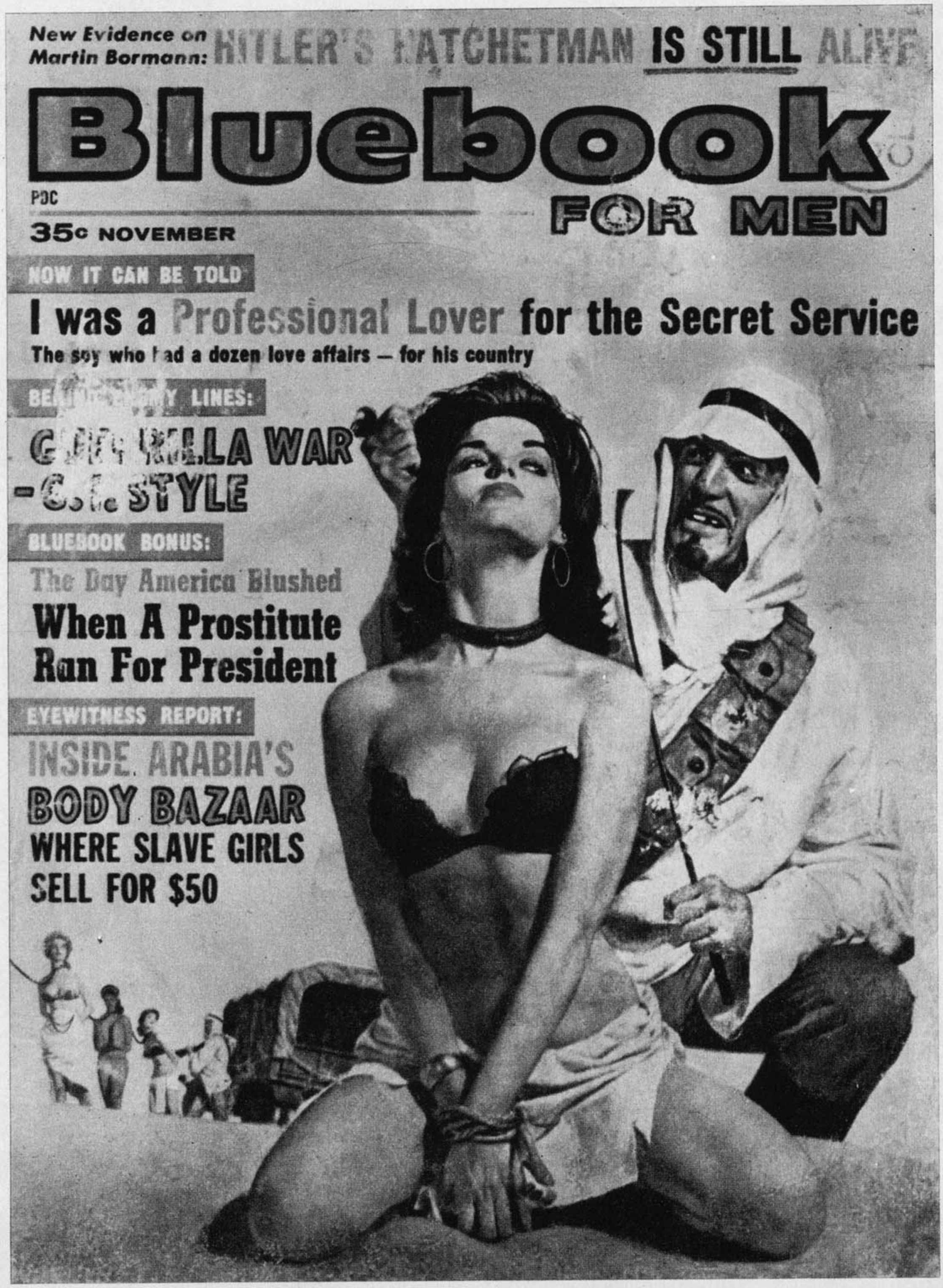


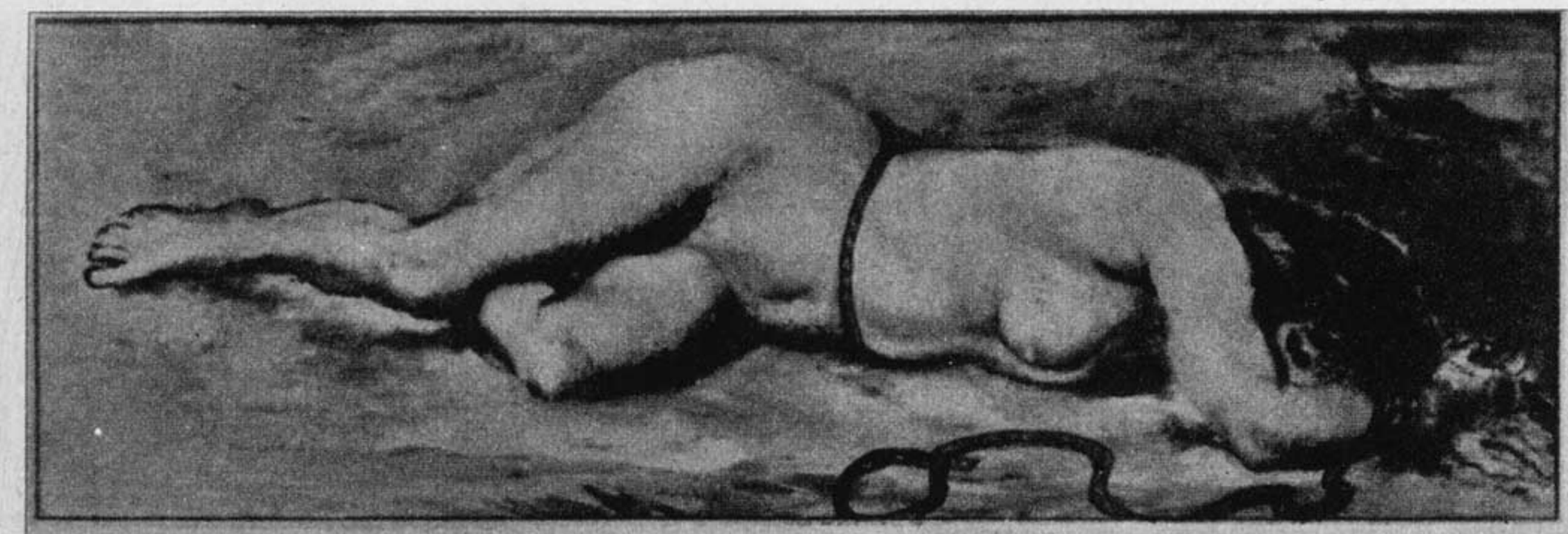


アメリカの公刊誌・ご紹介



BLUEBOOK FOR MEN 誌





EYEWITNESS REPORT:

INSIDE ARABIA'S BODY BAZAAR

YOU CAN STILL BUY A SLAVE GIRL FOR $50.

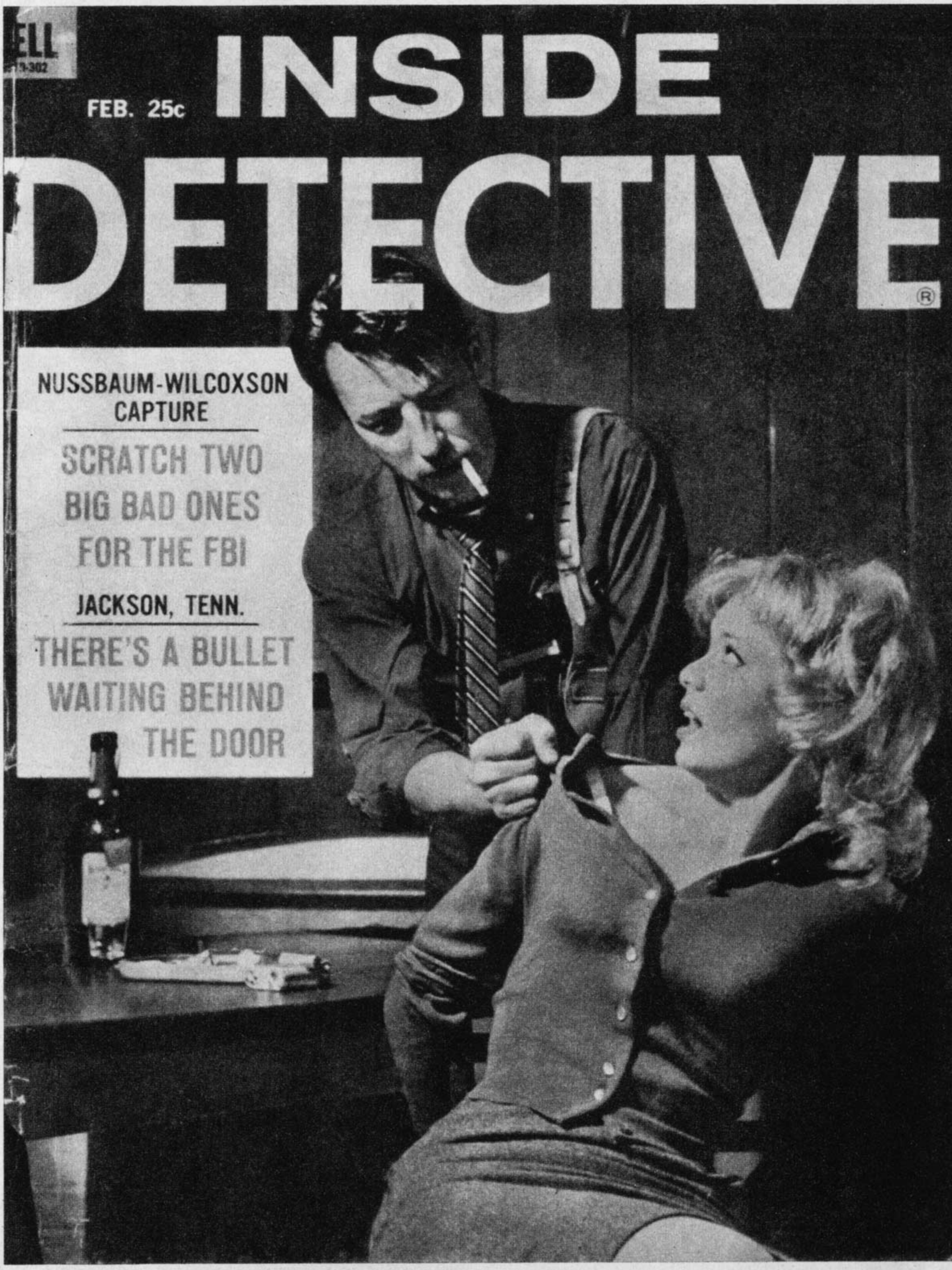
by Leo Heiman

ADVENTURE 誌


WHAT MOST MEN DON'T KNOW
WOMAN'S MOST INTIMATE SECRET—VIRGINITY
ADVENTURE
THE MAN'S MAGAZINE OF EXCITING FICTION AND FACT
AUGUST
STILL ONLY 25¢
TRUE STORIES ABOUT HUMAN VAMPIRES
THEIR HANDS WERE RED
ARE THESE OUR DAUGHTERS?
NIGHT LIFE, U.S.A.
THE DAY BRITAIN'S FINEST PERISHED
"A HELL OF A WAY TO DIE"

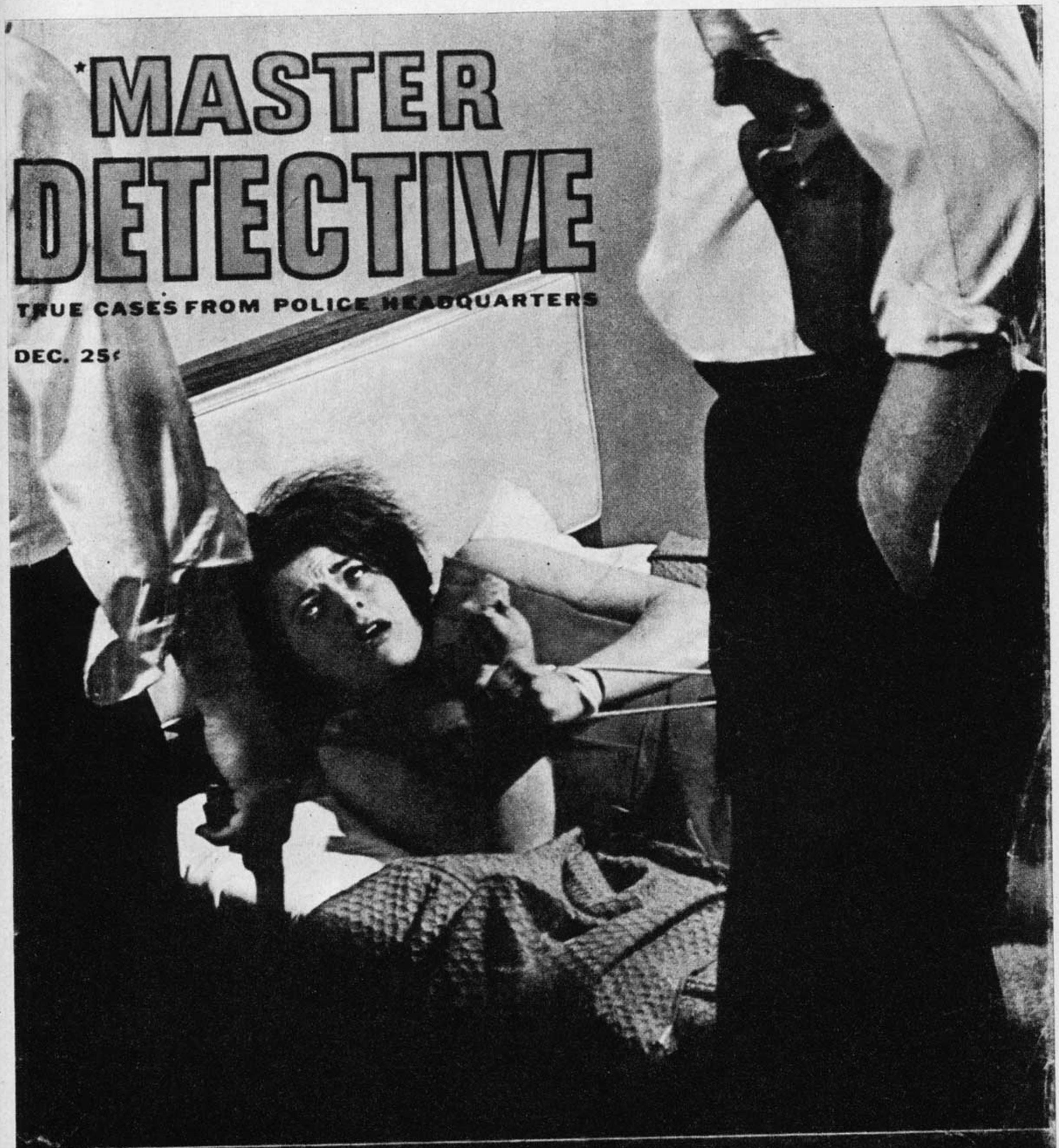


INSIDE DETECTIVE 誌



MASTER

DETECTIVE 誌



WEST COAST LOVERS LANE KILLING
THE DIVORCEE'S FATAL TRYST

MAN'S

COURAGE 誌



DARLING OF HE-MEN

WE CLOBBERED THE CAR HOP CALL GIRL RACKET!

MAN'S COURAGE

OCTOBER 35c

THERE WERE ONLY 12 OF US— AGAINST 5000 NAZI BEASTS!

THE BULL RING BLOOD BATH OF THE BETRAYED MATADOR

Commander Caldwell's SUICIDE SQUAD OF FANTASTIC FROGWOMEN

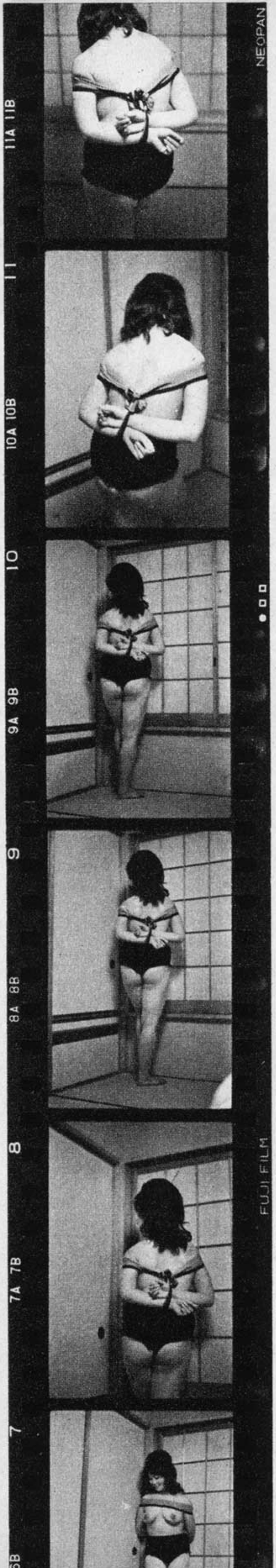
HOW THE FOREIGN LEGION SMASHED THE WHITE BROTHEL IN THE CASBAH!



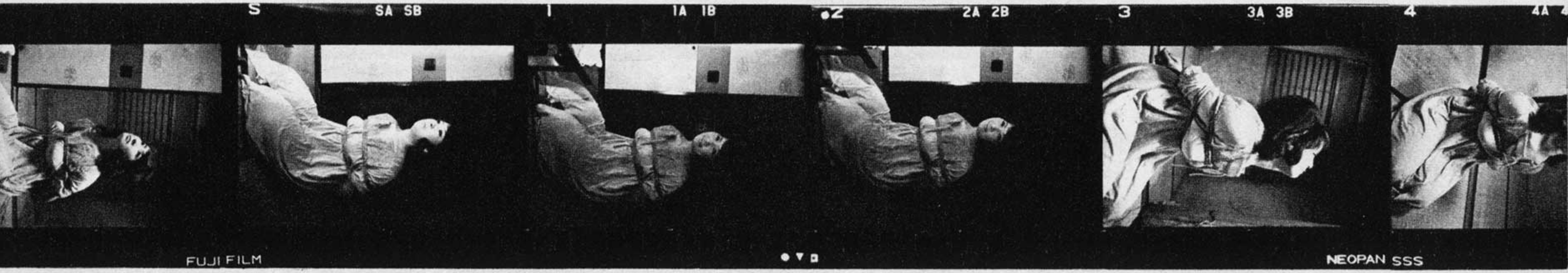
榛名リエ・パレード

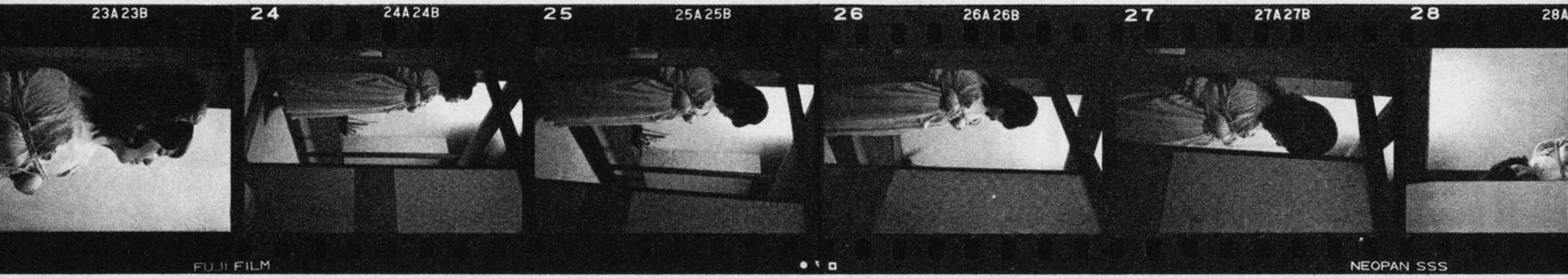
カメラ

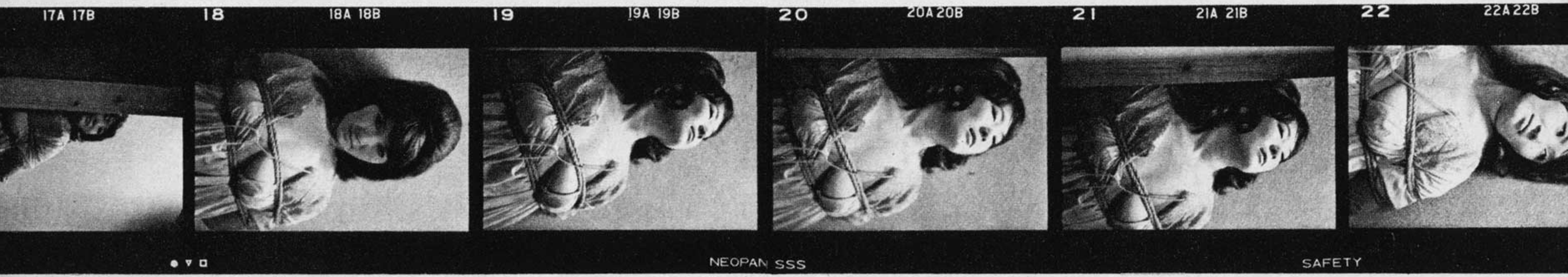
藤沢　修



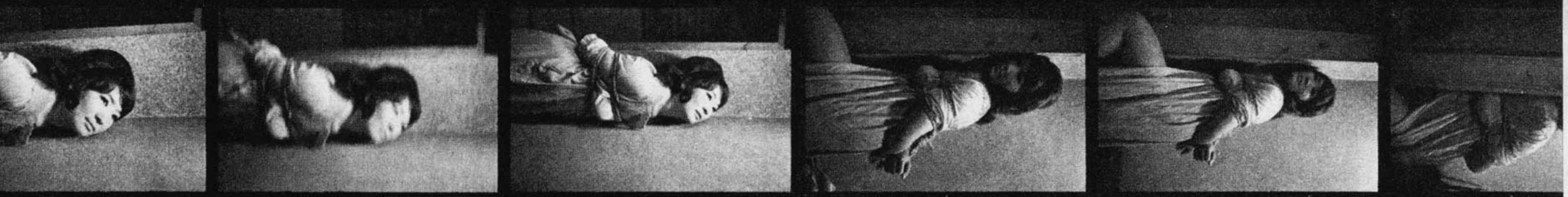



S
SA SB
1
1A 1B
2
2A 2B
3
3A 3B
4
4A
FUJI FILM
NEOPAN SSS


23A 23B
24
24A 24B
25
25A 25B
26
26A 26B
27
27A 27B
28
28A
FUJI FILM
NEOPAN SSS


17A 17B
18
18A 18B
19
19A 19B
20
20A 20B
21
21A 21B
22
22A 22B
NEOPAN SSS
SAFETY

11A 11B 12 12A 12B 13 13A 13B 14 14A 14B 15 15A 15B 16 16A



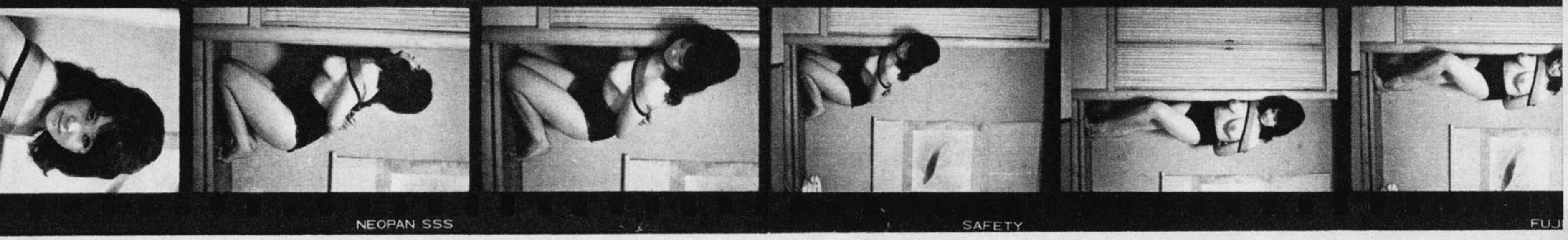
NEOPAN SSS SAFETY FUJI FILM

31 31A 31B 32 32A 32B 33 33A 33B 34 34A 34B 35 35A 35B 36



FUJI FILM NEOPAN SSS

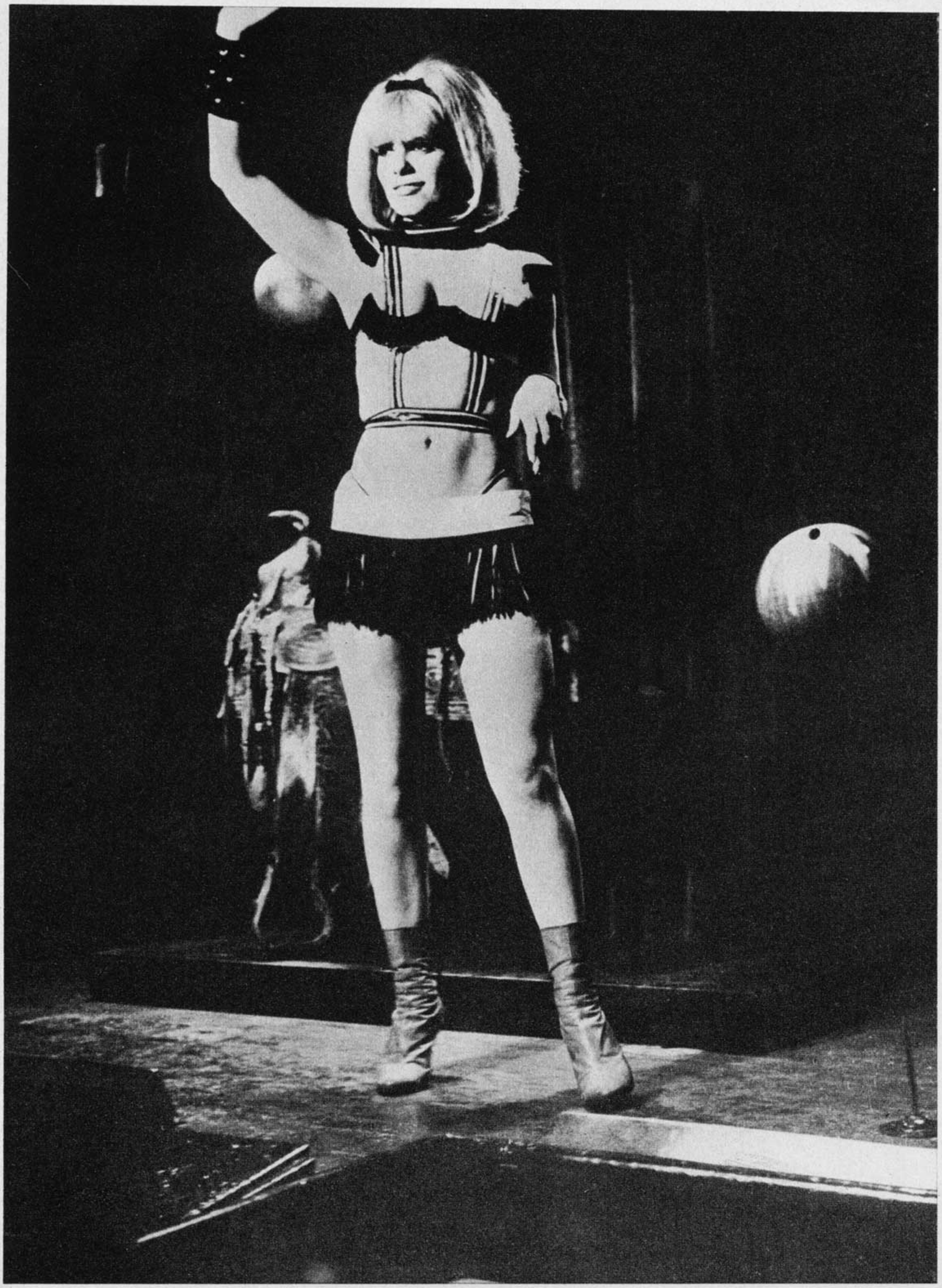
18B 19 19A 19B 20 20A 20B 21 21A 21B 22 22A 22B 23 23A 23B

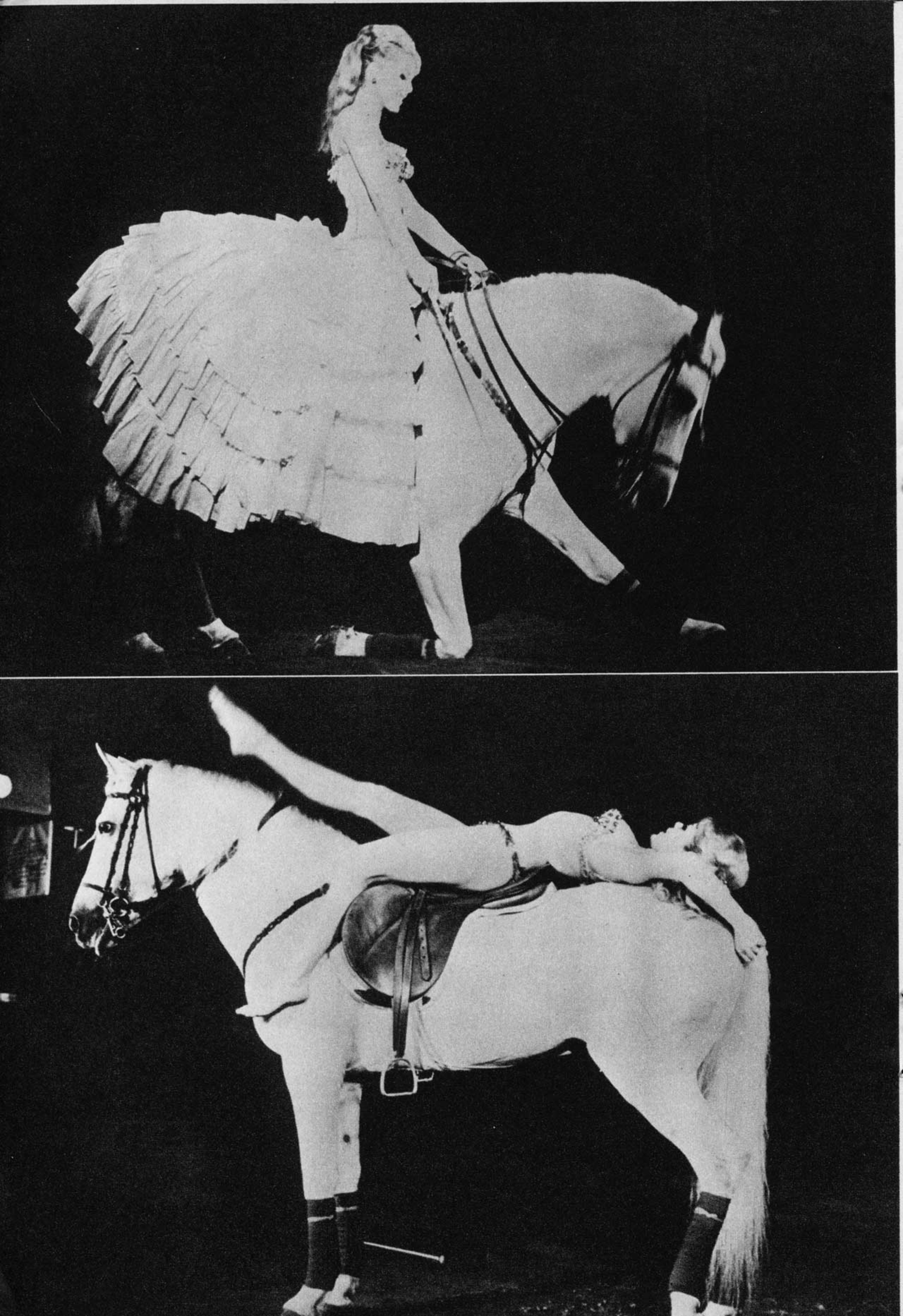


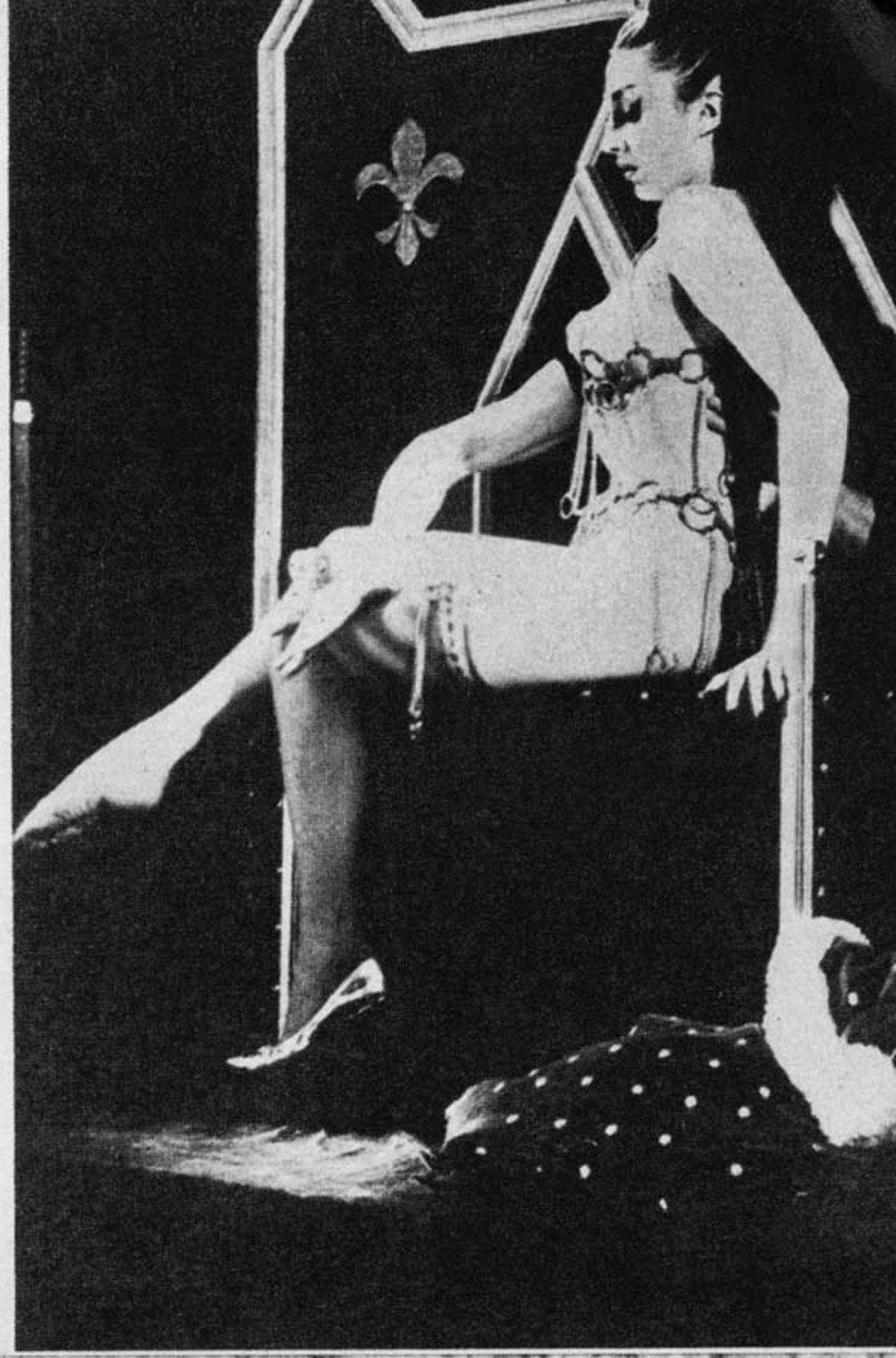
NEOPAN SSS SAFETY FUJ

奢れる女神のポーズ六態









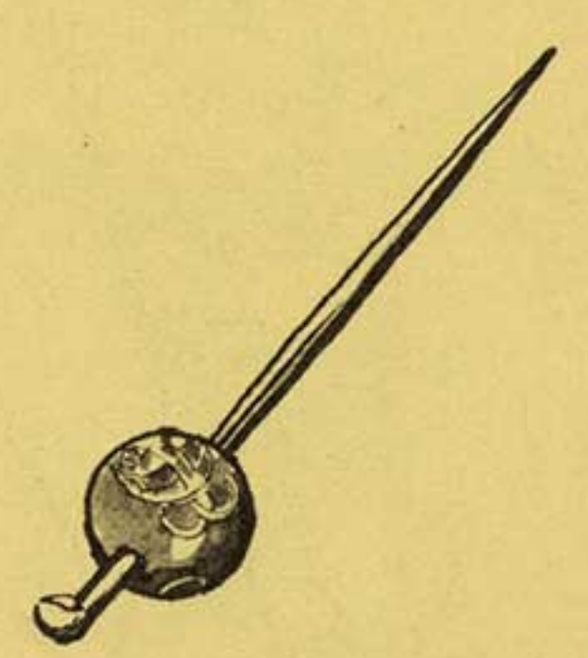




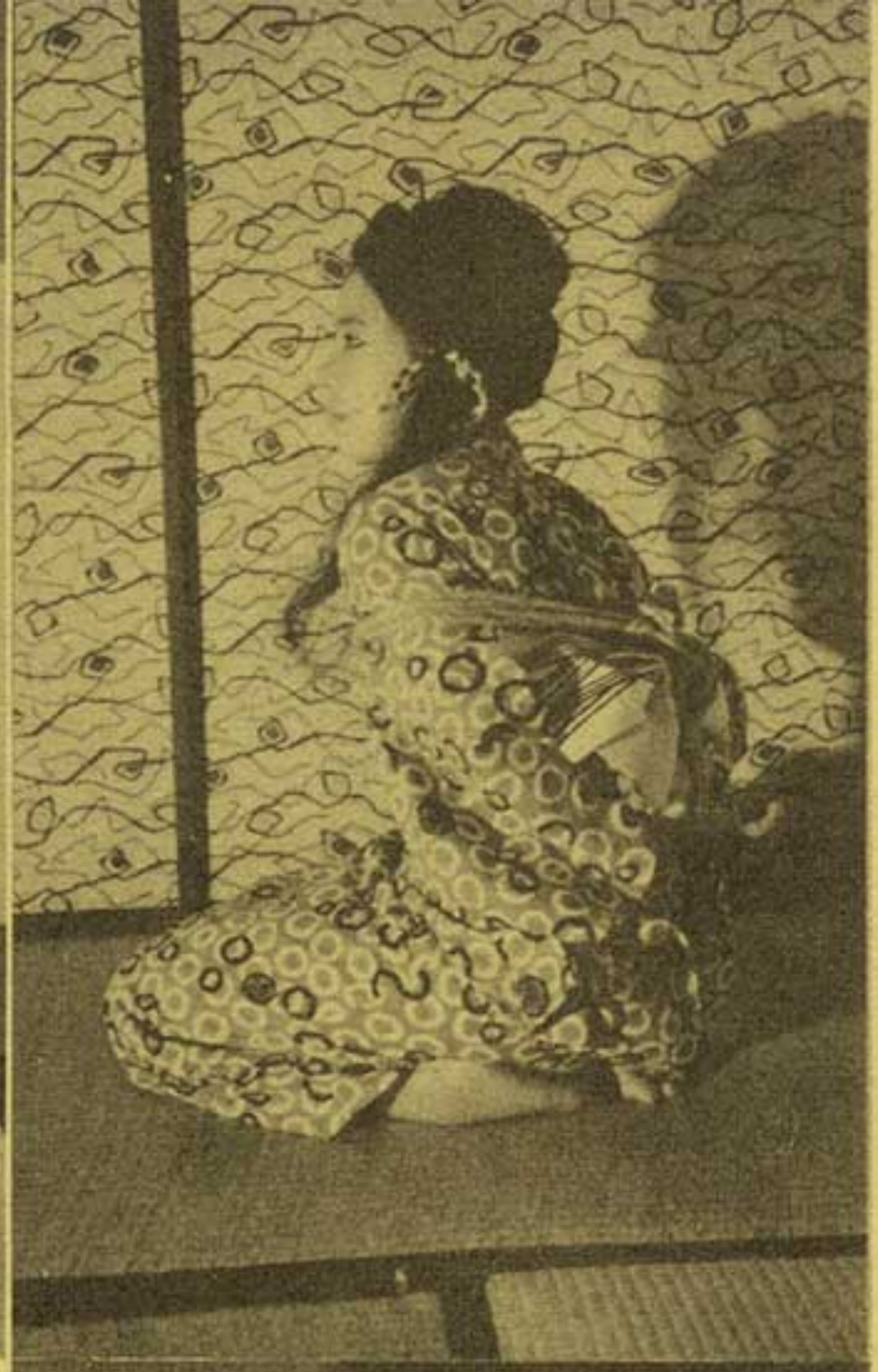


和装絢爛

柚木あぐり／北　好夫







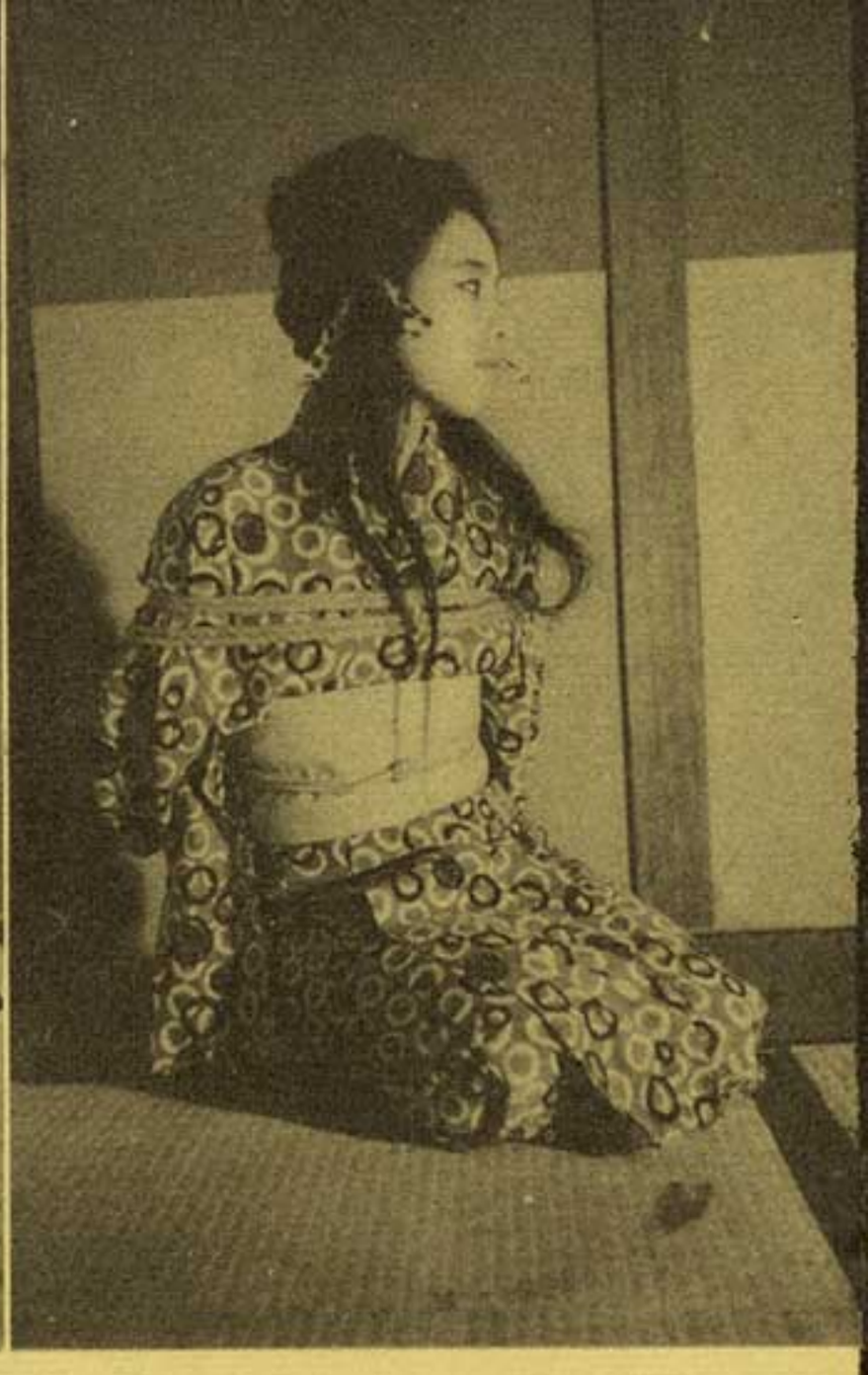




















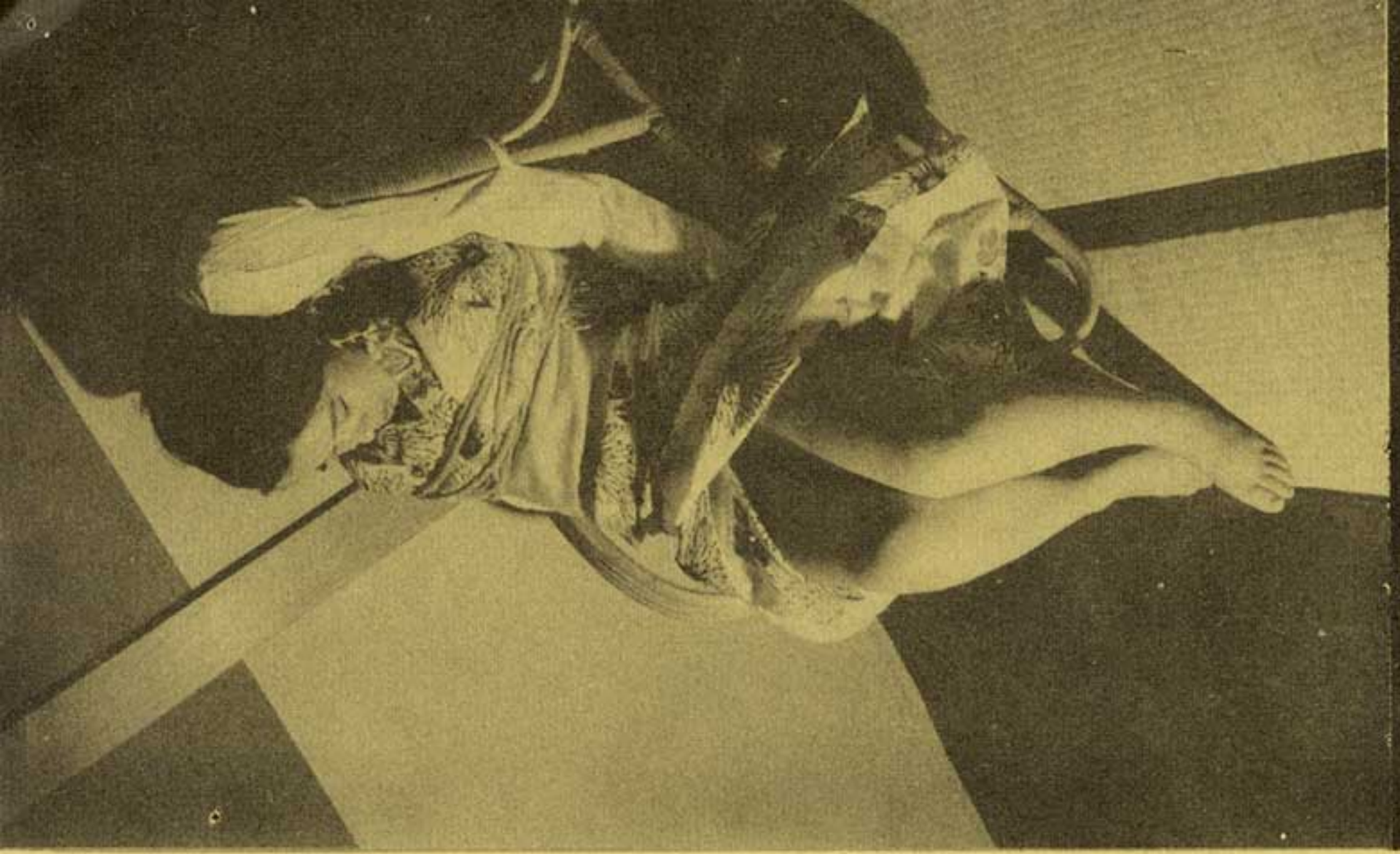


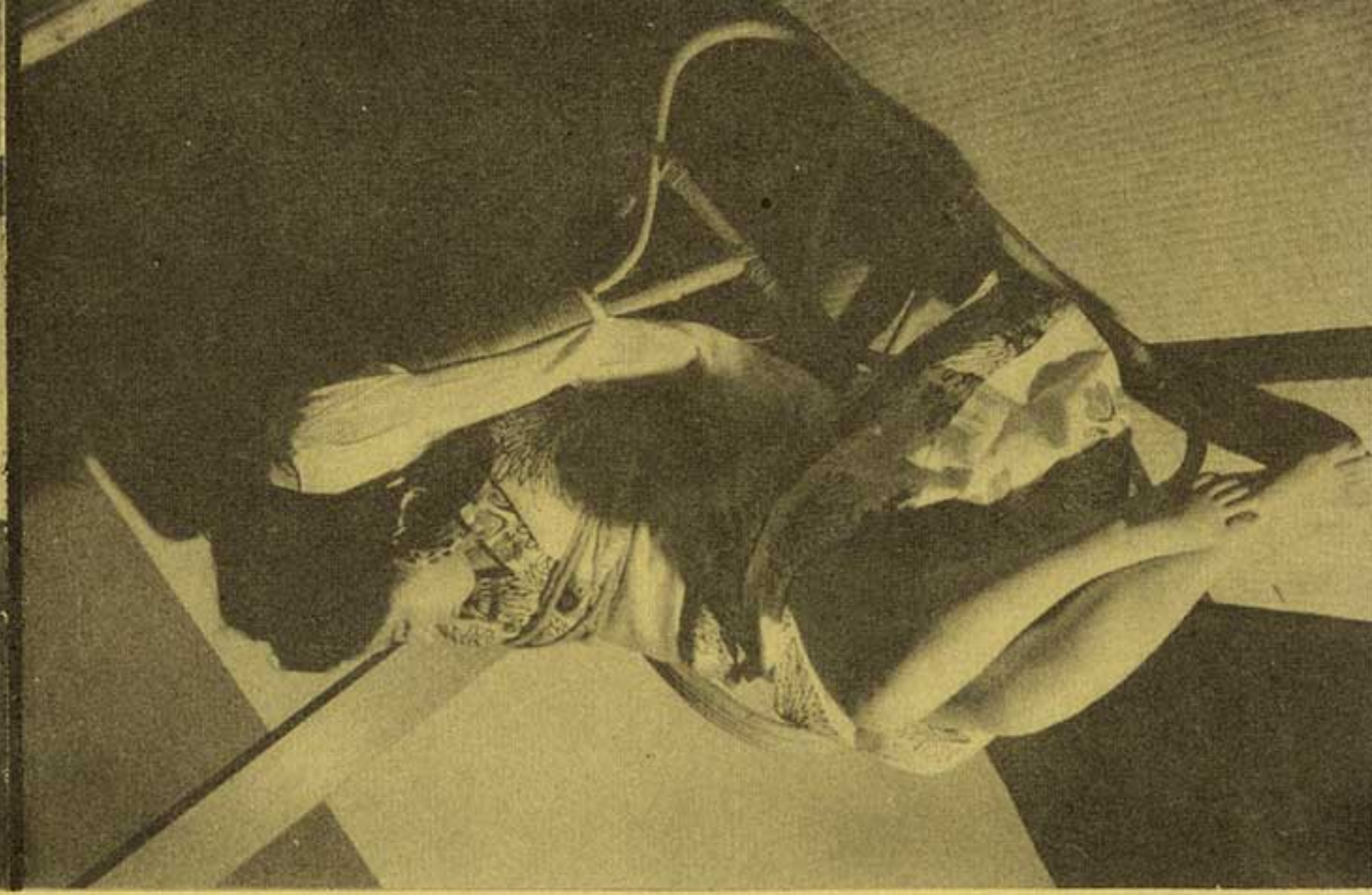
































裏窓タウン



角田久喜雄・著
「まぼろし若衆」

伝奇小説界の大御所ともいうべき、角田喜久雄先生の「まぼろし若衆」上・下巻は、比較的あたらしく出版された長編時代小説である。全編をつらぬくサド的趣向は、当なものである。

講談社発行のロマン・ブックスにおさめられ、上巻が百五十円下巻が百六十円と、お値段もおごろ。

まだお読みにならない方にはご一読をおすすめする。

この小説の特殊性は、時代もくせに、登場するS的悪玉がまことに現代的なS的持論を吐その手段もまた、現代的な責めをすることである。

まず、悪玉侍の、そのS的女観を引用してみよう。

——おふさは逃げたがすぐ追つめられてしまった。

恐しい力だった。おふさの手をつかんでねじあげると、そのま椅子のところまでつれてきた。

もがこうが悶えようが、容赦はない。椅子へかけさせ、後手にねじった両腕を椅子の背のうしろへまわして、おふさの腰からむしりとった細紐で、ぎりぎりくくりつけてしまった。

それでも、おふさは、椅子を背にしょってさえ、逃げようともがく。蔵人は、おちつきはらっていた。悠然と、おふさをおさえつけ更にその腰をさぐって細紐を抜きとった。そのために、着物の前の合せがゆるんで、苦しげに喘いでいるおふさの胸元があらわにのぞいた。

蔵人は、おふさの両足首をくくってから、

「どうだ、動けるかね？」

と、無表情にいった。（中略）

「この世の中には、飼いならすものと飼いならされるものと二種類があるのだ。飼いならすものが利用し、飼いならされるものが利用されるのだ。（中略）わしの飼いならす女は、わしに対しては牙をむき、歯をむくことも忘れはてたあの虎と同じく、自由な心などというものを、更々なくした動物であることを必要とする。ただ虎と犬とでは、毛並も形も吠え声も違うように、様々な個性や、違った媚態をもってわしを楽しませてくれる女であればよい。分ったか、おふささん」

蔵人はゆっくりとコップをとりあげた。

「貴女がいうとおり、これは阿片という悪魔の毒薬だ。しかし、無上の楽園を作り出す神秘な霊薬でもあるのさ。これをのめば、貴女を苦しめている人間の心の動きが安らかに静まって、素直に動物の境地になれるのだ。さア、飲め」

蔵人は、片手でおふさの髪をぐさっとつかみ、その顔を力まかせに仰向けにした。そして、手にしたコップをゆっくりと唇へもってゆく。

「う、う、う、う……」

おふさは喉の奥で鈍くうめきながら、必死に歯をくいしばってい



るが、首のつけ根も折れんばかりこの日本を去ってゆくのだ」

に仰向けにされ、その苦痛と息苦（中略）

しさに、思わず唇はあき、歯がゆ「さァ、犬になれ」

るんだ。（以上は上巻から）と、蔵人はつかんでいた手をひ

「わしは、一度口に出したことはいた。

必ず実行せずにはおかぬ男だ。お菊さまが、よろめくようにの

ふさはわしの犬にする。宝を手めってゆくのを、蔵人は片手でぐ

入れるまでは、大事な人質故にっと肩先を抱いて、

っとしておこうが、犬にするのは「帯をとけ」

それからだ。雌犬にしたてあげといった。ぞっとするような冷

存分に楽しむのはそれからのこ酷な声である。女を女としてもて

だ。あの女が、恋しい亭主のこあそぶのではない。女を犬として

を思って泣き狂いながら、いつあつかう、冷酷無慙ないい方であ

か、己れで己れの着ているもの った。

一枚々々脱ぎすててゆき、素裸「く、薬を……薬を……」

なってわしの足許を這いまわると、お菊さまは、喘いで唯それ

で、じっりく飼いならすその楽だけをいう。

さを、何でむざむざと捨てさっ「餌はやるといっている。その前

よいものか。（中略）やがて、に犬になるのだ。あア帯をとけ」

ふさはわしの雌犬になりきって蔵人の指先が、お菊さまの帯に

まう。わしがおふさを手離し、かかった。それがとけて行く。

等が呼び招いても、絶対にわし「薬を……お願いです。薬を…」

足許から遠ざかることの出来ぬお菊さまの様子は、今己れの身

犬になりきるのだ。わしは、おふに何が起るかということより、唯

さとお菊さまと、得がたい二匹もう薬を求めることにひたすらの

美しい雌犬をひきつれて、やがように見えた。（中略）

帯のゆるんだお菊さまの身体を

蔵人は寝たままに、ぐうッと引き

よせて横抱きにした。

「あっ！」

と、さすがにお菊さまが小さく

叫んだのは、蔵人の手が無慈悲に

その襟元を引きひろげ、胸元へ指

先をさしこもうとしたとたんであ

った。

「ああ……」

お菊さまが、泣くように声をあ

げながら、僅に身を悶えた。それ

が、お菊さまに出来たせめてもの

抵抗だったのであろう。

「犬！」

蔵人は口ぎたなく叱咤した。

「主人にさからうと、ためにならんぞ。あす一日、餌をくれてやらぬからそう思えッ」

「ああ……」

お菊さまは、また、かすかにうめいた。うめいたきり、死んだようにじいっと動かなくなった。

「よし、次第に犬らしく素直になってくる」

蔵人の片腕がお菊さまの背に廻



裏窓タウン

り、その身体を己れの胸元へ固くひきつけた。――（後略）

だいたい、以上のような描写であるが、じっさいはこの倍ぐらい長く、ねばっこい。

ちかごろ、このねばっこさが、とみに減少の気配を示してきた角田先生の、これは最後のS的傑作といっても、よいのではないか。

（伊）

吉行淳之介・著
「浮気のすすめ」

新潮社でさいきん刊行された単行本のなかに、吉行淳之介・著の「浮気のすすめ」という風流ずいすい筆集がある。

通勤の電車内で読むには絶好の本で、読みながら思わずニヤニヤしたり、ときに吹きださずにはいられないほどのおもしろさ。

さすが芥川賞受賞作家の書いたものだけに、ほかに多く出ているわいせつ趣味の風流話なんぞとちがい、軽妙ななかに真実性がありおヘソの裏側をくすぐられる思いがする。

装幀、厚さ、質量のボリウムに比較して、値段も安い。二百二十円。まず、買ってもソンをしない本であろう。

なかで「裏窓」に関係あるとみられる箇所を、すこしばかりひろって、ご紹介してみよう。

――また、ある娼婦の話によると、次のような客もいたそうだ。

その男は、風呂敷包をかかえてやってくる。包を開くと、ハイ・ヒールが出てくる。踵のひどく高く細く尖っている女靴である。彼は裸になって腹這いになり、彼女にその靴を穿かせて、自分の体を踏みつけるように命令するのである。

これは、色情倒錯症のうちのマゾヒズム（被虐症）の一例といえる。専門家の説明によると、フェティシズム（崇物症）も混っているということになる。（中略）

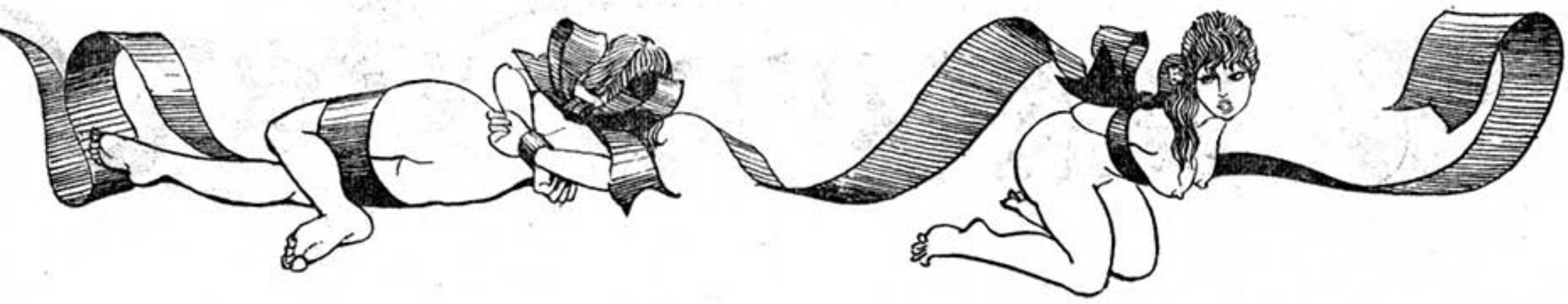
女性の靴、それも踵の高い靴があとして、後者のサディズムの客が、立派な長靴などが具合がよいのだそうだが、それを寝床の中に持ちこんできて、革のにおいをかいだり、脚の間に押しつけたり、愛撫したり、舐めたりすると、欲望が起ってくる。（中略）

マゾヒズムと対蹠的なサディズムについても、娼婦の報告を掲げた文献に、次のようなのがある。

その客は、彼女にまず小鳥や兎を買ってこさせる。そして、ベッドの中で、その小動物を、むりやり彼女に殺させる。頭を切断したり、眼をえぐり出させたり、内臓をつかみ出させたりする。彼女がその命令どおりにすると、満足して沢山金をくれる。そして、彼女には指一本触れないで帰ってゆくという話である。（後略）

おもしろおかしく書かれてあるが、このへんまでくると、本誌の愛読者ならば「オヤ？」と、すぐ首をひねられるにちがいない。

マゾヒズムのところは、まあまあとして、後者のサディズムの客についての話は、まるきり逆なのだ。つまり、この客は、いわゆるサディストではなくて、やはり、



マゾヒストなのである。

どんなに軽い文章を書いても、真実というものをゆがめてはいけないのが、作家というものではないだろうか。それが誤解されやすいテーマであれば、なおのことである。

このゆかいなずい筆集のなかでちょっぴり悲しい後味であった。

文芸内閣の「悪書」談義

河出書房から発行されている月刊純文学誌「文芸」が、三十九年一月号から、新装ポケット版という、お手軽な形になった。

ねだんも、ぐんと安くなって、百二十円。鉄道弘済会の売店でも売っている。

川端康成の長編「ある人の生のなかに」が、五百枚いちどに掲載されていて、文学好きの方には、たしかにお徳用な雑誌になっている。

この五百枚が単行本になったらたちまち、四百円、五百円というねだんがつくのだから、紙質が少少落ちるのさえガマンすれば、じつに安い。

ほかにも、水上勉、丹羽文雄の百枚の小説が載り、松本清張の連載自叙伝「彷徨」もおもしろい。

「文芸内閣誕生」というのが呼びものになっていて「閣僚」は、つぎのとおり。

総理大臣兼大蔵大臣　石川達三
法務大臣　伊藤整
外務大臣　小田実
文部大臣　山本健吉
厚生大臣　水上勉
農林大臣　有馬頼義
通産大臣　安岡章太郎
運輸大臣　阿川弘之
郵政大臣　遠藤周作
労働大臣　平林たい子
建設大臣　武田泰淳
自治大臣　平野謙
国務大臣経企庁長官　荒正人
国務大臣行管庁長官　野間宏
国務大臣防衛庁長官　大江健三郎
国務大臣科技庁長官　奥野健男
内閣官房長官　開高健

一月号はその第一回で、議題は「オリンピック開催」「物価高の対策」「不良出版物と性」というふうになっているが、そこはそれという顔ぶれで、つまり、この一流の「文化人」たちだけに、話題は四方八方にそれ、飛躍して、皮肉な読みものになっている。

そこで「不良出版物と性」についての、各「閣僚」の発言を、このタウン欄に、ピックアップして引用させて頂こうと思う。

少々長くなると思うが、ちかごろ世間をさわがせている、悪書追放運動に関しての、もっとも良識的な（ほんとうは常識にすぎないのだが）意見だと思うので、あえて引用させて頂く次第。

――（略）

石川総理　防衛庁長官、その点はどうですか。減らすわけにはいき

裏窓タウン



ませんか。

大江防衛　次の悪書追放問題と関係があるが、予算は要りませんから、追放した悪書は、全部防衛庁にいただきたい。自衛隊全部に配りたいと思います。僕は日本でいちばん欲望の飢餓状態にあるのが防衛庁だと思います、自衛隊ですね。そこに悪書を全部与えると、個人的に頽廃すると思うのです。性的に、個人的欲望に目ざめるが、サディズムなどを通じて、個人的暴力に目ざめると思う。そうするとアメリカで、十年間大統領になろうと思ってがんばってきたノーマン・メイラーという人がいますが、彼は、人間が個人的欲望に目ざめたときには、集団的破壊活動には参加しなくなると言った。それは正しいと思う。自衛隊の人たちが悪書を読んで、個人的暴力、個人的欲求に目ざめると、クーデターというような集団的暴力は起こさなくなるだろう。たとえば一人の自衛隊員に、自衛隊内でどんな悪書でも読んでいいということにしましょう。

――（中略）

開高長官　では、あと不良雑誌追放問題、これは全日本的に広まっていまして、今年もいよいよ盛んになるであろうかと思われるのですが、主として法務大臣、文部大臣のご関係かと存じますが。

石川総理　そうすると防衛庁長官は、悪書は良書であるという……

大江防衛　個人的欲望を発揮させるためには、できるだけ悪いほどいい。

阿川運輸　なるほど。しかし、自衛隊だけでは片手落ちなので、いわゆる進歩的文化人などにも、同様悪書を配布いたしたいと存じます。それで天下が泰平になるのではないでしょうか。

水上厚生　ときたま自衛隊の外出許可とか休暇とかあるが、こういう時にはどういうことになりますか。

大江防衛　悪書を与えるかわりに、自衛隊内にとじこめておくことにしましょう。

山本文部　いわんや防衛庁に払い下げるということはできないです

伊藤法務　押えることでなくて、裁判に付することはできます。ただ発禁とか、差押えとか、押収とかはできないのです。

山本文部　悪書を追放して、いまつまり防衛庁によこせというわけですね。

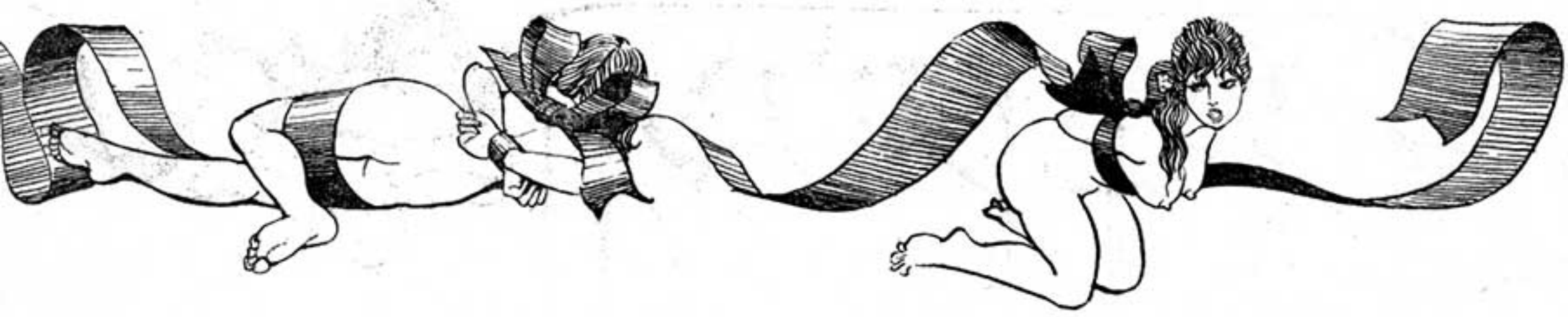
大江防衛　はあ。

山本文部　没収する断を下すのは法務大臣か。

伊藤法務　それは憲法の禁ずるところだからね。

山本文部　憲法改正するか（笑）

石川総理　そう飛躍しちゃ、いかん。やはりいまでも警察、あるいは検察庁が、これはいかんということになれば、押えることができる法律があるだろう。



ね。

伊藤法務　それは悪書かどうかということも問題だね。第一、私自身が訳書のことで、前に被告であったことがあるのです（笑）。いまのところは趣味の悪い雑誌を、悪い雑誌と言っている。それをいままでの判例でいうと、趣味ということは入ってこなくて、趣味がいいと思われている雑誌のなかでも、いまの基準で悪質と言われているものは、そうとうあるわけです。それから学術の図書、雑誌、純粋の文学作品のなかにも当然あるわけです。だから、いまのような基準で、巷の御婦人たちが気に入らないから、これは悪書だときめるということは、私は非常に危険ではないかと思うのです。現在までの段階では、だいたい当法務大臣においても、無理もないというようなものに対しての非難が起こっているのですけれども、それがあまり御婦人たちが自信を強くしすぎて、法務大臣自身が訳した本も、やはりだめじゃないかということになってくると（笑）、非常にさしさわりが起きてきまして……。実はこの法務大臣が、昔訳して、日本で最高裁判までいきまして有罪になった訳書は、この二三年間にアメリカでもイギリスでも公判されるような都合になってくるのではないかと思うのです。もしこの本がいままた訳されて、日本の社会に流布されることになったら、これは多分悪書の一つとして追放されることになるのではないかと思っているのです。そういう点についての、いろいろ気がかりなことがあるものですから、いまの悪書追放というものは、それ自体では是認すべき運動だと思いますけれども、その限界ということを一つ心得なければいけないのではないかと申し上げるわけですが。

平野自治　いまやられている悪書など見た……？

伊藤法務　見なくても、だいたい……僕しょっちゅう読んでるよ。

山本文部　しかしちょっと見ましたところ、どの程度に害を及ぼしているかということは、データとして出てこないでしょう。

石川総理　実に愚劣……

山本文部　愚劣は愚劣だけれどもね。

開高長官　しかし、法務、文部両大臣の年齢や血液の分量も問題になってくるのではないかと思うのです。私は戦争中、中学生で、食う物も食わず、豆かすに水を飲んで働いてほとんど栄養失調にあったが、それでも疎開で出てきた荷物のなかの、バルビュッスの「地獄」というような本を読んで、カッカッとなりまして、戦後完訳の本を読みましたけれども、どうということはないが、〇〇〇××××とありますと、全身血がたぎって困ったのですが。

山本文部　血がたぎって、なにか行動に出ようというあれがあったですか。

開高長官　ええ、単独行動に出た（笑）。

山本文部　結果はよかったの。社会の道義に反したか、反しなかっ



たか。

開高長官　そうですね、私自身モラルがないので、そのころ困っておったのですけれども、戦後、大岡昇平さんのお書きになったものを見ると、少年期に単独行動の経験をくり返して、これを罪だと思ったのは、快楽であったからであるという分析をしているが、私も快楽を感じたので、それを罪だというふうな意識にいくらか感じたが、いまはそういうコンプレックスはぜんぜんないのですが。

荒経企　途中ですが、非常に悪書とか不良雑誌ですか、そのこと自身がちょっとおかしいのですが、それはそれといたしまして、かりに括弧づきで使うとして、その悪書というものがなにか悪い影響を与えるというのは、これはぜんぜん間違いなんです。悪書というものはなんにも悪い影響を与えないということは、いろいろな接点から最近証明されまして、そのいい例が、東京の練監の少年鑑別所の所長が言っているのですが、悪書を読めば、油の上に火が注がれるというわけです。不良になるのは、悪書のためになるのではなくて、不良になったのが悪書を読むということです。そのへんどうでしょうか。官房長官は、すでになっていたために（笑）カッカッとなったのか、そのへんはいろいろ研究の余地があるけれども、これはしかし林髞さんも言っていますが、やはりそういう素質があるのが読めばなるだけのことで、東京大学教育学部の先生も言っていますが、ぜんぜんそういうことはないのです。アメリカから出た膨大な報告書にしても、影響はまずないというのが出ている。こういう学問的成果に対しては、いかがお考えでございましょうか。

開高長官　まあ最初の動機といたしましては、はなはだ疑惑の多いところかと思うのですが、練監プルースになったから悪書を読んだ例が多いという、いまご説明があったのですけれども、そういう素質がある上に、その上悪書を読めば、油の上に火が注がれるというわけです。不良になるのは、悪書のためになるのではなくて、不良になったのが悪書を読むということです。そのへんどうでしょうか。官房長官は、すでになっていたために（笑）カッカッとなったのか、そのへんはいろいろ研究の余地があるけれども、これはしかし林髞さんも言っていますが、やはりそういう素質があるのが読めばなるだけのことで、東京大学教育学部の先生も言っていますが、ぜんぜんそういうことはないのです。アメリカから出た膨大な報告書にしても、影響はまずないというのが出ている。こういう学問的成果に対しては、いかがお考えでございましょうか。

開高長官　まあ最初の動機といたしましては、はなはだ疑惑の多いところかと思うのですが、練監プルースになったから悪書を読んだ例が多いという、いまご説明があったのですけれども、そういう素質がある上に、その上悪書を読めば、油の上に火が注がれるというわけです。不良になるのは、悪書のためになるのではなくて、不良になったのが悪書を読むということです。そのへんどうでしょうか。官房長官は、すでになっていたために（笑）カッカッとなったのか、そのへんはいろいろ研究の余地があるけれども、これはしかし林髞さんも言っていますが、やはりそういう素質があるのが読めばなるだけのことで、東京大学教育学部の先生も言っていますが、ぜんぜんそういうことはないのです。アメリカから出た膨大な報告書にしても、影響はまずないというのが出ている。こういう学問的成果に対しては、いかがお考えでございましょうか。

荒経企　なるほど。

開高長官　こちらのほうは、下部構造に影響してくるのではないかと思うのです。

荒経企　それはあると思いますがね。しかし、探偵小説を読んだからといって、人殺しをするというようなものではないからね。

開高長官　探偵小説は頭脳労働でございまして、前頭葉を使う知的な作業ではないかと思うのです。

荒経企　なるほど。

開高長官　こちらのほうは、下部構造に影響してくるのではないか（笑）。

遠藤郵政　だけれどもそれをなくしたら、年齢的にエネルギーのあるときには、そこへタンコブが出なかったらこっちへ出るし、だから読み方一つでなるから、同じことですよ。

伊藤法務　つまり悪書というものは、私どもの裁判のときも、悪書は、露骨な表現は人を悪にかりたてるだろうかというケースも調べたのですけれども、どうもそうい



うことは関係はないという結論になったのです。それから私の訳した本については、読者のアンケートでも、学者がそれをやったのですが、この本は刺激を与えるけれども清潔であると、結論的にはそういうことになったのです。なんというのですか、いろいろあるでしょうけれども、いったい教育の面から言いましても、だれかがどこかで性教育をしなければならないわけですね。

――（中略）

伊藤法務　それから官房長官も言ったが、本能のなかには悪と解釈されなければならないものがあると思います。悪と解釈することによって、これを享楽するところがじゅうぶんにあるので、それを悪だから締め出すということは、人類の自殺だというふうにとることができるのではないか。この点は悪とはなんぞやという問題になるわけですよ。平林大臣いかがですか。

平林労働　私は現在、マスコミと青少年問題懇談会という、それの委員なのです。二回ばかり出まして、いろいろな人がきて、話を聞きましたけれども、私の考えではいわゆる悪書という、悪という言葉の意味はわからないのですけれども、ただいまおっしゃったようなことについてはとにかくとしてこういう本を汽車のなかなんかで紳士が持っているということは、あまり品がよくないことだと思います。

伊藤法務　そうです。

平林労働　だからその点で、発行してもいいが、あまりあらわれないようにしてもらいたいとは思うのです。それだけのことですが。

山本文部　私も中学生時代に、同級生がこっそりエロ本猥本のたぐいを持ってくると、みな学校の片すみなんかに行って、顔つき合わせて読んだりして、やはりそういうときには、まあ官房長官がおっしゃるように、そうとうカッカッといくわけですね。それが害悪があったかというと、べつにないのです。当然これは、そういったような素質というものは、万人が持っているので。それを悪というなら、人間全部が悪の素質を持っているわけですよ。私はそういう教育を受けなかったとしたら、ただいまおっしゃったように売春廃止問題と関連してくるのですけれども、あれはやはり公然としてはいけないという面もあるでしょうが、性教育の機関でもあったのですね。そういうものがいまぜんぜんないわけです。こういう本でしか、いまの青年が性教育を受けないということは、僕は気の毒に思う。

遠藤郵政　だいたい文学とか本とかいうのは、みな世間は重視し過ぎているんじゃないか。あまり文学とか本は影響ないと思います。

荒経企　自衛隊にやっても、効果があるだろうかどうかということ……

山本文部　効果があるか、どうか。それより大江大臣の小説のほうが……

裏窓タウン



野間行管　大江大臣の良書をね……り発言して悪いが、「チャタレイ夫人の恋人」がイギリスで最近になって流布されると決定したときに、三十数人の宣教師とか、教師とか、お母さんとか、大学生が集まって、全部これは道徳的に有用な本であるということで、許可になったわけでありますが、「チャタレイ夫人の恋人」というものを、また政府で、文部省で流布する必要があるのではないかと、私はそういうふうに思いますが、いかがですか。

石川総理　なるほど。文部大臣困ったな。

山本文部　私は、そういうものは政府がやらないで、民間にやらせたほうがいいと思う。こういうものを統制するということも民間でやっているわけでしょう、山梨県ではじまって……民間で自発的にやる場合、やるということを統制する必要はない。たとえば山梨県の小売業組合ですか、あそこからはじまって、そうとう飛び火をした。それも彼らの責任においてやっているわけです。それに対して**石川総理**　悪書から影響を受けない人とやはり悪い影響を受ける少数の人間もいるんじゃないか。

奥野科技　そういうのは文学愛好家ではない。

石川総理　ここに集まっている各大臣は優秀な人種であるから、こういうものからは悪い影響を受けないが、受ける少数の人間がおって、それが問題にされるのではないか。

伊藤法務　悪書といっても、ある種の小劇場と同じようなもので、たいしたものではないと思う。ただ人の見ているところで平気でこういうものを開く神経がおかしいというだけで、概念の行儀だけの問題だと思います。

石川総理　そうすると、こういう露骨詳細ばかりの雑誌を黙認、あるいはこっそりでも発行させるよりも、懇切な、そして指導的な要素を持った本を政府が発行したらどうですか。

伊藤法務　だから、法務大臣ばかりでなく、PTA的な考え方というのは、だいぶ毒している面があるのだが、PTAというものを、文部省としては廃止したいということを考えている（笑）。

石川総理　これは大問題だから、PTA廃止論はこの次にやろう。

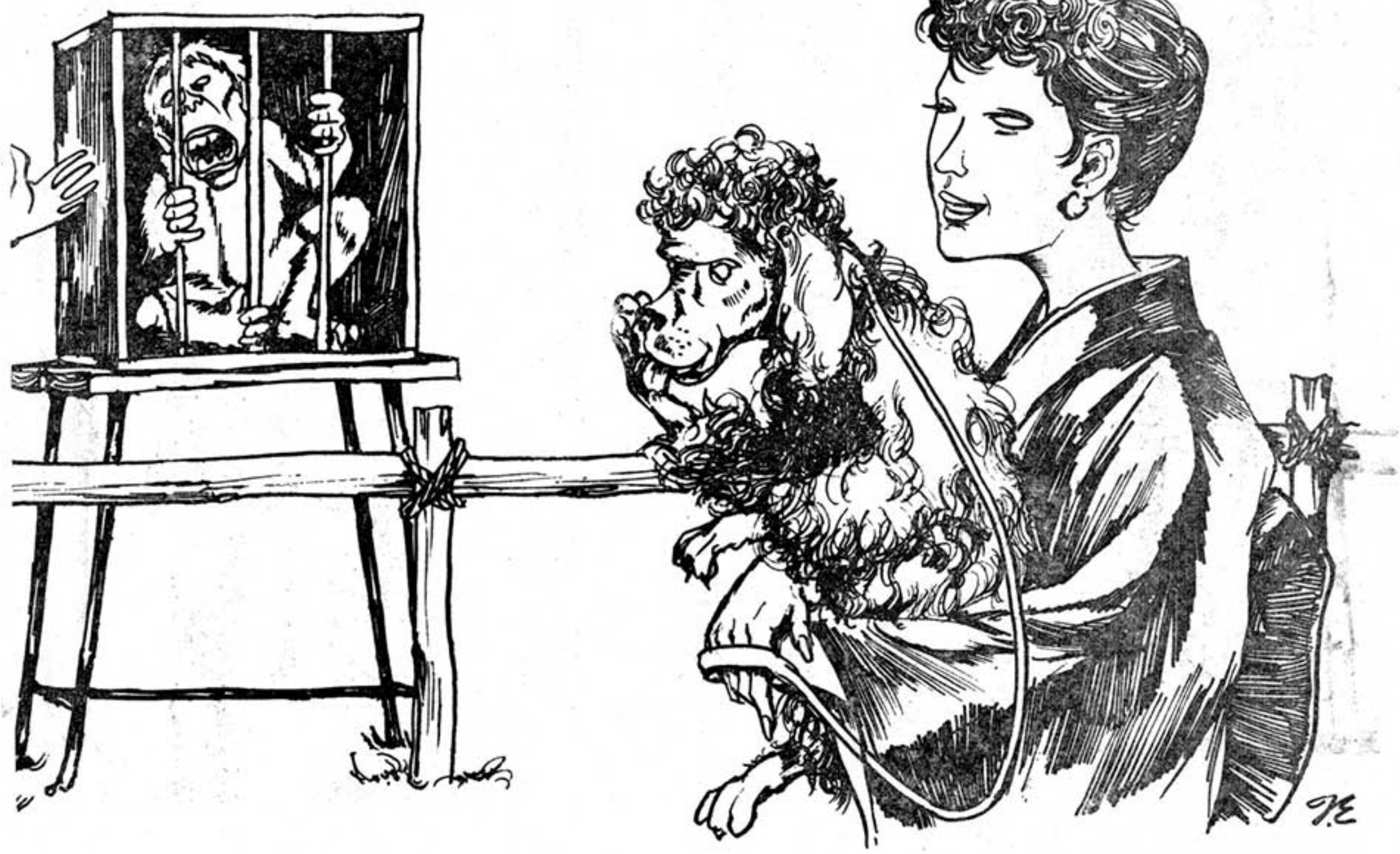
開高長官　自治大臣どうですか。両大臣の提案は……

平野自治　だいたい賛成ですよ。ことに法務大臣の発言は、実に私小説的で非常によかったと思う。

伊藤法務　どうもありがとう。

――（後略）

というような調子で、議題はこのさきまた脱線して、売春制度復活案なども大まじめにとびだす。



1

不具者を見世物に供するということは、現在ではいかなる目的のものにしろ、固く禁じられている、このごろではもう、どこに行っても、このような見世物を見ることはできない。

ぼくが子どものころは、不具者の見世物がたくさんあった。ちょっとしたお祭でもあると、サーカスのジンタの音と共に、必ずあやしげな見世物小屋が一軒か二軒、ときには、数軒並んで立った。

「花ちゃんやーい」

呼び込みのおじさんが声をかけると、ろくろ首の女、一寸法師、あるいはからだが犬で手足がサルだとかの男や女が、一種哀調のある返事をした。こういう見世物は、中にはかなりインチキなごまかしもあったのであろうが、大半、そういう本物の不具者が、全国から相当あくどい手段で集められて、多くの観客の見世物に供された。もちろん児童憲章なんぞ、なかった時代である。

戦後、新憲法下の日本では、そういう不具者を、衆目にさらして見世物に供するなぞという蛮行は行なわれなくなった。

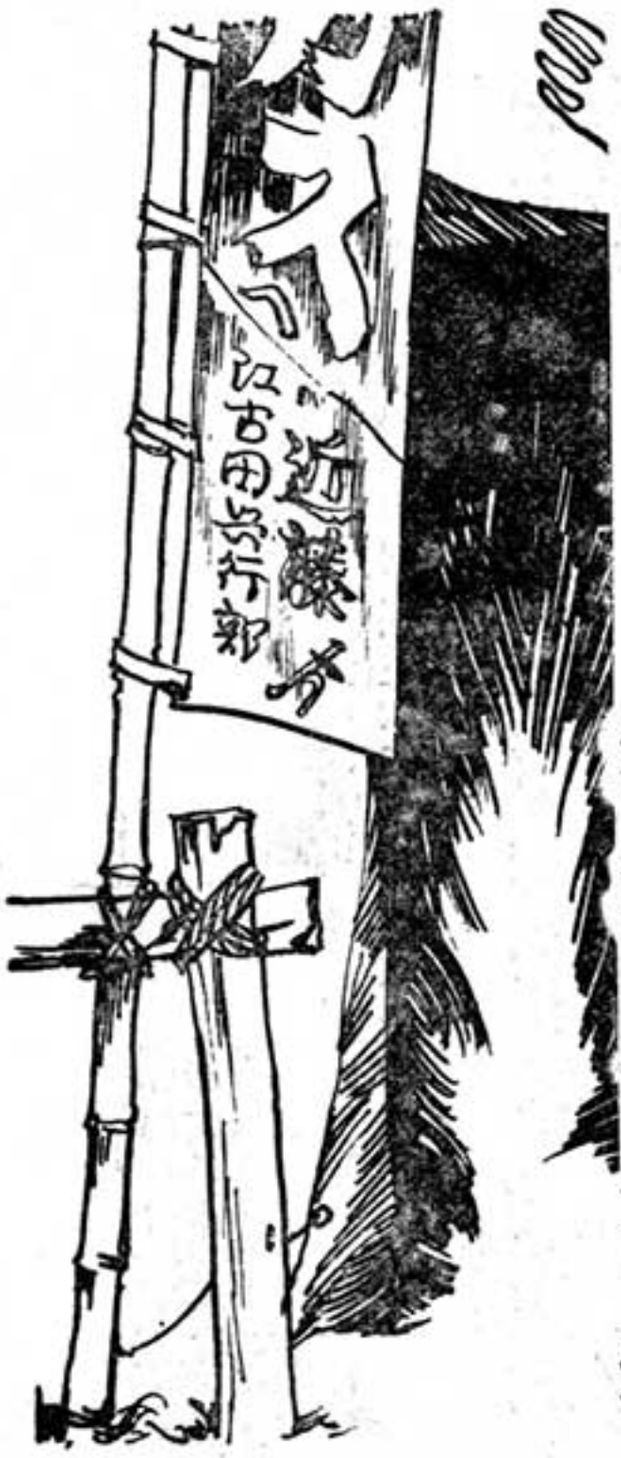
《女性自身》で、サリドマイド禍の赤児の写真や記事を扱ったとかいうことで、世間から大変な反撃を食った。戦前では考えられなかったことである。今は人権というものが大変高く評価されて、いかなる理由によっても、かりにも人間である以上、結果として見世物に供するということであれば、それは絶対に許されないことになっている。世が世なら、サリドマイド禍の赤ちゃんは、写真や記事どころか、実物が興行用の見世物として、お祭なぞに登場したかもわからない。



■体当たりマゾヒズム論・21

ああ、ぼくはあなたにすべてを捧げもっとも卑しい器具になりたい

水尾究



江渕晃夫・絵

人間社会の制度や理念はこうして大きく変わった。変わったが実は人間それ自体の欲望にはそれほどの変わりはない。珍しい物を見たい、できればそれを所有したい、ペットとしたい、と、限りがない。昔ローマの貴婦人は、不具者を競いあって自分のペットとした。時には人工的に不具者にしてペットとした。

とにかく、独立した一個の生命を、自分の意思通り、自由にできるということは最高の喜びであり楽しみであろう。動物愛がんも良いが、人間であって人間でないような、不具者愛がんが中でも最高のものであった。これは一つには、支配欲、権力欲の変形した表明にできるということは、これ以上にすばらしいことはないであろうから。

ともいうことができよう。何をさておいても、安全に、人間を自由

2

先にも述べたとおり、時代は変わった。これからももっともっと変わってゆくことであろう。

教育、職業の機会均等。老後の社会的保証。真に自由な、真に人権が確立された、すばらしい社会が歩一歩われわれの前には近づいてくることであろう。しかし、それでも本当にはだかの人間の心はかえって逆に潜在心理として、無意識裡に、強く深く、あのかつての日の支配欲、権力欲を持ち続けて失うことはない。

動物愛護と称し、人工的にいろいろと手を加え、まるでおもちゃのように変形させてしまった犬をペットとして愛がんするという種の心理は、支配欲、権力欲の一変型として認識される。とこう、話がまるでとほうもなく大きく広がったが、実はE氏とぼくが共同し

てねらったのは、こういう人間の潜在心理を、特にI嬢という女性の意識を借りて、どこまで引き出せるか、それをテストしようというところにあった。

ぼくは痴呆者という、精神上の不具者であった。こういう男を身近に見るとき、女には猛然として支配欲が起こる。

支配欲は所有欲にも通じる。所有欲はむしろ男より女に強い。空飛小助という一寸法師のボードビリアンに数多く女性からファンレターが来るという。

ところがその特徴は、普通の意味のファンレターではなく、支配欲、所有欲を満たさんがための、あらわなものが多いという。見世物を見て楽しむ、楽しむものを所有する、ペットとして支配する、この一連の心理の系譜は今もなお、むしろ強く残っている。

E氏がI嬢にぼくを紹介した方法は、こういう女の潜在心理を巧妙にくすぐるものであった。命令されれば、股の間にだって、スカートの中にだって、キキとしてはいってゆく完全に支配されるためにだけあるような動物、そういう動物としてぼくを紹介した。

3

ぼくがI嬢を単独訪問しての三度目に当たる日、全く恵まれたことには彼女はそのとき最初のときと同じようにひとりだった。

午前十時を少し回ったころであった、I嬢は部屋の隅のほうのベッドに、まだねまきのままやすんでいた。遠慮したように、ぼくはホトホトと低くドアをノックした、彼女はねむそうにあくびをしながら、すこぶる迷惑そうな顔付で起きてきた。

ドアを細目にあけ、ノックの主がぼくであることを認めると、安心したようなアゴをしゃくった。

I嬢は桃色のねまきを着ていた。ベッドにかけ、無言のまま目顔でぼくを招いた。ぼくはE氏に、渋谷のホテルで紹介された時のように、畳の上にペッタリとひざをついて正座した。彼女は、もともと、ことば数は少ないほうのようである。だまってはいたが表情が微妙に変化した。迷惑そうな顔から安心したような顔からいくらか複雑な、しいて言えば嗜虐的な表情に、その変化は微妙に、しかも迅速に行なわれた。

I嬢はくすぐったいような、秘密めいた笑いをもらすと、ベッドの上に立ち上がり、あたりを見回した。

彼女が何を考えたかは最初わからなかった。だが、しめられていたカーテンを、さらによくすき間のないように引き直し、またベッドから降りて、ドアのカギをカッチリとかけたI嬢の行為に、ぼくはすべてを察し戦慄した。

戦慄と歓喜とは全く紙一重のものである。というより、重なり合ってぼくの心を打った。男と女が居る時、ドアにカギをかけるのはだいたい男の役目だ。それが逆に女にカギをかけられるというのは、その場を味わってみないとわからない倒錯した喜びがあるものだ。

I嬢は再びもどってきてベッドに腰かけた。ねまきのすそを乱したままだ。

乱したままぼくを呼んだ。ぼくはすぐ近くにすわっていたが、なお近くいざり寄って、ベッドに腰かけているI嬢の、ひび頭のそばに顔を寄せた。I嬢は真上から見おろすようにしながら、うすら笑いを浮かべ、

「ここにはいってごらん」
と、ひざ頭の間をわずかに広げた。
ぼくはただ夢中だった。わずかに広げられたその間、ねまきの乱れの間に潜航艇のようにして進み入った。ぼくの首から上がペリスコープで、波の間に頭を出して目標を見定めながら進むかのようであった。

4

暗がりの中ににおいがこもっていた。
いつもかぎなれているにおいであった。においの奥で、とまどったようにペリスコープは鼻づらを向けたままためらった。I嬢はすかさず言った。
「かいでごらん」
においが激しかった。それは何とも形容のつかない、たとえていえば魚のはらわたがくさってでもいるような、悪臭が鼻をついた。でも目をつむり、まさぐった。
とその時、窓の外に足音が通った。カーテンが引いてあるので、外から内部がのぞけるはずもなかったが、I嬢はバネ仕掛の人形のように、身を引いて立ち上がった。
足音は窓下を回り、ドアのほうに近づいた。彼女はあわててねまきの身仕舞いをし、急いでドアのかぎをはずした。同時に、赤ちゃんをおぶったこれも若い下ぶくれの女が、心安そうにはいってきた。
「早かったのね」
I嬢はその時はすっかり落ち着いてしまって、全く何事もなかったかのようであった。
いろいろふたりの話を総合して聞いていると、この女は、つまり前回、I嬢を訪問したときに見かけた、演劇青年、「だれかサルを買ってくれる人、いないかな」と言っていた青年の姉であることがわかった。九州から上京し、二晩か三晩、こうして弟のところに厄介になって、すぐまた九州に引き返す、という事情であるらしかった。
姉といっても、青年自体が若く、彼女もまだ二十六、七歳の見当に思われた。下ぶくれのみずみずしい、かわいい女であった。若い健康な母親であった。
ぼくはこの不意な闖入者には、少しも腹は立たなかった。もし彼女が、もう少し遅れてもどってきていたら、どういうことになっていたか、それを思うと今でも大変心惜しいことに思われる。
だが、正直いって、あの悪臭には閉口していた。I嬢の物ぐさな不潔さがそれで証明されていた。気持ちはちぢかみかけていた。だから、闖入者はかえって歓迎すべきものであったのかもしれない。ぼくは残念とは一方で思いながら、しかし勇んでこの第二の女性の前に拝跪するためにとんで出た。

5

最初、彼女はびっくりした。
いきなり見知らぬ男が飛んで出て、雑布で足をふこうとひざまずいたからだ。事情がのみこめないまま、彼女はしりごみし、恐縮しきったようにかぶりを振った。
「とんでもありません。結構です、自分でふきますから」



それをなおしつこくしたものかどうか、判断に迷っているぼくと彼女と、見比べながらI嬢は、面白そうに笑った。

「義姉さん、いいんですよ。その人はばかなんだから」

義姉さんと呼ばれた彼女は、びっくりしたようにぼくの様子をうかがったが、にわかには自分がどういう態度を相手に示すべきか、決断に迷ってはにかんだ。はにかみながら、しかしぼくがふこうとするのを今度はこばまず、足を片方ずつ差し出した。

女の羞恥とはマゾヒストにあっても貴重なものである。女の羞恥に奉仕するのも、大事なマゾヒストの務めであろう。いたずらに倨傲なだけが、またドミナの資格ではない。I嬢に比べ、第二の彼女

のほうが、いわゆる女としてのふくらみに富んでいた。

そしてこの場合、彼女が羞恥を示したのは、ぼくに対してではなく、I嬢という第三者に対してであり、またそういうあられもないポーズで、傲慢にも年上の男に、足の裏をふかせるという、自分自身の態度に自分自身が羞恥していたのであった。こういう羞恥は、結果として男を無視していた。結果としてこれほど高慢な羞恥はなかった。実にぜいたくな羞恥であった。

I嬢が彼女のことを、なれなれしげに義姉さんと呼んでいたが、といって、I嬢とあの青年が夫婦であるとは思われない。仲の良い友だちというのであろうが、I嬢が義姉さんと呼ぶ、その呼び方に格別の意味はない。だが見ていて、I嬢と青年の間はほおえましい。仲の良い姉弟のように見えた。

そんなようなことを思いながら、ぼくは赤ん坊を寝かしつける彼女の手つきをぼんやりながめていた。I嬢はその彼女をいたわった。だらしなげなさっきまでの様子は消えていた。かいがいしく立ち働いて、お茶を入れてきたり、何とか義姉さんの心をくつろがせようと誠意のこもった応待を見せていた。

6

つい二晩か三晩の逗留でも、赤ちゃん連れとなるとおしめの洗たくが大変だった。

ぼくはマッサージが得意ということで、横になったお義姉さんの肩腰を軽くマッサージしてあげたあげく、タライいっぱいのおしめの洗たく物をかかえて洗い場に行った。おしっこでしめった程度のよこれ物ならともかく、まるまる赤ん坊のうんちでよごれたおしめは、さすがに気の毒だとみえ、お義姉さんはその分だけえり分けるようにしながら、これはいいわ。うんちまみれなんだもの。若い母親の羞恥を示しながら言った。

ぼくはうんちを見ると興奮した。理屈からいえば、これは単に赤ちゃんのうんちであった。しかし、理屈を越えた精神上の立場から言えば、これは母親のものと等しかった。そこにひとりの若い母親が居た。

赤ちゃんは、母親にとっては分身、わが身の一部分に過ぎなかった。赤ちゃんの排せつ物は、他人に対して、わが身の排せつと等しく申し訳ないほどにきたない物、ということであった。そこにはやはり、特有の女の羞恥があった。

ぼくは頭の中がカッとするほど、ほてりを感じながら、母親の手から、うんちまみれのおしめを奪うようにしながら、洗い場に立った。

後で、I嬢に言う、若い母親のことばが追っかけるように聞こえた。

「ほんとに便利ね。あれじゃ、なまじっかなお手伝いさんより、ずっと便利だわ」

とっさに出た感想で、このことばにはいつわりはない。便利だ、という言い回しの中にぼくは自分が一種の物として見られた、ということを確認し、満足した。

大きなタライにおしめの山、それを中腰で慣れぬ手付きでジャブジャブ洗う。まるで漫画だ、そんなつぶやきが出る。理屈に合うことではない。いったいぼくとしては、こういう行為のどこにどんな魅力を感じるというのだろう。

暗がりの中で鼻を押しつけかぎ分ける女のにおいと、排せつ物に



まみれた赤ちゃんのおしめを洗たくするのと、どちらにどれだけの価値があるというのだろう。もちろん、仮にマゾヒズムなるものの正当な理解がなされたとしても、これは文句なしに、直接女のにおいをかぐことのほうが、かがせられることのほうが、マゾの立場からいっても多くの価値や効果が認められるに違いないのだ。

ぼくもそれは認める。その価値多いI嬢との千載一遇の素晴らしい時間が、第二の女性の出現で中断されたことは、悔やまるべきことであろう、にくむべきことであろう。しかし、ぼくは、今おしめを洗たくをしている。そのことに歓喜している。女のにおいをかぎつけるのと等価値以上の効果に酔いながら、漫画の主人公のようにおしめの山と格闘している。マゾヒストにあってのおしめの価値や効果は、不思議なものである。

7

端的にいって、ぼくはI嬢より第二の女性、若い母親に多く引かれた。無口で権高で、勝気さをあらわにしたI嬢より、一般的でふくらみがあり、こちらが恥ずかしくなるような羞恥を示した若い母親に引かれた。この選定はマゾヒストが考えるに当たっても、多くの示唆を含んでいる。

つまり結果からいって、明らかに傾向として、多分にS気を性格として身につけている、特殊型の女をではなく、良き女、良き母親良き愛らしき妻、そういう正常な型の女を選んだことになるのである。これは、俗に普通人としての選定と、そうでなく、あくまで特殊な、マゾヒストとしての立場と、結果としては同じような女の選



び方をしてしまったということである。

ところが一方、それからしばらく時間をおき、冷静にその時の経験を思い起こしてみるに、第二の女性を選んだというぼくの選定はマゾヒストとしてはまちがっているように思えるのである。

マゾヒストは「ヴィナスのほうより、並の女の足蹴を喜ぶ」と、沼正三氏が≪マゾヒストの手帖≫で定義されていたことは正しい。と同様に、マゾヒストは「並の女のつつましい無意識裡の侮蔑より、Sに、自覚した快感を感じる、自覚したS型の女性の、自覚した嗜虐行為」を喜ぶということが考えられる。

ぼくのこの間の経験を振り返ってみるに、I嬢は明らかにS型の女性であった、E氏との芝居が奏功して、格好なおもちゃだと思いこみ、ただ一時の快楽のため、ぼくを生きた器具として使った。その時、I嬢は、おそらく思ってもみなかった或る精神上の優越感にひたったであろうに違いない。

器具と見なされることは、マゾヒストにとっては最高の境地である。器具の中でも、最もいやしまれるべきもの、その一つ、オナニー用の器具扱いにされるケースは、恐らく理想上、最上のケースであることにもまちがいはない。だから、改めてこの時の経験を、時間をおいて判断するとき、ぼくはI嬢との出会いの状況を、第二の女性との出会いより、数等上のケースとして、思い返すだけで大変な興奮を覚えるのである。

そして第二の、女性とのケースには、さほどの感激は今となってみれば当時ほどにはないのである。大変矛盾し、困乱した話とぼく自身思う。

8

今仮にぼくが第三者として、他人から、ぼくと同じケースの体験を告白されたとする。I嬢と第二の女性と。すると同好の士としてぼくには、I嬢との出会いの話のほうにより強い感銘を受けることが確信をもって予想される。赤ちゃんのおしめを洗うより、女の器具になるほうが、ずっといいことは確かだ。ヴィナスのほうより、並の女の足蹴を喜ぶ。たとえI嬢が、当人の好みにずれた女、あるいはさして美人でなかったとしても、自覚したS的快感に身をゆだねるままに、ひとりの男を器具として使用する、この女性心理を見事に誘発し得たことは、何をさておいてもこれ以上のことを望むのは至難である。

だが、それにもかかわらず、現実の問題として、先に述べたとおり、その時ぼくは、I嬢ではなく第二の女性、つまり若い母親のほうに軍配をあげた。一般人としての心理からではない。マゾヒストとして、マゾヒズム的感激の度合いにおいてである。

Mの世界にも、理性的なもの、一般原則的な公理論上の立場と、それから感覚的なもの、非合理的な衝動性に駆られる立場があることに、このときぼくは気づいた。マゾヒストの中に、マゾヒストとしての一般常道をふまえた、観念的、理念的理解の仕方と、その時その場に当たってでないとわからない、というより、その物になるとどのような変容を見せるかもわからない、理不尽な突発性に駆られる感性的なものと、この二つが存在し、また二つがからみ合うのである。

だがこうも言える。残酷さを待ち望むM心理の奥には、実は残酷さそのものを待ち望むことに全目的がおかれるのでなく、残酷さに象徴されるところの階級的支配秩序、いつの時代にも秩序づけられている序列体系、これを道徳体系と言い換えてもよいが、こういう体系の中にひそむ矛盾残酷に、身を餌食として投ずることで、それを一つ一つ摘発してゆく。

つまり、階級的服従支配の関係を、戯画的に、なぞらえほり下げてゆく。それが身分的、性的差別のワク付けをゆさぶる。ゆさぶるところに性的に裏打ちされたところの快感が伴う。これがマゾではなかろうか。とすると、女の器具となることより、その時の条件によっては、赤ちゃんのおしめを洗うことのほうが、より現実的に、身につまされた形でそこに身分的性的差別の戯画を即物的に見いだし、より深いマゾの実感を生み出す、こういう解釈も成り立ちはしないか。

9

再び日を改めてI嬢を訪問した時、あの日あの時の嵐は過ぎ去っていた。I嬢はそのときもひとりだった。彼女がぼくをながめる目付きには、新しい刺激的なものはもう含まれてはいなかった。情熱は去っていた。それは同じように、ぼくにも言えることであった。I嬢はささけ立った畳の上に寝そべった姿勢で言った。

「あんた、足の中にはいること、そんなに好きなの」

「ぼく、あんまり好きでもない」

ぼくは考えた上、こう答えた。これは答えとしてあまり上等なものではない。この場合、好きと答えるべきであるのかもしれない。

しかし、好きなものを、好きなこととしてさせてもらうことにぼくは抗抵を感じる。むしろ、股の中にはいることに、本来は嫌悪を

感じなければならない。そうでないと、股の中にはいらせられることに、屈従感は真にわいてこない。女性にしてもそうだ。イイダクと、喜んで命に従う者をより、いやがる者をあえて命に従わせる、この調教的な要素が加味されないと、Sとして生きてこないのではないか。

この判断が、ぼくに「あまり好きでもない」という答え方をさせた。しかしそれも、もうあまり意味はないようであった。I嬢は、もうのうくうなずくだけである。

ぼくはI嬢のそばににじりより、寝そべったからだを、肩から腰へ腰から足へともみさげた。彼女は目を閉じたまま、からだをあずけっぱなしていた。そこで足の腹になると、またそこで新しい興奮がよみがえった。こうも女の足というのは、感動的なものだろうか。

足の腹にほおずりし、何度もキスをし、指を吸った。皮膚はザラザラし、恥部に似たすっぱい味とにおいがあった。

I嬢はそうしている間中、じっとしていた。やがて起き上がり、大儀そうにペタンと畳に腰をすえ、

「あんた、ラーメンでも食べてみる?」

そこにはただ一介の、ごく平凡な、生活臭を身につけた、女がひとり居るに過ぎなかった。つまり何事も行なわれはしなかったのだ。

10

E氏はI嬢との経過をいろいろ聞きながら、その効果的なクライマックスには、さすがに嘆声をもらした。だがことわっておきたいが、E氏との対話、E氏のもらした嘆声、それはいわゆる猟奇的な好色のそれではなく、どこか真剣な、科学者の、心理実験の臨床事例を検討するような趣が見られた。

どこまでどう踏み分けていけるのか、何か引き出され得ざる心理上の未知の分野が、こういうどぎつい性の色合いを身につけて、なんらかの予見をいだかせるということは、皮肉なことだ。

ぼくもE氏も、セックスそのものにはほとんど直接的な興味はなかった。事例は性の色合いを、色濃く漂わせ、むしろショッキングなタイプとしてわれわれの前に現出したが、そしてそのことが多くの誤解を招きやすいが、われわれが感動を受け、興奮したのは、直接にそのときの性の色合いそのものではない。性を越えてその向こうに、性を媒介としてはるかに遠く、人間の心にひそむ可能性の一部を、真実なものの一つとして垣間みたからである。

E氏とぼくとには、しかし立場上の相違があった。なにさま、E氏はぼくと違い、広く世間的に知名の士であった。顔も知られていた。それだけに、おのずからなしうる行為に限界があった。世間という、一つの安易な秩序概念に、表立ってさからい、そむくことはできない。それにさからって勝てるためしはないのだ。

こうして、われわれふたりの実験も、行動範囲におのずからのワクがはめられていた。遠くの、何やら怪しい心の衝動が、E氏の心をやがて捕えた。ワクの中で、もう一つやれるものはないか。

「あなたは、対象は女だけですか。男の場合、絶対その気にはなれませんか。——たとえばぼくです。ぼくの奴隷になってみる気はありませんか」

とんでもない、というふうにぼくは手をかぶりを振った。

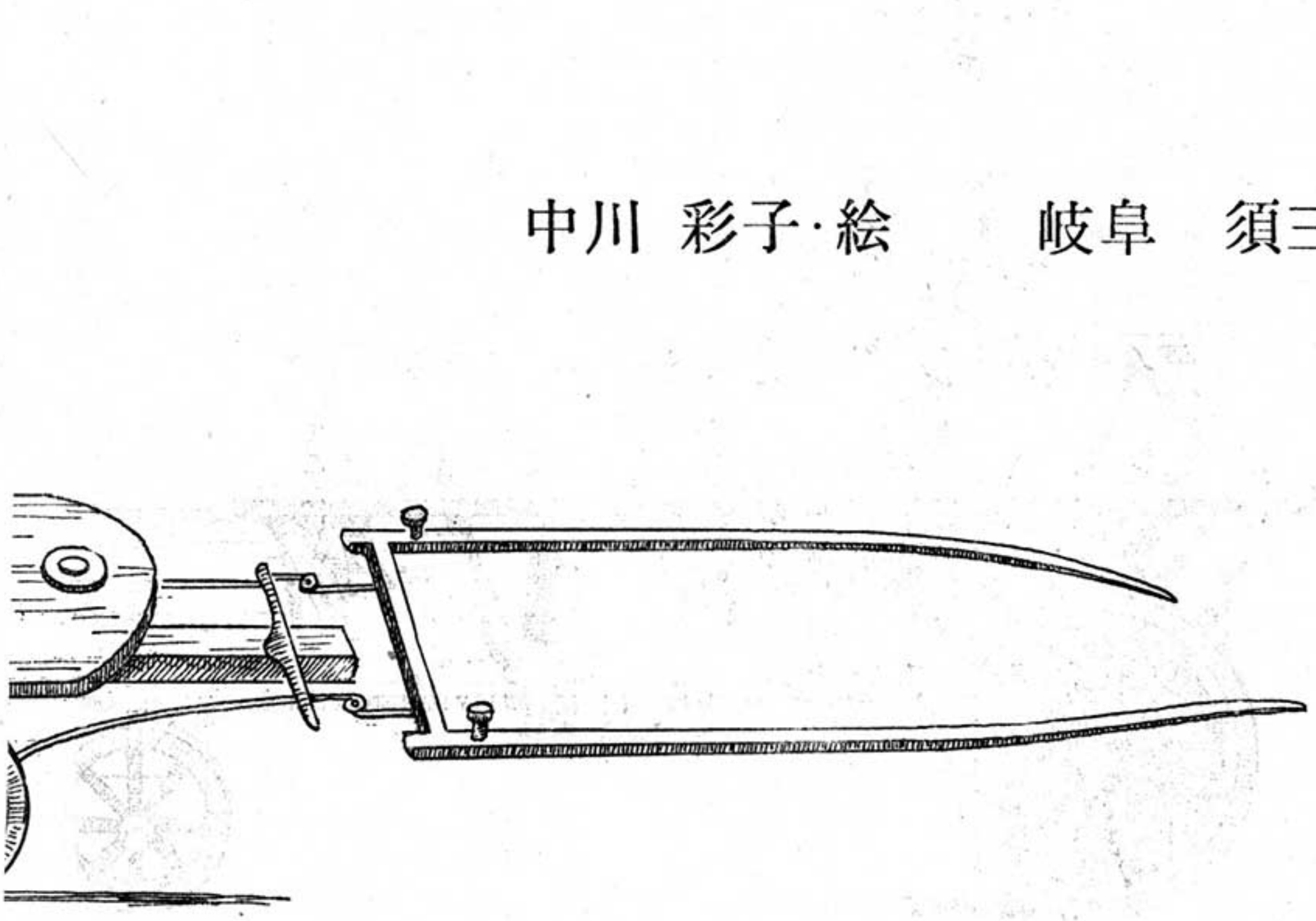
「でしょう。でも、そうするとですね。その代償としてですね。ぼくはまたそれ以上の女性をあなたに紹介しますよ」

この一言に、ぼくは考えこんだ。

■ ある矯正具の裏面史

背骨のまがった娘たち

中川 彩子·絵　　岐阜　須三夫



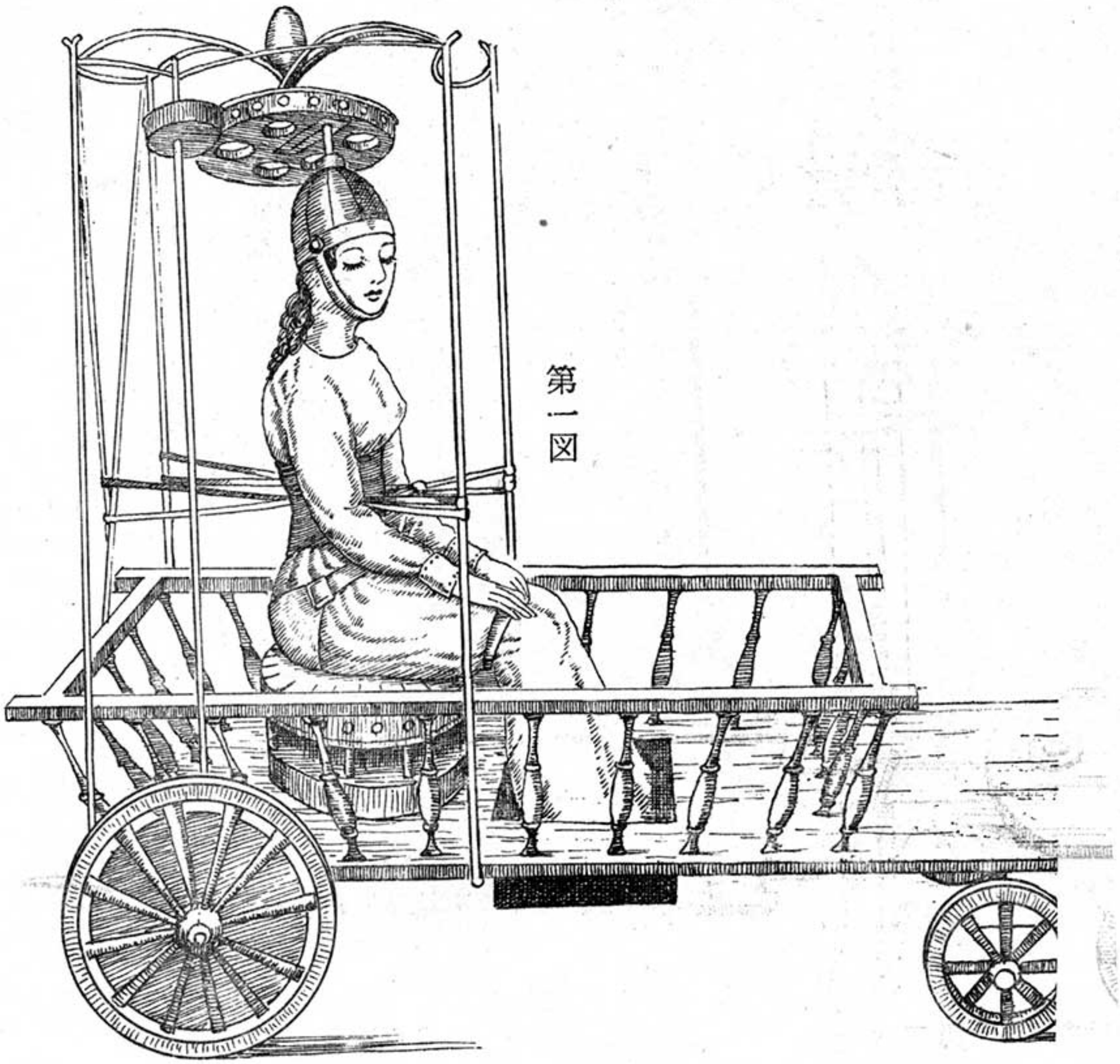
街で、電車の中で、またはたまたま行った病院の待合室で、私たちはふと気の毒な人の姿に視線をうばわれることがあります。

手や足や首に、固いギプスや器具をはめられた、いたいたしい姿の人。私たちはそんな人に出あうたびに「どうしたんだろう。かわいそうに」「小児マヒかしら」などと考えます。

そして、その人たちのことをすぐに忘れてしまう人と、長いこと心の底に焼きついて、「どうしてあの人たちはあんな目に会わなければならないのだろう？　あのギプスは重いことだろう、不自由なことだろう」と考えこんでしまう人とがあります。

この、いつまでも考えこんでしまう人のために、そのギプスや器具について、ちょっとくわしくご説明させていただきたいと思います。

石膏の粉をまぶしてお湯で固め、からだに巻きつけた包帯がギプス包帯です。たいへんに固くて重く、時としては全身の自由を完全にうばってしまうこともあります。これに対して、セルロイド板や、皮や鉄板で作られたものを全て「装具」という名前で呼んでいます。そのうちで、手や足にはめるものが補助



第一図

器、首や胴にはめるものがコルセットと言われています。ギプス包帯でからだの型をとり、患者にぴったりあうように、特に製作された重くてちからの強い器具類です。

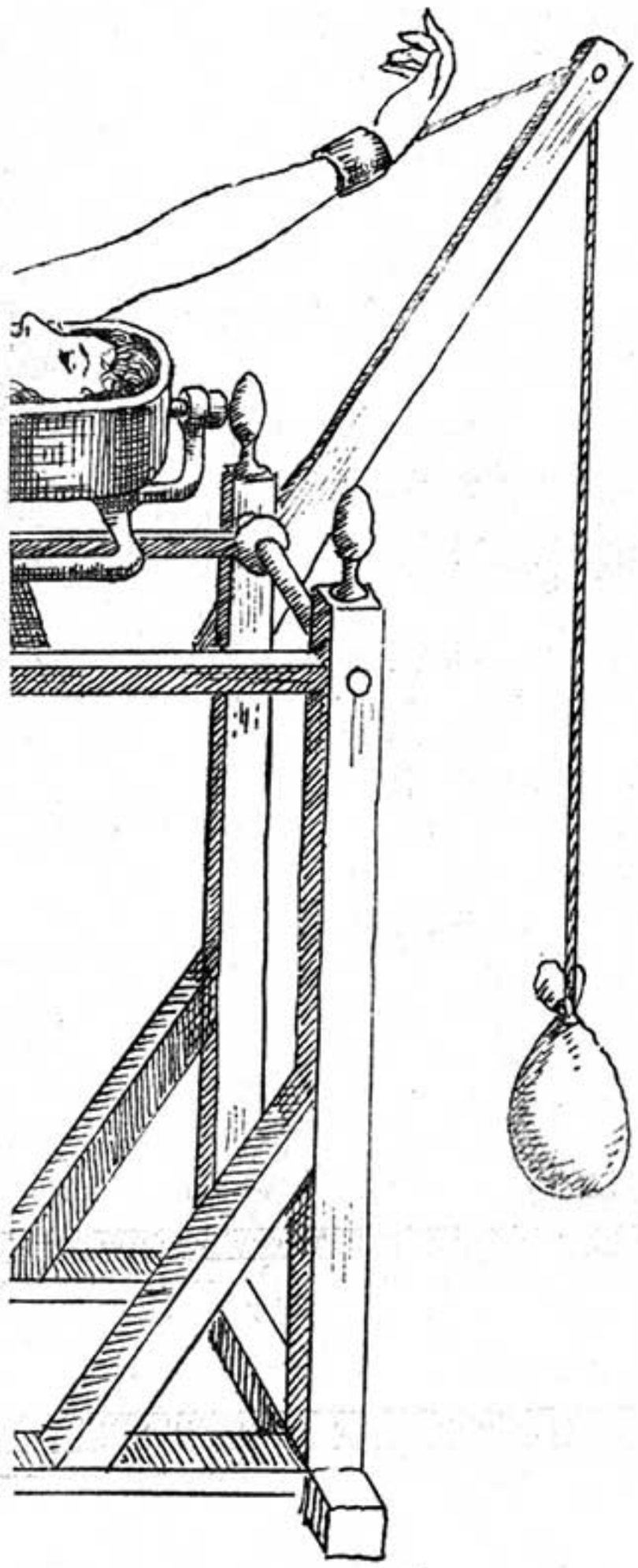
世間一般ではこういったものを、全部まとめて「ギプス」と呼んでいるようです。

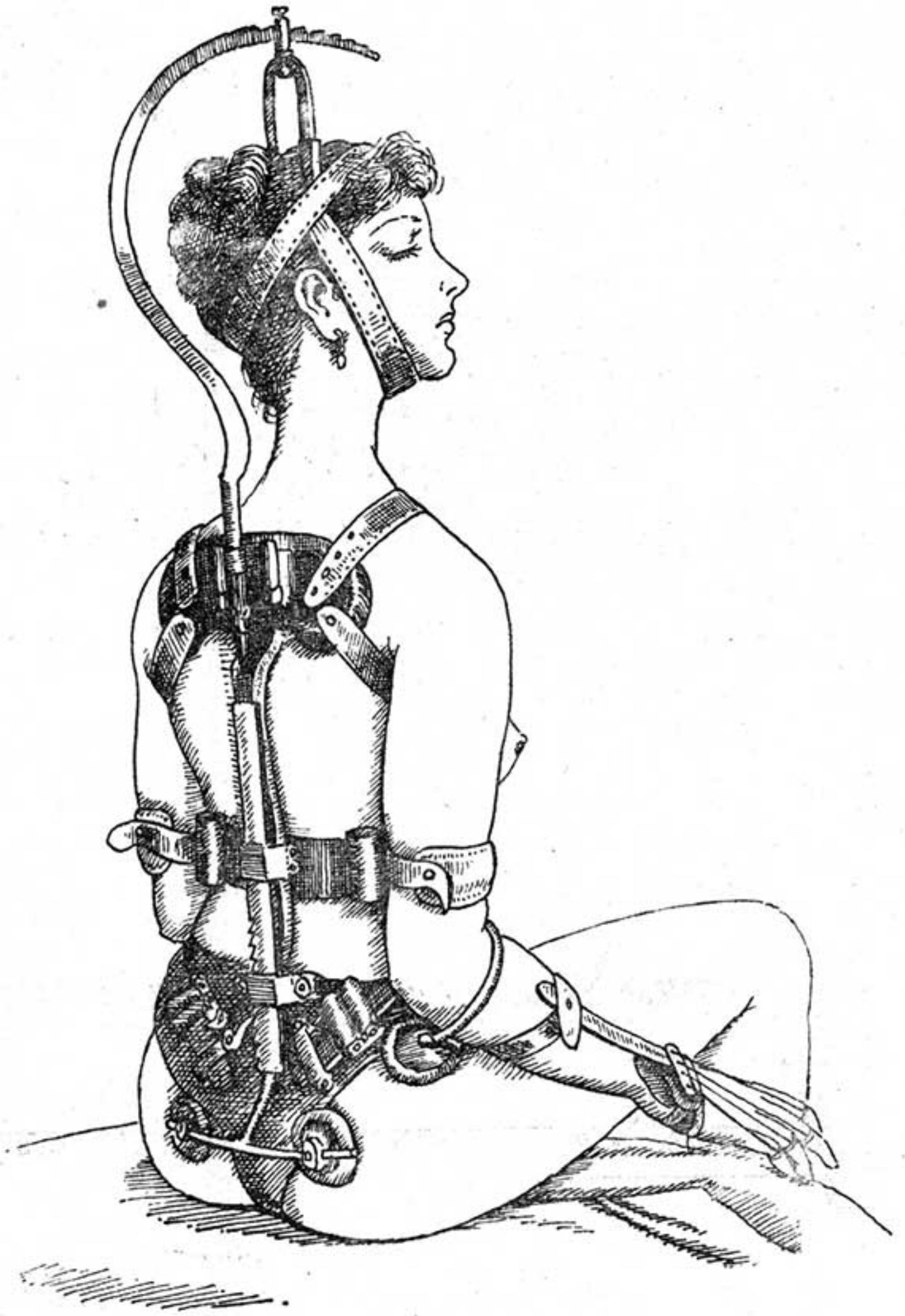
ギプスや装具類は、全て整形外科医が治療のために使用します。まず第一に、病気の関節を動かさないように固定する器械として、次に曲がった骨をもと通りにする矯正用の器械として、主にこの二つの目的で使われています。

最初にこの矯正用の装具を取りあげてみましょう。

とても残酷で、家族の者は正視にたえないような装具が、昔から整形外科医の手でつぎつぎと考案され、患者のからだに試みられてきました。何しろ、曲がった骨をもと通りにしようというのですから、強いちからを患者のからだに加えることが出来る装具でなくてはなりません。その装具をはめられることによってどんなに患者が苦しみ、もだえても、医者は病気をなおすという目的のために、他はいっさい目をつぶってきました。

整形外科医学が発達してきた十九世紀のなかば頃から、世界各国の医者の手で、新しい





第二図→

装具がつぎつぎと製作されてきました。そのほとんどは、はめられる患者の肉体的な苦痛は全く無視していました。

病気をなおすという名のもとに、こうした器械を使って、患者の肉体を責めさいなむ試みが、病院で、一般の家庭で、白昼公然と続けられてきたのです。

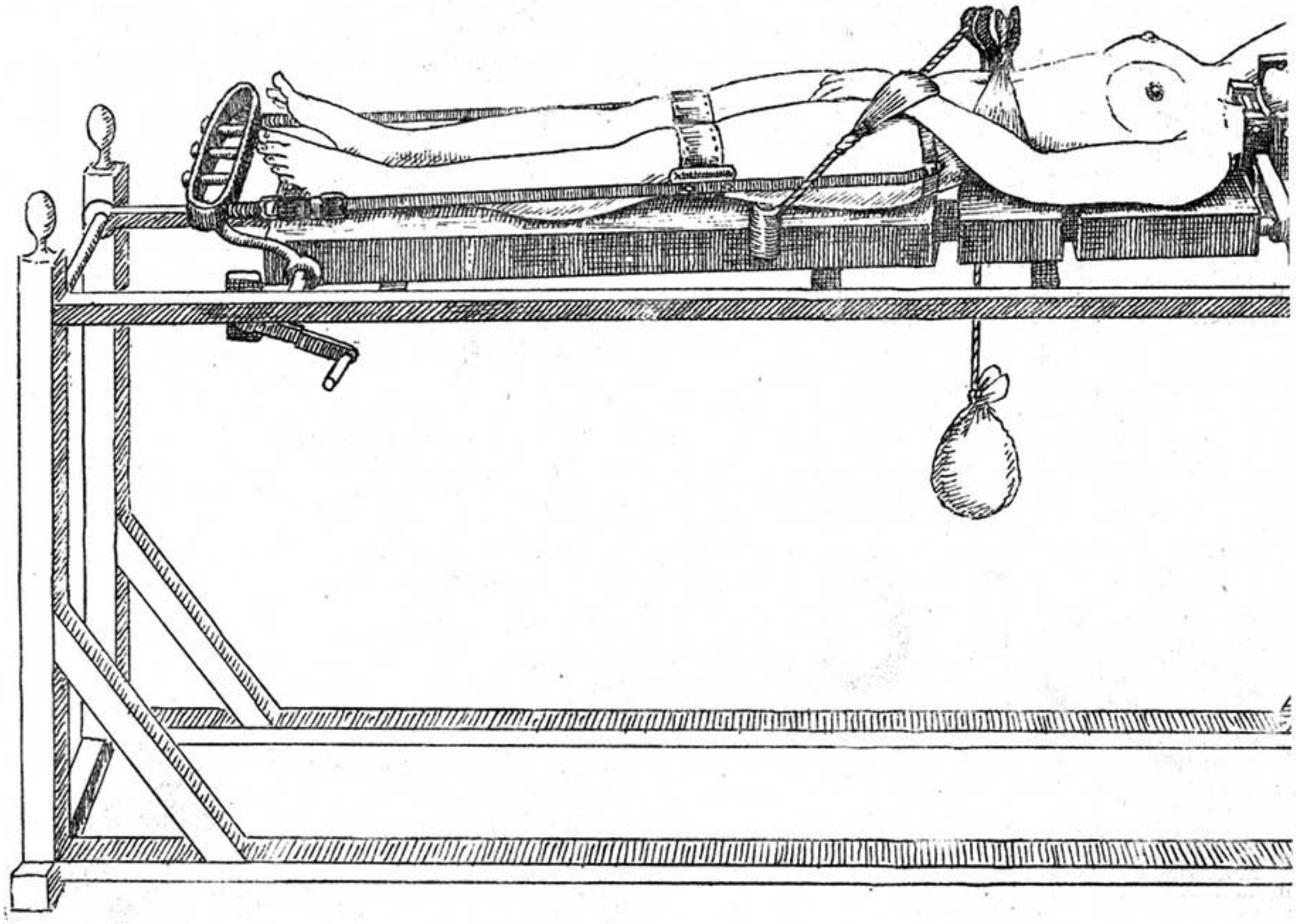
特に、カリエス、関節炎、背椎側彎症の患者たちが、拷問にもひとしい、ひどいギプス装具類の犠牲になってきました。

最初に、背椎側彎症の場合からお話しましょう。

背骨が横にねじれて、次第に曲がってしまう病気がありますが、どうして背骨が曲がりはじめるのか、原因は今だにわかりません。ただ、からだの弱い、せなかの筋肉の弱い人に多く起こることはたしかで、この患者のほとんどは若く、ひ弱な女性なのです。

これが背椎側彎症（スコリオーゼ）で、欧米では昔から、十代の成長期の可憐な娘達のあいだに、非常にたくさんの患者が発見されています。

患者に現在、なんら苦痛がないのだし、病院は放っておいてもいいのですが、将来、彎曲がひどくなる可能性もあるので治療をはじ



第三図

めます。

この治療法が、患者の肉体的苦痛を全く無視したものすごいものなのです。

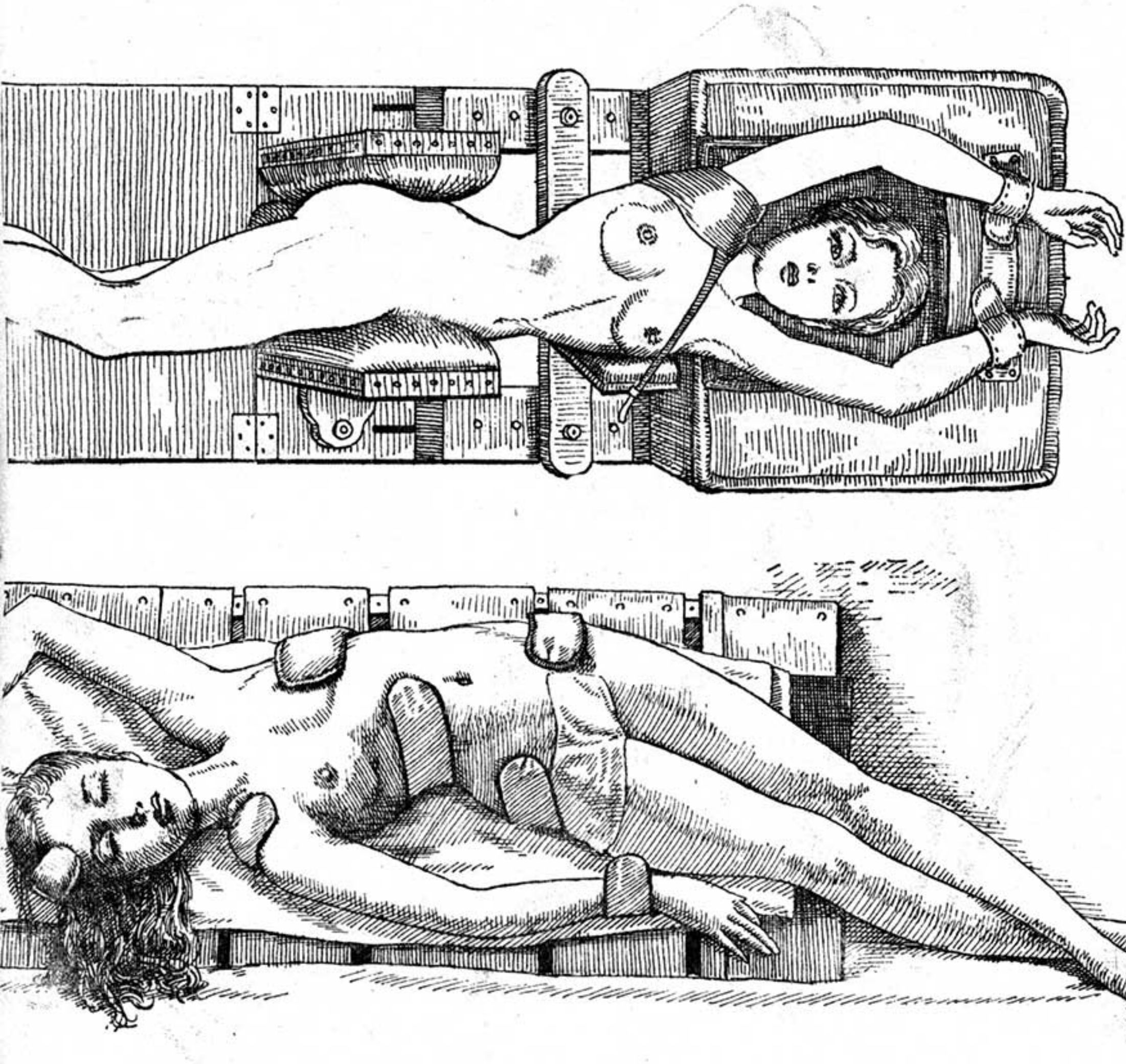
原因もわからぬまま、医者は曲がった背骨をもとへもどそうとします。最初に考えられる方法は、患者の首と足を引っぱって背骨を上下に引き伸すことです。まるで拷問のように、患者のからだは、長く上下にのばされます。

次に、背骨の曲がって突き出した部分を、強力に押しつぶしてもとに戻すこと、そして、ある程度矯正されると、再び曲がらないようにギプスで固めてしまいます。二年も三年も患者は、重いギプスの中に閉じこめられるのです。

背椎側彎症の治療法は、今から二千年前、ギリシャ時代からさかんに研究されてきました。

中世には貴族のお姫様たちにこの病気が多くあらわれ、か弱いお姫様の背骨をまもるために、五、六才の頃から、固いコルセットをはめさせたり、鉄の支柱を背骨にあてがったりすることが、真面目に実行されていました。

第一図は、一八二八年パリで作られた背椎



第四図

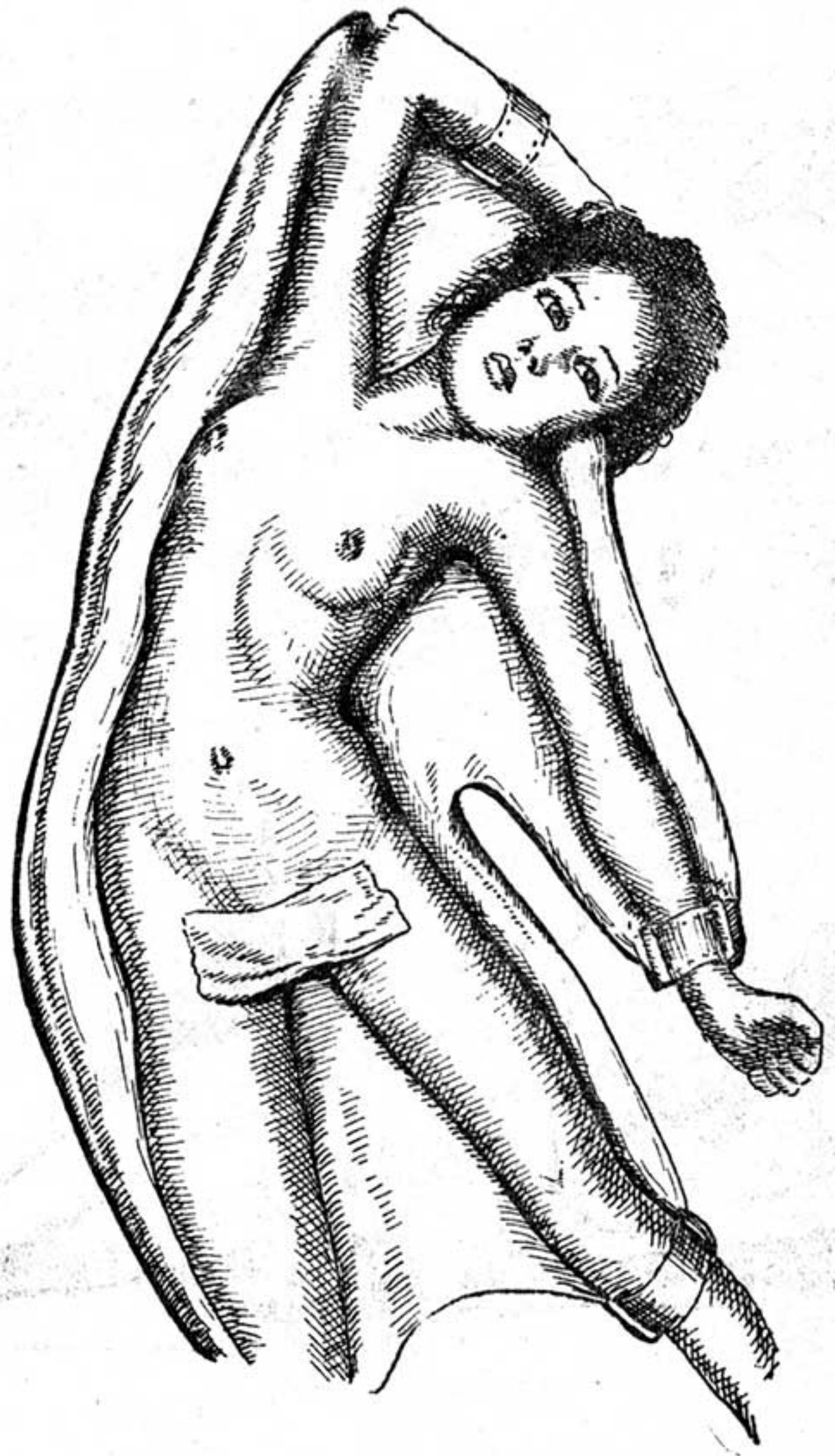
骨矯正器つきの馬車です。患者である姫君は、首を上方に吊り上げられ、数本のベルトで、曲がった背骨を矯正されています。姫君はこの姿で邸の庭をまわり、たいくつをまぎらわした、と記されています。

一八三七年に、やはりパリでデラクロア教授が矯正用コルセットを発表しました。腰や肩をネジで締めあげ、せなかに鉄の支柱をたてて、頭を吊り上げるようにしたものです。支柱は太く、鉄の張力は強くて、頭は絶えずものすごい力で上の方に引かれています。このコルセットのままでは食事も不自由です。

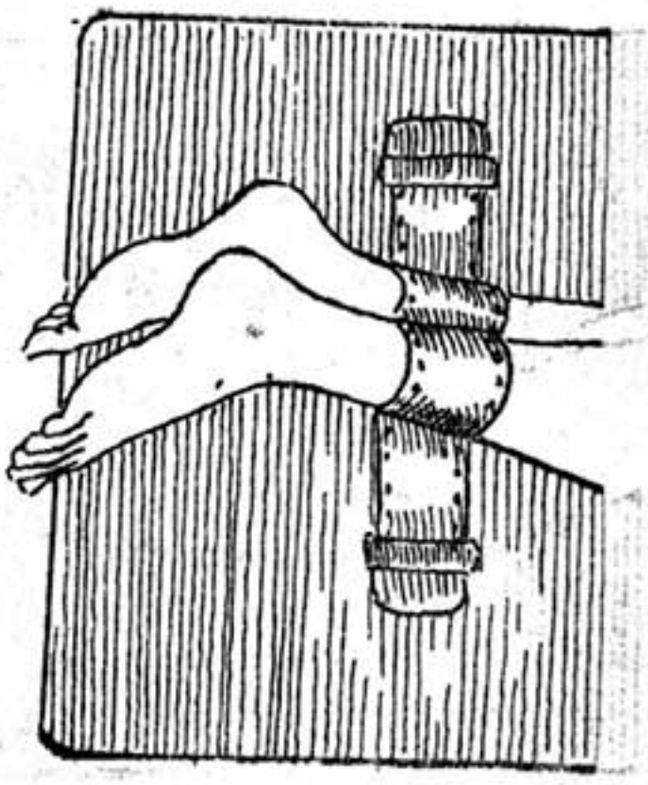
この絞首台のような支柱は、ユリマストと呼ばれてこの後も各国の医者の間でさかんに使用されました。第二図が、そのコルセットです。

当時イギリスのダリッソン博士が、患者のあごと後頭部に巻きつける、懸引用の皮製の首輪を発明しました。「グリッソン氏係蹄」と呼ばれるこの首輪によって、頭を強力に引っぱることが出来るようになりました。

この「グリッソン氏係蹄」を使って、側彎症患者のからだを自由自在に引き伸すことの出来る、懸引用ベッドが大量に作られるようになりました。



第六図





→第五図

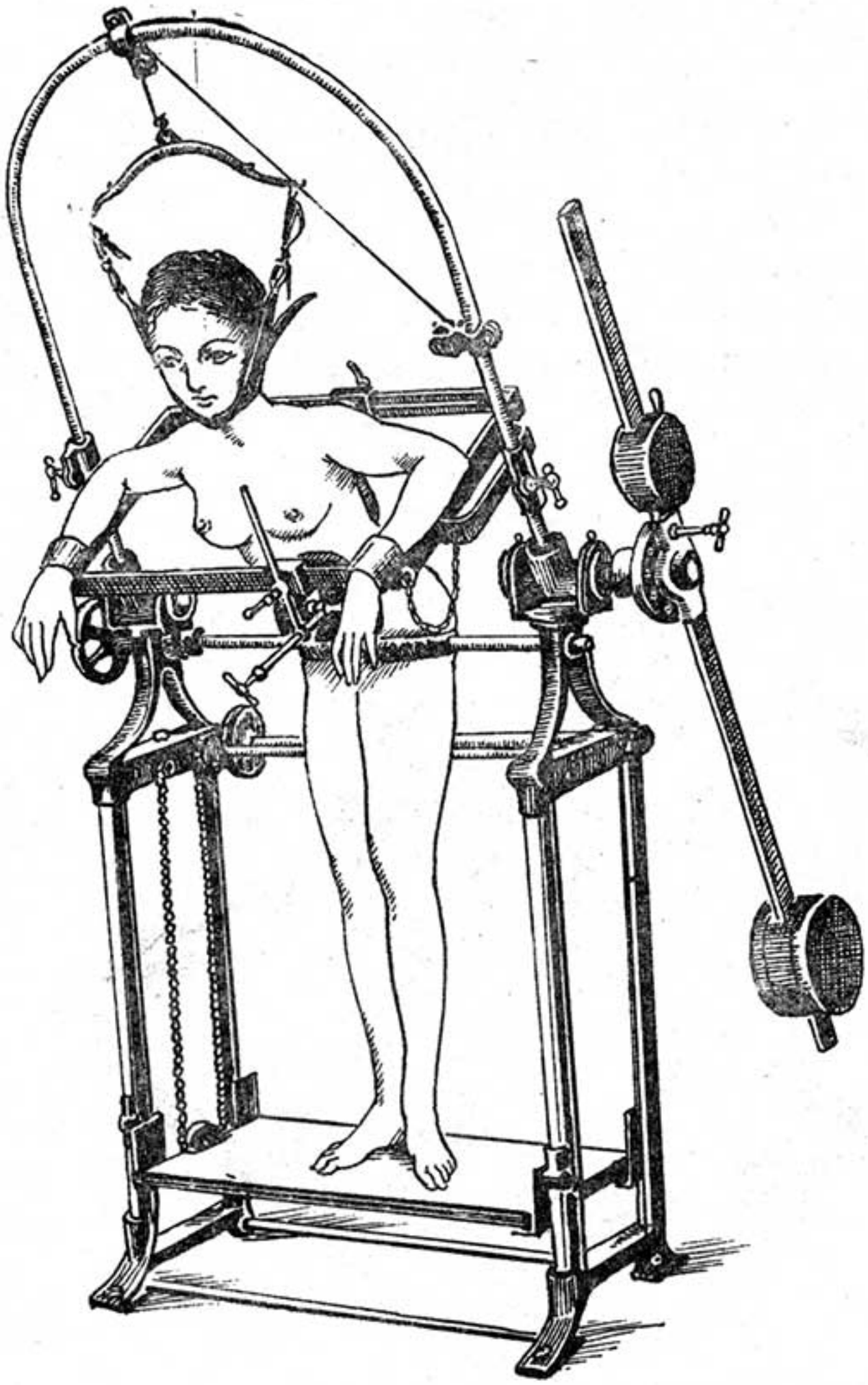
寝台の頭の方を高く、斜面に寝かせた患者の首に「係蹄」をはめ、からだのずり落ちるちからを利用して背骨をのばし、更に足首にまで鉄の錘をくくりつけて、強力に引きのばすようにしたものなど、ヨーロッパ各地の医者が、それぞれ矯正用ベッドを考案しました。

第三図はその一例ですが、当時、これらのベッドは大都市の医療器械店で、誰でも容易に買うことが出来、一般の家庭にすえつけられて、背骨の治療に使われました。

その頃、パリの或る上流階級の夫人が側彎症の予防のつもりで、全く健康な娘のからだを矯正用ベッドに縛りつけ、強力な懸引を長い期間にわたって娘に加えて、ついに歩くことのできない不具者にしてしまったという記録がのこされています。

また、アメリカ南部の金持ちの夫人が、娘のごく軽い側彎症をなおすために、パリで矯正用ベッドを買って帰り、娘の治療を勝手にはじめたのですが、娘がベッドの上で苦しみもだえる姿を見ているうちに、ふと、これを奴隷の拷問台に改造することを思いついて、大量の奴隷をベッドで責め殺したことが、当時の新聞に報じられています。

十九世紀のなかばから、つい三十年ほど前



第七図

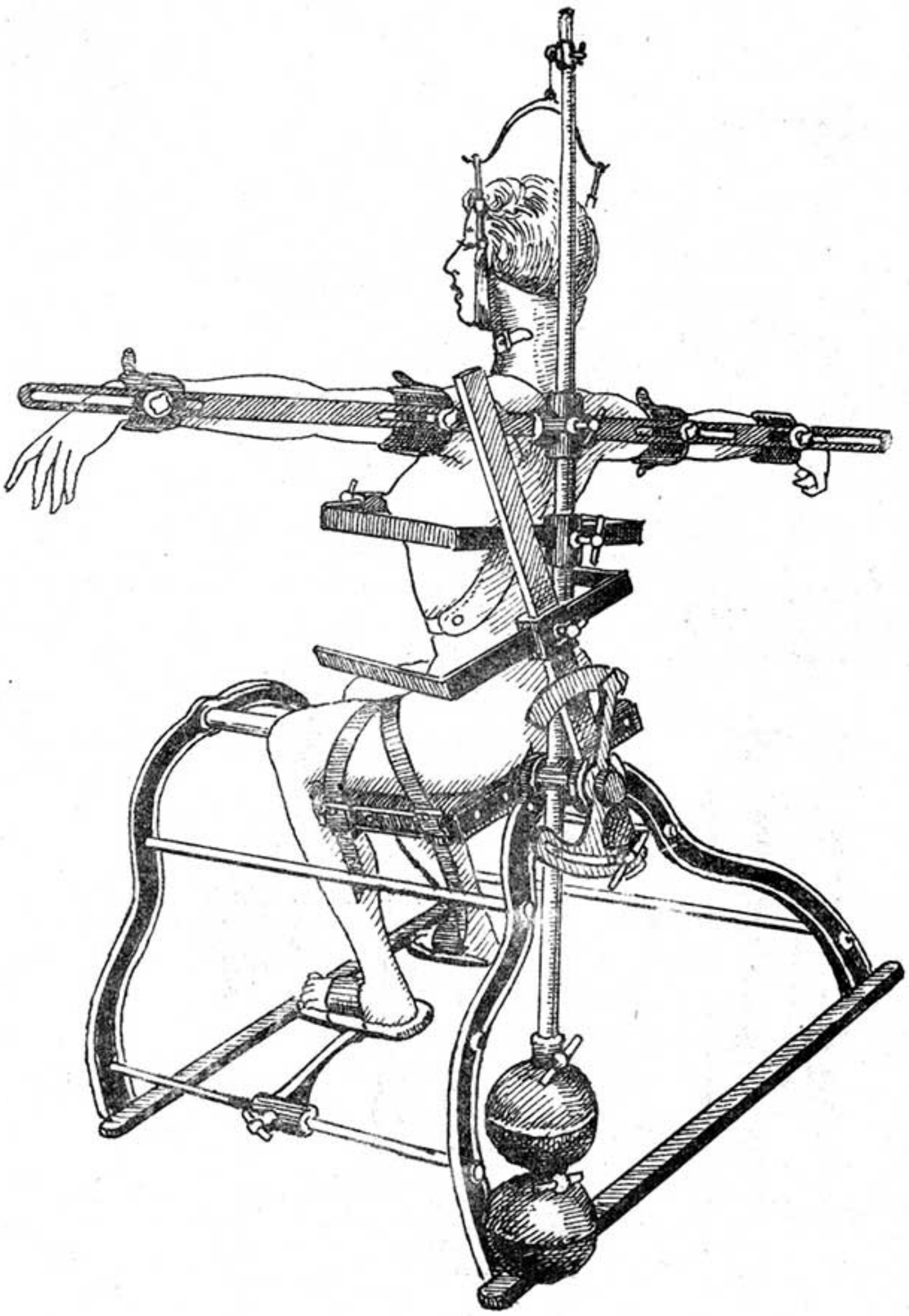
一九三〇年頃まで、この種の矯正用ベッドはさかんに使用されました。哀れな病人は、ほんのちょっと背骨が曲がっているというだけの理由で、数年から十数年、時としては一生のあいだ、このベッドの上で生活することを強制されたのです。

二十世紀に入ると、より強力な、したがって患者にとっては、ますます苦痛にみちたベッドが発明されました。

第四図はローレンツ教授の考案したもの。教授は背骨のねじれをなおすため、頭と肩は真上をむき、腰は九十度ねじって真横をむかせるベッドを作りました。患者は腰を板にはさまれ、肩を両方とも ベッドに縛られます。

第五図はフスナー教授の考案になるもの。患者は、ベッドへ垂直に立てられた板にくくりつけられます。わきの下と腕がだきかかえられています。三本の腕は、鉄板に皮のおおいをつけたものです。患者はこの不自然な姿勢で、昼も夜も暮らさなければなりません。鉄の腕が当たる胸や腰は、皮膚が破れ、あざが残り、時には肉までくずれてしまいます。しかし、当時の医者は、側彎症をなおすためには、そのくらいのことは問題にならない、と考えたようです。

第六図は、フランケル教授の矯正用ギプス

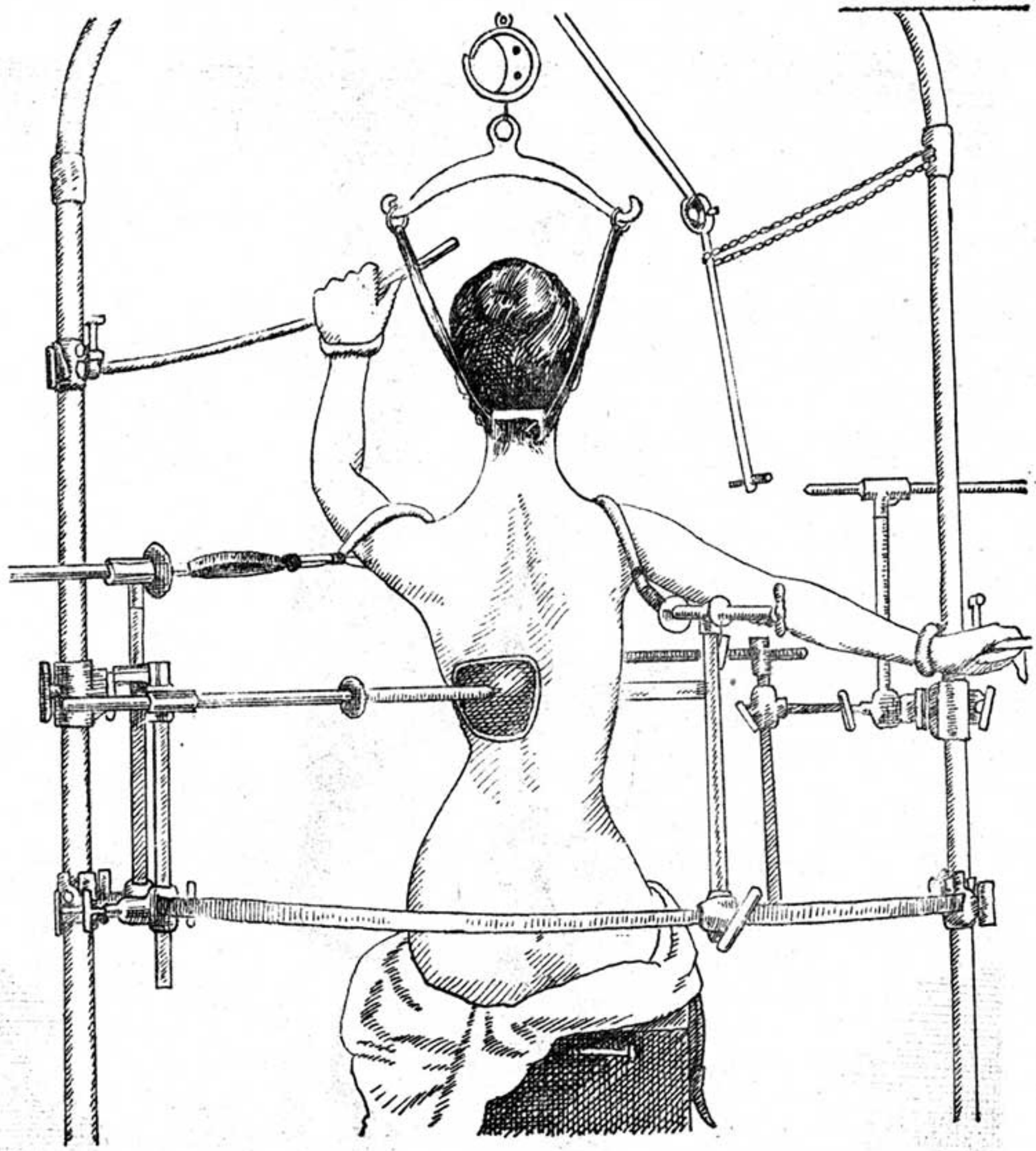


第八図

ベッドです。教授はまず、患者の娘を大きな台の上にうつ伏せに寝かせます。そして、図のようなで娘の姿勢をとらせます。助手が数人がかりで娘の手足をとり、背骨が横に曲がるだけ、ぎりぎりのところまで曲げて、手足を台に固定します。そして、娘のせなかや手、足、からだ全体に、ギプス包帯をかぶせて固めてしまうのです。ギプスが乾くと、それをベッドにして娘はあおむけに寝かされます。台の上でちから任せに強制された無理な姿勢を、今度は一日中つづけていなければならないのです。ギプスベッドが耐えられなくても、起きあがることが出来ないように、教授は、患者の手足を皮ベルトでギプスに縛りつけることにしていました。数ヵ月して、娘のからだがその姿勢になれてくると、更に強力な矯正用ギプスベッドを作って使用させたのです。

苦しいベッドを強制するだけでなく、教授たちはさまざまな矯正器械を考案していきました。矯正用ベッドと同じに、この矯正器械も実にたくさんの種類があります。

第七図はそのもっとも典型的な器械です。患者はまず腰を鉄の環にはさまれ、首を係蹄で引き上げられ、足の板を下に降ろされてつま先きで立ちになり、大きな振子のちからを利用して上半身を前後に振りまわされます。



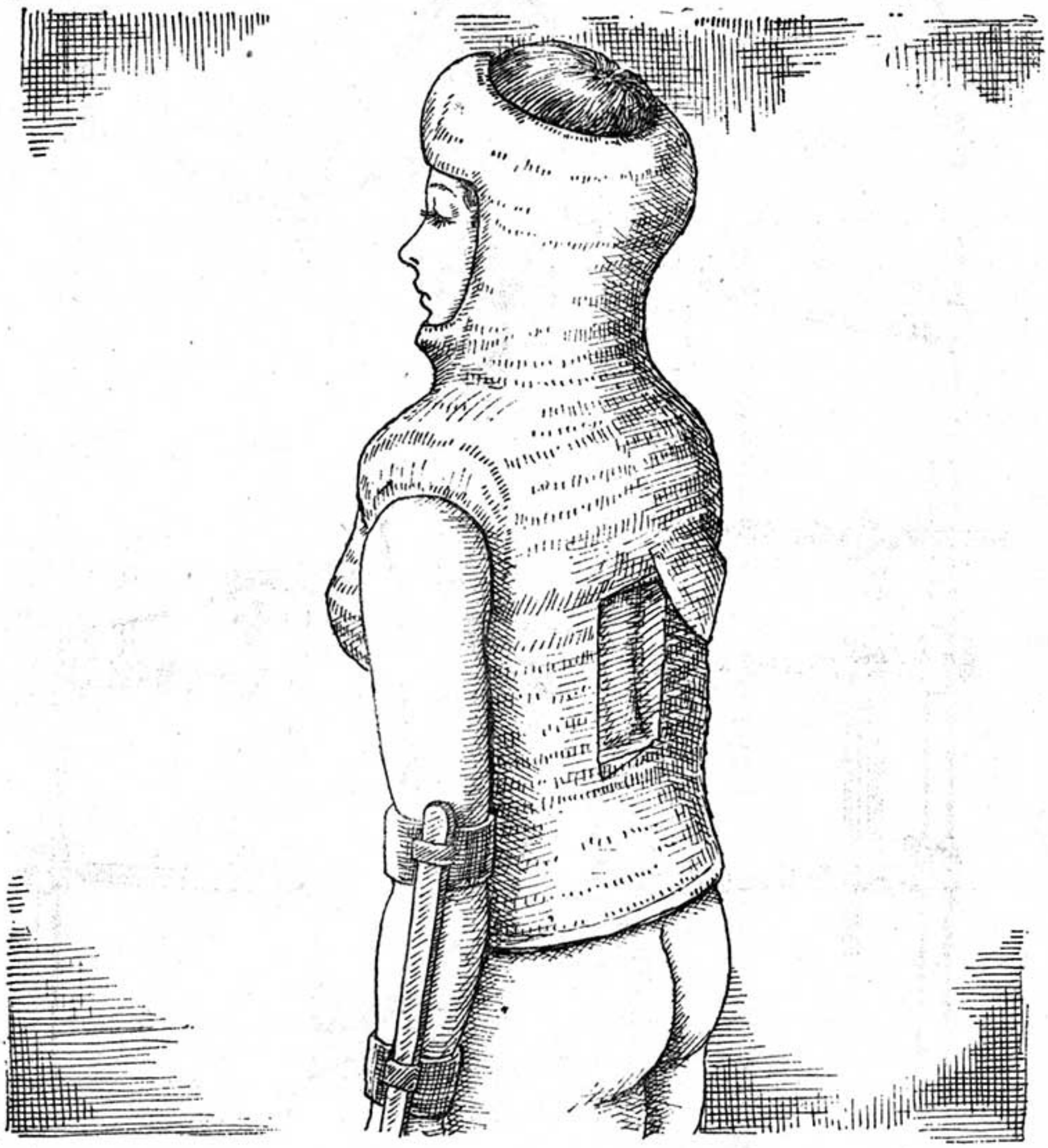
第九図

振りまわす速度はだんだんと速くなり、背骨が少しでもやわらかくなると、首はより強力に引き上げられ、背骨の曲がった部分を押す腕木は、ますます強くからだにめり込んできます。この矯正体操は長時間、規則正しく行なわれ、からだの弱い娘などは、この器械の中で気絶してしまうこともたびたびだったようです。

第八図は、背骨を今度は左右に振りまわす器械です。ベッカー教授のこの矯正器械は、まるで「はりつけ」のように、両手を左右にひろげて縛りつけておくように考案されました。

これらの矯正器械も大量に作られて、家庭に持ちこまれました。そして、昼となく夜となく、苛酷な治療が気の毒な娘のからだに加えられたのです。

十九世紀の後半、ギプス包帯がさかんに使われるようになって、側彎症の治療法は大きく発展しました。矯正器械で引き伸し、曲がった骨を強引に押しもどしたあとで、二度と曲がらないようにギプスで固めてしまうのです。ドイツのウルスタイン博士は、患者のからだに強力な懸引を加えたうえで、そのままギプスコルセットを巻いてしまう装置を考えました。第九図がそれです。患者は傾斜した



第十図

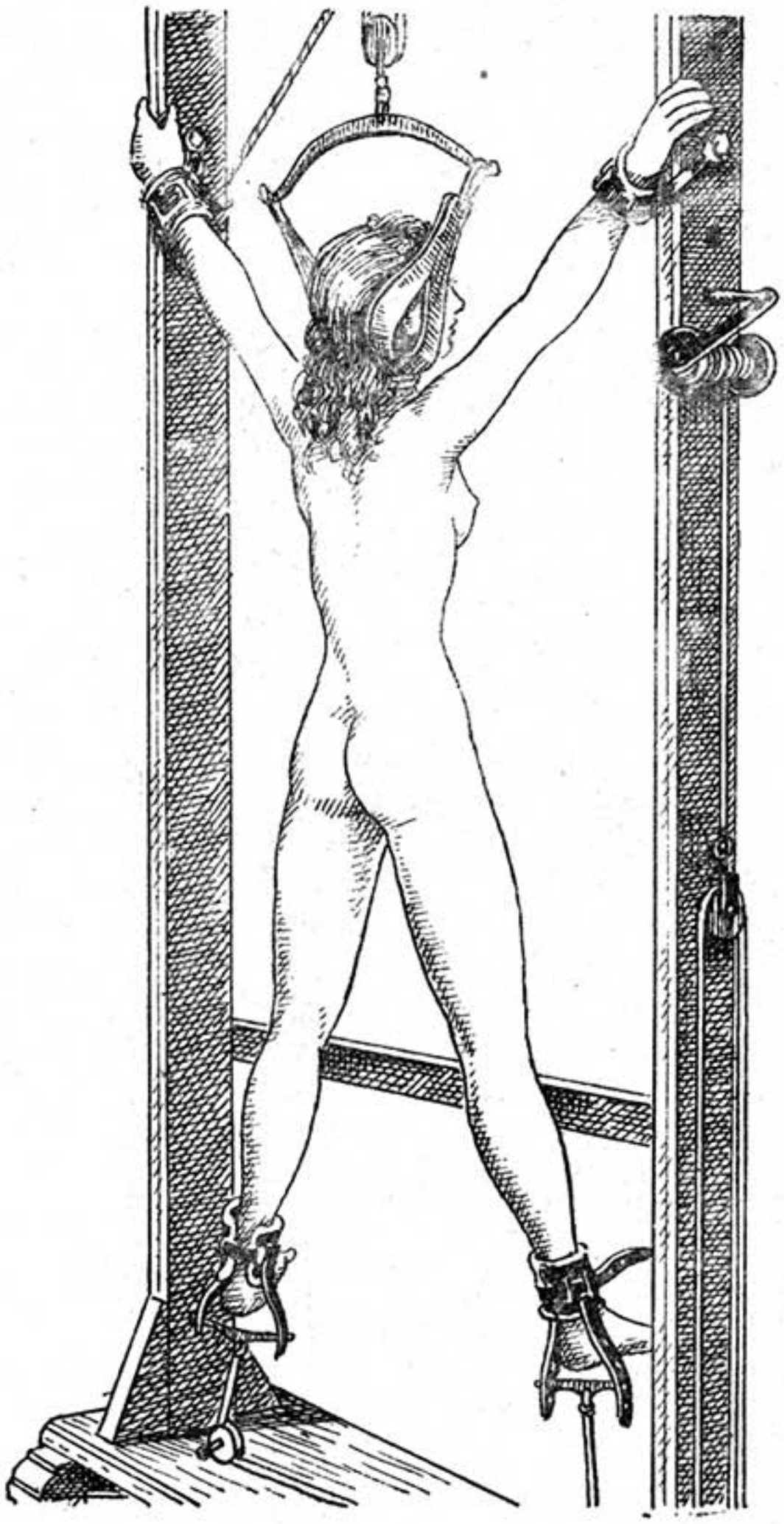
腰かけにもものを縛られ、首を係蹄できびしく懸引され、背骨の突き出した部分を鉄棒で強引に押しつぶし、そのままギプス包帯を巻いてしまうのです。

ギプスは腰から胸、肩、頭まで、すっぽりと患者のからだを包んでいます。わずかに顔と頭のてっぺんだけを残して、ひたいまできっちりとギプスで埋められてしまいます。第十図がそのギプスコルセットです。

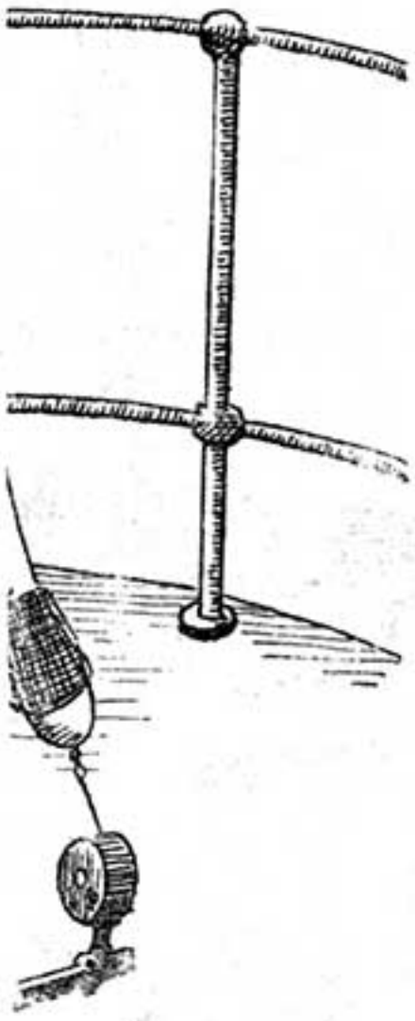
哀れな患者は、このコルセットに閉じこめられたまま、最低二年から五年の間、苦しい生活を続けるのです。

このギプスコルセットは、恐ろしく重いものです。少し厚く、ていねいに巻かれると、三十キロ近い重量になります。わずか体重四十キロ足らずの少女が、三十キロ以上のギプスをはめられて、一人では立っていることも出来なくなる、などということは、その頃としては珍らしいことでもなんでもありませんでした。しかも医者は、体力をつけるために患者に歩くことを命令し、少女は自分の体重と同じくらいのギプスをはめて、病院の中をヨロヨロと歩き廻ったのです。

ギプスコルセットは重いだけではありません。患者が耐え得るかぎり、強力に背骨を矯正して、そのままギプスで固めてしまったの



第十一図



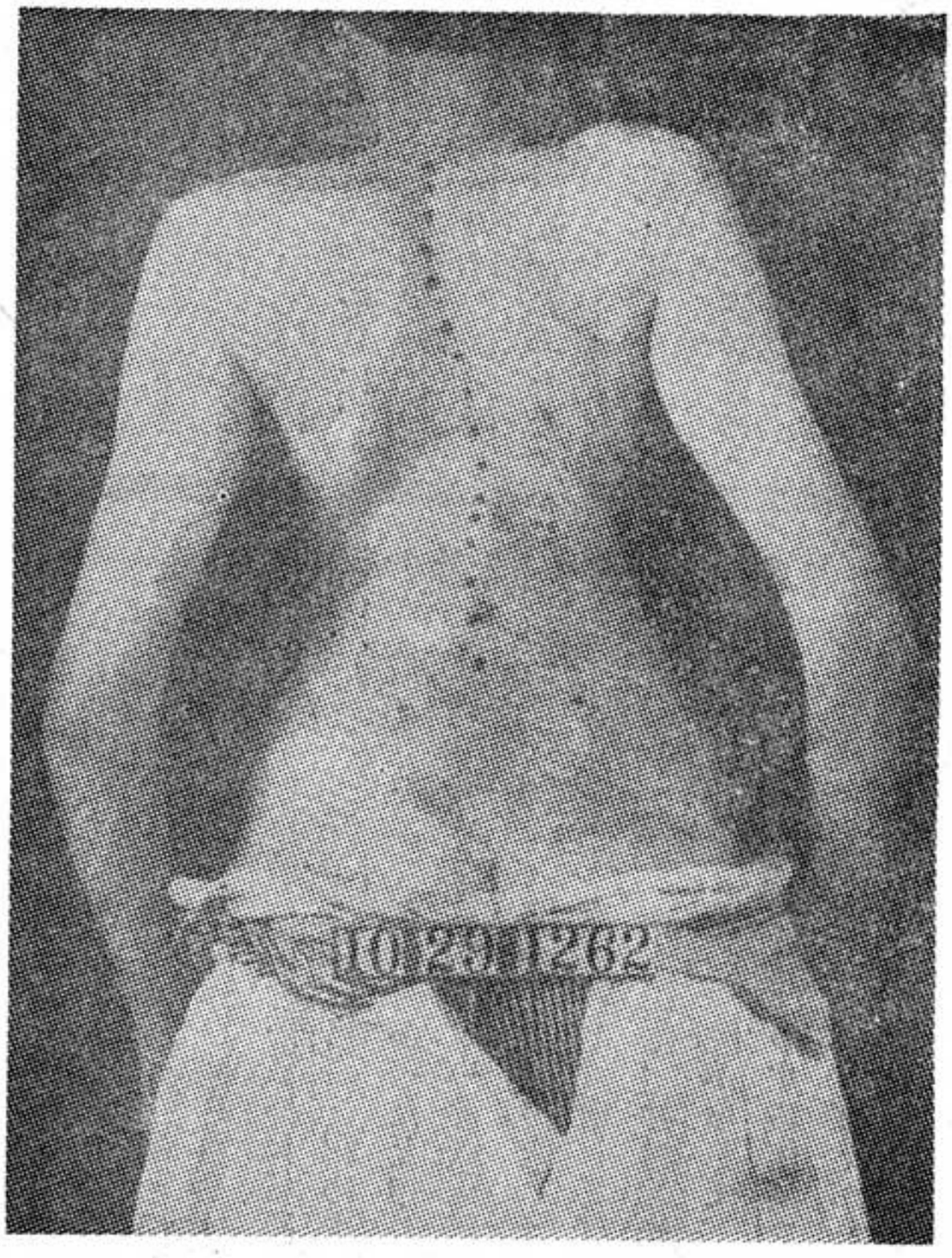
第十二図

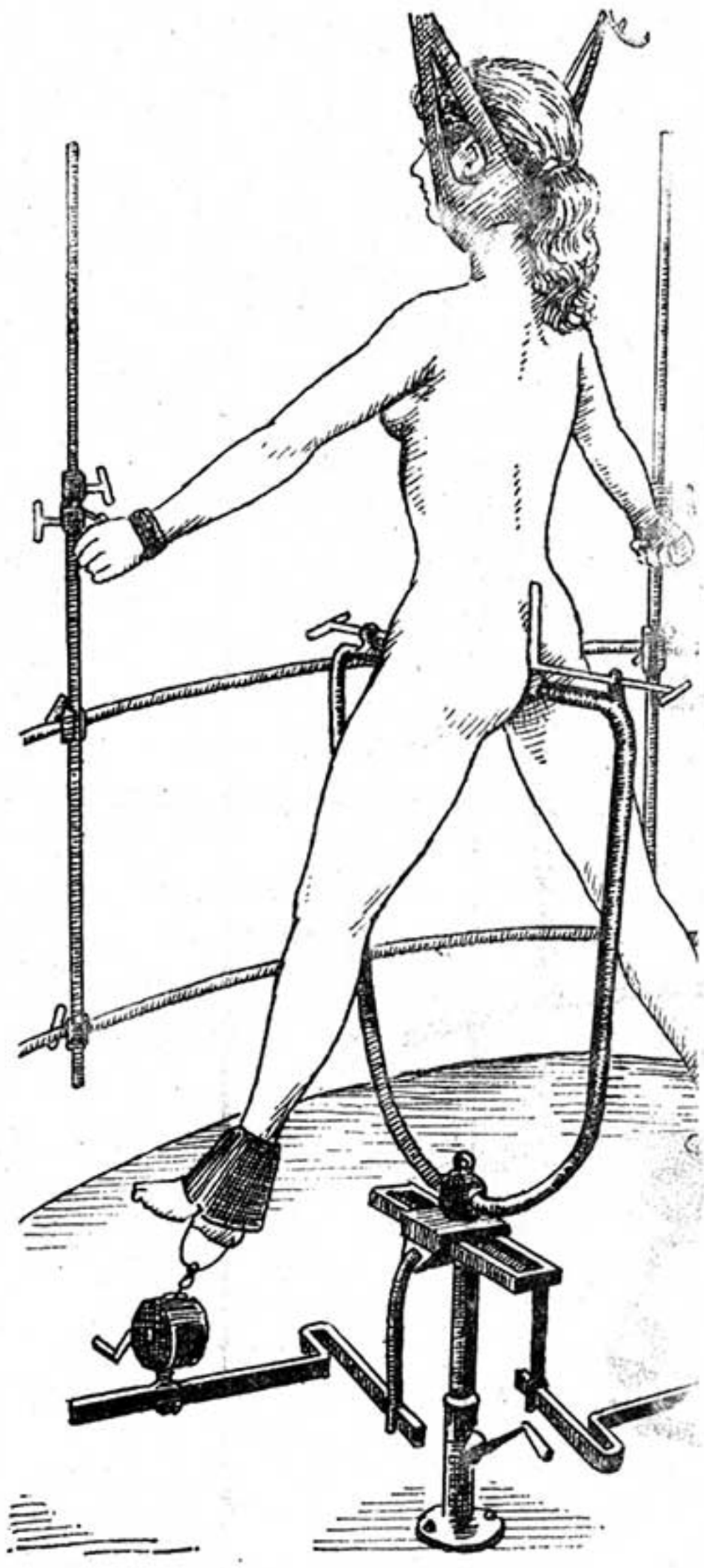
で、コルセットの中でその矯正された姿勢のままで、いつまでもいるということは、大変つらいことなのです。首も懸引台で引き伸ばされたままギプスに閉じ込められてしまったので、長く伸びたままです。ほとんど口も開けることが出来ず、食事も思うようにとれません。当時の医者は「口は薄く切ったパンがやっと入るくらいに開けば充分である」と書いています。

患者のからだを強力に懸引して、そのままギプスを巻くことが出来る新しいギプス台が、今度は医者の研究の対象になりました。

第十一図はシャンツ博士のギプス台です。患者はついに完全に宙吊りの状態になりました。首に係蹄をはめ、自分の体重を全て首にかけて宙吊りになっても、博士はまだ懸引が足りないと考えて、足首に輪をはめ、足までも下方に引っぱりました。この引き伸ばされた姿勢で、患者は腰から頭までギプスを巻きつけられるのです。もちろん、普通の少女に突然こんな強力な懸引を加えたら、たいていの者は首の骨がはずれるか、あごの骨を折ってしまいます。まず、患者を斜面の板に寝かせ、首に五キロくらいの鉄の錘をくくりつけて懸引し、だんだん錘をふやして、三十キロくらいの懸引にたえられるように、首の骨

第十三図





をならしてからギプス台に吊るのです。それでも、この時代に、治療の途中で首の骨がはずれたり、あごの関節を折ったりした例が、多数に記録されています。

まさに中世のハンブルグにあった「のばし拷問」が、医者の手によって堂々と行なわれたのです。

第十二図はモデリンスキー教授のギプス台です。細い鉄のパイプにまたがった患者の姿は、日本の「木馬責め」を思わせます。この場合も首は上に、足首は下に強く懸引されています。

こうして、側彎症の患者は、苦痛に満ちたギプスコルセットの生活を強制されました。皮膚がギプスにすれて傷ついても、はれて化膿しても、医者はギプスの中には手当をする方法がありません。一年ごとにギプスをはめなおす時以外は、放っておくより他にないのです。一年目にコルセットを聞く時は、皮膚は変色しあざだらけになり、とても酷い状態です。ギプスコルセットに耐えきれず、自殺したり、発狂した娘のことが、当時の医書には多数報告されています。

第十三図は、ギプスコルセットの治療で見事になおったといわれる、十八歳の娘の写真です。彼女はそれまでに二年半にわたって、

ギプスコルセットの治療を受けました。彼女の哀れな、あざだらけのせなかをごらん下さい。胸から腰へかけての不自然な曲線を、これは二年半の間に、ギプスの檻の中で無理にこしらえられた身体の線なのです。それに、両腕の奇妙な肉のつきかた、これは、わきの下まできっちりとギプスで締めつけられ、両腕を充分に下へおろすことが出来なかったためなのです。

さて、以上が一九三〇年頃までの側彎症の治療法です。

当時の医者は、患者の肉体的苦痛などは全く考えないで治療を強行していました。患者は完全にモルモットだったのです。あのシャンツ博士のギプス台にしても現在では、患者のからだを宙吊りにするほどの懸引は全く必要がない、むしろ有害であることが証明されています。

ところで、この背椎側彎症の治療法。現代はどうなのでしょう。

一九五三年に、アメリカでたいへん効果的な方法が考案されて、現在は日本でも、その方法を使って治療を行なっています。しかしこれも患者にとっては楽な方法ではありません。両方の足の先から頭まで、時には両腕も

★「花と悪銭」読者の批評集★



▼新しい企画とみられる「四作家競作同一題小説」について、簡略な感想を述べさせて頂きます。

「花と悪銭」風松英之介先生のものを、第一と認めました。一番おもしろかったと申しあげます。と同時に、一番無難（ということは多少マンネリという意味にもなります）とも申しあげられます。

第二位、井村錠先生。過去の先生の作風からして、なんとなく気合ぬけのする作品です。しかし、構成は変りばえがあり、推理手法も取り入れて、斬新な作風とはいえるでしょう。

第三位、松山省一先生。なんとなく、こじつけの感じ。むりやりに題名に結びつけたようで、四編中、唯一つの現代物だけに、もっと趣向のある構成が欲しかったと思います。

第四位、京剣児先生。先生の持ち味の表面だけが表現されているようです。裏窓的要素はほとんどなし。書店店頭に乱雑にならんでいる時代読切小説集のなかの作品のほうが、むしろもっと突っ込んで書いてあり、同じような構成の小説も、通俗誌にあるほうが、生き生きとしています。

（京都・光谷東穂）

▼「花と悪銭」風松英之介氏のものが一番よかった。四作品のなかで、もっとも裏窓的描写に富み、舞台の設定、時代の設定も一番いいようだ。二番目は京剣児氏、場所の設定はおもしろいし、すこしは裏窓的描写もあるが、ストーリーが安っぽい映画によくあるやつで、おもしろみを欠く。三番目は井村錠氏。妓とお露をみまちがえるところなど、筋としてはおもしろいが、話の運びが早すぎ、やはり裏窓的描写にとぼしい。四番目は、松山省一氏。柚須利という主人公の名前がおもしろい。都庁で問題になったような事件にヒントを得ているようだが、SM的描写にとぼしい。

（東京・栄田町夫）

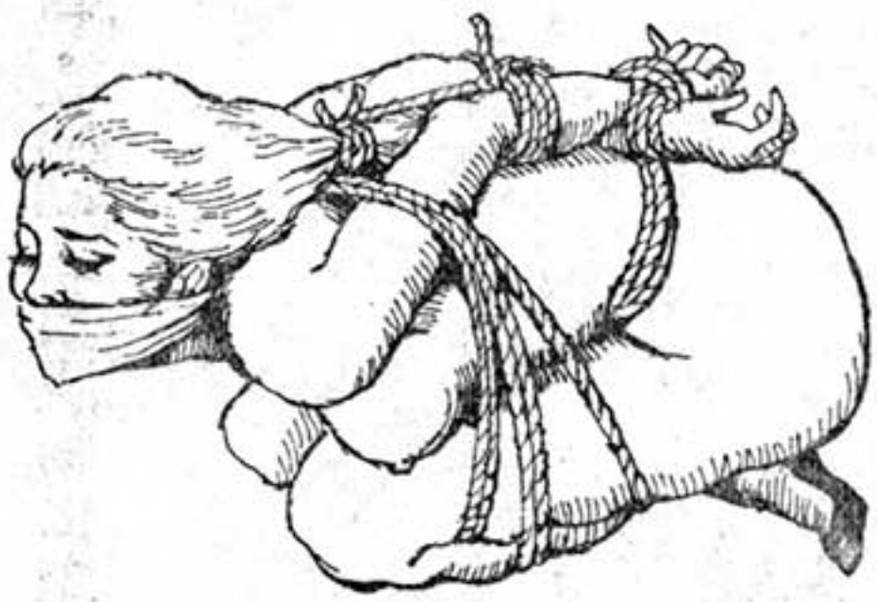
▼「花と悪銭」風松英之介氏のものがよかった。花屋のお千代を木

ギプスに閉じ込められるのです。それから、セルロイドや鉄柱のコルセットもさかんに使われています。

この現在のお話はまたいずれ、といたします。

なぜ、整形外科の話をこんなに申しあげたのでしょうか。整形外科は、お医者さんがよほど注意してくださらないと、よほど患者のためを思っていただかないと、白昼公然と社会正義の名のもとに、堂々とおこなわれる拷問になりかねないからです。

もし、そこに誤診や治療の行きすぎがあったら大変です。現在でも、患者は、中世の拷問となんら変わらない、正視にたえむごい治療を受けなくてはならなくなるのです。



★「花と悪銭」読者の批評集★



馬にのせるところが、一番おもしろみがある。（千葉・松坂高義）

▼「花と悪銭」京剣児氏のものが一番よかった。浪人侍の活躍と遠山金四郎の使い方が、大変に上手だと思った。全体の流れとしてはスムーズに流れすぎた傾向があるが、作品としてまとまっている点がよかった。（神奈川・KT生）

▼「花と悪銭」井村錠氏のものがよい。みどころがすくないというか、ズームレンズのピントが合わない感じ。しかし、人間の表裏の心理を描いた点で感心した。

（東京・代々木清一）

▼「花と悪銭」松山省一氏のものが一番おもしろかった。軽いタッチの内容で、全体の動きがユーモラスであり、最後のクライマックスで、どんでん返したつもりが、またどんでん返されるところなど本作品における作者の、もっとも得意中の得意をみせたところですかな。

（静岡・宮田保）

▼「花と悪銭」風松英之介氏のもの。限定された特殊な舞台での事件。ちょっと考えた復讐だと思った。

（広島・弘田久仁夫）

▼「花と悪銭」井村錠氏の作品が一番おもしろかった。女主人公の扱い方に、いままでの小説にはない新鮮などんでん返しがあった。ただ、この雑誌の特殊性から離れた筋立ては、惜しかった。（H）

★編集部より★

先月号（二月号）に掲載した四編の「花と悪銭」への読者のみなさまのご投票は、一月十日現在で百九十八票に達しました。

内訳は、風松英之介八十八票、井村錠四十四票、松山省一三十四票、京剣児十票という所です。

この投票および寸志の写真贈呈は、一月十五日をもって、しめきらせていただきます。

なお、来月号（四月号）にも、このような競作を企画しております。ひさしぶりに、S小説界の巨匠・円城寺達先生がご執筆をお約束くださいましたので、乞う、ご期待というところです。またご投票をおねがいいたします。

●映画・演劇・出版物に現われた

現代マゾヒズム文化時評 ㉔



森下高茂

イタリアモード誌

「ラ・ドンナ」（一九六三年七月号）

エルメスというデザイナーが、いくつかのモードをこの号に発表している。その中の二つが、ここにかかげる写真AとBである。

Aは上下ともに布のものでクラシックな感じのものである。写真そのものの撮り方、モデルの表情などが、たくまぬ魅力をたたえている。

これを考えると、とくに女性用のオート・クチュール（ハイ・ファッション）に、このようなモードが現われたことが興味をひくのである。

今や西欧諸国は、従来保有していた植民地を失いつつある。それは人種平等という大義名分をかかげ、多くの場合、流血と紛争の末に独立という形でおこなわれつつある。

たとえば白人コロン達は、かつて牛馬のごとく黒人達を酷使していたのだが、かれら自身が受けた高等教育やキリスト教的道徳によって受けた恥辱とは異質のものである。

のものは、前のAにくらべて目的が多様ではあるが、アフリカの言葉から転用したサファリ（旅）は、白人による蛮地の探険征服という意味から、猛獣狩りの旅という意味でも使われている。

これを考えると、とくに女性用のオート・クチュール（ハイ・ファッション）に、このようなモードが現われたことが興味をひくのである。

今や西欧諸国は、従来保有していた植民地を失いつつある。それは人種平等という大義名分をかかげ、多くの場合、流血と紛争の末に独立という形でおこなわれつつある。

たとえば白人コロン達は、かつて牛馬のごとく黒人達を酷使していたのだが、かれら自身が受けた高等教育やキリスト教的道徳によって受けた恥辱とは異質のものである。

のものは、前のAにくらべて目的が多様ではあるが、アフリカの言葉から転用したサファリ（旅）は、白人による蛮地の探険征服という意味から、猛獣狩りの旅という意味でも使われている。

これを考えると、とくに女性用のオート・クチュール（ハイ・ファッション）に、このようなモードが現われたことが興味をひくのである。

今や西欧諸国は、従来保有していた植民地を失いつつある。それは人種平等という大義名分をかかげ、多くの場合、流血と紛争の末に独立という形でおこなわれつつある。

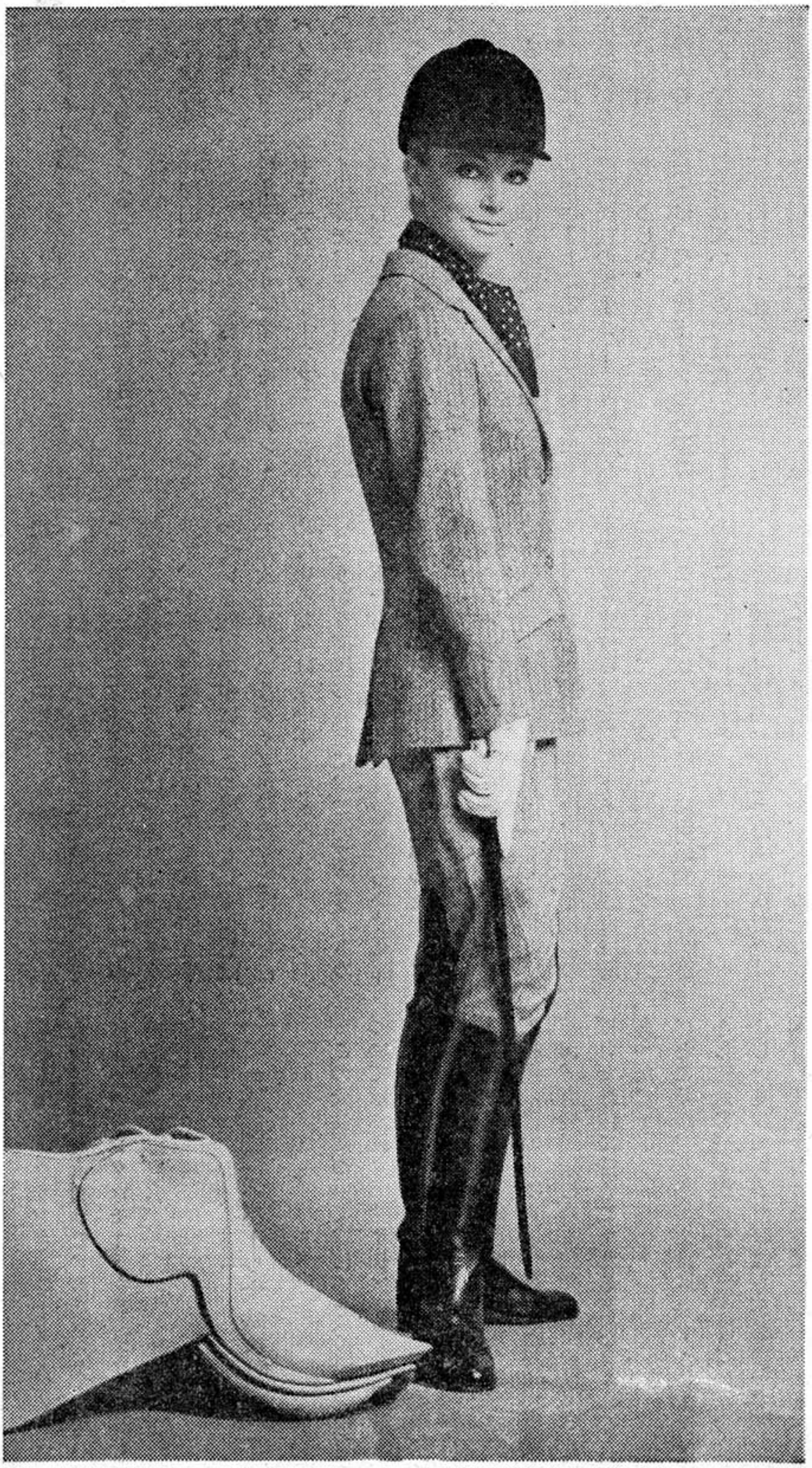
たとえば白人コロン達は、かつて牛馬のごとく黒人達を酷使していたのだが、かれら自身が受けた高等教育やキリスト教的道徳によって受けた恥辱とは異質のものである。

エルメスというデザイナーが、いくつかのモードをこの号に発表している。その中の二つが、ここにかかげる写真AとBである。

Aは上下ともに布のものでクラシックな感じのものである。写真そのものの撮り方、モデルの表情などが、たくまぬ魅力をたたえている。

Bはサファリと名付けられた上下コンビネーションになったキュロットであるが、かつてのものは、少なくとも私の知るかぎりではめずらしいものである。

とくに「サファリ」と名付けられたこの形



こうした汎欧州とも言うべき全欧州人のやる時代の象徴ともいうべき、この一作（モーとして、その一端をのぞかせたと言えば言いすぎだろうか。

ともあれ美しい女性が、有色人種を頤使す

ド）は、作者エルメスの元来のアイデアと関係なく、私達の一部の「白色女性に対するパギスム的マゾヒスト」を、十分に堪能させるすじのものであろう。



■写真A

西ドイツ誌

「プラリイネ」(一九六〇年八月二日号)

非常に美しい印刷で有名な、ハンブルグで出版されているこの一般女性誌は、とくにこの号はモード特集「プラリイネ・モーデン・パノラマ」の中に「アマッオーネン・一九六〇」というタイトルで、五種類の新しい乗馬服のモードを紹介している。

それぞれについての詳しい説明は省略するけれども、中でも捨てがたい一枚をここにかかげる。(写真C)

古来、ドイツ人はこの種の服装の女性を好む。なにもバルキュールに範をとるわけでもあるまいが、同系民族のオーストラリアでもその傾向はいちじるしい。

「雄々しい女性」は、長い間ドイツの男達の頭の中で偶像視されていたのではないかと思われる。そういう裏付けが見られる。

ちなみに一九一〇年～二〇年代の有名な写真家ドーラ・ベンダの作品の中にも、かぞえきれないほどの≪長ぐつをはいた女性、朝の乗馬に行く女性、アマゾンとしての女性、馬にまたがって≫等の題名で発表された。これらおびただしい乗馬女性および乗馬服の女性に関する作品である。

ベンダは、今でいうグラマー派の写真家であった。だからヌードの中にこの種の作品が数多くある。ということはやはりオーストリア、ドイツでは、女性美というか女性が持っている魅力の中に、この種の≪長ぐつをはいた女性≫というタイプが、大きな部分を占めているのではないかと考えられる。

ともあれプラリィネのモード・パノラマは大変に鮮明な色刷りで、さりげなく私達の前にショッキングなモードを見せてくれたものである。

東京国際スポーツ大会より

この大会について詳しくその内容や意図についてはふれまい。オリンピック知事をいただく東京都の無理押しプランの一つの現象であった。

近代五種という純西欧的な種目が、はじめて私達の目の前にあらわれ、国際的な馬術競技が、有史以来この≪東洋の赤い盲腸≫と呼ばれた島国に持ちこまれるというふれこみであった。

ところが、その実体はニュー・ジーランドから数人の選手が来日しただけという大変さびしいものであった。にもかかわらず私達は期待していなかったすばらしい数シーンを眼底におさめることができたのである。ラウというニュー・ジーランドの女性馬術選手の騎乗法は私達がよく知っているそれとは、まったく違っていたからである。

彼女は他のニュー・ジーランド選手と同様



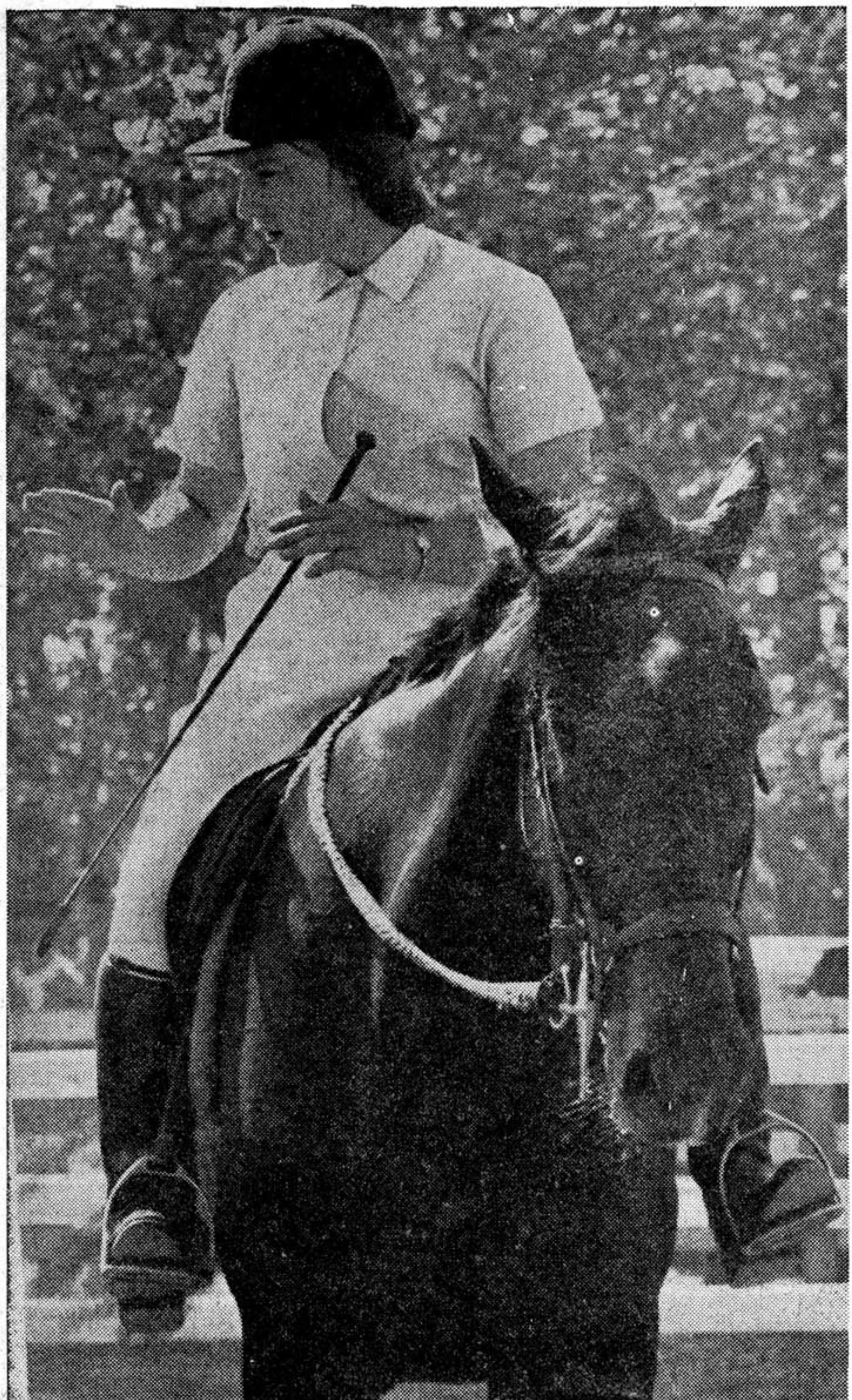
写真B

に緩急のない定速で障害に向かい、スムーズな動きを見てとったのである。（写真D）に飛躍した。しかし私達は障害の数歩手前から、はげしく精いっぱいの意地悪さで観客に気づかれないように上半身はおろか、上半脚さえも動かすことなくラウ女史の表情ゆたか





■写真 C

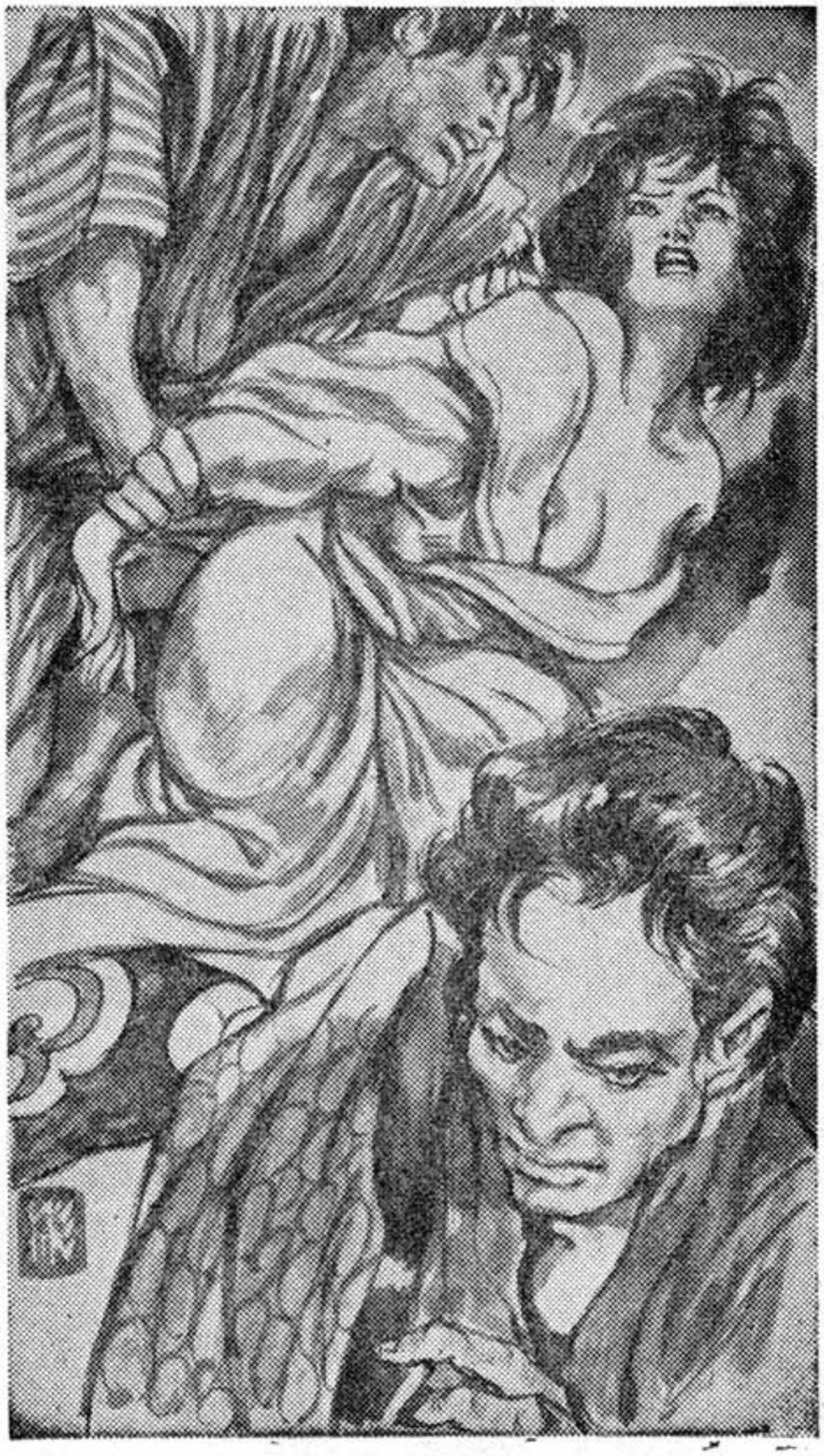


■写真 D

■私の愛した女優

多ア坊のこと

北野竜一
山田彬弘・絵



私はほとんど五年ぶりで、大阪の土を踏んだ。というのは私が大阪を離れた昭和三十三年頃からいうのは私が大阪を離れた昭和三十三年頃からいわゆる全ストブームが関西に捲き起こったからだった。始め京都の東寺劇場という建ち腐されになりそうな芝居小屋から発祥した全ストショウの流行は、好むと好まざるとにかかわらず燎原の火の如く京阪神地方を席捲した。それは場末の小さな劇場から次第に都心の劇場にまで拡がって来た。もう、文芸部の必要はなくなっていた。

――悪貨は良貨を駆逐する……私は自分の胸にそういい聞かせて、昭和三十三年の暮近く大阪駅から東京へ引き揚げた。

その後の関西ショウの発展は、全ストショウから、ベッドショウ、そして、特出しショウと発展していった。特出ショウとは読んで字の如く、〝特別に出す〟ショウなのである。

なにを特別に出すのかは、いわずと知れよう。とにかく、特別に出すのである。あからさまに懇切丁寧に、かぶり付きの客からエプロンステージの両側に並んでいる客にいたるまで、一人ひとりに、しゃがんだり、拡げたり、中には自分の手で部分部分を詳しく紹介するのもいる。

「どのくらい出すかによって、値が決まるんやからなァ」

と自嘲するのは、関西の興行師の口癖だった。

その結果が五年後の今日、出しても出しても客の反応が無くなってしまったのだ。つまりどのように出しても客の神経は痲痺して以前ほど来なくなってしまったし、オリンピックを控えて、取締り当局もそうそうお目こぼしをしてはいられなくなったらしく、相次ぐ検挙によって、関西の全ストショウは窮地に追い込まれてしまったのだった。

そんな時、

「先生、一つ関西のショウを、むかしに戻してくれへんやろうか」

という使いが、私のところへ来た。

「へえ、先生も知ってなはるやろうけど、道頓堀のD劇なァ、あてが今度、経営者が代って、すっかりデラックスに改装しましたんやそいでまあ、この際思い切って、特出しをやめて、昔のような、つまり今の東京のようなヌードショウにしたいと思いましてなァ」

みなまで訊かず私はオーケーした。

そして、実に五年ぶりで、私は大阪の土を踏んだという次第なのである。

なるほど改装したD劇は、目を見張るほどの豪華な劇場になっていた。広々としたロビーには赤い絨毯が敷きつめられていたし、客席のシートは柔らかく、もちろん冷暖房完備だし、どう考えても、ここで全ストショウをやるにはふさわしくないゴージャスな雰囲気が溢れていた。

「どないだ、これでは特出し出来へんでっしゃろう」

と、私を迎えに来たO氏はそう云って、得意そうに笑った。

「久しぶりで飲みに行きましょう。珍しい子がおりまっせ。一つ先生に口説いてもろうて舞台に出してもらわんことには」

「というと、ホステスかなにかで?」

「そうでんが、全くホステスなんぞにしとくのもったいのうて、あの子がおったら、特出しよりぐっと色気あるよってなァ」

「だれです、いったい?」

「まあまあ、それは見てのお楽しみ。さあ行きまひょ、行きまひょ」

K氏は浮き浮きと私の手を引きずるようにして、外へ出た。

「五年ぶりだなア」

またしても、私の胸に感慨が湧いてくる。

すっかり夜の粧いをこらした、〝ミナミ〟の繁華街は、生き生きと脈動していた。道頓堀の暗い河面に映るネオンの灯も、心なしか以前より増えているようだったし、戎橋の上には街頭のカラーテレビを見る人でいっぱいだった。

宗右衛門町にある東洋一といわれるマンモスキャバレー〝M〟へK氏は入って行った。

巨大なドームのようなそのキャバレーも満員に近い盛況だった。

「いらっしゃいませ、ご指名は?」

とボーイが近づいて来る。

「――」

K氏はそのボーイに低声で何やら囁いた。

「いま来ますよってなァ、まあ、一杯」

K氏は悪戯っぽくそういいながら、ビールのコップを私の方に押しやった。

2

「やァ、先生!!」

大ゲサにおどろいたような声がして、私の目の前に現われたのは、多ァ坊だった。

「なんだ、君、多ァ坊じゃないか」

私も少なからずおどろいた。

「どうだ先生、びっくりしましたやろ」

K氏は得意そうにグッとヒールを飲み干した。

「――」

私はしばらく無言で、〝多ァ坊〟こと、川田多美子の顔を見つめていた。

「いややわ。そんなに見つめはって」

「だって、君がキャバレーのホステスとはねえ」

私は実感をこめてそういった。

川田多美子は、大ゲサにいえば、日本のストリップショウの初期からつい最近までの日舞ショウのスタアだった。

そして、その最初から、私はその川田多美子の成長を見守ってきた一人なのである。

「大阪へ帰ったって噂は聞いていたけど、まさかこんなところでねえ、僕はどこかの舞台で多ァ坊を発見出来るとは思ってたけど」

「そやかて、いま、いくらなんでも大阪の舞台へうちよう出られしまへんわ」

多ァ坊はちょっと怒ったような顔でいった。

「先生、多ァ坊をな、うちの舞台に出てもらおうと思ってな、ワシが随分いったんやけどアカンいいますねん、そやから今晩先生に口説いてもろうて、と、こないな思って来ましたんや」

とK氏はそういうと、

「よろしゅう頼んまっせ、ワシ、ちょっと他に用がありますよってな、そんなら多ァ坊お勘定これでしといてや」

一万円札を三枚、多ァ坊の手に握らせて、

「おさきに。先生頼んまっせ、ほんまに」

K氏はそういって席を立った。

「多ァ坊少し肥えたのとちがうか」

私もつい大阪言葉になってそういった。

「年増肥りやね、もうアカンわ」

多ァ坊は昔と変わらぬ、色っぽい涼しげな眼でそうこたえた。

「年増肥りって多ァ坊はまだ――」

「年のことわんといて。先生はうちの子供の頃からの知り合いやよってなァ」

「うん、もう十年以上になるね」

「そうや。先生にはずいぶんイジメられたし」

「僕だけじゃないだろう。多ァ坊は僕よりもっとイジメてもらった先生がいたろう。どうしたい、浅田先生は？」

「よう知らん。なんでも落ちぶれてウロウロしてはるって聞いたけど」

「つめたいんだね」

「――」

多ァ坊は一瞬、空を見詰めるように口を閉じた。

彼女の胸にさまざまな過去の幻影が浮かんだのであろうか――。しかしそれにもましてもぐり込んでしまったこの第一期黄金時代だったのストリップショウの第一期黄金時代だったのだそうである。

それはさておき私はその温泉劇場に出演している〝東京テキサスショウ〟になんとなく持った娯楽場だったことから名付けられた名前なのだそうである。

温泉劇場という不思議な名前は、戦前この劇場の地下にラジュウム温泉があって、つまりいまでいうヘルスセンターのような規模を演中の東京のヌードショウ一座である、〝東京テキサスショウ〟という一座を訪ねた。

阪のジャンジャン横町にある、温泉劇場に出ねばならない事情があった。

なんとかなるさ、そう思って私は、当時、大私が始めて住み馴れた東京を後にして放浪の旅に出たのは。その原因を今ここで触れてみても仕様がないが、とにかく私は東京を離れ

3

その頃――。昭和二十三年の春であった。

ョウの作家がほとんど存在していなかったのも幸いだった。

その頃、始めて浅田日舞ショウが温泉劇場の舞台を踏んだ。浅田一郎というそのショウの主宰者は、関西では相当名の売れた上にグロ劇の役者だった。その浅田一郎が、まとまった日舞もののショウが関西には無いのに目をつけて、自分の一座から目ぼしい女優を引き抜いて作ったショウだった。

「すんまへん。ちょっと舞台見てやっておくんなはれ。東京の先生に見てもろうたら、よいか悪いか判りますさかいなァ」

ある日、その浅田一郎は、汚ない楽屋でゴロゴロしていた私のところへきて、そういった。見るからに精悍な、どう見ても役者とは見えない小肥りな浅田は、分厚な下唇を舐めながら、それが癖なのか、眼を激しくパチパチさせて頭を下げた。

私はウソ寒い客席に廻って、その浅田日舞ショウの舞台を見た。関西風のコッテリした日舞ショウの中で、私はその時始めて、川田多美子を見たのである。

それは、お夏狂乱をテーマにした踊りだった。

向う通るは清十郎じゃないか、

笠がよう似た　菅笠が——

そういう曲に乗って、襟元と裾を乱した、川田多美子のお夏が、笹の葉を片手に、うつろな瞳で登場してきた。

私は、それを見た瞬間、これはイケルと思った。

イケルというのは、直感的に、その俳優がスタアになれる素質を持っているということである。まさしく川田多美子は、その一人であった。ちょっと説明しにくいが、スタアになれる素質というものは、舞台に気品と大きさを感じさせることをいうのである。



舞台のお夏は、伴奏に乗って踊り始めた。そこへ、浅田一郎扮する雲助が出て来る。それから始まった嗜虐的なシーンは見ものであった。

気の狂ったお夏を、雲助はこれ幸いとばかり裸にして荒縄でしばり上げる。まだ幼い白い肌とピンク色の乳首が無残に荒縄でしばり上げられて、赤い湯文字一枚のお夏は悶えるのである。

浅田一郎扮する雲助は、ゆっくりと楽しむように川田多美子の白い肌を痛めていった。

それは見ようによっては演技ではなく、自らも楽しんでいるような仕科だった。

私は楽屋へ戻って来て、

「あの、お夏をやった子はイケますね」

といった。

「はあ、あの子でっか。あれは川田多美子ちゅうて、うちの子飼いですさかい、六つの時から子役で舞台出てまんねん。ようい うことをききますわ」

浅田一郎はまだ少し血走っている眼付きでそういった。

「多ァ坊、ちょっと来てみい、東京の偉い先生や、ごあいさつせんかい」

浅田は楽屋へ声をかけた。

白いタオルの楽屋着を着た川田多美子が、

「川田です、すんまへん」

といって私の眼の前へ現われた。

「なかなかよかったよ。しっかりやんなさいい」

私はそういって激励した。

「大きに」

多美子は、伏目勝ちに答えると、

「父ちゃん、もう少しゆるうに縛ってほしいわ。痛うてかなわん。こないに跡ついてしもうたわ」

と、楽屋着の袖をまくった。白いかぼそい二の腕に、真赤な縄の跡がくっきりと二本ついていた。

「それでいいんや。お前みたいにまだ芸のまずいもんは真剣にやらんと見てられへん。そうでっしゃろ、先生」

浅田は、多美子の細い手首を摑むと、

「こないにすると痛いか」

といいながら、ねじり上げた。



「痛いッ!!」
多美子は、大げさに顔をしかめた。
「そら見い、そういう表情が芝居で出せるようになったら一人前や」
浅田は大きな声で笑った。

4

それから一年ほどして、浅田日舞ショウは東京の浅草ロック座の専属として迎えられて行った。
川田多美子は浅田日舞ショウのスタアからロック座のスタアとして、その名が知れ渡っていった。
年配の、といっても、三十代から四十代の男が出来た。ご多分からずいることと思う。
ファンなら、ロック座の浅田日舞ショウを知っているだろうし、そこのピカ一スタアだった川田多美子の舞台姿に魅入られた人も少なからずいることと思う。
川田多美子の舞台には、えもいわれぬお色気があった。舞台へ出てくるだけで、たいての男は川田多美子の妖しい魅力に取り憑かれた。しかも、それが惜しげもなく白い裸身をさらすのだから、人気の出るのも当然だった。ことに多ア坊の場合は、町娘とか、若妻だとか初いういしい女にふんした時、一層の魅力があった。舐めるようにしてかわいがりたいというのは多ァ坊のような女のことをいうのであろうか。切れ長の眼と赤く小さな唇程よく盛り上がった乳房。その頂点にピンク色の小さな乳首がポツンと滲んでいた。肌は透きとおる程白かった。ことに下半身は少年のように細くしなやかな線でスラリと伸びていた。
全体に小作りで、背は五尺二寸足らずだった。
六つの時から舞台へ出ていたということは必然的に多ァ坊を世間知らずの娘にしていた。恐らく小学校もロクに出ていないに違いない。その証拠に、彼女は芝居の読み合せの時などは誰かにカナを振ってもらった台本をタドタドしく読んでいた。しかし一回読むと不思議に彼女は台詞を覚えていた。頭で覚えるというような感じだった。
そんな彼女に、やがて男が出来た。ご多分に洩れずそれは、浅草の愚連隊のチンピラだった。圭ちゃんと呼ばれるそのチンピラは、いかにもスケコマシのように気障な色男だった。そういうチンピラに手もなく引ッ掛かってしまう単純さが多ァ坊にはあった。
「圭ちゃん、圭ちゃん」
と多ァ坊は夢中になった。
アパートを借りて同棲した。圭ちゃんは色男ぶって一緒に楽屋入りして、一日中楽屋でゴロゴロしていた。
「多ァ坊、パチンコしてくる」
「多ァ坊、ちょっと飲んでくる」
圭ちゃんはそういっては、多ァ坊から小遣いを捲き上げてはどこかへ消えていく。
そのうちに、財布の主導権は圭ちゃんに移ったらしく、
「圭ちゃん、二百円欲しいわ」
「チェッ、また金か、あんまり使うなよ」
というように、立場が逆になって、圭ちゃんが多ァ坊の稼ぎを独占するようになった。多ァ坊は次第にほうぼうに借金が重なっていった。
そして、もうこれ以上多ァ坊から金が引き出せないと思った時、圭ちゃんはどこかへ姿をくらませてしまった。
多ァ坊は舞台をそっちのけにして、圭ちゃんの行方を探した。そして、その心労から胸を患らって、とうとう二年間の療養所生活を余儀なくされた。
私は、川田多美子が浅草の舞台で人気を得るようになった頃、再び東京へ戻っていた。
そして不思議なことに、多ァ坊が療養所へ入ってからしばらくすると、私は再び関西へ

放浪の旅に出てしまったのだ。まるで私は多ァ坊の後を追うような行動だった。

今度の放浪は、名古屋、神戸を経て大阪の土を踏んだ。当時は、といっても昭和三十一年頃だったが、どこへ行っても、おかげさまで私は、歓迎された。

そろそろストリップショウが一つの頂点を過ぎた頃だったので、どこの劇場でも新しい企画を求めていたからだった。

そして、再びジャンジャン横町の温泉劇場に来たのは、昭和三十一年の正月だった。温泉劇場は三十年の暮から大改装を加えて、冷暖房完備の近代的な劇場になり、そのコケラ落としに私は呼ばれたのだった。

時を同じくして、川田多美子は足掛け二年にわたる療養所生活を終えて、大阪へ戻って来ていた。

「やァ、先生！」

多ァ坊は例の人なつこい笑顔で、私を迎えた。どういうワケか、今度もお夏狂乱の衣裳をつけていた。

「なんだい、またお夏狂乱かい」

「そやかて、ここの専務さんどないしてもお夏狂乱やれ言うんやもの」

「へえ、だって今度は浅田の父うちゃんがいないじゃないか」

「へえ、うち一人だって出来ますさかい」

多ァ坊はちょっと怒ったような顔でいった。

「ごめんごめん、多ァ坊はもう昔と違ってスタアだからな」

「でも先生、うち困ってんのよ。浅田の父うちゃんがここへ来るって言うの」

「浅田さんが？」

「いえ、父ちゃんいま困ってるらしいねん。それで、こんな台本送ってきて、温泉でやってくれるように話してくれいうのよ」

多ァ坊は化粧前の上に乗っていた分厚い脚本を取り上げた。

〝大陸暴行列車〟　浅田一郎・作――と大きな字で書いてあった。

その頃の流行として〝大東亜戦争強姦史〟などというショッキングな題名をつけた愛欲劇が各地のストリップ劇場で上演されていた。いってみれば、浅田にとっては自分で十年ほど前やっていたエロログロ劇の復活のようなものだった。

「浅田さん、きみがいなくなってから、ショウを解散したらしいからね」

「そうやね。そやから、うち父うちゃんには すまんことした思ってるわ」

「よし判った。浅田さんの脚本来週でも上演出来るように僕から話して上げるよ」

「すんません」

珍しく多ァ坊はシュンとして、涙ぐんだ。

浅田一郎は数日後うらぶれた姿を温泉劇場の楽屋に現わした。

「放送局へ行って、機関銃の音や大砲の音の効果全部テープへ入れてきました。ついでに台詞もワシが一人何役もやって全部入れてきましたよって稽古しやすいですわ」

浅田はそういって、分厚い下唇をなめた。

5

私はフト、女の悲鳴を聞いたような気がして目を覚ました。

ジャンジャン横町の一角にある古びた旅館の一室だ。そこは私の大阪滞在中の定宿だった。

釜ガ崎のベッドハウスよりはいくらかましだったが、いってみれば昔の商人宿のような安宿だった。

二階の奥の四畳半が私の部屋だった。かすかな女の悲鳴らしいものは、隣りの部屋から聞こえる。まくらもとの腕時計は二時を廻っていた。まっくらな室内に二条ほどの灯りが洩れて、縞模様を作っていた。

隣の部屋の灯りが洩れているのだ。安普請

の有難味はこういうところにある。私は、音のしないように起き上がると、布とんをかぶって灯りの洩れてくる壁に近ずいた。

壁と柱の間の隙間から覗いた隣室は、この世の地獄絵だった。

部屋の片すみにある塗りの剝げた衣桁掛けに、何やら真白いものがへばりついていた。

視線を定めてよく見ると、それは、若い女の肉体だった。

グルグルと白い細引が衣桁の横棒に平行して、両手を縛りあげられている。両足はこれも衣桁の下の四隅に固定されていた。

「ええか。もっと苦しげな声出すんや。お前はな、シナの女スパイやで。それも八路軍の女兵。それが日本軍につかまって、拷問を受けてるところや、これがこの芝居のヤマや。判ってるか」

太い聞き覚えのあるダミ声だ。浅田一郎の声に間違いなかった。

すると、縛られている女は——。

川田多美子に違いない。

「もっと、ヒイヒイ、いわんかい」

浅田は手にした皮バンドで、白い肉体をピシリと打った。

「ウーッ」

と声を殺した多ア坊の悲鳴が洩れる。

「そんな声じゃあかんのや。いいか、お前は素ッ裸に剝かれて天井から吊り下げられて、足の下には真赤に灼けた鉄の板があるんやで」

「父うちゃん、もう勘忍して。本番になったらうまいことやるさかい」

多ア坊は押し殺した低い声で訴える。

「あかん。稽古で出来んものが本番で出来る筈がない。足の下には火が燃えてるんやで」

浅田一郎の大きな背中が動いて、川田多美子の白い足許にうずくまった。マッチをする音がして、煙草に火をつけたらしい。

「ええか。これより熱いんやで」

煙草の火が、白い足の裏に近ずく。

「多ァ坊。お前はわしを裏切って、わしのところから逃げた」

浅田はネチネチとしゃべりつづける。「その罰や。お前は小さい時からよくこうしてわしにいじめられたやろ。お前はわしのかわいい玩具やった。いじめればいじめるほど、おもしろくなっていった。そのかわいい玩具を見ず知らずの他人に取られて、わしは泣いたで——」

そういいながら、ピシッピシッと皮バンドを振るった。

「父うちゃん、かんにんしてッ」

「かんにんせえへん。かんにんせえへんで」

浅田は、多美子の柔く白い肌のあちこちをつねり上げ始めた。

真ッ白い肌に紅い痕がついていく。

私は息を呑んでこの光景を覗き見ていた。

そして、浅田一郎と川田多美子の秘密の一部分に触れた思いがした。

つまりこの二人は、師弟であり恋人同志であり、また、いわゆるサディストとマゾヒストであったワケなのである。川田多美子は浅田一郎によって飼育された一匹の白い女獣なのだ。

そういう関係でこの二人は反撥しあい、憎み合い、そして時には愛し合うのである。

私はそこに、原始的な男と女の愛の姿を見たような気がした。

一晩中、寒い冬の夜が白々と明けるまで、この奇妙な男女の遊戯は続いた。川田多美子は恐るべき忍耐で、浅田一郎の責めに耐えていた。いや、むしろ、よろこんでといった方がよいのかも知れないのだった。

★ マゾヒズム画廊 ★

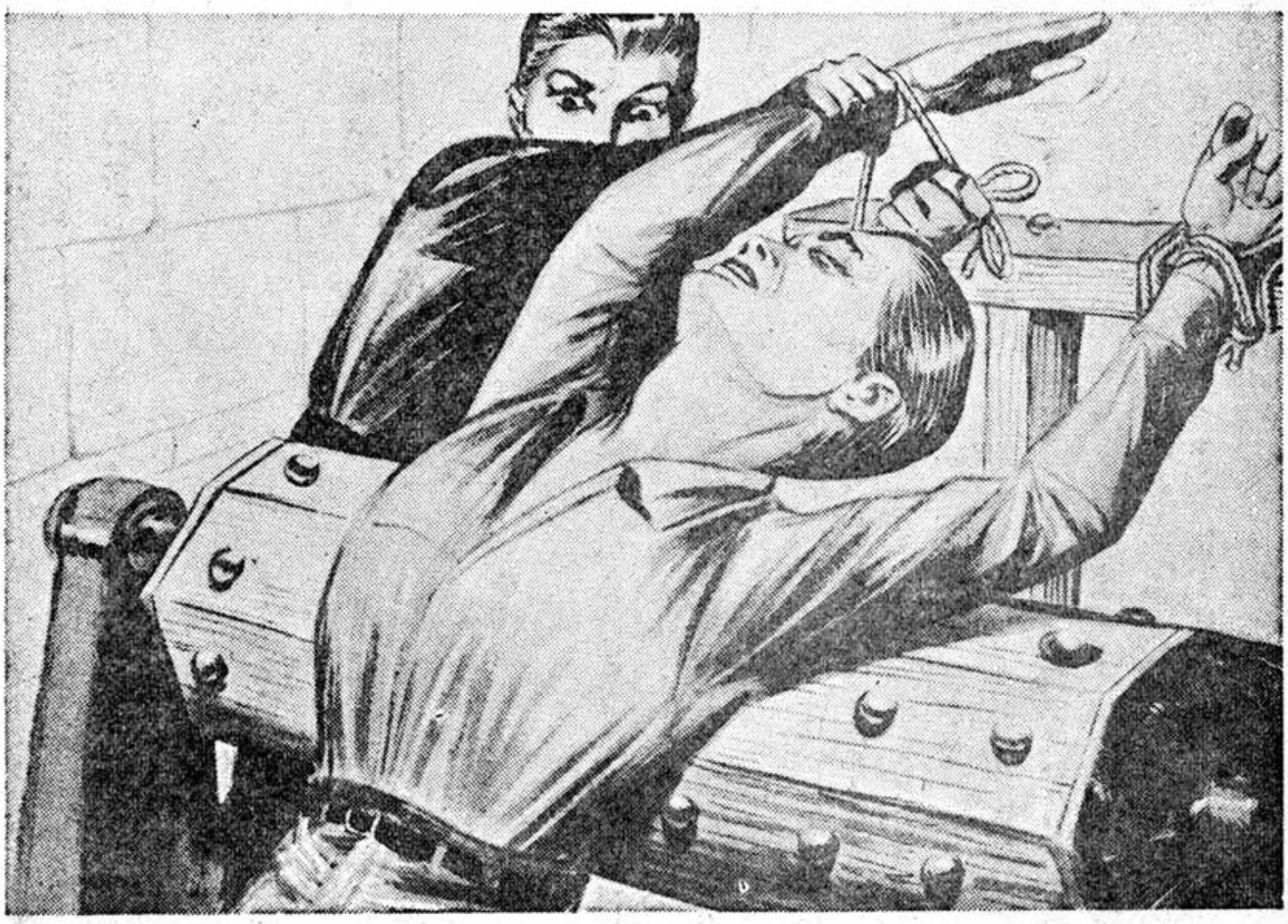
「拝啓、昨年十二月号の〝マゾヒズム画廊〟の大量掲載ありがとうございました。なかなかバラエテイに富んでいて楽しかったのですが、惜しむらくはあれを、グラビアかオフセット印刷で発表してくれるべきでした。しかし、ほかにも多くの傾向の読者もあることでしょうし、あまりわがままも言えないところです。せめて、あのていどの絵でもけっこうですから、ときどきは掲載してください。貴誌はやはり、S派尊重のようですね。たまには私たちM派の読者にも、お恵みをあたえてください」

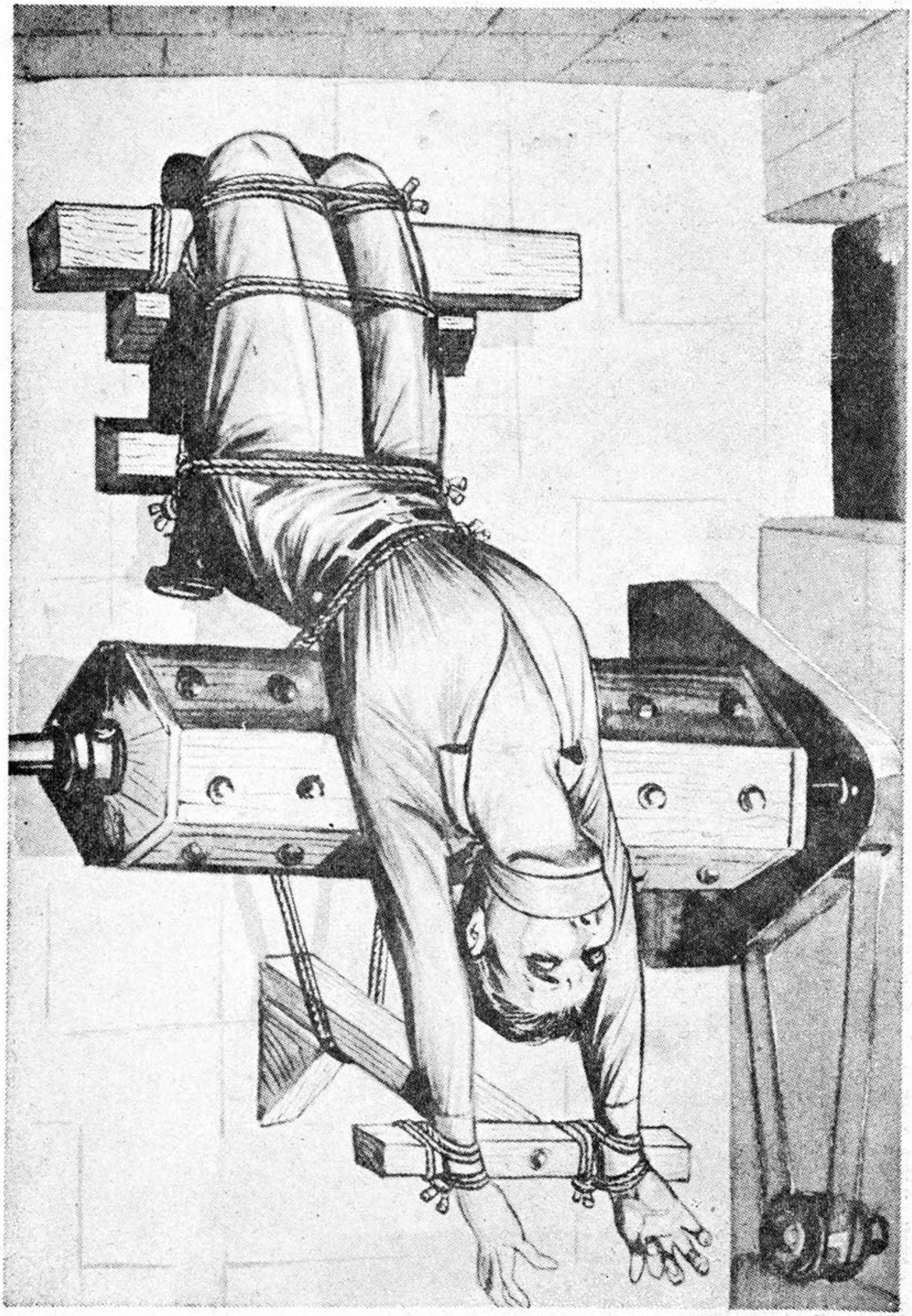
というようなわけで〝マゾヒズム画廊〟のつづきを、六点ほど発表いたします。

この絵には、ストーリーもちゃんとついているのですが、残念ながらいささかお粗末なので、ご紹介するまでのこともありません。

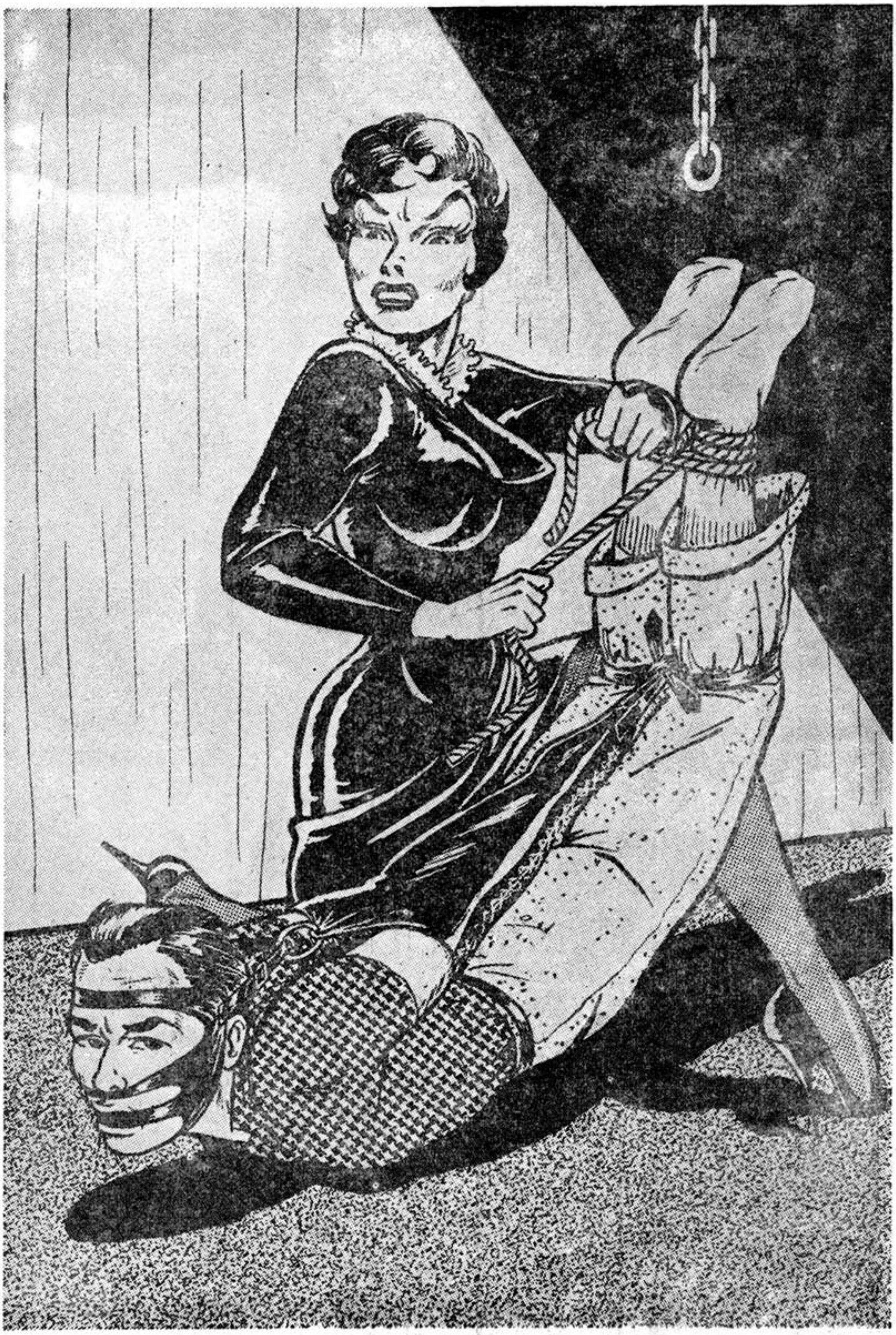
かえって、読者の方がご自分でストーリーを考え、勝手にご想像されたほうが、たのしいかと存じます。

どちらにしても、アメリカの画家がこういう作品を描き、それが印刷されて多くの読者を得ているという事実は興味ぶかいし、そしてまた、この六ページが、ある種の貴重なコレクションになることは、まちがいないと思います。

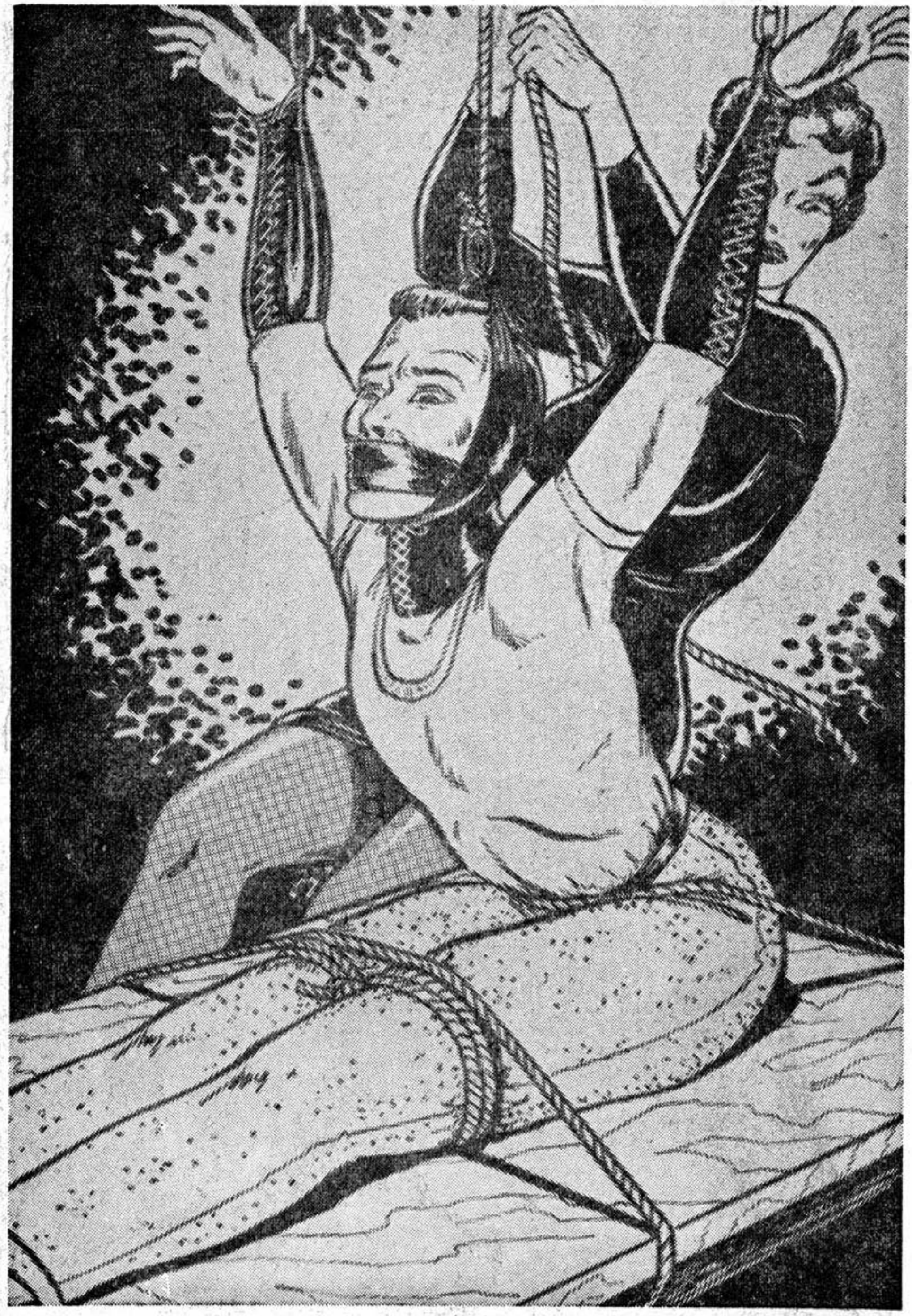





Gun-Moll
disposes of her
unwanted
slave admirer







●回想的ルポルタージュ

浅草の妖魚

間野嶺



汚れフェチ紳士のいる風景

そのころ、わたしはひまさえあれば夜昼となく、野良猫のようにウロウロと、浅草を歩きまわった。

浅草はむかしと変っていた。戦争があったのだ。浅草だけが変らないわけはない。だけど変らないものもあった。

六区の映画街。そして、むかしながらの柳が風になびいているひょうたん池をへだてたむこうがわが、四区とよばれていた。

四区には林泉（うえこみ）が、そっくりそのまま残っていた。雨のふったあとなどは、林泉の樹々の葉がつやつやと濡れていて、風情があった。が、いつもはほこりっぽく、よごれていた。

このあたりに、昼の葉っぱとおなじようによごれている男や女が、昼間からぬたりぬたりとうごめいていた。

えたいのしれぬ布地のズボンの、ちょうど尻のところが破れ、垢だらけの皮膚がいやでも目にとびこんでくる。そんなものを着ているが、べつにどこといって身体に悪いところのありそうもない若者だ。

戦争時代そのままのうすっぺらな作業衣の襟を立てて、ペンチに転がっている中年男もいた。頭にのせているのは、ヨレヨレの戦闘帽。痩せこけて、ひげが長くのびて……。

そうした男たちのところどころに、立ったり坐ったりを無意味にくりかえしている女たちがいた。

ペラペラの紅っぽい人絹のマフラーを首にまきつけ、しわくちゃの男物のズボンをはいた若い女がいる。ズルズルとひきずるような、縞目もなんともわからないスカート——といえばいえるらくずのような——をつけて、髪にわのものをくっつけている中年の女もいる。みんな眼脂をためていた。

これが、コジキや浮浪者あいてのジキパンだ。

夜の闇が林泉にかぶさってくると、ジキパンたちは、客をだいて木の根っこのところへひっくりかえる。夜はありがたい。淡い、木の間洩れの月のひかりだから、女のからだの垢はみえず、股倉はなまじろく光って、いっそ男をそそる。

ここに一組。たいして離れていない木影にはまた、べつの一組。ガスパ以上の混濁であった。

こんなジキパンに、シャンとしたセビロ姿の〈紳士〉が、夜陰にまぎれるといったふうに、声をかける情景を、わたしは一、二度みたことがある。

刑事……なんかではもちろんない。このころは、刑事自身の家人ですらが、あすの配給物をとる金ほしさに、巷に立って通行の男の袖をひいた、という乱世の時代だったのだから。

ではジキパンに声をかけたのはなにか、というと、これは汚れフェチッシュの男、とわたしは読んだ。かれらはあいての女がよごれていればいるほど、その歓びも強くそして大きいのだ。

が、ジキパンのほうは、客が〈紳士〉であろうと、よけいにオタカラを貰っていようとよけいな奉仕はしない。ひるま日向ぼっこをしているときのような、表情のない表情でいてをする。強いていえば、それは白痴の表情といおうか。

そして、更にわたしは想像を逞しゅうする。彼女の客の汚れフェチの〈紳士〉は、わが家へ戻ると、ジキパンをだいた手で、おしろい塗った、ざーますコトバの妻の体を、こんどは自分がジキパンのような、つゆほどの感激もない表情で、だくことであろうと。

タイツをつけた春婦

ふつうのパンスケ――というのもおかしなコトバだが――は、やはりこの林泉のあたりに多くでていた。それから、彼女らが〈奥〉とよんでいた、林泉の奥の藤棚のあたりに、昼間からもう、早出の夜の天使たちが、出動していた。そうして四人五人グループとなって、たむろし、いつもペチャペチャと声高に喋べくりあっていた。

わたしはすぐに、彼女らと顔なじみとなり、懇意となった。女たちはわたしを地廻りの風来坊と思っているらしかった。じじつ、風来坊以外のなにものでもないわたしだった。

藤棚組のなかに、ひとりきわだって他とは変った、十八、九の女がいた。なかまたちのライオン頭のような、パーッと大きくひろがったパーマ髪とちがい、癇性らしいひッつめ髪、ほそおもての蒼白の顔には、いつも青メガネをかけていた。

身装りがおもしろい。上半身にはジャンパーかセーターか、あるいはハデなアロハシャツだが、下肢には、どこでみつけてきたのか黒のタイツをつけ、ゲタばき、という格好なのだ。

なかまたちとは、あまり談笑するようすもなく、たいてい、藤棚ちかくの捨て石などに、ひとり黙々と腰をかけていた。どこかういういしい、処女のいろけのようなものが、彼女から感じられた。

公園のポリスマンや、なかまたちから、「青メガネのカヨコ」と彼女はよばれていた。

このカヨコと、わたしはとくに仲よくなった。話してみると、カヨコはわりとよく喋べった。パンスケ稼業の裏ばなしなどを、なんでもあけっぱなしに、いせいのよい調子で語ってくれるのだ。だから、そのころの浅草の夜の天使について、わたしの奇妙な考現学（モ

デル・ノロジオ）に、他のそれよりは正確性が、もし多少でもあったとすれば、その三分の二くらいは、彼女の力によるものだ。

カヨコのポンポンとまくしたてるような語気、声調、そしてまた色っぽい鉄火さともいえるような態度を目のあたりにしていると、なにかこころよく、彼女にたいしてマゾヒスチックなきもちにひきこまれるのを、わたしは感じた。

林泉一帯に夕靄がたちこめかかると、夜の天使たちはソロソロと、しょうばいの活動を開始する。

「ちょっとオ、あんたア……タバコの火かしてくれない」

こういって、通行の男にちかよっていくのがキッカケ。火がついたら、ふーッとひといき、夜空に鼻をむけて白いけむりをはいたのち、

「ねえ、あそんでかない」

とバンをかける。

これがこのシマの女の、誘客の常套手段であった。

だが、カヨコはこれをやらない。男のほうから呼びかけてくるまで、黙っているのだ。

客がつくと、カヨコはさきにたって、ズンズン歩きだす。ひょうたん池沿いに、公衆便所のある通りにでると、そこを斜めにつっきって、伝法院の裏手から、その寺内へはいっていく。

半壊したり倒れたりしている墓石の間を、二、三分ほども縫っていくと、木立のある、雑草の生いしげるにまかせた空き地にでる。木の間がくれにチラチラと、遠く近く、仲見世の灯がみえる。

ここへくると、カヨコはきまって、

「ちょっと待って」

と男に声をかけて、その場に屈み、タイツをこきおろして、放尿をするのだ。放尿をしながら、あることにたいする男の反応を測るのである。

あることとは、男にすくないといわれるも、たくさんの顧客をもった売笑婦の間に知られている〉うんぬんとシュールケルなども指告している尿心酔――つまり、女尿心酔である。カヨコの場合、十中の三人はこの反応を示してくるといっていた。彼女のような、男のM的心理を刺激するような女にたいしては、スカタロジーのケのある男は、いっそうそのきもちをそそられるのであろう。

カヨコはこのことを、偶然の機会から知った。そしてそれ以来、このテを用いるようになった、ということだった。

なぜ彼女は、このようなことをするようになったかというと――、

まず第一に、そのことによって余分のオタカラを男から貰えるからだ。彼女のネクタールを口にしたい身体にふりかけてほしいその他等々の男のもとめを叶えてやって、売春とは別の代価を、男に請求できるのである。

二つには、その瞬間だけでも、みずからのインフェリオリティ――娼婦であるというこのインフェリオリティを、木の間洩れの灯に光りながらほとばしる水とともに、消散できるのみか、このとき、男の優位に立っているという快感を味得できるからだ、とカヨコはいった。

〈尿心酔の満足は、能動的のも奇動的のをこきおろして、放尿をするのだ。放尿をしながら、あることにたいする男の反応を測るのである。

あることとは、男にすくなくないといわれるも、たくさんの顧客をもった売笑婦の間に知られている〉うんぬんとシュールケルなども指告している尿心酔――つまり、女尿心酔である。カヨコの場合、十中の三人はこの反応を示してくるといっていた。彼女のような、男のM的心理を刺激するような女にたいしては、スカタロジーのケのある男は、いっそうそのきもちをそそられるのであろう。

カヨコはこのことを、偶然の機会から知った。そしてそれ以来、このテを用いるようになった、ということだった。

なぜ彼女は、このようなことをするようになったかというと――、

ある浮浪少女の展覧の稼業

わたしはときどき、木馬館をのぞくのも、たのしみのひとつだった。

木馬館では、レコードの伴奏で、木馬がまわり――もっともご時勢で、木製のジープもあったが――、こどもたちがキャッキャッと

歓声をあげながら、乗っていた。

せまい館内の一角、板壁のなかに、凸面ガラスの大きな鏡がはめこまれてあって、木馬に乗っているこどもたちの姿や、つきそいの親たちの姿が、タテに長細くなったり、よこにふくらんだりの、いびつの形に映していた。

この木馬館で、わたしは顔なじみのター坊という少女と、よく出会った。ター坊は木馬に跨りながら、わたしをみつけると、いつも鏡のなかでベッカンコをした。

そのたびにわたしは、「やっぱりこどもだナ」と思ったものだった。

タミ子とかタツ子とでもいうのか、ター坊のほんとうの名をわたしは知らない。そんなことはわたしにはどうでもよかった。彼女はこのエンコ（浅草）で遊んでいるズベ公のひとりで、エンコのだれの間でも——パンスケや、グレン隊や、小屋者や、またポリスのあいだでも、単にター坊で通っていた。

ター坊は、浅草でなければみられないタイプの、早熟な浮浪少女だった。年齢は十四というが、胸のあたりは成女のように、ざっくりともりあがっていた。歩けばおしりがブルンブルンとふるえる。いわゆる美貌というのでは、決してない。南国的な、浅黒い皮膚の、まるまるとした童顔であるが、こころもちまくれあがったような唇のあたりには、妙に男の情念をそそりたてるような、セックス・アピールが感じられた。じっと人をみつめると きには、その眼に妖しいまでの媚光が、窺われることがあった。一人や二人の男のからだを味わった経験は、ないこともなさそうであった。

いってみれば、暦でかぞえると十四歳、生理的および情的年齢十八歳、智的年齢十一歳、というような少女なのだ。

ター坊には、ひとつの〝かくし芸〟があった。そのかくし芸で、生きる糧をかせいでいた。

男はもちろん、なまぐさい情欲の念でこれをみるのであろう。が、わたしはこのさまを脳裡におもいえがくとき、うつくしい詩情を賞えた。

一本のマッチの火の光圏のうちに照しだされた、春草もほのかな、ういういしくも臈たけき火処（ほと）のすがた。それはたまゆらのひかりのなかのものだけに、いっそう美しい。

わたしは、榛葉英治の、「蔵王」のなかのひとつの章句を、おもいだす。

〈解けるまえのひと握りの雪に似て淡く盛り上り、青白く地が透け黒々と硬質に光って可憐な小鳥の巣みたいに縺れ乱れた下は青白い影に刻まれて、そこに一本の褐色の線。たか子の体が細かく顫えて低く泣き出した〉

うんぬんとある一節を……。

が、ター坊はもちろん、ふるえも泣きもしない。マッチの火が消えると同時に、まくっていたスカートをいきおいよくおろし、

「おしまい」

と勇ましくいうのだ。

この瞬間の鑑賞の代価五十円。前金でとること、いうまでもなかった。

「日に五コはらくにかせぐわよ」

とター坊はいっていた。

後年、ター坊のこのテとおなじようなことをする少女が、街に現われたときいたが、開祖はター坊だとわたし信じている。

「男はみんな見たがるでしょう。だから、思いついたのよ」

とター坊は、この〝かくし芸〟の動機を語っていたが、なおきいてみると、彼女には幼時から、女性には稀少といわれる展覧の性癖があったようだ。

ものごころつくころから、親たちやまわりの者から、自分のはだかの肉体にたいして、賞讃の声を、あびせられつづけであった彼女は、あいてから有頂天になるような愛情をうけるためには、まず衣服をぬいで、はだかのからだを展覧させることだと知るようになったという。

そんなことから、彼女はいつのまにか、他人の前で、しきりにみずからの膚を露出することをこのむこどもになっていた。十一のとき、戦禍のために両親に死別し、彼女は孤児となって巷にほおりだされた。

が、あのころは、孤児など拾ってくれるものなどありはしない。彼女は東京のそちこちを浮浪するようになった。そして、生きるためのすべとして思いついたのが、上記のテである。

だから、「男はみんな見たがるでしょう」うんぬんと、展覧の癖とがあいまって、この方法を案出したとみてよかろう。

では、そうした展覧行為におけるター坊の感覚的のよろこびは如何?——となると、彼女は笑って答えない。

思うに、この〝かくし芸〟をつづけているうちに、そのことへの羞恥の念をしだいにマヒさせていき、金ほしさとともに感覚のよろこび——見られる快感をも感得できることから、この行為をつづけていたのではなかろうか。

もひとつ、ター坊のひとと変っているところは、日に五百円のみいりがあろうとも、ドヤには泊らず、いつも上野で露宿(アオカン)していることだった。

ドヤ代だすのが惜しいなどというのではない。かせいだ金の大半は、口腹の快楽に遣ってしまう。

「アオカンのほうがすきなのよ」

と彼女はいうのだ。それもひとりぼっちで天を戴いて草に伏す。野性である。

所詮は、不逞な純独な、一匹狼でター坊はあるのだった。

次号予告

▶アラビアの城・最終回

零号ハレムの夜はふけて……北園透一郎

▶続・スクリーンに躍るロマンと幻想……藤見郁

▶連載M小説・ゴルドンの記憶……阿麻哲郎

▶私本・男色大鑑・4……かびや・かずひこ

▶体当たりマゾヒズム論・22……水尾究

▶奢れる女神への祈り・3……森本愛造

犬小屋一家の生活

伝法院の寺内、墓地の片隅の雑草のなかに、犬小屋にも似た、屋根の低い堀立小屋があった。

人が棲んでいた。住人は四人家族で、父親らしいのは三十七、八、眼に険のある痩せた男。母親らしいのは、女土方のような、仇っぽいくひっかぶった格好をしていたが、ひどく感じの窺われる三十がらみ。それに十二、三の女の子と十歳くらい男の子であった。

この家族の昼の生活はわたしは知らないが、夜の生活のちょっと変っているさまを、ときおり目のあたりにした。

まず、エンコの夜の天使たちが、そのしょうばいを開始するころから、それを終るまで——つまり夜半の一時二時ころまで、彼女らとショート遊びの客のために、この小屋が提供されることであった。

いれかわりたちかわり、いろいろの女がいろいろの男をつれてくる。前の組が事をすまさないときは、後の組が小屋のそとで待っている。

小屋のなかはというと、地面にじかに荒ムシロがしいてあるきりで、もちろん電灯などないから、真の闇。ただ、板と板のすきまから、そとの光りが射しこんでくるのみだ。

そとの光りは、小屋のすぐ前での焚き火のあかりである。小屋の主人の男とその小さい娘とが、焚き火を囲んで、屈んでいる。火のうえには、手製らしい大きな五徳ようのものがおかれ、そのまたうえに、大きなナベ。ナベの蓋の端から、ほのじろいけむりが、濛々とたちのぼっている。

「あのなかは飲食店の残飯よ」

とパンスケのカヨコが、ナベのなかみの正体を教えてくれた。

それはともかく、この場合、父親は度外視するとしても、十一、二歳の少女が、小屋のなかの男女の声や音を、しじゅう耳にしている、という目撃は、わたしにはショッキングであった。

ショートがおわれば、女はそのつど、小屋の使用料を焚き火の男に払っていく。一回が五十円である。ドヤを使うよりは、その半額ほどですむので、パンスケの頭のいいのが考えだしたわけだ。

が、小屋のあるじのほうは、まとまれば、一夜千円ほどのみいりとなる。それなのに、小屋の家族は、残飯を常食としている、という。

残飯は、母親と男の子とが、公園の飲食店を廻って、もらってくる。そのかわり、というよりも、その礼としてジンギとして、その飲食店の店さきなどを、はき掃除する。なじみの店をひとまわりすれば、二人のさげたバケツがそれぞれいっぱいになる。貰ってきた残飯は、雑炊にする。衛生的でもあるし、栄養価はじゅうぶん——ということも、カヨコが話していくれた。

この小屋の家族の生活態度も、じゅうぶんマゾ的だとわたしは思った。

しかもわたしは、他の春婦の一人が、つぎのような噂をしているのを、きいたことがある。

小屋のあるじ夫婦は、夜半、ようやく自分たちが寝につく時分になると、ふたりつれだって外にでてゆく、というのだ。

前記のターボウのような、露宿癖というのではない。ふたりは寺内の木立のあたりにくると、男は妻の体を樹幹に縛り、木の枝をもって、妻をしたたかに打ちすえた、という。女はしきりに呻きをあげたが、それは情事のさいの嬉声にも似ているように思われた。——おのが常宿へ帰るべく、伝法院の寺内を通り抜ける途中、その情景を二度までも目撃したと、そのパンスケは語っていた。



お福茶の吉次

一匹ぎつね

井村鉦

小向一夢・絵

正月も七日をすぎると、めっきり日の長くなっていることに気づく。

いまも、山の頂に近づいたお天道さまが、見えない棚にでも乗ったように動かず、だいだい色にうるんだやわらかい光を、街道に投げかけている。

（このぶんじゃ、明かるいうちに岡崎にはいれるかも知れねえ）

街道を足早やにいそぐ旅人がふとつぶやいた。

暮れなごむ街道のあたりにはもう人影はなく、旅人の影だけがやけに長い。

いなせな姿である。しぶい縞の旅合羽からのぞく黒の袷、小柄ではあるがキリリとひきしまった足首。伊達にのばした月代も、きれいにそろえられている。それに、ぜいたくな蠟鞘を一本おとしたところは、どうみても仁義を売りものにやくざ渡世。

ここまではいいのだが、ときどき細い目を

いっそう細めて、岡崎の宿を眺める男の顔がいただきかねる。まるで狐でるように白く、こけた頬によ並みはずれに出ッ歯のせいでがほんのときたまである。

ひとかどのやくざに身をやきつねに似ているところから人呼んでお稲荷の吉次、巾着切りが本業である。

この男、元来気が小さく、自分の顔からくるひがみが強で仕事をするなどということってそう仕事が達者というわつもやくざの身装をしているくじった時など、相手が弱いちゆすりに早替わりするのにである。それと、なんの因果わず、たいへんな女好きでおのも原因であった。

そんな吉次なので、いつの間にか仲間うちから爪はじきされ、こうしてを履くようになったのも、もはるばるわらじとはといえば仲間のたれこみで、江戸を追われる身となってしまった。

いわば、一匹ぎつね?の都落ちといえる。そんなわけで小心翼々、ときき吹きぬける野分けにさえも、ぎくりと神経をとがらす吉次だった。

犬の仔一匹いない、と思った行く手の小川にかかった橋のたもとに、どうやら雲助風態の男が道ばたの大石に腰をかけ、のんきに煙草をくゆらしているのに出会った。

吉次が近づいてみるとその男、先ほどから前でヒラヒラさせた。

「親分、岡崎へお泊りで」

「それがなんかおめえとかかわり合いでもあんのかい」

「まあ、そういちいちからまれたんじゃあ、例によって針のように神経を緊張させながら、吉次は男の前を足早やに通りすぎる。先の言葉が出ませんやね。いえね、宿場にゃろくな女はいませんぜ」

吉次はやっと合点がいった。よくみるとこの男、雲助にしちゃあ割合小ざっぱりした身装をしているし、よくしばたたく小さな目も、底に悪意はなさそうにみえる。

「おおきにお世話だがおめえ、いい女でも知っているのかね」

もとより好きな道である。吉次はようやく警戒の色をゆるめた。

「おっと、やっぱり親分衆はものわかりがいい。なぁにね、宿場女郎なんどたァ大ちがい、しんねんとろりとおかいこぐるみで育ってきた、正真しょう明の生娘を、親分さんにおひき合わせしようというんでさあ」

客引きの言うことなんざきまってやがる、よくある手だ、がこういういいちゃもんのつけられかたは初めてだった。吉次は腰をおとし、左手を長脇差にかける。

「からかうなんて、とんでもねえ」

男は吉次のようすにあわてて、片手を鼻の

と吉次は内心苦笑をしながら、ちょい、とこっが傾いた。

辻堂のなか

男に案内されたのは、どこやら村に通じる道らしい。とある辻堂の前まで来ると、男はふいとふり返った。

「へっへっへ、ご本尊さまはこの中で……」

もとより神仏とは無縁な吉次のこと、何さまがまつってあるかに知らないが、みるとまだ新しい堂の扉はぴったり閉ざされて、人の気配は感じられなかった。

「へン、おめえ、たいそうな口をきいたが、これじゃまるで夜鷹か舟まんじゅうと、たいしたかわりはなさそうだぜ。あとで鼻っ欠けになったりするんじゃ、あんまりぞっとしねえな」

どうせこんなことだろうと思った、とうかうか口車に乗ってやってきた自分がいまいましい。

「ま、そういいなさるのも無理はねえだろうが、これもわけがあってのこって、お代は見てのおかえりだ。一度玉を見てやっちゃどうです」

男は自言ありげに言いながら、扉を引いて中にうながす。



しばらくは真っ暗でなにも見えない。

吉次は目を激しくしばたたいて、それとおぼしい闇を見透かせてみた。

堂の一隅の柱のかげで、もぞり、と人の動く気配に、吉次は目を光らせてその方を見る。

女だ。だんだん闇に馴れてきた目に、ぼんやり女の襟あしが浮かんでくる。

だが、意外な女の格好に、吉次はしばらく闇の中で、あんぐり出ッ歯をむき出しにしたままつっ立っていた。

床の上に荒むしろが敷かれてあり、その上に女は横になっていた、いや、ころがされていたのだった。

馴れると堂の中は意外に明かるい。女は手足を黒ずんだ縄で縛られ、猿ぐつわの豆しぼりが髷のうしろで堅く結ばれている。

吉次の方に背を向けた後ろ手指さえも、あきらめきっているのかピクリとも動かない。

それとも、これから自分の身に加えられる災厄に、からだを堅くしているのかも知れない。

旅の途中をかどわかされたとみえて、いまはやりの黄八丈に手甲、脚伴、わらじばきもそのままである。まだ年若い娘らしく、手甲や脚絆の赤いのがいたいたしい。

縛られているため裾の乱れをなおすことならず、それにからだをくの字に曲げているために、かたちよく盛り上がった腰の丸みが挑発的である。

ゴクン、と吉次は生つばをのんだ。

「親分さん、まあゆっくり見てから決めてもいいぜ」

男は自信ありげに言いながら、娘の手首から柱につないだ縄尻を解いて、手荒くからだを引き起こした。

髷をつかんで、グイと顔を正面に向ける。

すき透るような白いひたいと、悲しげにとざされた長いまつ毛がふるえているのも悲壮な美しさである。

吉次の食指は刺激されて、みるみる怒張していった。ふたたび生まつばをのみ込みそうになって、男に気づかれまいとすると、今度は出ッ歯の間からよだれになってこぼれ落ちそうになる。

「い、いくらだ」

上わずった声が口をついてでた。

「二朱、いただきてえ」

「そいつぁ、ちっと高すぎる」

「冗談じゃありやせんぜ。おめえさん、このあまの顔ばかり見てなさるが、まあこのからだもとっくり見てやっておくんなせえ。それに、なんと言っても手つかずの生娘だぁね」

男は娘の襟に手をかけると、乱暴に両肩をむき出してみた。

あらがう気力も消え失せてか、娘にわずかにビクッと肩をふるわせただけで、殆んどなすがままであった。

こんなのを餅肌というのだろうか、むっちりこぼれ出た娘の丸い肩は、顔の色に劣らぬ白さで息づいていた。

「へっへっへ、ずいぶんやわらけえ肌をしてやがる」

男は品物でも試すように、娘の胸もとに手をつっ込んでいじりはじめる。

さすがに堪え切れなくなったか、娘は猿ぐつわの下で小さな呻き声をあげながら、必死に男の手を逃がれようとして、妖しいくの字を描き出す。

「おいッ、よさねえか」

吉次は思わず声をかけた。もっと近づいていたら、おそらく男の手を払いのけていたろう。

「気にいりやしたかね。もっとも親分が気に入らぬえでも、まだまだ客人もあることだがね」

男は、吉次の気持ちを見すかしたようにニヤリとした。

ここらが潮時だな、と吉次は思った。みりゃ女も存外の上玉らしい。潮時をうっかりはずすと、これっきりになってしまいそうな気もした。

「よし、買った」

胴巻きから小粒をつかんで差し出した。

「へっへ、二朱そこいらじゃ、安いくらいのもんで。銭さえもらやあ、あとは焼いて食おうと煮て食おうと、親分さんの勝手だぁね。それからちょいとことわっておきてえが、ここは野中の一軒家じゃねえ。猿ぐつわだけは

はずしてもらっちゃ困りますぜ。ならおいらは外で見張っておりやすから、しっぽりかわいがっておやんなせえ」

いやしく笑って、男は堂の外に消えた。

娘は、とみれば、すっかり観念しきったのか、ぐったり床に伏せたままま動かない。

吉次は娘の肩をかかえて、さっき男がしたように、白い胸もとに手を入れてぐっとつかんでみた。

なるほど、男の言ったことはまんざらうそばかりじゃなさそうだ。宿場の安女郎しか女を知らぬ吉次には、指に吸いつきそうな娘のやわらかい肌が、おかいこぐるみで育った娘のように思われる。

娘はすでに、次にきたるべき危難にそなえてか、ももを堅くとじ合わしたからだを小さくちぢめる。猿ぐつわの上の、うるんだような黒いまつ毛がいじらしい。

吉次は膝がしらで娘の腰を押さえると、はやることころを制しながら、ゆっくり、足首を縛った縄を解きはじめる。

——やがて、次第に闇が濃くなっていく堂の中に、熱っぽく荒い吉次の息と、苦痛とは異なった女の呻きがきこえていた。

どこか、遠く近くきこえてくる太鼓の音で吉次は眠りを覚まされた。

目がさめると、いきなり昨夜のことがフッと吉次の脳裡に浮かんでくる。

「ふっふっふっ」

今朝の吉次はすこぶを寝覚めがいい。

それもそのはず、昨夜は初めてほんとうの女のよさを経験するような、満足な夜だったと思う。二度、三度、と彼はゆっくり、噛みしめるように女のからだを味わった。

それに……と吉次はありありと昨夜の有様を想いうかべてみた。

（生娘というのはどうやらうそらしいが、あの時の女のからだの動きは、どう考えてもおれに合わしてやがったのかも知れねえ）

女の美しさもさることながら、吉次の満足感はそこからきているのである。

（それと……あの目だ）

吉次にはかつて苦い経験がある。まだ江戸にいた頃、ゆすった相手がちょっと垢ぬけた娘で、声も出せずただおびえているのをいいことにして無人寺に引きずり込み、後ろ手に縛ってナニに及ぼうとした時である。

娘がそれまで声さえ立てなかったので、うっかり猿ぐつわを噛ましてなかったのが失敗で、

「化けものッ、きつねッ」

とののしられてしまった。

そういわれて猛りたった吉次もとたんに萎えてしまい、腹立ちまぎれに横っ面を思いきり張りとばしたうえ、娘の身につけている金目のものを残らず剝ぎとって、ようやく憂さを晴らしたが、にがにがしさはいつまでも残った。

それ以来、吉次はいっそう女に対して自信をなくした。——

（ところが、あの女の目は……）

昨夜の女は食いいるように吉次の顔を見つめていた。それも——、決して憎しみの目の色じゃなかった。

（すがるような目つきだったぜ。あれぁ、おいらに惚れていたのかも知れねえ）

思わず顔がほころんで、吉次はそっと面に手をあてる。と、むき出しになった歯が掌にふれて、あわてて手をはずす。

「親分さん、お目覚めですか？」

襖の外で、宿の女中の声がした。

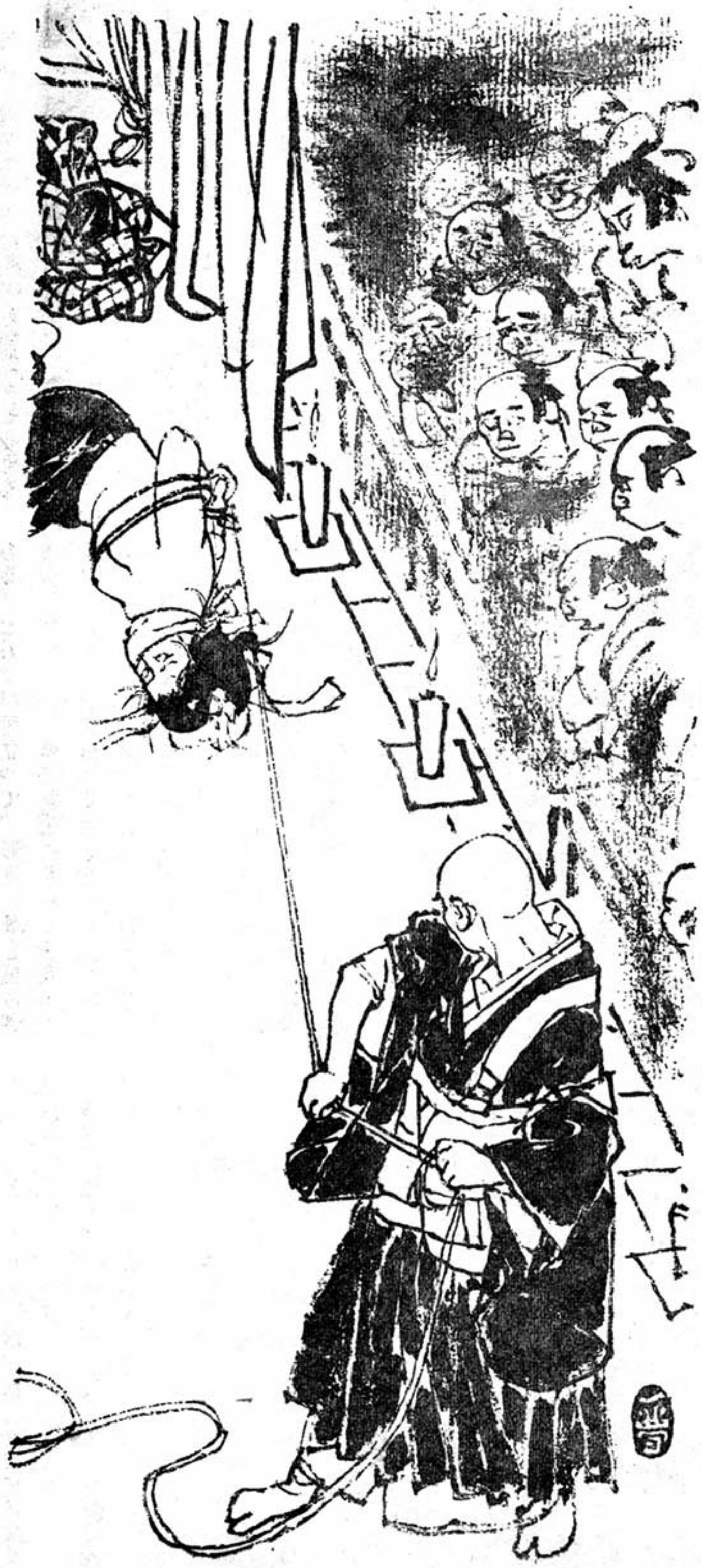
「おお」

答えておいて、吉次はむくりとからだを起こした。

「ほんに、ようおやすみでしたなァ」

「いま、なんどきだい」

「もうぼつぼつお昼ですよ」
「おっといけねえ、あんまり姐さんが親切なんで、こいつぁうっかりねすぎたようだ」
気分がいいので、ついついそんな軽口も飛び出す。
「ところで表はたいそう賑やかなようだが、なんかお祭でもあるのかえ」
「へえ、つい近くの村で。今日は初午なんですって」
「へえ――、なにかおもしろいものでもあるのかい」
「田舎のことですからねえ。江戸の親分にゃめずらしいこともありますまいが、それでもお正月から興業している見世物が評判で、なんでもとってもおもしろいとか」
女中は床をたたみながら答えた。
「なるほど、見世物か」
こいつぁ、仕事が出来そうだ、と吉次はキラリと目を光らす。どうせ田舎のお祭りだ、たいした稼ぎにゃならねえにも、昨夜の散財におつりくらいは出るかも知れねえ。
「ところで初午ってえのは馬の市でも立つのかえ」
「いやですねえ親分、初午ってのはお稲荷さまの……」
笑いながら女中は吉次の方をふりかえって、あわてて口をつぐんでしまった。



冷たい水をかけられたように、吉次はいやあな気分になった。

見世物小屋

初午は岡崎の宿からも人が寄せるらしく、案外な賑わいをみせていた。

吉次とすれ違う人達の中には、三々伍々、きつねの面を頭にかぶったものもいて、吉次はあてこすられているようで気まりが悪い。なるべく素知らぬ顔をして、空をみながらブラリブラリ歩く。

女中の話していた見世物小屋もすぐわかった。なるほど、評判らしく小屋の前に多ぜい人だかりがしていて、お定まりの呼びこみの口上が塩っ辛い声を張り上げている。

出し物はといえばこれが因果もの、高く揚げた絵看板には、からだぢゅう黒い毛で覆われた熊娘が、里の両親恋しさに帰ったものの、名のって入れず窓の外からそっと中の様子をのぞいているものや、下半身青いうろこで光る蛇娘が、捕えた鶏をくわえているもの、果ては口が耳もとまで裂けた狼娘が、血のしたたる兎を頭から食っている図などが、極彩色で毒々しく描かれている。

それらと並らんで吉次の目をとらえたのは因果物の他に寸劇でもあるらしく、日道とみえる悪僧が、猿ぐつわを咬ましり手足を縛った町娘を、いま犯さんとしている絵看板であった。

その町娘に昨夜の辻堂の女を想いうかべてみる。おもしろそうだ。

先年処刑された稀代の破戒僧、延命院の僧日道の事件は、お上の差し止めにかかわらずこうして芝居の好外題となってしばしば上演されていた。

吉次がひと稼ぎするにもこういったところで、客が舞台に気をとられているときなどがとおよそ縁のなさそうな、松に鶴亀の幕がたらしてあるばかり。

好都合である。

「さぁさ、いまから始まりだよ。親は代々けもの撃ち。親の因果が子に報い……」

（あんれ？）

吉次は首をかしげた。

呼び込みの声に、どうもきいたような覚えがある。彼は人垣の間から伸び上がって、声のする方をかいまみた。

吉次が見ているなどおかまいなしに、男はいっそう声を張りあげる。

「生みおとしたのが因果の子……」

（ちくしょうめ）

吉次は呻いた。それはまぎれもなく昨夜の雲助だったのである。と、すると……、吉次は魅入られでもしたように、

「さあ入らはい、入らはい、お代は見てのおかえりだぁ」

いつの間にか木戸をくぐっていた。

なかなかの盛況である。客席は後の方をやや高く、ゆるい傾斜をつけた板の上に、いちめんにむしろが敷いてあり、五十人ばかりの客がときおり伸びあがりながら一心に舞台をみつめている。

舞台、といっても二間ばかりの台の上に、黒い布を敷いてあるだけで、背景には出し物とおよそ縁のなさそうな、松に鶴亀の幕がたらしてあるばかり。

吉次が舞台に目をやると、お目あての日道の劇が始まったばかりのところらしく、縛り上げられた町娘の縄尻をつかんだ日道なる役者が、べたべたお白粉を塗りたくったというだけで、お世辞にも二枚目とは言えないご面相の目ばかりむいて、何やら科白を言っている最中だった。

そんな日道の見得にかかわらず、客の目はいっせいに無残な姿の町娘にそそがれてはなれない。

もう仕事のことはそっちのけで、同じように娘の方に目をやった吉次は、

（あっ！）

と声をあげそうになった。

（やっぱり……）と吉次は再び呻く。
それもそのはず、舞台に縛られた娘の黄八丈からからだつき、口を覆っている猿ぐつわまでが、昨夜の辻堂の女にちがいなかった。
（ちくしょうめ）
まんまと一杯食わされたのが、なんとしてもいまいましい。
「いやじゃと言うなら縄つてやろうかい」道が、どれゃ引導をさずけるとかめると、縛ったままの娘のからだをずるずる引きずって、舞台の袖へ引いていく。ここで三味がはいり、何やらわけのわからぬ長唄がきかされる。
しばらくすると、日道が一人で舞台に戻って出る。手に、舞台の袖から長い縄を引いている。
「どおれゃ、しっぽりィ、うかい」
再び見得をきると、手もたぐった。
おおよその見当はついたが、舞台の姿に、吉次の周囲袖から引きずられ出た娘のからも、ゴクン、と片唾をむむ音がした。
ろうそくの明かりに照らされて、光るような娘の白肌に、むごいばかりの縄が食いいっている。猿ぐつわの顔を激しくふりもがき、腰布一枚の白裸を後ろ手に縛られた町娘は、羞恥と苦痛に引きずられながら身をもだえくねらす。それはこんなちゃちな寸劇に、後光が射すような美しさ、妖しさだった。
見ているうちに、吉次はさきほどまでの苦しさはどこへやら、昨夜とはまた変わった優越感をおぼえてきた。いっぱい食わされたことはいまいましいにちがいないが、みれば女はこの一座の女丈夫といかないまでも、一座の花形であることにまちがいない。昨夜のことはどうせ色好みの女の色と、呼び込みのまにも吉次の咽喉を食い破るかと思われた。欲とがからんで打った茶番だろうが、なんにしたところで、こうして舞台で見る女は、客の色情を刺激せずにはおけぬ、なんともいえぬ色気である。
どっちにころんでみたところで、あのぬめぬめしたからだがたったの二朱じゃあ、たいした拾い物だ。
（さまあみろってんだ）
吉次は、あたりの客に思わずそういってやりたい気持ちであった。
日道に縄尻を引きずられて、娘がまとう最後のものが、床にこすれて落ちそうになる。
客の目がいっせいにカッと開かれる。
と、意地悪く日道は縄を引く手をとめた。
「ふっふっふ。娘御、観念したかな。ここは秘密の地下部屋じゃ、泣こうとわめこうとどこへも聞こえぬ。どれ、猿ぐつわを解いて、花のかんばせを見せてくれやれ。そしてこの日道ともども、ありがたいお題目を唱えようかィ」
言いながら日道は、グッタリしおれている娘の猿ぐつわに手をかけた。
（ゲッ！）
吉次は背筋に戦慄が走った。
キッ、と客の方をふりむいた女の口は耳もとまで裂け、ギッシリ並らんだ鋭い歯が、いまにも吉次の咽喉を食い破るかと思われた。
（た、助けてくれ。いくらおいらがきつね面だって、狼との噛み合わせはひどすぎる。これぁ、なんてこった）
悪感が胸もとからグイグイ突きあげて、目の前が次第に暗くなる。
「りゃりゃっ！　仏罰はぁ」
チョン、と拍子木がはいって、
「げに、おそろしやあ！」
日道が大見得をきり、賑やかな三味線と長唄に合わせて、狼娘が縄目のままで踊り狂うころ、吉次は白目をむいてむしろの床にひっくりかえっていた。



ゴルドンの記憶 (12)

阿麻哲郎
江淵晃夫・絵

不在のバー

バー・エテルナには人気がなかった。もう三晩目である。張り込みの刑事たちもサジを投げた気になった。もちろん、張り込みだけではなく、店内捜査を隅までやった。店内はすぐにでも営業できる状態にあった。細長く奥行きの深いスペースに、椅子とテーブルが三組み、右手の長いカウンターに添って止まり木の椅子が十個ほど並んでいた。

背後の棚には、まだ手つかずの酒びんが、新奇なデザインのラベルを見せながら、幾本も幾本も飾られたままだった。マダムもルミもキクも、小林春吾の誘かいを、前々から上島氏が愛飲したキュラサオ島直輸入の、リキュール酒も一本だけまじっていた。それは計画的にたくらんでいたのでないことを証まるで上島氏の帰りを待ちわびてでもいるかしていた。

のように、棚の奥で、だれからも触れられず機会はそれまで何度もあったはずである。その気になりさえすれば、女に甘い小林春吾のことゆえ、とっくに彼ぐらい、易々として冷たい沈黙を守っていた。

ということは、事件は突発的なものであった、ということを証明していた。マダムもルミもキクも、小林春吾の誘かいを、前々から計画的にたくらんでいたのでないことを証明

■ 前号まで

わたしは大阪商船の航海士，上島氏を通じ予言者サレアを知る。上島氏は≪ゴルドンの伝説≫の古文書をわたしにあずけ航海に出るが，キューバ近海で突如消えたという知らせを受ける。古文書の本当の持主である相馬博士に会う機会を前に，博上は行方不明の後，腐爛死体として発見される。

わたしは以前上島氏に案内された新宿のバー・エテルナに目をつけ，流しの男に探りを頼んだが，彼はホステスのとりことなる。その後九州・熊本の山中で男の死体が発見される。こうして事件のなかに，わたしはしだいに引きこまれていくのだが，あずかっていた古文書を何者かに持ちさられる。その犯人らしい女に偶然出会い尾行する。女はアフリカ学術調査隊・西司郎の留守宅に消える。

二つの殺人事件は女による犯行ではないかと考える坂崎警部を伴い，翌朝西司郎宅に乗り込んだが無人家であった。そしてエテルナの常連で友人でもある小林春吾はホステスたちに拉致されたと聞く。彼は上島夫人が羽田で西司郎の見送りに行っていたと以前わたしに話したことがある。

なお事件のカギと見られるクロレラについても調査がすすめられている。

誘かいできたはずである。それが不意に、突然かなりの危険を犯してまで、今さらあえて誘かいせねばならなくなった動機というのは何であったのか。

それはともかくとして、このような店の様子から、当局では、マダムや女の子の逮捕は、いと簡単なことに判断した。つまり、彼女らは、何食わぬ顔でエテルナに現われるであろうことを予期したのである。まさかその夜限りで、姿を消してしまうとは思ってもいなかった。

八木、長沢両刑事は、尾行に失敗したとはいえ、彼女らに気取られるようなヘマはやらなかったはずだ。彼女らは、従って、犯行の現場をまさか刑事たちに見られていたとは、夢にも気付いてはいないはずだ。とすれば、バー・エテルナはそのまま何事もなかったもののとして、店は以前通りあけられてよいはずだ。

ところが、三晩たっても、マダムたちはついに現われようとしない。彼女らは尾行に気付いていたのか。

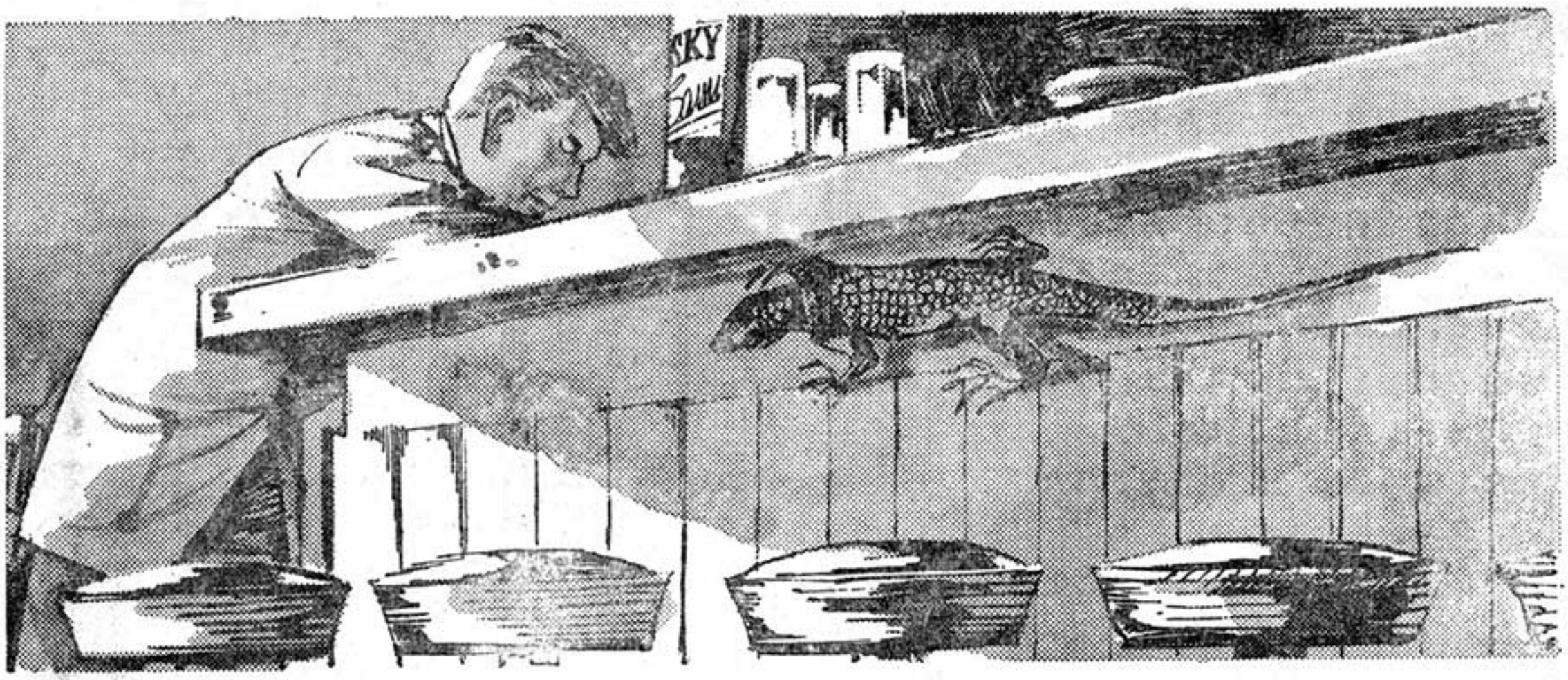
別人

エテルナの近くの、たばこ屋の赤電話から八木刑事が署に連絡していた。

「今晩も来ないようですね。店はあのままちゃんとしているのに、やっぱりかんづいたんでしょう。もう彼女たち、ちょっとやそっとじゃ現われませんよ」

「それがおかしいんですよ。ここらのだれに聞いても、エテルナの女たちの本当の素姓については知らないんです。マダムがその山野ゆう子だということになっているのですが、これは全く別人です。山野ゆう子はほかにちゃんとして居るんですよ。——ええ、もちろん記載通り、上落合に居るんですがね、それはマダムとは別人です。山野ゆう子の言うとこ ろだと、或る友人の紹介とかで例のマダムが現われて、月々名儀料五万円払うから名前を貸してくれ、迷惑は絶対にかけないから、というふうに口説かれたと言ってますがね。——ハア、これはうそではないようです」

「その友人というのはですね。そんな女は知りもしないし、だれも紹介したことはない、そう言ってますが、これも本当のようです」



応援の刑事たちが派遣され、今度は本格的な家宅捜索が行なわれた。テーブルの下はもちろん、トイレの中から棚の隅々まで、しかしどこにもマダムたちの身許を明かす手がかりになるものは見付からなかった。

「そんなわけでしてね。阿麻さん。何か最近小林春吾のことで、思いつかれるようなことはありませんか、何しろ彼が誘かいされる動機というのがまるでわからないもんですからね」

坂崎警部はいかつい顔をさすがに曇らして弱りきっていた。わたしはあれから両三日の間、何度も警察には足を運んだ。渋谷駅前でナゾの女を発見し、西司郎教授の留守宅での奇怪な出来事を目撃して以来、次第に一連の事件の広大な輪が、徐々に、自分の身辺にせばめられてきていることを感じていた。

これは、当然、エテルナでの出来事ともつながっていた。ことに、誘かいされたのが、小林春吾だとあってみれば、事情は思いもかけぬ身近さで切迫しているのかもしれない。偶然ということで片づけるわけにはいかなかった。

だから、問われるまでもなく、わたしのほうが積極的だった。何とか坂崎警部には協力してやりたい。でも、小林春吾が唐突に誘かいされねばならなくなった理由については、何も思い当たることはなかった。

後姿

「何でもいいですから、言って下さい。たとえば女たちにうらみを受けていたとか、金をためこんでいたとか――」

警部はテーブルの上でこぶしをつくった。自分で自分の質問のおろかさに、じりじりしていた。ほかに質問のカナメになるものはなかった。そのことを理解はしても、わたしは警部の質問の仕方に軽い失望を覚えた。もし理由があるとすれば、単なるうらみとか、金を奪うとか、そんな月並みなものであるはずがなかった。

警部はわたしの話に、つまりゴルドンの伝説にまつわる一連の話に、かなりの理解と興味を示しながら、結局は心底から信じてくれたわけではないのだ。だったらこんな月並みな質問をするわけはなかろう。

「女にうらみを受けるとか、金をためていたとか、そんなことはもちろんどちらも、この際当てはまるはずはありません。――といって、ほかに何だと言われても困るのですが――」



わたしは空をにらむように思案した。

「最近、彼がわたしのところに遊びに来たとき、羽田に西教授を見送りに行ったときのことを話していたようですが――」

「西教授とはあの西司郎」

「そうです。教授は人類学の研究でアフリカに渡ったのです。ただその時ですね。小林は芙美子さん、といってもおわかりではないでしょうが、つまり、わたしの先ばいの細君なんですが、その芙美子さんの後姿を見かけたというんですが、それは結局人違いだったことがわかりまして。とにかくそそっかしい奴でして、――そのほか、これということで思い当たることはありません」

わたしは思いつかぬことの無念さに、くちびるをかんだ。

思えばわたしもおろかだった。自分が今証言していることの内容の重大さに、少しも気づいてはいないのだった。

坂崎警部も、そのことをあまり興味なさそうに、うん、うんと軽く聞きのがすだけで終わった。それも無理はなかった。彼の手がけたこれまでの数多くの事件の範ちゅうに、今度の事件は決してどれににも当てはまりはしないのだ。

それを職業的な本能から、彼はそのどれかに、どの種の事件の類型にあてはめるべきか、考えていたのであった。それは無理もないことではあった。

発想

坂崎警部が、ふといだいた疑念、ゴルドンの伝説中の不老不死の女王というのと、部下の岸本刑事が、中村教授のところから聞き出してきた不老不死の妙薬、KB物質というのと、とっさに結びつけて考えたのは、確かに絶妙な思いつきであった。

これをもう一歩深く突っ込んで考え詰めるだけの霊知が働いたらば、事件の全容は、もっと早くつかめたであろう。だがこれを望むほうが、だいたい無理なのであった。空想や伝説の世界と、現実世界の日常的な事件とを、結びつけて考えるほどに、現代人はだれもが暇はなかった。

まして坂崎警部は有能な警察官だった。結末に至る最短距離を突っ走るためには、少しのムダな遊び、余分な空想の深追いはしない現実的な行動人だった。

その彼が、なぜ不老不死の女王や、物質なぞという、夢みたいな話に興味を持ったかというと、それは彼なりに、もっと現実的な発

想によったからであった。彼は、わたしが話した逐一的な話から、根本的にサレアという女の存在に或る疑念をいだいた。

彼女は予言者であり、霊媒術者である。彼女の実際の年齢や経歴についてはだれも知る者がいない。すべて伝説ずみたヴェールにおわれ、或る説によると、数千年のよわいを重ねているのではないかというほどの、信じられないうわさが流れたりしている。

これは聞きようによっては、まさしくゴルドンの伝説中の女王そのものではないか。伝説の女王は、ひどく残忍で冷酷だというが、阿麻哲郎が上島氏とサレアの楽屋を訪問したときの印象を語ったところによると、まさしくそのものである。

「わたしの召使いたち！　みんな舌を抜いてオシにしてあります。鼓膜を破ってツンボにしてあります。だから、何にもしゃべれず、何にも聞こえません」

サレアは自分の召使いの土人や、ゴリラ男と称する不思議な者たちを前に、冷酷に言い放ったということであった。

仮定

わたしが坂崎警部に、どうせ信じてはくれぬだろうと思いながら、しかも話さざるを得なかった一連の奇怪な話は、彼は彼としての受取り方がされたのであった。つまり彼は、サレアを国際的な大カタリ師だと推定したのであった。警部にとっては、予言や霊媒なぞというものは、みんなインチキに過ぎなかった。これは途方もないカラクリが隠されているに違いない。

ただ言えることは、サレア自身、いくらか気が狂っているのではないかという推測がなされることであった。それは新興教祖のように、彼女自身の宗教を広めるのに役立っていた。

もし阿麻哲郎の言うように、サレアの来日以後、彼女と面識のある上島氏の蒸発事件や、またそれとかかわりを持つがために相馬博士や流しの男が殺され、ゴルドンの古文書が奪われ、西邸に女にムチ打たれるゴリラ男、また関連してエテルナの女たちの失踪と小林春吾の誘かいがつながってくるとするならば、やはり根はサレアにあるものとするのが順当なところであった。

何のために、それはまだ解けぬナゾではあったが、そこにヒントになるのがクロレラではなかろうか。

KB物質と不老不死と伝説の女王この糸は、実際現実にはどうつながるのか。いくらか狂ったところのあるサレアが、自分を齢（よわい）幾千年の女だと宣伝するうち、本当にその気になり、どういう方法でか伝え聞いた人体を培養器とするクロレラの栽培で、KBその物質の開発に成功し、不老不死の秘法を得んものと、愚にもつかない狂信のとりこととなり果てたのか。

そのためには手段を選ばなかった。国際的な秘密の組織をバックに、それがどんなにばかばかしい狂気じみた愚行であるかを感じない狂信の徒に守られて、世界中で幾人もの人命がサレアのため犠牲に供された——

これは坂崎警部ほどの人にあっては、全く一世一代の、最も空想的な飛躍した考えであった。で、彼は、自分の空想力に、すっかり自分で驚いてしまった。

わたしがすっかり勝手知った警視庁の、薄暗いコンクリートの廊下を渡って、捜査一課のドアをあけたとき、坂崎警部は大机を前にして、黙然とタバコの輪を吹き上げていた。室内には、古風な石炭ストーブで、ムッとするような温気がこもっていた。いつ見ても殺風景な部屋である。

不規則な生活をしいられる刑事たちの、あまりさえない顔色が、ストーブの回りの床几



名探偵

わたしは、かねがね推理小説を愛読している。名優ドルリー・レーンや、親しむべきポワロ探偵の、胸のすくような活躍に、子どものようなかっさいを送ったものだ。ところが、現実にこうして、何ともしれぬ不可解な事件に、上島氏を思わせるらいらくさが感じられた。

「こちらに来ませんか」

立って廊下に出た警部の後から続いて、わたしたちは宿直部屋にはいった。寒々とした破れ畳、その上に上がりこみながら、

「ちょっと寒いけど、ここのほうが落ち着くでしょう」

警部は言った。

の上に三、四人腰かけて低い会話をボソボソとかわしていた。

「やあ、来ましたね」

警部は灰皿でたばこの火をもみ消すと、大きな伸びまじりのあくびをすると立ち上がった。そのガッシリした大きな体軀は、はがねのように強じんで、頼もしく見えた。どこかに、上島氏を思わせるらいらくさが感じられた。

の輪の中に巻き込まれてみると、いかに自分が無力であるかを覚らねばならなかった。

現実には、もうレーンもボワロも、働く余地はなかった。警察を出し抜いて輝やかしき書物中の名探偵のように、快刀乱麻の推理も行動も、働かせる余地はなかった。

ただ今となっては、坂崎警部を信頼し、彼になんらか、助けとなるべき助言の一つか二つをする以外、とる方法はないのであった。

「まあ、立ってないでおすわんなさい」

警部はそう奨めてから、にが笑いまじりに言うのであった。

「あなたがおっしゃってたゴルドンの伝説というのは、そのゴルドンということばの意味がわかりましたよ」

「えっ」

少なからず驚いたわたしの様子に、警部はまた苦笑ともつかぬ笑いで答え、

「いや、大した意味があるわけじゃないらしいんです。そうですね。詳しいことは、うちの岸本君に話をさせることにしましょう」

彼は戸口のところまで立って出て、廊下越しに大声を立てて呼び立てた。

「おーい、岸本くーん。ちょっと来てくれんか」

やがて遠くで返事があり、コンクリートの廊下にくつ音を響かせながら、岸本刑事がやって来た。

彼は、やせがたの精かんなマユをもった青年である。宿直部屋の畳の上に上がりこみ、わたしたちの仲間入りをしたところで、坂崎警部に促されるまま、中村教授のところで聞き込んできた話を繰り返した。

わたしは坂崎警部に指示された通りの道順をたどって中野の中村教授宅を訪ねた。警視庁を訪れたその翌日のことである。あらかじめ電話連絡で教授の在宅は確かめておいてあった。

応接間に通されて見回したところ、十畳敷ほどの広さであろうか、古い、スリ切れた赤いじゅうたんの上に一通りの椅子やテーブルや、壁添いに石で囲った暖炉があるほか、特に変わったところは見受けられなかった。

ちょうど暖炉には赤々と火がたかれてあったが、そこに女中が口のラッパ状に開いて底の浅いバケツに、石炭を山盛りにしたのを重そうに運んできた。

「やあ、お待ちどおさま」

教授は着流しの和服姿であらわれた。やせて長い顔をして、ひどくじじむさい印象は話に聞いてきたとおりであった。

茶と菓子ぼんが出され、女中が引っ込むとすぐに教授のほうから切り出してきた。

「あなた、ゴルドンの伝説のことでお尋ねじゃとか。なるほど、警察でもそんなこと聞いてきよった。何か犯罪捜査と関係あるとかゆうて――」

「そうです。もとはといえば、ぼくがその事件とは関係が深いので、ゴルドンの伝説につ

糸口



いてご存知よりのことがあったら、どうかご教示をたまわりたいものです」

わたしは、そこで、そもそも上島氏との知りそめた当初から、サレアとのめぐりあい、上島氏からあずかったゴルドンの古文書等から、バー・エテルナのこと、誘かいされた小林春吾や、西司郎教授邸で目撃した美女によるゴリラ男ムチ打ちの奇怪な情景に至るまでを、こと細かに説明したのであった。

しかし一連の事件とは直接関係がないということから、上島芙美子の存在については、どういうわけだか触れずにしまった。何か彼女のことになると、後めたい感情が尾を引くからであった。要するにわたしは、今では、あのころ何気なく聞き過ごしていた上島氏の暗示めいた話や、またサレアが、コマ劇場の舞台で見せた奇跡の数々を、皆ことごとく信じる気持ちになっていた。

語源

「なるほど、そういうコツがあるちゅうわけですな。おもしろいこってすな」

中村教授は目を細め、くちびるをすぼめた。すぼめると、口腔が、まるで老人のように深いしわの穴となる。

「さてそこで、お尋ねのゴルドンということばの意味じゃが――」

茶をすすりあげて続けた。

「わしはもともと、排せつ物の研究家でな。そういうことばの問題となるとあんまり詳しいわけじゃないが、しかしゴルドンの伝説というのは、排せつの歴史の上で、すこうしばっか、関係があるんでな、少うし研究しとったんじゃ」

教授には、ひどいなまりがあったが、それほど聞きとりにくくもなかった。

「ゴルドンというのはな。わしの知るところではヒマラヤ系のことばなんじゃ。つまりレプチャ語で、サキ、ソク、ゴル（gol）はモル、モリということばと同じで、『守る』や『防ぐ』という意味なんじゃ。だからたとえば、古い万葉の歌なんかにある防人（さきもり）というのは、何も崎を守るのじゃなく、あれはレプチャ語で、どちらも同じく『防ぐ』『守る』という意味以外に、崎という意味以外に、これとおんなじなわけさ。するとドンは内か、何を守り何を防ぐのか。朝鮮の若者のことを、ヨボというのはドンとなる。だからゴルドンは、若さを守り防ぐという意味になるんじゃ。

レプチャ語というのはな。いわばアジアの母国語なんでな。万葉集の巻十四に、『大君の、みことかしこみ、かなし妹（いも）が、たまくら離れ、夜だち来ぬかも』というのがあるな。チベット語でな、グス・パ（gus-pa）、カシ・コは尊敬や崇拝の名詞になってるが、しかしレプチャ語ではギャル（gya'r）、ゲル、ゴル、ガシ、カシは『恐れる』『びっくりする』という動詞で、その語根に習性としてコをつけ、カシ・コ、つまり恐しいということはなんじゃ。どういう意味以外に、崎という意味以外に、これとおんなじなわけさ。するとドンは内か、何を守り何を防ぐのか。朝鮮の若者のことを、ヨボというのはドンとなる。だからゴルドンは、若さを守り防ぐという意味になるんじゃ。

レプチャ語というのはな。いわばアジアの母国語なんでな。万葉集の巻十四に、『大君の、みことかしこみ、かなし妹（いも）が、たまくら離れ、夜だち来ぬかも』というのがあるな。チベット語でな、グス・パ（gus-pa）、カシ・コは尊敬や崇拝の名詞になってるが、しかしレプチャ語ではギャル（gya'r）、ゲル、ゴル、ガシ、カシは『恐れる』『びっくりする』という動詞で、その語根に習性としてコをつけ、カシ・コ、つまり恐しいということはなんじゃ。どういう意味以外に、恐しいということはない。ゴルドンのゴルというのが

やない。フン尿崇拝の名ごりからそう言ってるんじゃ。――」

中村教授がそうして語ったヒマラヤ奥地の古い歴史の中の、恐しい専制女王の国の話は確かに驚くべき暗示がこめられていた。

処刑の舞踏

排せつ物崇拝と共に、古代では女性崇拝の風習が常道であった。原始共産世界にあっては、すべては生産第一であった。生産をつかさどる大地や水、太陽、そして肥料としての排せつ物、ことごとく生産につながるがゆえに崇敬された。そして、その生産に従う労力がとおとばれたことはもちろんであるが、しかし、それは女性の出産能力という、不思議な、絶対的な生産能力の前には、その影は薄かった。女体はすべての源泉として、最高の尊敬とそして畏怖を諸人に与えた。

そのころヒマラヤの山ふところに、或る若く美しい女王の国があった。その国では、女性と、そして女性が排せつするフン尿とが、最高のものとして尊敬を受けていた。

年に一度、その国の犯罪者を一所に集め、女王臨席のもとで独特の刑が執行された。それは今から考えると随分風変わりなものであった。罪人はひとりずつ、まず掘られた穴の中に立たされた。

教授の調べたところでは、穴の直径はだいたい一メートル強、深さも一メートルぐらいということで、それで穴の中に立つと、上半身、胸から上が地上にのぞくのであった。立たされた罪人の首に、首かせがはめられた。穴の直径とほぼ同じ、径一メートル弱の丸い厚目の板の中央に、首がはいるだけの穴があった。

罪人は大きな首かせの丸い板を負うのである。その板には、初め両端に、選ばれた美しい処女が、向かい合うようにして乗る。ふたりの重みが首かせの罪人の足もとをふらつかせ、肩こう骨に食い込むが彼、もしくは、彼女はそれに耐えねばならない。

今度はややあって、別の一角に向かいあって、やはり選ばれたふたりの処女が板に乗るのである。四人の重量が罪人をひざまづかせる。ひざ頭が、穴の底の荒い砂上にめりこんで、くだけるような苦痛が来る。さらにまた今度はその上にふたり、またふたり、こうして選ばれた処女十二人が、ぎっしりと板の上に立錐の予地もなく乗り終わるころには、罪人はもはや穴の底で、十二人の体重をもろに全身に受け、スネの骨はさけ、腰部の肉はくだけて、気息エンエン。

そうなったところで、首かせの板は穴のフチまで下がり、そうしてその板の上で、妙なる楽の音に合わせて、処女たちの踊りが、さながら十二人を一つのからだに合したような連けいのもとで演ぜられるのである。

ゆるく速く、しかも舞踏が最高潮に達したとき、十二人の処女は一体のからだとなって空中に飛び、また演舞台の上に飛びおり、その余勢を駆るがように、首かせの生きた頭を、円舞を舞いながらけりつけるのである。

これは死の舞踏とでもいうべきか、罪人のからだが裂け散って、泥土にまみれるまで続けられた。罪人の立つ穴は同時に堆肥物となった。清められたフン尿と共に、泥土と共にこねられ、それは最も神聖な肥料となった。

「こういう話は、昔語としては珍しいものではなかが、ゴルドンの伝説のナゾを説明するには、やっぱり必要な話じゃけん――」

中村教授は、実に愉快そうに、どこまでが本気かわからないような、おどけたしわだらけの表情で笑った。

（つづく）



読者コーナー



★このらんの投稿はハガキで結構ですからご自由にお書きください。

★今月掲載しました方には，4月号および，5月号をお送りします。誌上匿名は自由ですが，住所，氏名はお書きください。（読者コーナー係）

★拝啓、貴誌益々御繁栄の段、大慶に存じます。連載の「アラビアの城」はいよいよすばらしく、毎月のたのしみがひとしおです。作者、画家先生のご奮闘をお祈りします。

さて、これから述べます私の希望を、今後の誌面に織りこんで頂ければ、この上ない幸せに存じます。

まず、鬼頭暁先生にお願い。

①さし絵は、文章に忠実に描いてください。

②移動椅子に坐らされている場面が比較的多いようですが、これではファンに飽きられやしないかと、心配です。もっと動的な絵も入れてください。弓子の心理状態の描写を、さし絵でも表現してください。

③文章のほうの拘束具は、わりあい大ざっぱに書いてあるのでそれを具体化するのは、鬼頭先生の想像力、絵画的創造力の責任だと思います。つぎのような拘束具を、具体化して下さい。

㈠ゴツイ首輪、手錠、足枷、腰枷、顔面枷など。鋼鉄製でピカピカ光った感じの、巾の広いものをお願いします。金属の固さ、非情さが表現できれば、すばらしいと思うのですが……。すなわち、

首輪——巾七センチ以上、厚み一センチ以上（一月号の絵ではせいぜい巾が三センチぐらいだと思います）

手錠——巾十センチ以上、厚さ二センチ以上の鉄輪。

腰枷——厚さ一センチ以上。（パンティ型、ズロース型、コルセット型など）

貞操枷——T字型の鉄枷。

足枷——厚さ三センチ以上。巾は十センチ以上。

顔面枷——口枷、鉄の仮面、（厚みは一センチていど）

鉄製の固い非情な艶と感じをリアルに描いてください。

㈡オシメカバーにもっと実感をだしてください。もっとフクラミをだして下さい。（いままでのものは、オシメをあてていない位にみえます）

皮製のもの、ネル製、羊毛製など、厚いゴツイ布地でつくっても、おもしろいと思います。また、この場合のオシメは大人用ですから、布地を節約すると、コボレてしまいます。子どもの四倍ぐらいの大量の布地でつくったカバーの絵を希望します。

㈢弓子が部屋から出されるときの服装を、順を追って描いてください。だんだん枷をはめられ、からだ全体がやがてすっぽり包まれていく絵を、存分に描いてください。たとえば、一月号で、弓子が医務室へ運ばれるときの服装の順序は、つぎのようです。

Ⓐ胸に皮の圧迫ブラジャーをあて、その上にタオルブラジャーをつけ、さらにその上に鋼鉄のブラジャー枷をはめる。腰には、存分にオシメをあてたオシメカバーをはめる。足錠は足輪といえるくらいに、厚くて巾のひろい鉄枷。両手は前で手輪とよびたいくらいの手錠をはめさせる。以上の裸身の上に、外出用のコートを着せられつつある絵。

（つまり、首輪がコートに連絡され、後から女看守に弓子がコートを着せられている図。もちろん、裸身が



読者コーナー

見えるように、構図にくふうする。

Ⓑコートのチャックをとめたときの弓子の立ち姿（顔はそのまま）

Ⓒ顔に鉄の口枷（マスク型のもの）をはめたもの。

Ⓓコートにフードを取りつけ、頭部を包んだ場面（顔の前面だけはマスクをはめられているところが見られる）

Ⓔフードから顔の前面へたれ下がった厚い布のある弓子の立ちポーズ。

Ⓕさいごに、首輪をはめられた弓子が、女看守に首輪につけたクサリをにぎられて歩かされている場面。

以上のような絵をこまかい適確な描写のもとに具体化されんことを、せつにお願いします。

つぎに北園透一郎先生にお願いします。

①鬼頭先生の絵に合わせるように、物語のテンポをゆるめて書いて下さい。たとえば、一月号の、弓子を医務室へつれていくまでの経過など、弓子の心理をもうすこし描写して。

②一回分（一ヵ月分）を、つぎのアイデアでたっぷり書いてください。

Ⓘ弓子をトラックにのせて外出させ、平常社会における人間性をよみがえらせる。町を歩いている自由な女性たちを眺めさせる。これにくらべて現在弓子自身がおかれているみじめな境遇を思い知らせ、絶望に弓子を追いつめていく過程。

Ⓘ弓子を町にだすときは、服装をたびたび変えさせる。たとえば、外見は変わらなくても、素肌は——

Ⓐ鋼鉄製の枷ばかりをはめさせたもの。

Ⓑオシメカバーをあてさせる。

Ⓒ全身をふといクサリで縛りあげてあるとき。

Ⓓ皮製の拘束衣を着せる。

Ⓔ貞操枷のまわりから、たくさんの鈴をたれさせ、歩かせると、それが鳴る。弓子は羞恥に赤くなる。

Ⓕヨチヨチ歩きができるくらいに、股枷をはめさせるもの。

Ⓖ両手は横にたれさせ、乳から腰部までぴっちり、皮でしめあげたもの。

以上のような姿で、トラックの上で服装を変えさせ、東京の繁華街をあちこち見物させる。もし、弓子が逃げだそうとしたり、救いを呼ぶようなそぶりを見せたら「アラビアの城」に帰ってから、その罰を加える。

以上、ずいぶんとりとめもなく書きましたが、どうか、私のせつなる希望をかなえてくださいますよう、お願い致します。

そして最後に、この「アラビアの城」を単行本にして発行してくだされば、たいへんにうれしいと存じます。

北園・鬼頭両先生のご活躍を期待します。（東京・加瀬生）

★二月号の八巻令氏「ご隠居のたのしみ」は、ひさしぶりに、S小説らしいS小説であった。この作品のよいところは、女主人公の心理が、ある程度描かれていることである。ほかのS小説は、あまりにも女性側の心理がおろそかにされている。「アラビアの城」なんぞに至ってはその極である。もうすこし、心を持った人間にしてもらいたいものだ。写真では、柚木あぐりさんがひさしぶりに登場したが相変わらず、可愛らしくてよかった。絵では、落合竜二氏「女の館」がよかった。それと、山田彬弘氏の「瀬沼めぐみ」におけるさし絵が迫力があってよかった。この小説も、おもしろかったです。（大阪・世之介生）

★一月号の「白い粉の秘密」という小説にはおそれいった。姉妹探偵が主人公の、ドタバタ三文ハードボイルドである。クライマックスに、姉妹がベレッタを持って身構えたのには呆れて口がふさがらなかった。こういう小説は、ひとむかし前のカストリ雑誌でよくみられたもので日本文化の一面をになうと思われる貴誌が載せるべきものではない。せめて「ご隠居のたのしみ」程度の作品で誌面を埋めて欲しい。このへんでひとつ、われわれファンを「アッ！」といわせる斬新な趣向をもった小説が登場しないものか。

（神奈川・守田比呂美）

★直接購読会員の六ヵ月会員になりましたところ、さっそく、写真を六枚お送り頂き、あつく御礼申しあげます。六ヵ月間はこれで安心して、貴誌を読むことができます。ねがわくば、毎月二十日までに、我が家の郵便箱に貴誌が届くことを……。

（埼玉・須々木栄三郎）

つぎの要領で、あたらしく原稿の募集をいたします。ふるってご投稿ください。

▼創　作（四百字詰め原稿用紙）25枚まで
　S・Mその他を主題とした小説をお寄せください。
　新鮮味ある異色小説をお待ちしております。

▼告白体験記……20枚前後
　真実の告白、得がた体験記をもとめます。
　だれにも言えない告白を、原稿紙にぶつけてください。

◎掲載させていただいた作品には、相応の稿料を掲載後二ヵ月以内にお送りいたします。

◎原稿は第五種郵便になりますから五十グラムごとに十円の郵券を貼り、開封にして投函をおねがいいたします。

▼原稿の送りさきは――

東京都中野区松が丘2の21
あまとりあ社
裏窓編集部

「裏窓」を毎月確実に
お手に入れるために

直接購読会員募集

▼三ヵ月会員……七五〇円
▼六ヵ月会員…一五〇〇円
▼一ヵ年会員…三〇〇〇円

■いずれも、店頭発売前に直接お送りいたします。送料は、当社で負担します。

■〇月号から三ヵ月分とか、〇月号から六ヵ月分というふうに、はじめの号を、はっきりお書きください。

■住所氏名を正確に、はっきりお書きください。

■直接購読会員には、S写真の無料サービスをいたします。

三ヵ月会員～三枚
六ヵ月会員～六枚
一ヵ年会員～十二枚（いずれも手札型）

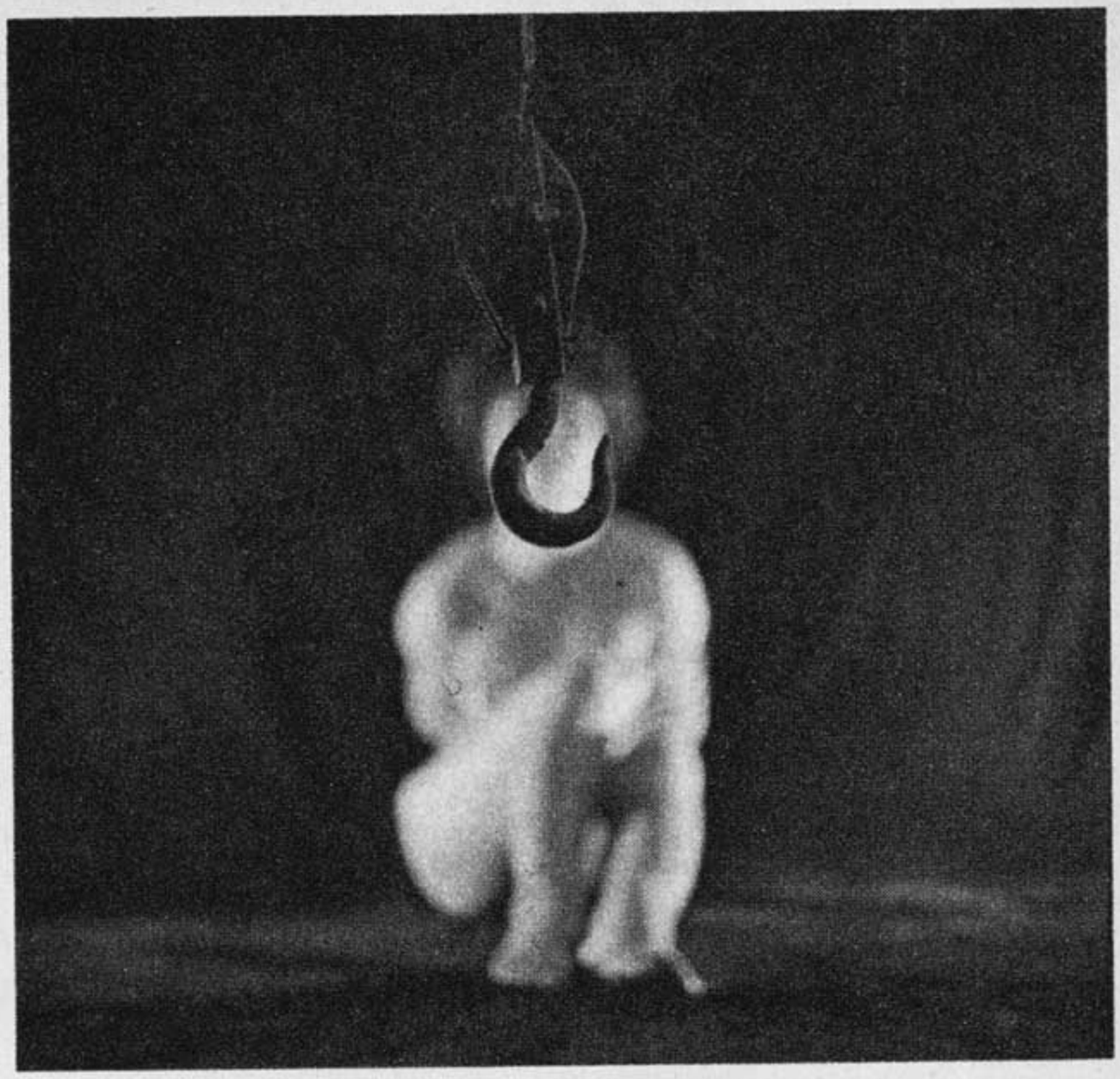
■送り先は――

東京都中野区松が丘2丁目21番
あまとりあ社「裏窓編集部」

吊り鉤



カメラ・吉田久
モデル・小笠原純子









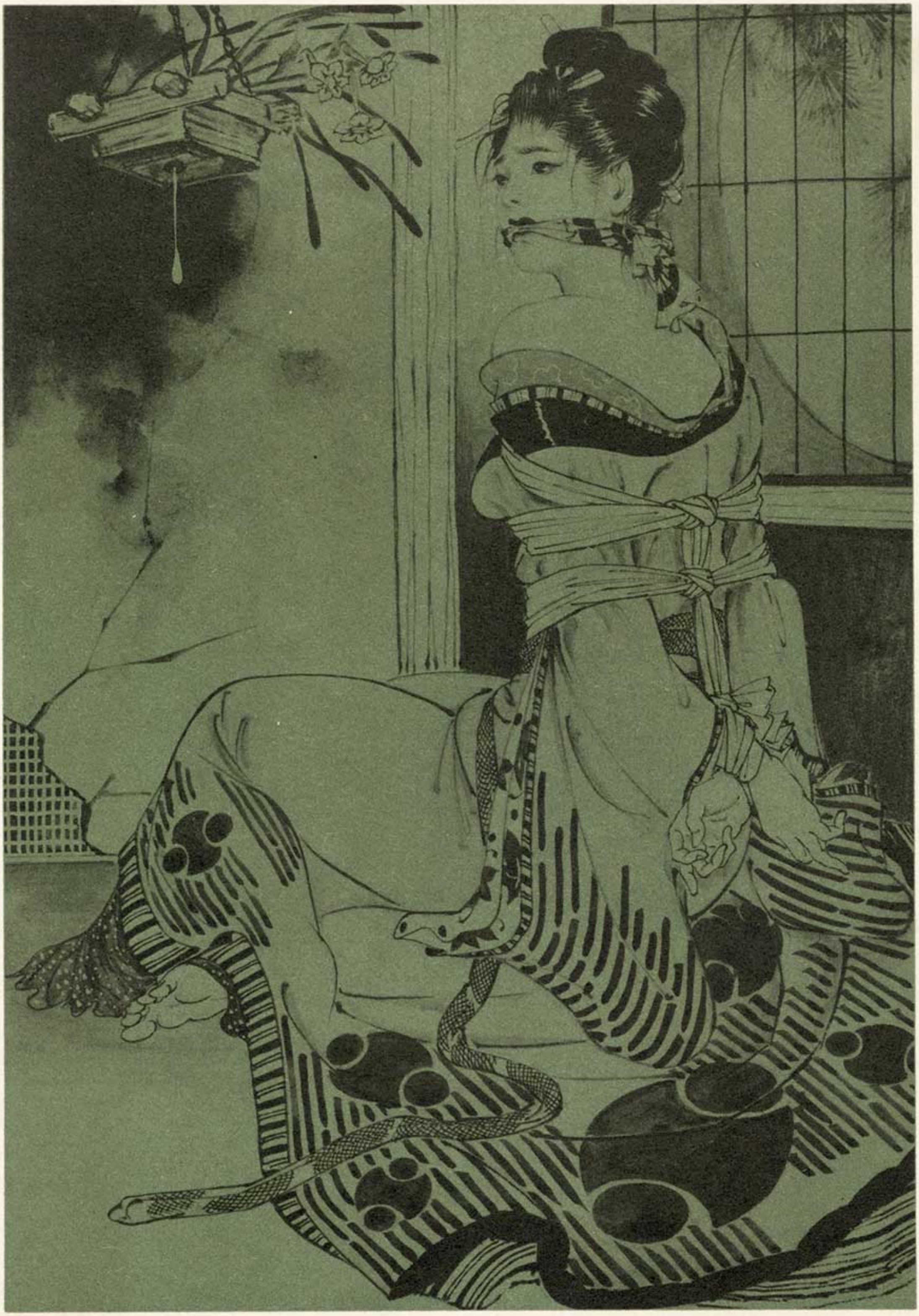




鬼頭 暁・画集

妖艶女態四景









裏窓・既刊号総目次

★既刊号をお買い洩らしになった愛読者の方々の為にこの機会にバックナンバーをお揃えになることをおすすめします。
★三冊以上御注文の際は送料は不要です。
★二冊以下の御注文は一冊につき送料12円です。
★御送金は振替か現金書留が最も確実です。

東京都中野区松が丘2丁目21番 振替東京10756 久保書店宛

38年（二月号）二五〇円

◎オフセットページ
フォト・ストーリー 竹の家……（文・藤見 郁／写真・フェニクス）
画集・女の館……落合 竜二
ふたりのお遊戯……西ドイツ・フェニクス
きもの線乱……カメラ・北 好夫
★グラビアページ★
五百羅漢……カメラ・吉田 久
戦慄のまなざし……北米・フェニクス
脚立と貴婦人……北米・フェニクス
奇怪な散歩着……西ドイツ・フェニクス
縄と鎖のコメディ……北米・フェニクス
四作家競作同一題小説 花と悪銭……（松山 省一／風松英之介／井村 錠／京 剣児）
ご隠居のたのしみ（落合竜二・絵）八巻 令
犬の楽園（秋吉巽・絵）……下須 畜男
瀬沼めぐみの受難（山田彬弘絵）春川 光彦
アラビアの城・8……北園透一郎
奢れる神への祈り・1……森本 愛造
わが愛のうめきとさけび……新村満美子
私本・男色大鑑・2……かびや・かずひこ
ゴルドンの記憶（江渕晃夫・絵）阿麻 哲郎

39年（一月号）二五〇円

フォト・ストーリー 魔女狩りパターソン……（文・藤見 郁／フェニクス商会）
絵物語・女戦士のレポート ミーノの貞操帯……（文・祖父江 新／絵・落合 竜二）
◎装身具とふたりの美女（フォト）……（文・井村 錠／絵・中川 彩子）
◎アメリカSM絵物語……北米・フェニクス
★グラビア・かわいい妖精①②……吉田 久
★グラビア・海外SMフォトご紹介……北米・フェニクス
鬼神丸秘帖（小日向一夢・絵）……潮 一樹
アラビアの城⑦（鬼頭晩・絵）……北園透一郎
男色大鑑・若道のほこりたかく（東桂史絵）……かびや・かずひこ
おつかれさま（山田彬弘・絵）……春川 光彦
■女宇宙士訓練室……絵・鬼頭 晩
空想と狂想のあいだ……森下 高茂
地図にない村（都築峰子・絵）……九十九十郎
体当たりマゾヒズム論・19……水尾 究
「馬狂いの女たち」における マゾヒズム描写……森本 愛造
ゴルドンの記憶（江渕晃夫・絵）阿麻 哲郎

38年（十二月号）二五〇円

フォト・ストーリー 深夜のひとりごと……（文・吉永百合夫／カメラ・吉田 久）
絵物語・破魔姫受難……（文・島本 春雄／絵・山田 彬弘）
◎フォト・白い炎……吉田 久
◎アメリカSM絵物語……フェニクス商会
グラビア・まるい筺口具……フェニクス商会
・カーテンのある風景……吉田 久
・海外SMフォト……フェニクス商会
★特集・マゾヒズム画廊……フェニクス商会
崖の上の墓標（豊田みのる・絵）佐藤達四郎
ピンアップだけはやめて…ADグラナムール
FとMの行き戻り（落合竜二・絵）光谷東穂
奇妙な実験（都築峰子・絵）……八巻 令
アラビアの城・6（鬼頭晩・絵）北園透一郎
私のSM論……重森 東
体当たりマゾヒズム論・15……水尾 究
恋人たちのオリ（山田彬弘・絵）九十九十郎
ほも紳士録(12)……かびや・かずひこ
体当たられマゾヒズム論……エダ・キリコ
灰色の夜（カット・エダキリコ）水尾 究
現代マゾヒズム文化時評……森下 高茂
ゴルドンの記憶（江渕晃夫・絵）阿麻 哲郎

38年（十一月号）二五〇円

◎犬吠岬の太陽……（文・エダ・キリコ／カメラ・吉田 久）
◎暗い画廊……吉田 久
◎フォト作品集……金井 行雄
◎アメリカSM絵物語……フェニクス商会
ヴィナスの誕生……森下 高茂
ねむれぬ夜の追憶（鬼頭晩・絵）北海 道雄
悪党半九郎（小日向一夢・絵）……潮 一樹
★グラビア・時代妖美画集……中島 喜美
★グラビア・海外の公刊誌より……フェニクス商会
★グラビア・犬吠岬……吉田 久
ビルマの首枷族……春川 光彦
ある女装者の夜々……かびや・かずひこ
■画集・黒い皮の饗宴……鬼頭 晩
大都会の夜の底で（江渕晃夫絵）九十九十郎
青雲崩れるとき（古正英生・絵）井村 錠
現代マゾヒズム文化時評・(19)……森下 高茂
体当たりマゾヒズム論・(14)……水尾 究
ゴルドンの記憶（江渕晃夫・絵）阿麻 哲郎
○絵物語・鉱山町の女たち……（文・宗方 八郎／絵・都築 峰子）
○絵物語・武士道無残……（文・島本 春雄／絵・東 桂史）

38年（十月号）二五〇円

◎絵物語　龍宮城の反乱……文・祖父江　新／絵・落合　竜二
◎時代絵物語　妖説朽木女忍伝……文・島本　春雄／絵・鬼頭　晩
◎サド絵物語　異端の城……文・三鬼　俊／絵・中川　彩子
◎戦国絵物語　本能寺炎上……文・井村　錠／絵・小日向一夢
★グラビア・ミッドナイト……吉田　久
★グラビア・海外の公刊誌より……フェニクス商会
◎雁形城落城図……小日向一夢
◎時代妖美画集……中島　喜美
伊賀の闇の葉（古正英生・絵）…佐藤逢四郎
裏切り（秋吉密・絵）……九十九十郎
ミッドナイト撮影記……エダ・キリコ
蛇樽女切支丹（東桂史・絵）……義川　源
アラビアの城・5　毒ぐもに巻かれる弓子
（鬼頭晩・絵）……北園透一郎
お転婆学園奇襲作戦……郷　保夫
ゴルドンの記憶⑥（江渕晃夫絵）阿麻　哲郎
現代マゾヒズム文化時評(18)……森下　高茂
体当たりマゾヒズム論・(13)……水尾　究
奇稿作品ご紹介と短評……編集部・編
裏窓叢書名場面集……編集部・編

38年（九月号）二五〇円

◎裏窓草紙「絵本いろはうた」
うた・宮古志満夫／絵・小日向一夢
◎絵物語　海賊虹姫伝奇……文・島本　春雄／絵・春日　章
◎絵物語　変幻白だぬき……文・井村　錠／古正　英生
◎アメリカ絵物語　男爵夫人の拷問博物館
★グラビア・洋画のSMシーン・スチル集
★グラビア・海辺のうた
夜のなげき……吉田　久
★グラビア・海外SM絵物語・ご紹介
小笹姫受難（小日向一夢・絵）…潮　一樹
特製マゾキン（山田彬弘・絵）…嶋岡　晨
魔女アクーリカ（中川彩子・絵）春川光彦
■鬼頭晩画集「美しきけものの檻」
■絵物語　必殺のデリンジャー…落合竜二
体当たりマゾヒズム論・14……水尾　究
現代マゾヒズム文化時評・18……森下高茂
穴（あな）……（都築峰子絵）…石山省一
お化粧される弓子（鬼頭晩絵）北園透一郎
★裏窓叢書名場面集（中島喜美ほか絵画集
ゴルドンの記憶⑥（江渕晃夫絵）阿麻哲郎

38年（八月号）二五〇円

◎絵物語　東京――神戸十六時間……文・祖父江　新／絵・山田　彬弘
◎絵物語　ぬめ肌女郎……文・矢桐　重八／絵・春日　章
◎絵物語　密林の美女……文・黒部　恭治／絵・中川　彩子
◎西部絵物語　紅のライフル……文・祖父江　新／絵・落合　竜二
★グラビア・砂の上の船
漁師宿にて……吉田　久
★グラビア・海外サド写真特選集
残念なり猿飛佐助（小日向一夢絵）井村　錠
妖異水底に沈む（秋吉密・絵）…信夫　潜夫
お仕置きにぬれる弓子（鬼頭晩絵）
……北園透一郎
お転婆学園秘密作戦（江渕晃夫絵）郷　保夫
女の争い（都築峰子・絵）……五所　章
フィギュア・トレーニング……春川　光彦
切支丹散華（東桂史・絵）……北村　仙也
現代マゾヒズム文化時評(17)……森下　高茂
体当たりマゾヒズム論・(13)……水尾　究
ゴルドンの記憶⑤（江渕晃夫絵）阿麻　哲郎

38年（七月号）二五〇円

◎絵物語　無明怨念記……文・矢桐　重八／絵・春日　章
続・アラビアの城……文・春川　光彦／絵・中川　彩子
泣きじゃくる弓子……文・北園透一郎／絵・鬼頭　晩
グラビア・静かな山林の午後
・開に光る……吉田　久
◎絵画集・サディスチンの微笑…江渕　晃夫
・切支丹女牢……喜多　玲子
・南北戦争以前……鬼頭　晩
・海外SM絵物語…フェニクス商会
切腹殉教記（小日向一夢・絵）…黒部　恭治
しのび逢い刺青情話（都築峰子・絵）
……北野　竜一
くたばれ！淑女学院……郷　保夫
西鶴におけるマゾヒズム……安東　泉
血染め白百合（古正英生・絵）…佐藤逢四郎
体当たりマゾヒズム論(12)……水尾　究
墓場からの命令（山田彬弘・絵）祖父江　新
わが愛の渇望（落合竜二・絵）…白木ゆりこ
虐げられた女たち（東桂史・絵）野方　伸
ゴルドンの記憶④（江渕晃夫・絵）阿麻哲郎

38年（六月号）二〇〇円

◎鬼頭晩時代妖美画集……鬼頭　晩
◎中島喜美時代妖美画集……中島喜美
グラビア・幽囚の部屋……吉田　久
◎絵画集・続・美しき海賊船　フェニクス商会
・西部の女……落合竜二
七つの大罪（中川彩子・絵）……九十九十郎
続・異端の終末……声田奈貴
おどろ記珍化論……左　次郎
「ロリータ」における
ニンフェッティズム……安東　泉
「夜と霧」……黒田史朗
放浪と自己恋着の画家……かびや・かずひこ
月光の道で……河村童八
鬼婦長……丸亀恵子
夜の妖蝶……立原道夫
ボスには乳房がある……五所　章
体当たりマゾヒズム論(11)……水尾　究
きんぎれ不動（小日向一夢・絵）…庄内裕治
復讐黒髪秘聞（中島喜美・絵）…黒部恭治
忍法〝乳影〟（鬼頭晩・絵）……島本春雄
妄執侍（古正英生・絵）……潮　一樹
霧姫変化（鬼頭晩・絵）……佐藤逢四郎
ゴルドンの記憶③（江渕晃夫絵）阿麻哲郎

38年（五月号）二〇〇円

絵物語・白蛾闇若衆……（文・島本春雄／絵・東桂史）
・流刑星の美女たち（文・豊田一狼／絵・山田彬弘）
江渕晃夫耽美画集……江渕晃夫
グラビア・夢幻のへや……藤沢修
・美しき海賊船・くさりと美少女（フェニクス商会・提供）
海外SM画傑作選……井村錠
茅女物語……潮一樹
会津の女兵……飯田豊吉
その夜……阿麻哲朗
ゴルドンの記憶 (2)……村山省
椎名夫人の足……かびや・かずひこ
ほも紳士録……森下高茂
現代マゾヒズム文化時評 (14)……水尾究
体当たりM論 (10)……北野竜一
私の愛した女優……北園透一郎
アラビアの城……祖父江新
孤島の復讐鬼……兼田奈貴
異端の終末……豊中夢夫
背後の脅迫者……郷保夫
ばんざいッお転婆学園……

38年（四月号）二〇〇円

絵物語・冥府海賊伝奇……（文・島本春雄／絵・秋吉巒）
・マドリーヌと黄金の靴（文・松平荘司／絵・中川彩子）
・白狐のお新いろざんげ……絵・東桂史
小日向一夢妖美画個展……小日向一夢
グラビア・黒猫といす……毛卓三
・黒いタイツ……猪島昌也
・鏡と女……藤沢修
・パウリーネ夫人のピクニック（フェニクス商会・提供）
海外SM画傑作選……
ゴルドンの記録 ①……阿麻哲郎
処刑の図……三鬼俊
無分別な夜……海老沢七郎
大阪非情地帯……豊中夢夫
内外ミュージックホール・スナップ集 藤沢修
「虹川画伯のアトリエ」演出ウラ話 北野竜一
文芸評論「醜いコメディ」について 安東泉
ほも紳士録 ④……かびや・かずひこ
A子の話……南ゆり
体当たりマゾヒズム論 ⑨……水尾究
舞踏会の餐……春川光彦
のぞきの大スケ捕物帖……飯田豊吉

38年（三月号）二〇〇円

絵物語・スリーペット号……（文・豊田一狼／絵・鬼頭暁）
不時着す……
・銭姫党伝奇……（文・島本春雄／絵・古正英生）
・白峰の女忍者……（文・矢桐重八／絵・小日向一夢）
グラビア・けんらんたる商品……藤沢修
・黒猫を捕えた①②……毛卓三
海外SMフォト・画傑作選……泰西出版資料
醜いコメディ……淡路周五
大利根無頼……祖父江新
和装恋慕……宮古志満夫
ほも紳士録 (3)……かびや・かずひこ
体当たりマゾヒズム論 (8)……水尾究
狼……村山省
犬とギプスと搾衣……春川光彦
不死身の女……海老沢七郎
「蠍たち」にみる
あるサディスチンのタイプ……安東泉
鬼頭暁時代妖美画展……鬼頭暁
うら八捕物帳……左次郎
虹川画伯のアトリエ……飯田豊吉
「裏窓」湯河原へ行く……
編集部

38年（二月号）二〇〇円

絵物語・姫法師呪文……（文・島本春雄／絵・小日向一夢）
・変化黒髪小僧……（文・京剣児／絵・古正英生）
秋吉巒妖美画個展……秋吉巒
グラビア・黒い皮のスタジオ……泰西出版
・美の凝結……金井行雄
・美の模像……金井行雄
海外SM画傑作展……泰西出版
島原の子守唄……春川光彦
金色の胸毛……立原道夫
郡氏の応接室……豊中夢夫
代用品じゃつまらない……九十九十郎
フォルリ城の花嫁……三鬼俊
おれの名はダニエル……祖父江新
愛の戦慄と充実……白木ゆりこ
体当たりマゾヒズム論 (7)……水尾究
ほも紳士録 (2)……かびや・かずひこ
新・森茉莉論……間野嶺
新・安岡章太郎論……安東泉
女因お蓮の死……小田桐爽
浪人夢想日記……市原砂夫
カブ一家の第三夫人……加木れい子

38年（一月号）二〇〇円

絵物語・ハレウィンの歌う首……（文・松平荘司／絵・中川彩子）
・赤鮫奇伝……（絵・小日向一夢／文・島本春雄）
・隠密麝香猫……中島喜美
山田彬弘妖美画個展……山田彬弘
グラビア・美の回帰・ほか……毛卓三
・美の彷徨……北好夫
・美の孤立・ほか……金井行雄
クリスマスイヴに悪魔がくる……九十九十郎
赤い血のうずまき……関町妙男
仮面のたわむれ……溝口雄太
黒い幻想……白木ゆりこ
小さな赤い腰巻の記憶……外村良
体当たりマゾヒズム論 (6)……水尾究
夜の感触……方里小路崑
忍者遁走記……祖父江新
決闘立花屋……花巻京太郎
女性的情念の三十年……かびや・かずひこ
「叩び声」を解剖する……安東泉
小説「連」のレスビアニズム……間野嶺
婦人機密将校ポーリン……泰西出版資料
売られていく玩具たち……北園透一郎

37年（十二月号）二〇〇円

絵物語・洞穴の姫と片耳の悪魔……文・松平 荘司／絵・中川 彩子
・耳の戦慄……絵・曾我部 泰
・妖説黒縄盗賊……絵・小日向一夢
グラビア・犬と女……毛 卓三
・美の発端……北 好夫
・美の展開……毛 卓三
・美の落差・ほか……金井 行雄
かわいい調教師……北園透一郎
殉国……中康 弘通
投げ節お駒……花巻京太郎
締めつける愛情……春川 光彦
東京午前零時……豊中 夢夫
日本刑罰史（終回）……名和 弓雄
ほも・とその周辺（終回）かびや・かずひこ
体当たりマゾヒズム論（5）……永尾 究
新・三島由紀夫論……安東 泉
お春さらわれ草紙……小田桐 爽
千代の青春……浦戸 宏
赤い城……三津井弓雄
ある身の上相談から……神原 栄知
イラ ラする夜に……羽鳥なつ子
風雲地獄街道（終回）……鈴宮 英樹

37年（十一月号）二〇〇円

絵物語・かわいいアンヌの ぼうけん……文・松平 荘司／絵・中川 彩子
・異聞・牛裂きの刑……絵・東 桂史
・宝石の血……絵・秋吉 巒
グラビア・美の鋭角……毛 卓三
・美の冗舌……金井 行雄
・美の傾斜……金井 行雄
・美の断面・ほか……金井 行雄
海外SMフォト特選集……泰西出版資料
あわれ雪路……丸亀 恵史
おかっぱとおさげの間……間野 嶺
霧笛の町……五所 章
妖美画傑作選……沖渉二 都築峰子
火刑幻想……多賀 満
夜の画帳……鳴滝 三郎
足……村山 省
体当たりマゾヒズム論（4）……永尾 究
さまアみろ……春川 光彦
ある恋の物語……山木 節夫
不安と絶望から幸福への道へ……桜井 和子
畜獣デリムソン（終回）……阿麻 哲郎
ほも とその周辺（9）……かびや・かずひこ
風雲地獄街道（6）……鈴宮 英樹

37年（十月号）二〇〇円

絵物語・ひざまずいて……絵・秋吉 巒
・柔肌切支丹……絵・曾我部 泰
江渕晃夫妖美画個展……江渕 晃夫
グラビア・舞台名場面集……金井 行雄
・たわむれのふたり……藤沢 修
・美と醜のあいだ……金井 行雄
ある青年の休暇……市川 菊夫
紅の私刑……阿麻 哲郎
女奴隷の浴室……小田桐 爽
妖しい体臭の夜……美濃村 晃
畜獣デリムソン（11）……水尾 究
鬼洞又四郎の煩悩……春川 光彦
ギラルド王の金色奴隷……山木 節夫
現代女牢記……村山 省
江戸の怪談……鳴滝 三郎
ほも・とその周辺（8）……かびや・かずひこ
海外SM映画ご紹介……泉 令
体当たりM論（3）……水尾 究
盗む……霧山 志郎
おろかな馬のものがたり……馬場 弘二
風雲地獄街道（5）……鈴宮 英樹

37年（九月号）二〇〇円

絵物語・凄絶めくら忍法……絵・東 桂史
・密林の女王ムムタール絵・中川彩子
・蛇と鞭……絵・山田彬弘
北原環妖美画個展……北原 環
グラビア・SM式美容緩和法……毛 卓三
・屈曲……毛 卓三
・悪夢……毛 卓三
・女ひとりのへや……猪島 昌也
・かわいいくらしぶり……毛 卓三
お浜の受難……花巻京太郎
山小屋の暴風雨……駒井たまき
戦慄の女体爆弾……綾川 妖司
鈴の泣き声……浦戸 宏
白痴美の女……青柳貫次郎
日本型罰史（3）……名和 弓雄
ほも・とその周辺（7）……かびや・かずひこ
「痴顛老人日記」を解剖する……安東 泉
タロの恋……八巻 令
体当たりM論（2）……水尾 究
女賊と姫君……霧山 志郎
畜獣デリムソン（10）……阿麻 哲郎
鬼憂のすむ家……三枝喜久治
風雲地獄街道（2）……鈴宮 英樹

残部僅少
残部僅少
37年8月号ぜんぶ
売り切れました